

●はじめに

私は西本願寺の報恩講を檀家として果たし、近所の神社に初詣をし、クリスマスは教会のミサを聞くという生活を過ごしている。アメリカ人には「I am Buddhist」と答えているが、いわゆるニッポン教の信者であって、70歳となりお迎えが近くなったので「悟りを開いて成仏しよう。」なんて決意は全くない。現代日本の宗教を語る時には、無宗教と新興宗教ラッシュとの両方からの切り口があるが、それらにも関心はない。

「カミ」と片仮名をタイトルにしたのは、「神」と「お上」と二股の意味をかけているからだ。宗教は社会構成を作り上げる力の源泉であることは、アメリカもロシアもキリスト教国家であり、トランプ大統領がプロテスタント（福音派）に、プーチン大統領がロシア正教に支えられている事から明確である。日本は「天皇は神にしませば」と近代国家を作りあげ、戦争に負け「信教の自由」を得たが、政治家と宗教団体とは今も強く結びついている。

「ニッポン教なる混然とした社会構造が歴史的にどのようにして出来たか、その時代の「王 臣」に分けて、高校の教科書を基に考えてみよう。」というのがこの著述の着想であった。半世紀前の高校教科書と比べて、過去のでき事が違うことはないはずだが、いわゆる「歴史感」が変わり、記述が随分変わっていた。さらに、専門書を図書館で借り、ネットを徘徊し、現代の教科書にある「神とお上」をもう少し掘り下げてみたかった。歴史記述に「民」が出ることは少なく、「王 臣」の「カミ」でしかないであろうが、その時代の権力者が作った社会構成を探るには良いはずだ。あと、私は建築史・都市史の学徒であるので、目に見えない「カミ」が形として現れた姿が、それがアイデアの「カミ」とどのような相互作用を果たしたかを示せれば良いなとも考えた。

建築を設計するのが我が人生の生業であった。設計するには技術が必要だが、お客様と形を決めるに、技術をつらぬく論理の方程式はなく、「決めちゃう」瞬間は「カミ」の力が必要だった。人間の意思決定の仕組みを、ギリシャ哲学では、**エトス**（信頼）・**パトス**（情熱）・**ロゴス**（論理）の順で説明しているが、全くそのとおりだったのである。

私は民間の仕事しかしておらず「儲かる建築」が大前提となる。よって、その点で不備があればプロジェクトはポシヤル。しかし、名古屋城天守木造化事業、愛知県新体育館事業は税金を用いるので、首長は「儲かる」事を全く気にしていない。民が「面白い」と思うかどうかだけが、事業の基点なのである。木造天守は、火事で燃える大変危険な建築であり「儲かる建築」とならないとすぐわかろうというものだが、裁判官は「名古屋市は適法に行っている。棄却。」だけで「高橋の意見書」への名古屋市からの反論はなく、私の「違法建築だ。」は無視された。民主主義、法治国家というのは、「王 臣」の都合でどうとでもなる、司法は権力側に立ち「王 臣」を守るのであった。「民」は「カミ」に命じられると、命をかけた戦争にさえ肅々と向かう。「カミ」ならぬ「お上」への疑問が「はじめに」にあった。

—目次—

●はじめに	1
第一章 縄文人のカミ	
・縄文人と日本人	6
・三内丸山遺跡（青森県）	11
・埋葬	13
・土偶	14
・アニミズム	18
第二章 弥生—古墳前期（BC7世紀～AC4世紀）のカミ	
・弥生人とは	20
・倭国	23
・吉野ヶ里遺跡から奴国へ	24
・尾張国、美濃国本巣郡	26
・環濠集落と戦争	30
・都市の論理—権力はなぜ都市を必要とするのか—	
第一段 都市は飢えない	33
第二段 商品作物は農民を富まさない	33
第三段 穀物はどこに消えたのか	34
第四段 都市は権力である	35
・唐古・鍵遺跡と邪馬台国	38
・埴輪	49
・古事記のカミ	52
・古事記のカミからヒトへ	56
第三章 大王（おおきみ）から天皇へ	
第一段 古墳後期（5世紀～6世紀）	
・治天下大君	62
・「天」、中国とヤマト王権との違い	62
・ヤマト連合政権	63
第二段 飛鳥時代（6世紀～7世紀前半）ホトケがやって来た。	
・仏教伝来の歴史 ※補注 ミニミニ仏教史	65
・継体（450年？-531年？）58歳で大王即位（507年）の怪	67
・蘇我馬子（551年～626年）のホトケ	69
・聖徳太子（574年～622年）信仰	70
・憲法十七条とホトケ	71
第三段 7世紀後半 詔「現神御宇天皇」に向かって	
・聖徳太子が作ったとされる寺	72

・官寺	75
・怨霊と持統天王	78
第四章 ホトケになりたいカミ	
第一段 聖武天皇の神仏習合の事績	
・聖武天皇のカミ ※補注 武 則天 (624~705 則天武后)	81
・八幡大菩薩宇佐宮	85
第二段 多度神宮寺	86
・多度大神の託宣 763 年「神の身を離れ、仏教に帰依したい。」	
・建築 (国分寺) が、神仏習合を進めた。	90
・「雑密」役行者 (634?~701?)	91
・義江氏の「仏になろうとする神々」	93
第五章 密教と怨霊から、山岳信仰へ	
・空海 と 最澄	95
・御霊第一号は崇道天皇	96
・超ト級御霊 天神さん	98
・山岳信仰	102
第六章 浄土信仰にカミをみる	
・浄土信仰	104
・藤原道長 (966~1028) の浄土信仰の 1	105
・神話の中のケガレとキヨイ	106
・藤原道長 (966~1028) の浄土信仰の 2	107
・「往生要集」	109
・物忌み、方違 (かたたがえ)	110
・カミとホトケの建築	112
第七章 本地垂迹説と鎌倉仏教	
・本地垂迹説	114
・鎌倉仏教	117
・禅宗	119
・禅寺	121
第八章 吉田神道 (唯一神道) と織田信長	123
・信長の天主	124
第九章 明治政府「神仏分離」	
・江戸期の儒学に明治維新の先ぶれを見る。	127
・明治維新	128
・平田神道	129
・廃仏稀釈	131

・「廃城」にカミとホトケはいなかった。 	1 3 6
第十章 民主主義と「カミとホトケ」 	1 3 7
・儒教は宗教か？ 	1 3 8
・治安維持法 	1 3 9
・仏教ファシズム 	1 4 2
・戦後日本と「カミとホトケ」 	1 4 8
●おわりに 	1 5 2

カミの変容

狩猟採集で生きる人々は全てにカミを見た。 土偶(母)、石棒(男根)、屈膝、抜歯、土函、土板

朝鮮半島から水稻技術、青銅器、鉄器を持って渡来してきた。 銅剣は大型化し、銅鐸と共に祭器となった。

東海海中に倭人100余国。漢に朝貢するところもあり。「漢書」地理志BC1世紀

男子を王として70-80年を経たが、倭国全体で長期間にわたる騒乱が起こった。そこで、率弥呼と言う一人の女を王に共立することによってようやく混乱を鎮めた。率弥呼は、鬼道に事え衆を惹いた。夫はいなかった。弟が国政を輔佐した。王となって以来人と会うことは少なく、1000人の従者が仕えていたが、居所である宮室には、ただ一人の男子が入って、飲食の給仕や伝言の取次ぎをした。標識や城柵が厳めしく設けられ、常に兵士が守衛していた。

憑依、事依させ「シャーマニズム」 元皇、祖霊と交信する。「魏志」倭人伝 率弥呼が死去すると塚がつくれ、100人が殉葬。

4-5世紀 近畿を中心に山陽、九州、関東に巨大な前方後円墳

氏ウジ 姓カバネ

例えば、中臣氏は神と人の中を取り持つ祭祀に関する地方の伴造の中臣・中臣部を管轄し、ヤマト王権の専制体制に仕える。

大連の大伴は、物部臣と応神5世孫を越え近江から王として向かえる。百濟から馬(陰陽道)、暦法、医学が渡来する。554年

場帝怒る「日出る処の天子、書を日没するところの天子に教す。」 持統天皇、伊勢に行幸する。

東大寺大仏開眼供養。宇佐八幡大菩薩が神託を下した。752年 763年神が人にのりうつり仏教に帰依すると託宣。多度神宮寺寶財帳

千日回峰行・生き葬式によって不動明王と一体となり、衆生を救済する菅原道真903年左遷先の大学府で死す。怨霊を治める為北野天満宮

1007年道長が大峰山に経塚を取める。「末燈明記」により末法に入る

「吾妻鑑」に、般若心経を唱える対象に「富士大菩薩」とあり、本地垂迹思想は平安の世にあまねく定着した。新たに鎌倉仏教が生まれる。

本地垂迹説 神は仏が世の人を救うために姿を変えてこの世に現われたとする神仏同体の説。法華経の本門・迹門の理解に負うもので、すでに九世紀ごろから神仏習合説が行なわれ、平安末期から鎌倉時代にかけて、すべての神社の本地仏が定められる。

幕府は諸社兩宜神主法度を定め、吉田神道を本所として全国の神社・神職をその支配下に置いた。

明治憲法施行 天皇を主権者とし、国の統治者、元首、軍の最高責任者 吉野～熊野では、天台宗を離れ、金峯山修験本宗を設立した。

BC 1000年

縄文文化

アミニズム

霊ミタマが全てに宿る

BC 500年

弥生文化

一年の周期(暦)を重んじ、田を多く作る強者は富を溜め、争いが生まれた。

瀬と土壁・漆による環濠集落をつくり、堅穴住居と高床倉庫と共同墓地を持つ。

ホトケの変容

釈迦(前463—前383年説と、前565—前485年説がある)

孔子(前552 / 前551—前479)

57年 奴国が正月に朝貢し、光武帝が 漢羽委奴国王 印を与える。

107年 倭国王帥升等が安帝に奴隷160人を献上した。倭という連合国であった。

247年 鬼道を操る率弥呼の邪馬台国を盟主とする倭の連合国が出来た。

香曇古墳 三輪山を祀る王の一家、普族が日本最初に力を持ち前方後円墳を作る。

ヤマト政権 広域連合王国は、墓を誇示し先祖霊を祀る儀礼に繋がって誕生した。

391年 倭軍が百濟・新羅を臣民とする。(好太王碑文)

渡来人

漢書、馬、漆物

478年 武(雄略)が宋に上表。倭・朝鮮六国の軍事権・安東大將軍、倭王。

507年 513年 552年 582年 587年 607年 663年 692年 701年 720年 741年

藤原京にて、文武天皇が大嘗律令を制定する。日本書紀が古事記に就いて作られる。

聖武天皇が因分寺建立の詔を出す。国家鎮護の仏教。

804年 822年 823年 唐、新羅に大敗。(白村江の戦い)中大皇子

藤原京にて、文武天皇が大嘗律令を制定する。日本書紀が古事記に就いて作られる。

聖武天皇が因分寺建立の詔を出す。国家鎮護の仏教。

第一章 縄文人のカミ

・縄文人と日本人

網野史観（2000年刊「日本」とは何か）では、歴史教科書の最初に、日本列島に現れた縄文文化をもって「日本人の形成」が始まるとしている事を痛烈に批判している。



「日本」という国家を日本人が意識したのは、中国大陸から「国となすところ」を5世紀古墳時代から学びはじめ、中大兄皇子が白村江で唐・新羅軍に負け、飛鳥浄御原で天武天皇が初めて「天皇」を名乗り、持統天皇が飛鳥浄御原令（689年）を施行した事に始まるという。702年第8回遣唐使は、則天武后に「倭国」でなく初めて「日本国」の使者と言いつつ則天武后もそれを認め記録として残っているのだが、歴史教科書には「いつから日本となったのか。」の記述はなく、神代の記紀の記述が古墳時代のヤマト政権と重ねられるように書かれており、「縄文時代の日本人発見」「旧石器時代にも日本人はいた」などの新聞記事が踊る。

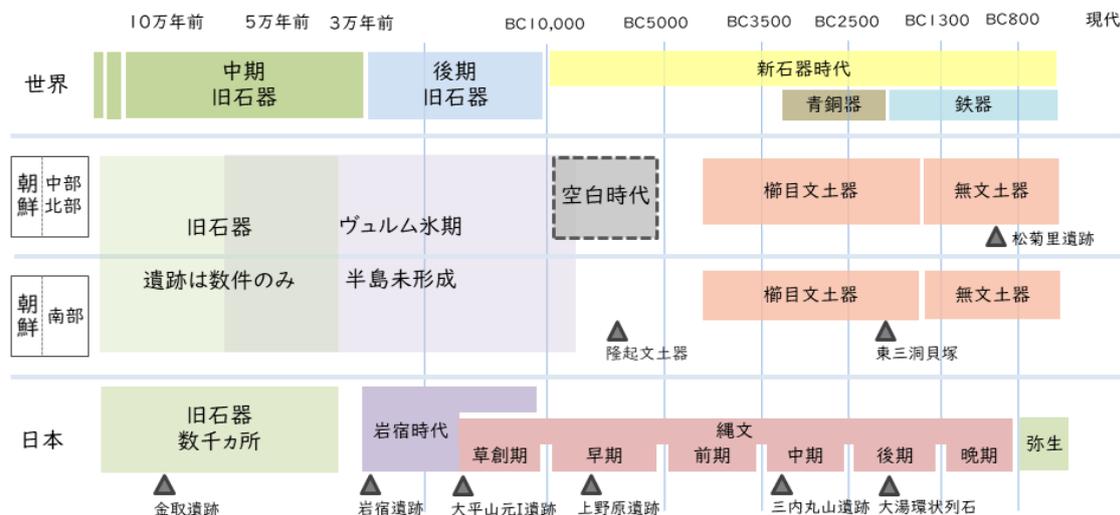
歴史学とは残された文字を元にして成り立つ学問であり、遺跡発掘の断片からあれこれ推測する考古学とは一線を画するものでなければならぬ事は、建築史・都市史の学徒を自認する私には当然である。昨今の城郭考古学を主催するタレント教授がテレビ画面で個人の妄想を爆発させる姿に、私はへきへきしている。

その私が、考古学・文化人類学の成果に臨み、「縄文人のカミ」を書き、次章では「弥生・古墳のカミ」を書くというのだから、以後は笑止千万のものであり、「妄想に過ぎない」と評価される事を承知して進める。歴史学に沿うものは「第3章大王から天皇へ」からである。実は第三章から書き始め第十章「カミとホトケ」の日本教まで進めて、やはり「カミとホトケ」の前の「カミ」をスケッチしないとイケないと、思い直して戻ったのであった。

「カミ」という言葉は、万葉仮名で「迦微」、「柯微」、「可未」と記され、中国から渡来した「神」を「カミ」と訓じたのは間違いないが、ヤマト王権が確立して日本となる以前の「カミ」は宗教としての教理、形態が整ってあるわけなく、遺物から日本列島に住んだ人々の「カミ＝信仰心」を探る事になる。その為には「日本国」が出現する日本列島の地理と気候を探り、列島に住んだ人々の生活を復元することから始まる。

縄文人が日本列島に現れたのは、1万3千年前、地質年代の洪積世末期の最後の氷河期が終わった後とされる。縄文とは、縄文土器から引用された言葉であり、対比として弥生土器から引用された弥生がある。

旧石器～縄文時代



大正時代に新石器時代の縄文土器と違う弥生土器が弥生町で発見され、鉄器時代の古墳時代と新石器時代との間に新石器と金属器を併用した時代があり、縄文時代→弥生時代→古墳時代と日本独自の時代区分がされた。

現代の考古学では、土器からの呼称を今も使っているが、縄文時代とは「新石器時代」であり、弥生時代とは「水稻農耕時代」を指している。弥生時代は世界標準で表現すると「青銅器、鉄器時代」が正しいのだが、神話世界の「水穂国（古事記）」こそ「日本国」誕生としたい昭和の国策が「青銅器、鉄器時代」の言葉を消しきった。

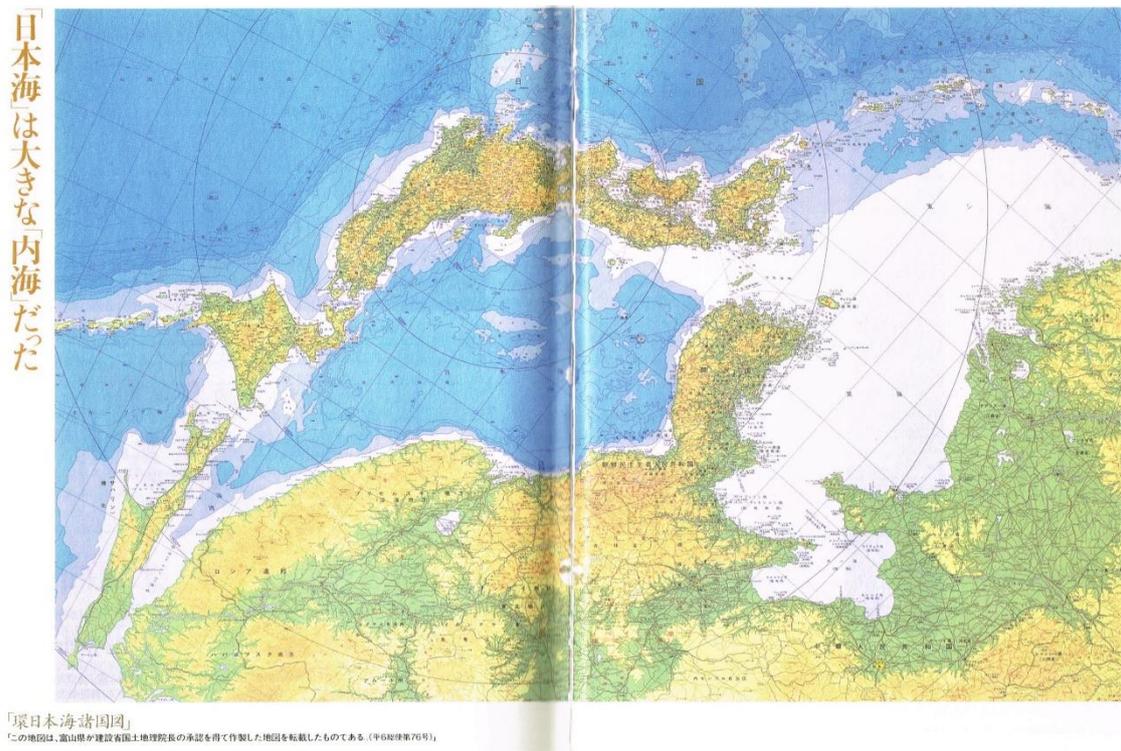
網野史観（2000年刊「日本」とは何か）では、人類の発展を、狩猟採集→農業革命→産業革命とする史観を否定している。

現代は工業社会から情報社会に移行したされているが、狩猟採集、農耕、工業は現代も並列に存続している。「進歩史観」では、他に、未開人の漂泊・遍歴の状況から定住・定着生活を確立して文明に向かったとされるが、未開とされた遊牧民がその軍事力で農民を支配した歴史は多く、現代でも旅と日常の形で生きており、どちらが「未開」であり「進歩」とは言えない。

経済史では、自然経済から交換経済、自給自足から商品貨幣経済と発展したと説明する。人はまず自らの生活を満足させ、余ったもの、余剰生産物を市場で交易するものだという理解を根底に置いているが、偏っている。人類が人間として生まれたのは「人間は本質的に自己と共他者を意識して生活する動物」となった時であり、交易、交換、それを目的とした生産、

商品は人間社会の最初からあったと考えられる。「自給自足」の経済生活など、実体としてはありえない。モノを生産しない流通、運輸、商業、金融なども人類の歴史と共に古いものだ。「進歩史観」は成年男子でもって語られて来たが、女性、老人、子供、被差別民は成年男子の補助ではなかった。人類社会の構成員であり、その価値を正しく評価しないとイケない。

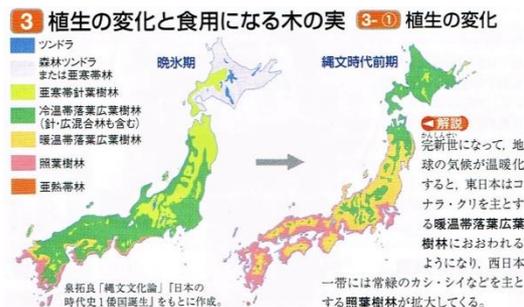
以上、網野史観は素晴らしいものだと私も賛同する。出来るだけこれに則して古代を書きたいのだが、網野史観が否定した言葉でしか教科書には日本列島を描かれていないので、どうしても教科書用語を使わざるを得ない。そこは許されて欲しい。



網野史観（2000年刊「日本」とは何か）の巻頭は「日本海は大きな内海だった。」と始まる。日本の旧石器時代（先土器時代）の遺跡は3万5千年前までさかのぼる。氷河期であり、日本列島は大陸続きであったと言って良い。

「孤立した島国」と日本を位置づけたのは、江戸時代の鎖国政策によるものであり、明治政府は「海が国境である」とそれを受け継ぎ、西欧の「帝国主義」を追いかけ、先の島々を領土として拡大するために海軍を増大させた。3万5千万年前から日本列島にとって「海は道」であった事を、時の政策によって忘れさせたのである。

渡辺誠（1938～）は著書の中で、結合釣針、石鋸と言われる黒曜石を用いた鋸、曾畑式土器などの共通した文化を持つ「海民」が縄文時代前期か



ら朝鮮半島東南岸、対馬、壱岐、北九州の海で活動しており、さらに少し時代が下がると、東シナ海に及び、沖縄や山陰、瀬戸内海にもその動きが見えると指摘した。縄文文化は決して日本列島内だけで完結していたわけではないのだ。縄文時代の巨大遺跡が青森県で出土したが、同じ新石器時代であってもこちらは、アジア大陸北東部との関係があったとされている。縄文時代の文化は、列島の西部と東部とは異質のものであったのである。

縄文時代（新石器時代）が1万2千年続く中で、いわゆる縄文人が形成された。日本列島の先住民であったのだが、紀元前5世紀の弥生時代から7世紀への1200年に渡り、漢民族に圧迫されて何十万人規模で朝鮮半島から渡来してきた弥生人が縄文人と混血して日本人となった。と、文化人類学の埴原和郎（1927～2004）氏は唱える。



また、『新日本人の起源 神話からDNA科学へ』（勉誠出版）の中で崎谷満（1954～）氏は、次のように推察する。バイカル湖畔から南下し華北に暮らしていた遺伝子YのD系統だが、先史時代の漢民族の圧迫から逃れるためにさらに南下し日本列島にやってきて、縄文人の中核を形成した。かたや、弥生

時代に渡来した人々は長江流域で水稻栽培をしていたO系統だ。やはり、漢民族の王朝に追われ列島に逃れてきた。また、朝鮮半島の人びともO系統である。現代の日本人の体の中に占めるD系統の割合は3割、O系統は5割と、渡来系の比率が高い。この数字だけ見れば、やはり渡来人に先住民が圧倒されたと思えてくるが違う。弥生時代の始まりとともに、渡来人の血が少しずつ染みるように先住民の中に受け入れられ、先住民は率先して稲作を選択し、人口爆発をおこした。彼らの子孫は、日本の風土の中で生まれ、縄文時代から続く列島人の風習と伝統を捨てなかった。と、彼は唱える。

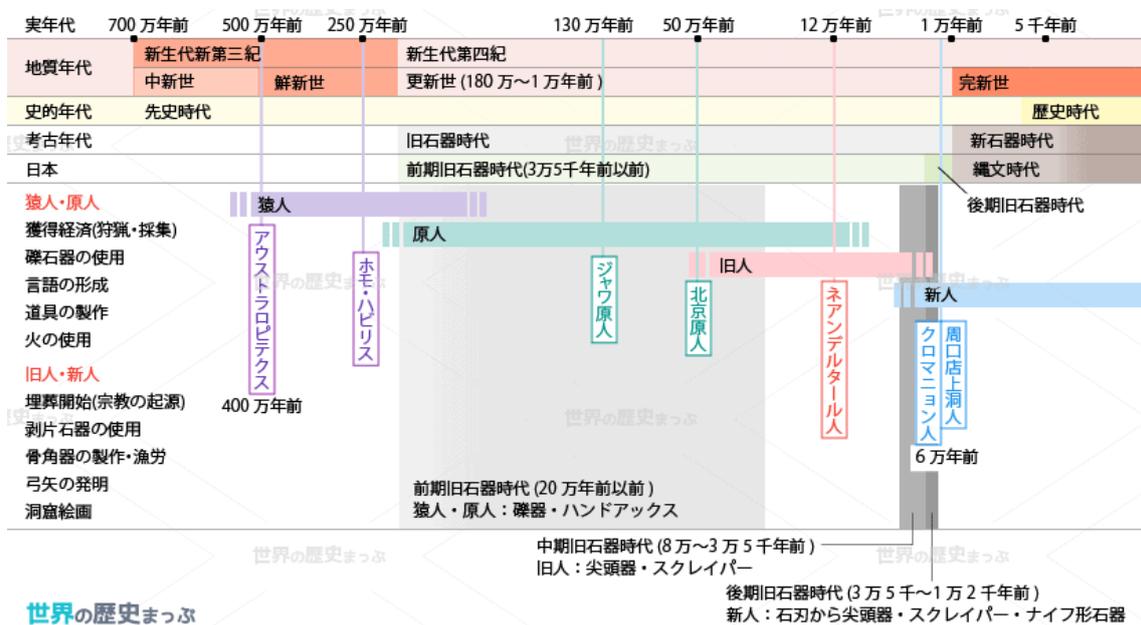
教科書では頭骨の説明が必ずある。縄文人は、顎がはり、大きな頭蓋の下の四角い眼窩に眼球を納めて、窪んだ鼻根の上に眉間を突出させ、鼻は反り上がり、歯並びは小さい。正に寸詰まりの yome の顔である。私は、面長で凸凹の少ないのっぺりした顔に、厚い頬を持ち、歯ははさみ状であり、大きく複雑である。これだけ違っても夫婦ともに日本人であるのは間違いがない。イタリア、イギリスでは先住民が征服される様が歴史に残されているが、日本では文字がまだ無い時に



◀解説 日本人の形成 東南アジアに達した新人のうち北へ移動した集団の一部が4～3万年前頃までに日本列島に到達し、縄文人の祖先になった(②・④)。一方、シベリアに向い、バイカル湖付近に定着して寒冷地適応を遂げた集団が、その後南下(⑥)・東進し、縄文時代末期から朝鮮半島経由で九州北部に渡来した(⑦)。その後、先住の縄文人との混血を重ねながら日本列島に拡散し(⑧)、現代の日本人を形成していった。

征服があったのである。教科書では、北方の寒冷地が弥生人の顔を作り、先住民であった縄文人は南方から来たと今もしている。崎谷満氏の DNA 分析によると縄文人も北方系となり、教科書と相反している。

古墳時代から古代国家の形成をみた第三章の日本国は、新潟から関東の線の北側、南九州から南西諸島は国外であった。DNA 分析でも、アイヌと沖縄は縄文人に近く、畿内を中心に西日本が弥生人の DNA が濃くなっており、先住していた縄文人の日本列島に、渡来人が金属器、水稻農耕、機織り、高温釜による弥生土器などの技術を持って移住し、縄文人もその技術を取り入れて日本国を作っていたことは間違いない。



縄文人が何処から来たかは、新人（ホモ・サピエンス）がアフリカから出て、ユーラシア大陸の中をどのように拡大していったか、その旧石器時代の資料が乏しい以上追いかけることができない。ただ、大陸の人類から縄文人は早期にわかれ日本列島に移り住んでおり、列島の自然環境によって大陸とは違う信仰心を持っていたのではないかと考えられる。

人類とは、二足歩行をし、手を使って石器を作り、森から草原にでて狩りを行い、火と言語を使って脳容量を増した事から始まるとされるが、現代の人類は新人から発達したものであり、その前に栄えたネアンデルタール人と混血していると DNA から言われている。では、なぜ新人がなぜ栄えたのか。

より精緻な石器、骨角器を用いて、弓矢で大型の獲物を取る事が出来たのは、その道具の発達だけではなく、ネアンデルタール人が家族単位での狩猟であったのに対して、個体としては腕力が劣る新人は、人をつなぐ社会性が強く、多人数による集団での狩りが出来たからだと言われている。網野氏は「人間は本質的に自己と共に他者を意識して生活する動物」と人間を定義した。宗教心は他者との社会構成の為にあり、人類誕生と共に生まれたのである。

った。

アルタミラの洞窟では、埋葬が行われ、洞窟奥深くに狩猟対象（野牛・トナカイ・象・馬・鹿・熊・サイ・狼）の絵が描かれ、動物の仮面や角をつけて狩りの成功を祈っている姿の祈祷師（シャーマン？）らしい人物像、男女のシンボルや人の手形なども描かれたことから、壁画は狩猟の成功を願う呪術的な作品と考えられ、信仰心を新人はもっていたとされる。



・三内丸山遺跡（青森県）

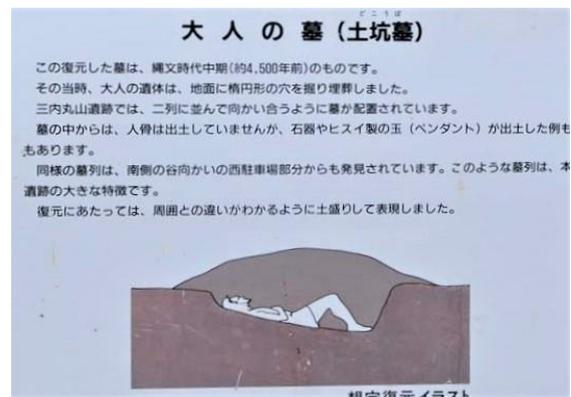
50 年前の教科書では、縄文人は家族単位で移動して狩猟採集を行う未開人であり、そこに弥生人が水稲農耕を持って渡来したと書かれていた。

1994 年に直径約 1 メートルの栗の柱が 6 本見つかり、また幅 10 メートル以上の大型竪穴建物跡がいくつも出土し、40 ha の史跡を発掘すると、竪穴住居、捨て場、掘立柱建物（倉庫）、貯蔵穴、墓・土坑墓、粘土採掘穴、盛り土、道路 3 本などが、計画的に配置されている大きな集落があったとわかった。



縄文時代前期中頃から中期末葉（紀元前約 3900～2200 年現在より 5900-4200 年前）において、既に 500 人ほどの定住生活が営まれていた事に日本中が沸いた。住居跡は 750 ほどあるが、1700 年も存続したとなると、重なって作られるのが常であり、同時に存在した数を確実にとは言えない。

長さ 32 メートル、幅 10 メートルの大型建物は小さな住宅以外に集落に必要とされた共同作業場であり、周りを石で囲んだ有力者のものと考えられる環状配石墓が道路沿いの土坑墓とは別があり、土坑墓には新潟産のヒスイが副葬されていることから、社会階級「王 臣 民」の存在がうかがわれる。



子供は壺に入れられて埋葬されていた。発見された 800 基の数では、500 人と推測する人口と 1700 年間の定住から少ないので、土杭墓と同様に特別な子供だったのだろう。

集落の周囲には栗林が栽培されており、多数の堅果類（クリ、クルミ、トチなど）の殻、さらには一年草のエゴマ、ヒョウタン、ゴボウ、マメなどといった栽培植物の種、ノウサギ・ムササビの動物、貝だけでなく、マダイ・ブリ・サバ・ヒラメ・ニシン・サメの魚類の骨も出土した。



縄文ポシエットが有名である。ヒバの樹皮を網代編みしたもので、中にはクルミが入っていた。

既に、漆が採集されており、木製の皿、土器に赤く塗られていた。石器、骨角器は、狩猟につかう鏃・槍・弓だけでなく、皮なめし用、丸木船削り用、櫂用、漁網用と目的に合わせて作られており、そこには専門職が生まれ、技術の伝承が行われていたと思われる。

縄文人の交易は広い。サヌカイト、アスファルト、ヒスイ、黒曜石と遺物を見るだけでもわかる。

1 縄文時代の交易

サヌカイト

近畿・中国・四国地方は黒曜石の産出が少なく、石器の原材料にはおもにサヌカイトが用いられた。原産地は、香川県金山・五色台、奈良県二上山などである。縄文晩期には、黒曜石の産地に近い中部地方でも用いられ、交易圏が拡大したことがわかる。



▲サヌカイト 香川県金山産 山口県立山口博物館蔵 縦15cm 横18cm

アスファルト

アスファルトは、箆や槍先を柄の先に固定したり、土器を補修したりする接着剤として利用された。原産地は、日本海側の秋田から新潟にかけての油田地帯に限られているため、土器に入られて産地から遠隔地まで運ばれた。



▲アスファルト 新潟県 大坂上道遺跡

ひすい(硬玉)

縄文時代のひすいは、すべてが新潟県の姫川流域の原産で、装飾品の貴重な原材料として利用された。代表的な製品である大珠が、全国に分布していることから、広範な交易ルートの存在が推定される。



▲ひすい 山梨県 天神遺跡



縄文時代は気温が今より 2 度程高く、縄文海進と言われよう今より海面が 2～3 m 高かった（ピークは 7000 年前）のだが、寒冷化して食料連鎖が変わり、大きな集落が維持できなくなり、50 年前の教科書にも書かれていた貝塚でしか縄文人は見えなくなった。

・埋葬

大正4年に発掘された岡山県の津雲貝塚では、厚さ30センチあまりの貝塚層から170体あまりの縄文人の人骨が発掘されたことで全国に名を轟かせた。現在の教科書に掲載されている。人骨はほとんど仰臥屈葬である。ほとんどのに抜歯が認められる。少数ながら貝輪や腰飾り、鹿角製耳飾りの成人骨、石製首飾りをしている小児骨もある。

出土遺物は、縄文土器・石鏃（せきぞく）・削器（さっき）・石錘（せきすい）・土偶・土板・鹿角製釣糸である。年代は紀元前約1200年頃と縄文晩期の貝塚層であり、縄文文化は列島の東と西とで伝播が違う事もあり、三内丸山古墳（紀元前約3900～2200年）と埋葬の形が違う事に私は驚かない。津雲貝塚の埋葬は弥生人の埋葬に繋がっていると私は見る。

縄文人は屈葬であり、弥生人は伸展葬だから、縄文人の埋葬には死霊封じがあるような記述がネットに多くある。

上体が寝ていて背を下にした、つまりあおむけの屈葬を仰臥屈葬、横腹を下にした形を横臥屈葬、腹を下にした形を俯臥屈葬という。上体を立てた形を座位屈葬という。屈葬の程度にも膝頭が胸に密着する姿勢もある。伸展葬というには、膝が曲がっていて、伸展葬を意識した埋葬の方法をとっていないものまでである。



埋葬の姿勢で信仰心を論じることは無意味だと思う。私の叔父さんは、座棺に上体を立てた形を座位屈葬で置かれ、60年前火葬された。土葬に座棺が用いられるのは、近年まで普通であった。私たちは「カンオケ」と呼んでいた。

死者を土葬するのは、「穢れ」回避の衛生面が第一であったはず。古代人は今と違って死亡率が圧倒的に高く、生活圏への「穢れ」を避けて、集落近くの土葬は世界に多く共通する。そういう意味では、貝塚に埋葬されるのは合理的であろう。

縄文後期になると、埋葬した上に環状に石を置いたり、墓標に吊り下げたのであろうか土杭に仮面が現れる。埋葬者への記憶の装置が現れて、集団の力を象徴するものとなり、人間の社会性の発達と共に社会をまとめる信仰心が現れたと思う。



日本の新石器時代（縄文時代）では、欧州のような洞窟画もストーンヘンジもなく、祭壇らしきものは弥生時代まで待たないといけない。

・土偶

「土偶ジョシ」がいるようだ。「仏像ジョシ」だと、様式についてのウンチクが必要だが土偶にはいらない。土偶は、母性を表す女性だけで、男性の土偶はない。そのデフォルメの姿は現代アートを思わせるものであり、若い女性に人気なのだ。土偶はフォッサマグナの東にしかない。縄文時代の日本列島は東西に二つの文化圏に分かれていた。東の縄文遺跡では必ずあり2万点も出土している。弥生時代になると土偶は消えてしまい、写実的な埴輪が5世紀に現れる。これからも、縄文から弥生にかけて日本列島に大きな変革があったと言える。

縄文人の信仰



教科書では「縄文人の信仰」と、土偶の変遷にタイトルをつけているが、その生産技術は、粘土をこねて縄文土器を作る技術に寄っているので、12000年の縄文土器の時代区分、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期にあわせて並べてあるだけで、土偶の形による「信仰」の変遷には触れていない。私なりに推定をしてみる。

新石器時代に土器が生れ、新石器時代＝縄文時代となる。植物、特にすり潰したドングリを煮て食べることができ、人口も増えたことであろう。貯蔵する道具は、動物の鞣し皮、植物の網物によってすでに袋としてあり、草創期の土器は袋状であった。早期になると、竪穴住居中央のイロリに突き刺すように、底が尖ってくる。前期になると熱を受けやすくする平底となり、縁に装飾が生れ、盛り付け用の浅鉢、台付き鉢、壺、漆塗り土器と用途に合わせての土器が生れた。縄での文様だけでなく、竹菅を利用した文様がおおくなる。ここまでに、8000年かかっている。

BC3000年、5000年前になると縄文土器の花、火炎土器が現れる。竹菅で穴を開け、へらを巧みに使い造形している。有孔唾付土器では入れ物としては使いづらく、さらに釣手形土器となると、釣り下げてランプとして使うしか用途はなく、数も少ないので、集落の中で信仰儀式が生まれた事が推測される。



土偶に戻る。縄文前期までの土偶は、小さく個人が携帯するものだろう。縄文中期の山内丸山遺跡からの土偶 2000 個は全て板状土偶だった。顔がつき、乳房、陰部の表現はあるが、それまでの母性を示すボリューム感はなく板状であり、壊された姿で出土している。ヘラを使ったレリーフである。遺跡の中で大型化していく。携帯するものでなく祭事の為だと思われる。

教科書ではこれらは立体の土偶でないので、土偶の系列から外しているが、茅野市の遺跡、集落の中央にある土杭から寝た状態で出土した「縄文のビーナス」が突然作られるものではなく、この間の時間をつなぐ板状土偶にも「祈り」のスポットを当てるべきだと思う。



縄文前期までの土偶は、乳房と尻だけであり、顔と手足はない。旧石器時代晩期 BC2 万年の「ヴィレンドルフのヴィーナス」と相似している。これは石器で石灰岩を削ったもので、ベンガラで赤く塗られていた。高さ 11 センチとその形状から、携行物だったのであろう。

縄文人の信仰心は旧石器時代と同じく、赤ん坊の食料を出す乳房の膨らみと、赤ん坊を宿す尻と腹の膨らみへの畏敬から始まったのであろう。これを「女性の持つ神秘を崇める」から「大地の豊穡を願った」と教科書は 12000 年の土偶をまとめて書いているが、それは違う。縄文中期に、土器は著しく発達する。山内丸山古墳は栗林に囲まれ、一年草のエゴマ、ヒョウタン、ゴボウ、マメなどといった栽培植物の種が見つかっている。古事記では、粟は大切な食料であり、神産みでは「スサノオが殺した女神の頭から蚕が、目から稲が、耳から粟が、鼻から小豆が、陰部から麦が、尻から大豆が生じた。」とある。蚕、稲は弥生文化だが、豆は縄文時代から栽培されており、農耕とは言えないまでも、一定区画を定めた畑での栽培が

始まり、アワ、ヒエ、蕎麦、麦、陸稲、豆によって、縄文人は集落を通過して定住し、集落では分業が行われ、祭りが生れたのだと考える。

「縄文農耕」という革命があったのだが、日本はカミが作った「水穂国」とする意思が日本列島の歴史を曲げていると思う。弥生人の水稲耕作の前に栽培は始まっていたのだ。東南アジア文明の芋栽培、メキシコ文明のトウモロコシ栽培と、石器時代に栽培は始まっており、そして、煮炊きと貯蔵の為に土器が生れ、金属器が発明されたのである。

土偶への信仰は、「縄文農耕」と、「集住」によって変わった。「縄文のビーナス」をみよう。



顔がある。頭上にある形（髪形か帽子か）は、動物が持つ群れの中で目立つ手法であり、自立する高さ27センチは仰ぎ見られるものであったであろう。わざと壊した板状土偶とは明らかに違う。乳房は小さく妊娠している。集落全部を尻に敷く如く大きな尻であり、尻の割れ目は前に繋がっており、離れた脚の上を盛り上げて女陰を表している。この集落において特別な女の埋葬の為に作ったのだろうか。埋葬の為にわざわざ作ったのなら地上に記憶として残す個人の象徴であったはずであり、埴輪のように立てられて埋められるものであろう。女の生前から、集落のシンボル「豊穰への祈り」として手間をかけて作ってあったのを、彼女の埋葬に際して、大切に副葬したのだと私は考えたい。

これから500年～1500年を経ると、「合掌土偶」が現れる。土偶は祈りをささげるシンボルであるべきものであり、祈る合掌の姿ではなく、両手で紐を突かんでいる座産の姿を現しているとの説に賛同する。正面からの写真はネットに少ないが、腹はへこみ、女陰は大きく裂けているので、産後の安堵の姿をシンボルとして、安産と安寧な産褥を願ったのではないだろうか。

動物土偶として、犬、猪が多くあり、これら身近にいた動物の出産も見ていた縄文人だったのだが、ごくごく身近にある人の死と、再生（お産）に特別な信仰心を抱いたのだと思う。

今に残るのは、石であり土器でしかないが、アイヌの木彫りのように、多くの獲物を願って木彫りを行い、アメリカインディアンのトーテムポールのように高く木を掲げ、祈りの空間を作っていたと想像している。

山内丸山遺跡の6本の栗の大木は、住まい、倉庫に使う為には労力がかかりすぎる。500人からの住人のまとめのシンボルとして縄文人が力を合わせて作ったのだと思いたい。私は諏訪の御柱祭りを思い起こした。



イノシシ 高さ9.7 cm



クマ 高さ8.3 cm



オオカミ 高さ4 cm



シカ

耳に穴の開いた土面が土杭に出土する。墓の上に木杭を立て、そこにシンボルとして引っかけたのではないだろうか。土面は顔に比べて小さいものが多く、顔に面としてつけるなら、木製のほうが手軽に作れ、つけるに軽いいので良いに決まっている。もっとも、顔に土を塗り、羽で結い上げた髪を飾り、耳、歯を異形にし、刺青を施すほうが、仮面づくりより先だったのだろう。合掌土偶の顔を仮面だという解説もあるが、縄文人のオシャレ姿を現しているのではないだろうか。



合掌土偶の顔

縄文人の出産「埋甕」の風習について木下忠氏の論文がある。「堅穴住居の出入りに「埋甕」があり、その中には後産の「胞衣えな（胎盤）」が納められていたと推定されるが、これは、近代の東日本でも、人の足で踏まれやすい所に埋めて踏まれれば踏まれるほど新生児が元気に育つ風習が残っており、これが西日本となると母屋とは別にたてた産屋でお産し、その床下、縁の下に犬などに掘りかえされぬように深い穴を掘って埋める風習となっている。」である。

第6章の平安貴族のケガレで私は「農村を語る神話世界の様が、産、死、腐、尿、糞、屠畜のケガレ（穢れ）と、海、高天原のキヨイ（净い）が対比して描かれ、キヨメの「禊」は、祀り場でのハライ（大祓い）と連続する。」と神話世界とケガレを書いているが、縄文人には月経、出産の血へのケガレ意識は無かったと思う。なぜなら、遊牧民、狩猟民は屠畜をし、血を見る事も皮を剥ぐことも日常であったのだ。しかし、水稻耕作と金属器と織物を持って渡来した弥生人の「カミ」が日本にケガレを持ち込んだと考える。被差別部落が西日本に強く残るも、弥生文化のせいであると言う文化人類学者に賛同する。

山本幸司氏は「穢れとは、人間社会秩序をかく乱する事象への、社会の不安、恐怖の念がそ

れら事象を忌避した結果、観念として定着したもの」と定義している。すると、恐れと不安を最も感じるものは生ける者には死であり、それに至る飢餓、疫病、怪我、火災が穢れに繋がるものとなる。信仰心とは、これらから逃れるものと考えるのが分かりやすく、壊された土偶はそれらへの呪術であったのであろう。

さらに、縄文人は「豊穰」「出産」と喜びへの願いを信仰としていたのであった。縄文人は集まって定住することにより、埋葬儀礼と出産儀礼を行い、集団の存続、祖先・子孫と言う概念をもったのだと考える。まだ、弥生人がクニ（郡）を日本列島に持ち込む前の大らかな時代の信仰であった。

・アニミズム

辞典では、ラテン語の「氣息」とか「靈魂」を意味するアニマ **anima** に由来する語で「自然界のそれぞれのものに固有の霊が宿るという信仰」とある。

縄文人だけでなく、現代の日本人にも多くの理解できない事、避けたい事、望むことがあり、習俗的に「カミとホトケ」に祈りをなすのであるが、1871年文化人類学者のエドワード・タイラーが「アニミズムとは多くの先住部族の信仰体系を表す言葉であり、最近になって発展した組織宗教(キリスト教、ユダヤ教、イスラム教、バハイ教、仏教、シーク教等)との比較対照のために用いられてきた」と説明したように、「カミとホトケ」以前の信仰心を持つ縄文人、弥生人は、比較対照してアニミズムと言って良いのであろう。しかし、文字を持たない未開人が自然界のあらゆるものに「人の写しとしての霊」を感じたかどうかの確証はない。弥生人のカミは、記紀の中「神産み」で「八百万のカミ」として名前が残されているが、縄文人の遺物は少なく、石か土器でしか残っていない。

縄文人は石棒の形で、陰茎（男）を残したが記紀では女陰（女）しか書かれていない



ギリシャ彫刻はルネサンスに繋がった。ラオコーン像BC2世紀が典型である。くねらず裸体に小さな陰茎。
BC6世紀の半人サキュロスは、勃起した陰茎が主役だったのに。



ギリシャ彫刻の ヘルマherma アテネ BC3世紀~AC1世紀

アテネ考古学博物館では、偉人の肖像彫刻が多くある。女性は一体のみだが、400年に及び偉人=政治家、商人となる多。肖像の下、テラコッタ、青銅できた正方形の柱にレリーフした像の事をヘルマと言う。ヘルマは街道と境界の境界線を示す目印として使われた。市場には必ずである。アテナでは、幸運を招くよう家の外に置かれ主を誇った。



田原神社お祭りの男根神輿を笑うがごとく、観光客は皆、微笑む。

唯一女性の肖像彫刻だが柱は無く女陰があつたかどうかわからないうか無かつたかと思う。

石で残っているものに唯一「石棒」がある。男根そのものだけであり、男の土偶はない。男

へのアミニズムは男根だけかよ！と、嘆くところであるが、「出産」「豊穰」信仰への男の働きはこれでは足りないのは、確かにそうだ。サル山では一匹のボスザルが全てのメスザルを一本の男根で制している。

人は食料を季節にとらわれず得られるようになり、食料を貯える知恵もつき、子作りに季節がなくなってしまった。年中いつでも子供を作れるように「進化」してきた。縄文人も性行為がなくして子をなさないのは承知しているが、子育ては集団で責任を持っていたのではないか。誰その子である事より、この集団での子として育てるのだ。新人（ホモ・サピエンス）は社会を家族から広げて作り、その集団の力で旧人を圧したのであった。

鉄器を操り、奴隷に農業をやらせ、商業で儲けたギリシャ人は、神殿を中心に都市国家を作り都市間の戦争を続けた。街道の交差するところ、都市の広場には、支配者として実在した男性の精緻な肖像彫刻と男根がセットである。これを「ヘルマ」と言う。ギリシャ神話では、地母神ガイアは、夫であり子供でもある天空神ウーラノスの男根を末子クロノスに命じて、刃が魔法の金属・アダマスで作られた鎌で切り落とさせ、大地と農耕の神のクロノスが二番目の神々の王となる。男根が人の活力の象徴であるのは、地母神と共に世界共通である。日本と同様に八百万の神々がいるギリシャ神話を古事記と読み比べてみると、アマテラスとアテーナー、スサノオとアレースと対照して面白い。古事記の戦いはヤマトタケルが全て引き受けているが、ギリシャ神話ではゼウスなど多くの男神が戦い、活躍する。よって、男女の絡みも多彩である。

日本の肖像画の歴史は、中国仏教の影響を受け、礼拝を目的として祖師や高僧を描いた絵を描くことから始まっており、ギリシャに匹敵する男の顔となると、武士の出現まで待たないといけない。特定の個人の肖像画から、日本の個人の確立は西欧に 1500 年の遅れがある。

男根を「活力のシンボル」と敬う祭りは今もある。愛知の奇祭として田縣神社おわせ祭りが

田縣神社 豊年祭 (おわせ祭) 3月15日 愛知県小牧市田縣町
 毎年ヒノキで作る、直径60cm、長さ2mあまりの大きな男型形の神輿をかつぎ、巫女は小型を抱く。恥ずかしながらも思わずほほえんでしまう祭りです。古語拾遺が由来とされていますが、いつからかは？



古語拾遺46 御歳神 807年
 官以牛完膏満口 作男堂形以加之 【是 所以厭其心也】 以蕺子蜀椒吳桃葉及鹽 班置其畔
 紐 (イナゴ) が出て去らなければ、牛の肉を田の溝の口に置いて、男茎 (オハセ=男性器) を作って加え置いて蕺子 (ツスダマ=ハトムギ)・蜀椒 (ハルハジカミ=山椒)・吳桃 (クルミ) の葉と塩をその畔に分けて置いておきなさい。

古事記「国産み」問其孫伊邪那美命曰「汝身者、如何成。」答曰「吾身者、成感不成感應一處在。」爾伊邪那岐命詔「我身者、成感不成感應一處在。故以此吾身成感應、刺差汝身不成感應、以爲生感團土、生奈何。」伊邪那美命答曰「然當。」と、凸凹で性器を差し、凹に凸を刺し差して、日本の鳥々を生む。
 古事記「神産み」家宅八神(家屋あるいは、自然家から家屋を守る神々)自然を司る神々(海、河、川、風、木、山、草)神の乗る船、穀物の神と多くの神の乗る船、次生火之夜登遊男神、亦名謂火之夜遊男神、亦名謂火之遊男神。因物此子、蓋著登見炎而脚臥在。と、火の神を生み火を焼かれて病気になる。嘔吐物から狐山、大便から土、尿から水が生まれ、伊勢外宮の食物の神を生んで、嘔吐の神を殺した刀から刀鍛冶の神が主れた。スサノオが殺した女神の頭から草が、目から稲が、耳から粟が、鼻から小豆が、陰部から妻が、尻から大豆が生じた。

大縣神社 豊年祭 (おそそ祭) 3月15日 愛知県犬山市宮山
 お多福の顔であるが、口の部分が女性器そのものとなっている。蓮物の布をかぶって練り歩く女性もその姿形から女性器を模したとされる。男性器を奉納する田縣神社と対をなす尾張の奇祭です。



女性の尻元からか、田縣神社と違い、神社の重層もなく、規は縮小されているような。神社にある「姫石」女陰は清水寺などにもあります。女性が練り歩くのが主体の祭りだった私の記憶です。

あり、それに鏡面しての大県神社おそそ祭りも有名だ。縄文人は「集団の喜び」でとして男根を神輿に担ぐことはなく、大地にボスザルのシンボルとして、建てただけではなからうか。

第二章 弥生—古墳前期（BC7世紀～AC4世紀）のカミ

・弥生人とは

第一章では、縄文人を際立たせるために、既に弥生人に触れた。樺太、北海道、本州、九州、西南諸島と弓型に繋がる日本列島に縄文人が20～30万人住んでいた。東北の落葉広葉樹帯と西の照葉樹帯とでは、主食の木の実が違い、大陸との連携が違い、フォッサマグナで違う文化圏を作っていたが、いずれもDNA鑑定では北方系の新人（クロマニヨン人）から出た縄文人であった。

4 弥生文化
中国大陸・朝鮮半島から伝播した文化

4-1 水稻農耕
● 4000～3000年前の遺跡
● 5000年前の遺跡
● 7000年前の遺跡

4-2 金属器
● 青銅器 大阪府 加美遺跡
● 鉄器 佐賀県 吉野ヶ里遺跡

4-3 大陸系磨製石器
● 大陸系磨製石器 佐賀県 紫瀬遺跡

4-4 機織り技術(復元想像図)
● 機織りの様子

そこに、新たに朝鮮半島から追われ、8世紀まで何十万人規模で渡来した弥生人が、縄文人と混血し「縄文系弥生人」「渡来系弥生人」が生れて、日本国を作った。弥生人に追われた北のアイヌと南の鹿児島・沖縄には、縄文人のDNAを色濃く持った人々が今も住んでいる。

水稻農耕と金属器と織物と、渡来人の文化はセットのものであるのだが、「BC700年の板付遺跡（博多）で水田が見つかった。」
「BC1000年の菜畑遺跡（松浦）の縄文時代の遺跡に水田があった。」と水稻農耕に偏り、「BC400年に九州に上陸した弥生人は100年ほどで一気に西進し、畿内で古

墳時代を築き、日本国を作った。」との私たち世代の定説を覆し、今の教科書は弥生時代の始まりを600年も遡らせた。

一方、青森県の砂沢遺跡 BC300年では土偶と共に水田が見つかり、垂柳遺跡では紀元ゼロ年頃の水稲農耕の様子が出土している。水稻耕作だけに偏るのでなく、弥生文化は九州から東海地方まで700年かけて、縄文人を取り込んで伝播していったのが正

1 青銅製祭器の変遷

	弥生前期 (前期)	弥生中期 (中期)	弥生後期 (後期)
銅矛	銅矛 (前期)	銅矛 (中期)	銅矛 (後期)
銅剣	銅剣 (前期)	銅剣 (中期)	銅剣 (後期)
銅鐙	銅鐙 (前期)	銅鐙 (中期)	銅鐙 (後期)
銅鏡	銅鏡 (前期)	銅鏡 (中期)	銅鏡 (後期)

● 銅剣・銅矛・銅文は、朝鮮半島でも儀式的な意味を持っていたが、日本で生産が始まるといよいよ大形化し、形状も細形→中細形→中広形→広形・平形と変遷して、純然たる祭器に変化する。銅鐙も、家畜につけていた鈴や朝鮮半島の小銅鐙が日本で独自の発達を遂げて祭器となり、大形化するにつれて、実際に音を鳴らすものから見るだけのものへと変わった。

しく、採集、狩猟、漁労を主とした縄文文化は、気候が変わり、海が沖に下がってもたやすくは消えない。貯蔵に適した稲が飢餓を救うと言っても、小さな水稻農耕では、半年間手間暇をかけても、冷夏、水害、害虫により収穫量は安定せず、また、沖積平野は滋味が薄く連作ができない。よって、東北地方の水田は早々に消滅した。日本の弥生時代とは、世界標準の青銅器をメジャーにすべきであり、BC4世紀～AC3世紀の従来説で良いと思う。

日本列島では、長く鉄鉱石から鉄を取り出せなく、弥生時代だけでなく、5世紀になっても朝鮮半島の加耶国から鉄鋌（てつてい）とよぶ短冊形の板に規格化された鉄素材が輸入されていた。

鋌（つち）・鉗（かなはし）・鉄床（かなとこ）などの鍛冶道具や鉄の製錬滓の古墳副葬が5世紀に始まることから、ここに列島によろやく鉄器時代が到来したと言える。また、その頃に馬・

牛も入って来た。これらは産業革命であり、王は鉄を独占して権力を強める。この事は、369年に百済王は倭王に七支剣を贈り、5世紀後半のワカタケルが臣に下賜した鉄剣が稲荷台一号墳（千葉県）と江田船山古墳（熊本県）から出土した事から証明される。私が古墳の姿で時代区分する考古学はおかしいと思うところだ。地方にも製鉄所が見られるようになるには律令国家ができる奈良時代まで待たないといけない。



文学部に所属する考古学は、放射性炭素年代測定・DNA解析には疎く、土器・青銅器・古墳の型式分類から、早期、前期、中期、後期、晩期と名前をつけている。年代の実数は曖昧なままであり、考古学者の論文では、その遺跡の特徴が地域差なのか年代差なのか私によくわからない。学者の間に中期ならば中期の共通の実年数があるものなのかと疑う。

一つの集落が500年続けば、どこでその特徴を見出し、年次を切り出すかの問題があるが、1970年代からの開発ブームに伴った「記録の為の発掘調査」は、地方自治体毎にまとめられており、学芸員は書きおいただけで、日本全体の歴史とは繋がっていない。

私は、1962年「岩波講座日本歴史」の中の「古代史概説」で石母田正氏が述べた「無土器時代が野蛮前期、縄文時代が野蛮後期、そして、弥生時代が未開前期、古墳時代前期が未開後期であり、古墳後期の4世紀末から5世紀の倭五王時代から文明段階となり、歴史時代に到達し、推古朝前後に国家の成立をみる。」を習った。

エンゲルスの「家族・私有財産・国家の起源」依拠して「考古学と歴史学の時期区分の統一」が行われた当時の定説である。そこに、岡本太郎が現れ、「驚いた！こんな日本があったのか。いやこれこそが日本なのだ。身体中の血が熱くわきたち、燃えあがる。」と叫ぶ。私も1970年万博「太陽の塔」を見て、古事記が伝える水徳国は作られたものだと知った。

「倭五王時代から歴史時代」であると思い、第三章 天下を治めた大王と、古墳時代の5世紀から私は「カミ探し」を書き始めた。一方、古墳前期の3世紀、4世紀の「前方後円墳は日本独自のもの」から説き起こす考古学、埋葬の姿による時代区分を胡散臭く感じているのは今も変わらない。弥生時代から集落の長、クニの王墓はあったのである。

●弥生時代の集落が、いくつか集まり「クニ」となり、王の墳墓が特別に作られ、古墳時代3世紀後半に繋がる。

BC400年～AC400年の日本列島を、集落から「クニ」へ、さらに大きな「クニ」になる過程と見て、弥生と古墳と区分をしない方がよい。



弥生時代のクニの支石墓、墳丘墓は朝鮮半島から持ち込まれたものであり、古墳時代の前方後円墳は朝鮮半島の「伽耶国」にもある。BC1000年、九州に水稻農耕と青銅器を持って上陸した渡来人は、朝鮮半島との交流を維持しつつ、東に向かい、弥生文化を縄文人に吸収させ、倭の国の範囲に弥生人として同化するには、BC300年と700年かかった。その間に川沿いの集落が統合されクニを徐々に形成し、2世紀に大乱がおき、3世紀に邪馬台国ができる。クニが大きくなるにつれて、王の権力が高まり、戦いに負けた王は大王（オオキミ）の臣となり、集落のカミは臣に統合され、王の権力を助けるクニのカミの下に入る。

古墳時代は、4世紀～6世紀であるが、4世紀には各地にヤマト王権の前方後円墳を真似て出来き、ヤマト王権を中心とした連合国としての倭の国が徐々に形成された。

5世紀の巨大古墳期を経て、ワカタケルは中国に対して、478年倭の王と名乗り、6世紀に王権は地方の王を「国造」に任じ、直轄地に「屯倉」おき、「氏姓制度」によって、中央政権を確立した。600年第一回遣隋使以降、朝鮮半島の争いに参加し白村江の戦いに負けるも、律令国家に向かう。

渡来した弥生人は、集落（小邑）から環濠集落（大邑）を作り出し、クニ（郡）をつくりだした。3世紀には、中央の邪馬台国だけでなく、北九州の奴国、中国地方の吉備国、出雲国、東海地方の美濃国、尾張国とクニ（国）作られ、4世紀には畿内の前方後円墳のもつヤマト王権のイデオロギー（宗教を含めた社会構成の基となる考え）により、西日本にローマ・ギリシャ時代のポリス国家のような連合国家が作られていく。この「クニの形成」では、弥生時代と古墳時代はひとつながりと捉えられる。ただし、イデオロギーの文としての抽出は、8世紀の記紀まで待たないと文書はなく、大変難しい。

第二章弥生—古墳前期（BC7世紀～AC4世紀）のカミとは、弥生時代（磨製石器・青銅器時代）から古墳時代前期（青銅器・鉄器併用時代）を繋げて考えるものであり、ポリス（都市）化していく古代人の生活様式を拾い出し、そこにカミが浮かび上がるのを狙って書いていく。

* 注記

邑とは中国の古代史（殷、周）で使われる集住の姿を現す漢字であり、囲壁をあらわす「口（くにがまえ）」にひざまずいた人をあらわす「邑（阝）」をあわせた会意文字で、この全体を略した部首が「阝（おおざと）」である。邑の社会は同姓の一族（大きく、もはや親族ではない。）による氏族共同体で土塁よりなる囲壁をめぐらし、周囲に氏族民共有の耕作地が展開した。新石器時代から青銅器時代である春秋時代中期（BC500年）までである。鉄器時代の戦国時代（B.C.476—221年）となると、国が立つ。中国統一の漢王朝はBC119

年にすべての鑄鉄所を国営化し、皇帝がその製造を独占した。全国に 46 の国営鑄鉄所があり、政府の役人が鑄鉄製品の大量生産を管理していた。古代中国における鑄鉄の普及により、農業の分野では鉄製の鋤やその他の道具とともに、鑄鉄製の犁先が開発された。小刀、斧、のみ、鋸、および突き錐もすべて鉄製のものが手にはいるようになった。

・倭国

倭国が中国史書に現れるのは、「漢書：地理志」B C 1 世紀の項である。「海中に 100 余国があり中には漢に朝貢する国もある。」と書かれているが、書かれたのは AC1 世紀である。

倭の一つの国である「奴国」の使者が後漢に赴き、後漢の王である光武帝から金印「漢委奴国王」を賜ったと「後漢書：東夷伝」にある AC57 年より遅くに書かれた。金印は博多湾の志賀島で発見されている。AC107 年に倭王が奴隷 160 人を献じ、安帝への謁見を願ったともある。

1 前1世紀～後2世紀の日本	
中国	中国史書にみる日本の様子
前漢	紀元前 1 世紀頃
紀元後 8 年	【漢書】地理志 夫れ濠浪海中に倭人有り、分れて百余国と為る。歲時を以て来り獻見すと云ふ。 (倭は百余国が分立し、なかには漢に朝貢する国もあった。)
後漢	紀元後 57 年
紀元後 107 年	【後漢書】東夷伝 建武中元二年、倭の奴国、貢を奉じて朝貢す。(中略)光武、賜ふに印綬を以てす。 (倭の奴国の王が後漢に朝貢し、光武帝より「漢委奴国王」の印綬を賜った。)
147～189 年	安帝の永初元年、倭の国王帥升等、生口百六十人を献じ、謁見を願ふ。 (倭国王の帥升等が生口(奴隷)160人を安帝に献上した。)
220 年	桓靈の間、倭国大いに乱れ、更相攻伐して歴年主なし。 (倭国で大乱が起きた。たがいに戦いあい、年を経ても盟主がいなかった。)
221 年	【魏志】倭人伝 其の国、本亦男子を以て王と為す。往まること七、八十年。倭国乱れ、相攻伐して年を歴たり。乃ち共に一女子を立てて王と為す。名を卑弥呼と曰ふ。 (邪馬台国はもとは男子が王であり、70～80年君臨した。倭国で乱がおこり、たがいに戦いあって年を経た。そこで、ともに一人の女性を王とした。名は卑弥呼という。)
222 年	
魏 蜀 呉	

しかし、この後漢書も 5 世紀に書かれており、西晋の陳寿によって三世紀に書かれた「三国志：魏志倭人伝」より書かれたのは遅い。「魏志倭人伝」では、2 世紀に倭国が乱れ、3 世紀に邪馬台国の卑弥呼 (?～247 年) が王となり、倭国をまとめたとあり、その邪馬台国にいたる道筋に、対馬国、一支国、末慮国、伊都国、奴国と書かれており、奴国が国としてある事を陳寿は確実に認識していた。卑弥呼は、中国が支配した朝鮮半島中部の帯方郡を通じて魏に使者を送り (238 年以降)、皇帝から「親魏倭王」に任じられた。ともある。

倭の五王の時代、南朝・宋に生きた范曄 (398～445) が 10 本紀 30 志 80 列伝の計 120 巻から成る「後漢書」をまとめるに、彼が実際に見記した事はなく、「漢書」「魏志倭人伝」のような既にあった史書を元にして書いたのであって、書かれた全てを史実として信じることはできないが、この三書によって紀元前後における倭国 100 余国の中での奴国の繁栄は歴史的に間違いがないと思われる。それを前提にして、考古学の成果を見てゆく。

その前に、弥生人は朝鮮半島からの渡来人であるので、朝鮮半島が中国から得た文化史も簡単におさらいする。BC1500 年に畑作農耕が始まり、BC1100 年には半島南部で水田が作られる。BC700 年に青銅器が作られ、BC300 年には鉄器が伝わり普及した。すると、国家ができる。『三国志』魏書三十 烏丸鮮卑東夷伝では、紀元前後から 3 世紀までの朝鮮半島の姿

「原三国時代」を、扶余、高句麗、東沃沮（ひがしよくそ）、濊（わい）、三韓（馬韓・弁韓・辰韓）が、中国の楽浪郡、帯方郡と共にあり、その南に接して倭があると書いている。

国家は戦争で形作られるので、BC 7 世紀から BC3 世紀にかけて、戦争に敗れた朝鮮半島の多くの人々が北九州から日本列島に渡来して弥生時代が始まったと考える。世界史にたびたび現れる民族移動だ。

考古学では BC1000 年に菜畑遺跡（松浦）で水稻農耕が行われたのを弥生時代の始まりとするが、日本列島に漫然とパラダイスを求めて、わざわざ 200 km の海を渡っては来ない。朝鮮半島での戦争によって日本に渡来する人々は、新羅が半島を安定的に統一する 7 世紀末まで続く。

・ 吉野ヶ里遺跡から奴国へ

3. 弥生時代の世界情勢

朝鮮半島

弥生時代は、朝鮮半島の無文土器時代（青銅器時代～初期鉄器時代）から原三国時代に相当します。朝鮮半島では紀元前1500年頃中国大陸より農耕が伝わり、紀元前700年頃には青銅器、紀元前300年頃には鉄器が伝わり普及しました。後期の無文土器は日本列島でも北部九州地方をはじめとする弥生時代の遺跡から数多く出土しており、弥生時代の稲作農耕や金属文化の流入に朝鮮半島からの人々が関わったことを示唆しています。吉野ヶ里遺跡でも、朝鮮系無文土器が多数出土しています。



無文土器時代の後期（初期鉄器時代）から原三国時代



朝鮮系無文土器（佐賀県吉野ヶ里遺跡出土）

鉄器の普及、特に鉄製農具の普及は生産力を増大させ、やがて半島内に幾つかの部族国家が並立するようになりました。弥生時代後期の日本列島の様子も記述されている読書楽史には、この頃、朝鮮半島に次のような部族国家があったことが記述されています。

- ・ 高句麗（現 中国遼寧省・吉林省・北朝鮮北部）
- ・ 東沃沮（現 北朝鮮咸鏡北道一帯）
- ・ 濊（朝鮮半島中東部）
- ・ 馬韓・辰韓・弁韓（朝鮮半島南部）

これらのうち、朝鮮半島南部の辰韓は鉄を産出し、倭人も鉄を求めて辰韓と交易していることが描かれています。この時代の朝鮮半島の状況は弥生時代の日本列島を考える上で中国大陸と同様、非常に重要です。

九州北部の小国



九州北部の小国 那馬台国連合に属する小国の所在地については、対馬国・一支国はそれぞれが対馬、壱岐であり、末建国は佐賀県松浦地方、伊都国は福岡県松浦平野、奴国は福岡県のかつて那津ともよばれた博多を含む福岡平野にあった、と諸説が一致している。



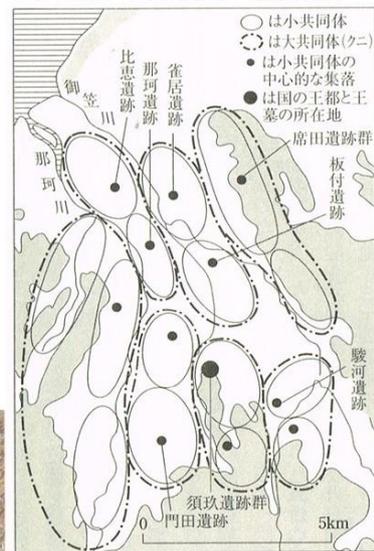
紀元前後頃の北部九州のクニ



紀元前後頃の北部九州のクニ・国

博多湾という自然の良港を持つ。朝鮮半島との交流から奴国が出来た。白村江の敗戦後、大宰府とさらに山に入って、支庁を作る。

BC 200～AC 300年 漢委奴国



ナ国の領域 中心をなす須玖遺跡群はクニ(=大共同体)に匹敵する

弥生時代の集落と言えば、私の教科書は登呂遺跡であったが、今は吉野ヶ里遺跡である。奴国の基盤となった板付集落の代わりに、発掘・研究が進んでいる吉野ヶ里遺跡を見ていく。吉野ヶ里遺跡は、有明海にそそぐ筑後川の支流に沿った神崎郡というクニ（郡）であり、支

流沿いの集落（小邑）のいくつかを束ねて首長となったのは BC200 年頃であった。吉野ヶ里遺跡と同等のものは、筑後川沿いに 10 カ所あった。添付の一点鎖線で示している。

古代には川毎に郡司が置かれ税金が集められ、現代の地名に残っている。古代ではクニ（郡）をまとめてクニ（国）とし、国司がおかれた。佐賀県と長崎県を合わせた肥前国とし、筑後川上流は、博多湾とくくられて筑紫国とされた。そして、645 年に筑前国と筑後国にわかれた。ここで国と言っているのは、現代の県がほぼ一致する。

クニ（郡）としての始まりは菜畑、板付遺跡と変わらず、小川を堰き止め、土で畔を作った小さな水田からであった。琵琶湖野洲川の河口付近の服部遺跡の復元図と等しい。服部遺跡では木製の矢板、農機具は出土せず、縄文土器と磨製石器が出土しており、縄文人が水稻農耕を始めたと思われる。

吉野ヶ里遺跡の丘陵地と離れたところに集落を囲む壕の痕跡がある。BC500 年頃には 2.5ha 規模の環壕集落へと拡大し、青銅器鑄造に用いた鞴（ふいご）の羽口や取り瓶などが出土したことから、ここが弥生社会の分業と交易の中心となり、川沿いの集落をまとめる首長がいたと思われる。

BC200 年頃、南部の丘陵をすっぽり囲む 20ha の環壕集落へと発展。内部に多くの竪穴建物跡や穴倉（貯蔵穴）跡があり、居住域と倉庫域が区別されていた。また、低地からは木製農機具、外洋航行船を模したと思われる船形木製品等が出土した。竪穴建物跡等からは青銅製の耳飾り（もしくは指輪）2 点（一对）や、数点の朝鮮系無文土器（片）も出土した。注意を引くのは、大型蛤刃石斧、抉入柱状片刃石斧などは作れていないことだ。これ等の重量のある製品は、福岡県今山遺跡のように、原材料が採取できる場所で大量生産されていた。石材だけでなく、柄の木材との調整が難しいので木工の専門職が中心だったのであろう。

AC2～3 世紀になると、集落は北方へと規模を拡大し 40ha を超す。環壕集落は二重に囲まれており、北の内郭は、物見櫓、大型の祭殿をもつ首長の居住、祭祀の場と考えられ、南の内郭は棟数が少なく、高い階層の人々の居住区と考えられている。その西方には、吉野ヶ里のクニ（郡）の物資を集積する高床倉庫群があった。青銅器や鉄器、木器、絹布や大麻布などの手工業生産や、各地の手工業産品や人々が集う交易の市が開かれたと推定される。

3 世紀の後半に、環壕集落は消え、その上に古墳が作られた。クニ（郡）からクニ（国）に替わったのであった。

奴国の BC200 年から AC300 年。吉野ヶ里遺跡の如き環壕集落クニ（郡）が 7 つ集まって、奴国が出来た。那河川と御笠川がそれぞれの山からでた所の扇状地から河口の湿地にかけてのクニ（国）である。港・博多湾は日々の漁労だけでなく、朝鮮半島・加耶国からの銅、鉄鋌（てつてい）輸入に欠かせないが、集落できて 500 年たち海岸にはもはや船を作る大木は無く、青銅器、弥生土器製作の手工業をするにも燃料の木材は集落まわりには切りつく

してない。クニ（国）の指示・分業の力が無くては、船は作れず、手工業もできない。高台にある須玖岡本遺跡は、福岡平野に突き出している春日丘陵上の北側半分に位置し、周辺の南北2キロメートル、東西1キロメートルの範囲で大規模な遺跡群（墳丘墓、甕棺墓、青銅器鋳造跡の遺跡等）を持っているが、これらは仰ぎ見る奴国統一のシンボルであり、王は臣、民と共に西側の門田遺跡に住んでいたのだと甕棺墓から私は思う。須玖岡本遺跡には、大きな石蓋の下に大型の甕棺が単独であり、これを考古学者は3世紀の王墓だと言い、その西には副葬品を王ほどは持たないまでも30人が眠る「墳丘墓」があり、さらに南東には、副葬品のない甕棺墓群が200もあるので、これ等を奴国の身分を表すものだと考古学者は続ける。しかし、縄文の埋葬からすでに集落の酋長は石の道筋に沿って代々埋葬されてきているので、副葬された30人はいずれも奴国が500年繋いできた王達だと思う。「大乱」によって倭の国王を畿内に取られ100年、三世紀に邪馬台国に屈した最後の王だけが単独で埋葬されたのだと思う。環濠集落は、より大きな分業・交易の社会体制を作った古墳時代の王の前に、防護柵は必要なくなり消える。王によって開拓を進めた水耕農耕から税は取られ、手工業はそれぞれに特化された所で行われ、社会体制をビジュアルに示す古墳が川下の民から見上げる台地に作られていく。645年、筑前国にまとめられた。

・尾張国、美濃国本巢郡

●濃尾平野は、古代の延喜式927年においては、美濃国が尾張国の2倍以上の収穫を出している。

古代東海道諸国の開発度
日本地誌セミナーV、東海地方、水野時二氏論文による

国名	延喜式 国等扱	田	出 卒 稲	郡の数	郷の数
伊賀	下	4,051町1反41歩	327,000束	4	18
伊勢	上	8,130町6反245歩	881,000束	13	94
志摩	下	124町 94歩	(正榜) 120石	2	14
尾張	上	6,820町7反310歩	472,000束	8	69
美濃	上	14,823町1反65歩	800,000束	18	131

本巢郡(大野郡)の細長さは、根尾川、揖斐川の流域に沿ってあったクニ(郡)の姿を現代に残している。郡司が美濃国司の元で税を集めていた。東山道は、不破の關から大野、本巢と大河を避けて北に迂回していた。木曾川の堤を家康が作る前まで、定期的にある洪水の為に、尾濃平野の開拓は進まなかった。



この章は弥生のカミなのだが、BC4000年の縄文海進の最大の姿に縄文の貝塚（登録数55か所）と古墳を重ねたのを先にみる。縄文人は海の近くの水はけのよい高台に住んでいて、海が沖に遠ざかり木曾三川の氾濫原が広がると、氾濫が作った自然堤防の微高地に降る。奈良時代に国府が置かれる稲沢のあたりは標高6~7mあり、犬山の扇状地から繋がって

貝塚がある。庄内川沿いにも貝塚がある。しかし、鮎千瀨の周囲を逆 U の字に囲む、熱田台、御器所台、笠寺台、見晴台、鳴海台が多く、尾張国の中の縄文史跡の過半を占める。美濃国は長良川、根尾川にも貝塚があるが、揖斐川が圧倒的に多い。35 か所登録の内 29 か所もある。

そして、弥生時代を飛び越して濃尾平野の古墳時代の古墳の位置は、縄文時代の貝塚と重なる。美濃の弥生集落は、木曾川沿いの扇状地から氾濫原の墨俣にかけて多く（20 か所）あるし、尾張も氾濫原に多くの弥生集落はあるが、いずれも古墳は高台にある。美濃の弥生集落数が少ないのは、都市化に伴う発掘がされていないだけで、927 年の稲の石高をみれば、美濃は尾張の 2 倍の収量を得ているので、水田及び集落が多くあったのは間違いがない。

清洲のインターチェンジの工事で貝塚（後に、上に古墳を作ったかもしれない。）の近くを掘ったら、「朝日遺跡」という、人口 1000 人か？と言われる弥生時代の環濠集落が発見された。後にまた書くが、3 世紀から環濠は埋められ、6 世紀となると泥の下になる。すなわち、氾濫原であるので、洪水が起きれば集落は消えてしまう。

古墳は、川毎にできた弥生集落のクニ（郡）の支配者のシンボルとして高台に築くので、縄文の貝塚位置と重なる。美濃は揖斐川の扇状地に多くある。尾張は犬山の 4 世紀の青塚古墳（123m 長）をはじめ犬山の扇状地に 15 か所あり、庄内川の河岸段丘には 4 世紀の白鳥塚古墳（115m 長）をはじめ志段味古墳群（100 か所？）がある。また、鮎千瀨まわりには、6 世紀と新しい尾張最大の段夫山古墳（151m）をはじめとして、多くの古墳があったようである。

5 世紀になると、庄内川に北側から注ぐ支流沿いに味美（味鏡）古墳群（23 か所以上？）が作られる。庄内川のクニ（郡）を巡る争いが志段味古墳群の王との間にあったのであろう。鮎千瀨は、年魚市評→阿由市郡→鮎市郡となり、日本書紀では「年魚市郡」と書かれていて、延喜式や和名抄では愛智郡となるので、ここが尾張氏の発祥であり、犬山の木曾川からの支流のクニ（郡）も統合して、古墳時代に尾張の王となったのだと考える。

尾張最大の段夫山古墳は、6 世紀になってから、5 世紀の旧名・仁徳天皇陵が瀬戸内に向かって作られたように、伊勢湾に向かって、あえて尾張氏の故地に作られたと考える。

魏志倭人伝は、邪馬台国の奥に邪馬台国と対立する狗奴国を伝えるが、揖斐川沿いの美濃のクニ（郡）、朝日遺跡のクニ（郡）、庄内川のクニ（郡）、鮎千瀨のクニ（郡）がゆるく統合されたクニの連合国があり、狗奴国と名乗ったのではないかと想像する。もちろん、邪馬台国は、奈良盆地のクニ（郡）の盟主だ（邪馬台国大和説）と考える故の事である。

私は本巢郡曾井中島村字東河原で生まれたので、前に美濃の古墳を追った事がある。生まれ

たのは樽見鉄道の東側であるが、鉄道の西側に西河原があり川もないのに変だな？と思っていた。曾井中島村の尾張平野に突き出た高台には「舟木山古墳」があった。3世紀から7世紀までの400年にわたって290基の古墳が作られた。最大の方後円墳は60m長あり、石英で覆われておりその輝く姿はこの地域のシンボルであったろう。

西の大野町には野古墳群がある。5世紀中葉～6世紀初頭と短い期間であるので、曾井中島村から一時的に権力を奪ったのだろうか。川下には上磯古墳がある。さらに西の山塊裾には、池田町に願成寺西塚之越古墳群、養老町に象鼻山古墳群とあり、壬申の乱で天武天皇が頼った豪族、美濃の村国氏に繋がるクニ（郡）があった事がこれらの古墳群からわかる。池田郡、大野郡、と郡が細長くあるのが揖斐川沿いのクニ（郡）の証明なのだが、川幅の細い糸貫川しかもたない本巢郡も細長く南北にあるのが、子供の頃からの私の疑問であった。

調べてみると、今は、根尾川は山を出ると西に流れ、揖斐川の支流になっており、席田用水（糸貫川）、真桑用水が田んぼを潤す本巢郡なのだが、1530年（享禄3年）の大洪水によって根尾川は現河道になったのであり、昔の河道は本巢郡の中心を下り、長良川と合流していたのだ。根尾川は長良川の支流から揖斐川の支流となり、昔の河道の荒れ地の上に樽見鉄道が作られたのであった。東河原、西河原は昔のままの地名であったのだ。

1640年（寛永17年）に新溝を掘り、渇水時には真桑用水側に12時間、席田用水側に18時間、全ての水を流す「四分六分」の番水制を定めるまで、用水の水争いは100年続いていたので、クニ（郡）は水稻耕作の水を得るために、川沿いにまとまった事がよくわかる。川沿いのクニ（郡）であるが、川上の扇状地の大邑がクニ（郡）の王となって権力を得た。なぜなら、扇状地は川下の低湿地より水田の灌漑のために人を集めないといけなく、山の木材を燃料として青銅器、土器を作る事から、手工業と交易によって力を得たのである。クニ（郡）の王は、川の氾濫が少ない川上の扇状地を居住地とし、クニ（郡）の中心をなす川に直行する街道が扇状地を繋いででき、やがて、幾本かの川沿いにあったクニ（郡）を統合するクニ（国）の王が出現した。奴国のあった筑紫国と美濃国は、地図上は南北が逆さであるが、クニ（郡）からクニ（国）への移行が似ていて読み取りやすい。

尾張国の濃尾平野の形は家康の「東国を守る」命令によって1609年（慶長14年）に一年で完成させた「御囲堤」によって確定する。尾張側は水不足に悩み、美濃側は洪水に悩むことになる。

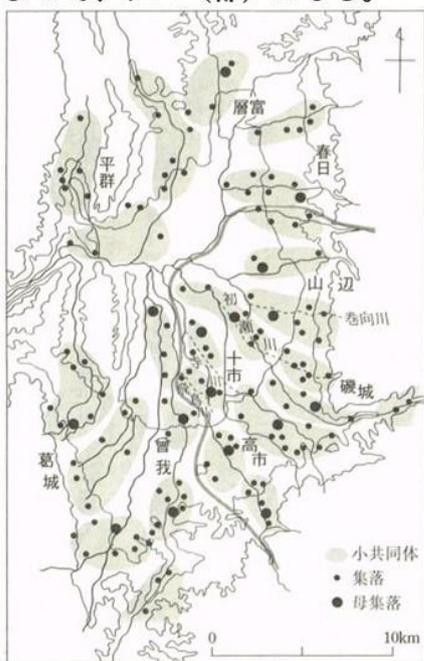


天正14年以前の木曾川流域 (富田風土記)

そもそも、天正 14 年（1590 年）6 月に木曾川の大洪水があり、秀吉は文禄 2 年（1592 年）11 月末から 12 月初旬まで洪水で荒廃した尾張に滞在し、自ら振興策の遂行を指導していた。幾筋にも分かれていた木曾川の流路を固定し、水流や水量を安定させ、渇水期でも川を使って大坂城や城下町の建設に使用する木曾檜等の木材を運ぶ事ができるようにする目的があった。なお、この洪水で木曾川の本流は大きく流路を変え、それまでの葉栗郡、中島郡、海西郡は木曾川によって 2 分され、木曾川の右岸となった地域は美濃国に編入された。

●水系の集落は王（豪族）によって、クニ（郡）となる。

4-② ヤマトの豪族の分布



奈良盆地の地域構造 弥生時代の遺跡を水系ごとにまとめると、23の小共同体(小地域)〔グレーのゾーン〕になり、さらに9つの大共同体(大地域)＝クニ〔太字〕にまとまる。東南部の山辺、磯城、十市、高市の大共同体が、あとで「ヤマト」と呼ばれる国の範囲だ



解説
三輪山の麓はヤマト政権の本拠地とされ、大王墓は前期の大型古墳が集中して営まれた大和・柳本古墳群中にあると考えられている。それに接して「連」姓の^{おと}大伴・物部両氏の本拠地があり、大王家との関係の深さが認められる。一方、「臣」姓の和珥・葛城・平群などの有力豪族の本拠地も大和盆地の各所にあり、その地域にも大型古墳が営まれていることが注目される。

●クニ（郡）は、水系の上流の王（豪族）によって水系毎にまとめられ、奈良盆地の中では、三輪山をカミとする王が大王となり、他の豪族のカミ、春日山、生駒山、葛城山は、三輪山の下につく。

同じ目で、ヤマト王権の成立を見る。奈良盆地には縄文海進もなく、小さな河による扇状地が多く、平にまとまってある奈良盆地は、BC4 世紀からの渡来人による水稻耕作が安定して、早くから完成していた。水稻耕作に先じた事により、奈良盆地の盟主となった邪馬台国が、奈良盆地以外のクニ（国）との戦争に勝つ力を得たのである。

弥生集落「邑」が集まってクニ（郡）となり、クニ（国）となる過程を見れば、邪馬台国九州説はありえない。邪馬台国がヤマト王権と直接つながるとは言えないが、3 世紀、奈良盆地のクニ（国）が九州のクニ（国）より朝鮮半島との関係を強め、先進性を得て、ヤマト王権となった。また、物部氏と大王の古墳群と邪馬台国大和説をとる弥生遺跡「唐古・鍵遺跡」は極めて近いところにある。

大和川はかつては堺に流れており、巨大な古墳が集まる百舌鳥・古市古墳群は 4 世紀後半

から 5 世紀後半にかけて築造されている。「倭の五王」の時代、ここは、瀬戸内の国・九州の国から、さらには大陸の国々からの航路の到達点であった。ヤマト王権「倭国」のシンボルとして瀬戸内海に向けて見せるために、百舌鳥の巨大古墳が築かれたのだ。

・環濠集落と戦争

愛知県の朝日遺跡から、環濠、柵列、逆茂木、乱杭などで集落を二重、三重に囲む姿が発掘され、吉野ヶ里遺跡の首のない埋葬者と合わせ、弥生時代は稲穂がなびく平和な瑞穂の国だったというイメージが一新され、青銅の剣や鉾が実戦で使われていた戦国（郡）時代だとなった。

後漢書「東夷伝」に、「2 世紀後半、大乱があり盟主がない。」と書かれ、「三国志：魏志倭人伝」では、鬼道をなす卑弥呼が推され、238 年に卑弥呼は中国が支配した朝鮮半島中部の帯方郡を通じて魏に使者を送り、皇帝から「親魏倭王」に任じられたと書かれている事と、環濠集落遺跡の戦争への備えは一致するのであろうか。

●弥生時代—環濠集落—人が人を襲う戦争が「カミ」を生む。川の交易圏がクニ（郡）となり、権力をもつ。

吉野ヶ里遺跡 佐賀県神埼郡 BC2c~AC3



朝日遺跡 清須市 縄文~BC4c~AC3c



大塚歳勝土遺跡 横浜市 BC3c~AC3c



池上曾根遺跡 大阪府和泉市 BC2c~AC3c



吉野ヶ里遺跡から、首のない甕棺が出た。矢が刺さった頭蓋骨もある。



川沿いの小邑を集めて大邑ができ、その大邑を中心としてクニ（郡）ができる時、クニ（郡）が争いクニ（国）となす時に戦争があるのは、中国、西欧でも同じである。クニ（国）が、倭国という連合国となるには、ヤマト王権が鉄剣を持って騎馬で戦った 4 世紀・5 世紀の古墳時代が必要であった。戦う大邑を朝日遺跡に見てみよう。

朝日遺跡は、東西 1.4 km × 南北 0.8 km、80 ha の巨大遺跡だとされているが、復元図にあるように、清洲インターで破壊されるどころ 9 ha しか発掘されていなく、面積は環状だったろうとの想定による。また、環状の外にも住居はあった。

BC4 世紀以前にも、縄文土器があることから当時は海に近いこの微高地に縄文人は降りて来ていた。滋賀県の服部遺跡、大阪府の池上曾根遺跡、奈良県の唐古・鍵遺跡と同じく、BC4 世紀に原始的な水稲耕作は始まっていた。BC200 年ごろ、150m 四方の環壕集落が見られるが人同士の戦争の防御の為でない。排水溝、ゴミ捨、野生動物対策の為であろう。遠賀川式土器が発掘された。西日本にこの土器が広がった時期と一致している。高度な水稲農耕技術を持った渡来系弥生人が、BC4 世紀頃から九州（ex 板付遺跡）から一斉に東に向かったのであろう。

BC1 世紀に巨大集落となり、環濠、柵列、逆茂木、乱杭などで集落を二重、三重に囲む姿が AC1 世紀まで続く。ここでの戦争は中国史書の書く 2 世紀後半の倭の大乱ではなかったのである。

庄内川の支流・五条川の大邑となって、クニ（郡、後の春日井郡）の盟主となったのだろう。堅穴住居で暮らし、石の道具や時には金属製の道具を使い、稲作・畑作に、漁や狩りも多くした。石鏃が刺さった鹿の骨が出土し、ヤス、紡錘車、装飾品など骨角器が多く出土したが、興味深いのは骨ト（こっぼく）に使われた鹿肩甲骨である。魏倭人伝に書かれている骨を使った占いがここでされていたのだ。律令国家では祭事となった。銅鐸の鋳型や玉作りの道具も出土し、専門的な工人も住んでいたと考えられる。集落と離れて方形周溝墓がある。AC2 世紀になると、居住域が南北に分かれそれぞれが環壕をもつ。銅鐸、巴形銅器、袋状鉄斧の金属の生産が盛んになり、赤色のパレス・スタイル土器が多く作られた。3 世紀になると、環壕に壊れた土器が捨てられ、環濠は消える。そして木曾川から五条川への氾濫により水没し、5～6 世紀になると貝塚の上に円墳が作られた。

吉野ケ里遺跡、池上曾根遺跡、唐古・鍵遺跡と、100 年オーダーで見ると、極めて似ている。「倭国大乱」は、クニ（国）同士の争いであるが、朝日遺跡は、紀元ゼロ前後にクニ（郡）の盟主として他のクニ（郡）と戦争をしていたのであった。繰り返す、吉野ケ里遺跡と同様に「倭の大乱」を示す遺跡ではない。

では、クニ（郡）の盟主をめぐる戦争の相手は誰だったのか？

古墳は庄内川の上流の名古屋市守山区の志段味に 4 世紀からあった。古墳は強いクニ（郡）であった証である。弥生時代 AC2 世紀に志段味の王は朝日遺跡の王に勝ったのだと思う。海沿いの集落は扇状地の集落に負けるのは奴国と同じだ。

朝日遺跡の王は庄内川のクニ（郡、後の山田郡）の盟主にはなれず、2 世紀に住居はわけられ、金属と土器の生産基地となったのであろう。福岡県・今山遺跡の石斧、同・立岩遺跡の石包丁、同・須玖遺跡の青銅器、ガラス、鉄製品、京都府・奈具岡遺跡の玉類など専門工房

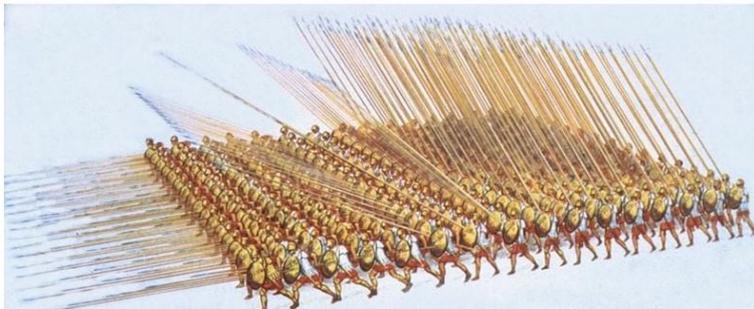
の跡は他にもある。そして、段夫山古墳ができた 6 世紀には、志段味古墳群の王も鮎千瀨から北上してきた（と私は考える）味美古墳群（庄内川の支流、八田川・地藏川）の王であった尾張氏に完全に従う事になったと考える。5 世紀のワカタケル時代には、鮎千瀨から出た尾張氏のもとに尾張はクニ（国）としてまとまっていたであろう。なお、山田郡は戦国時代に春日井郡と愛知郡に分割吸収された。

●弥生人の戦闘シーンを環状集落を見て、ローマ軍・三国志から想像する。王は野望の為に臣を使い民を訓練。

弥生人と同時代のアレキサンダー大王も関羽も名馬に乗って戦いの先頭を走った。日本列島の戦闘で馬を使うのは 5 世紀の古墳からかいま見える。スサノオは馬には乗っていないが馬を逆剥ぎにしている。



弓矢で攻撃される。守るには騎馬兵、歩兵いずれであっても、柵と堀で侵入を防ぎ、弓矢で迎撃をする。信長の鉄砲も同じだ。



ローマ皇帝の領土拡大の指示に従い、ローマ市民は重装歩兵となり、益を求めて戦場に向かう。



重装備をしていても、最後は槍も剣も打ち捨てて組打ちとなり、首を取って手柄となる。矢を避けて接近戦に持ち込む。

戦争の兵士を考えてみる。

朝日史跡は 1000 人の大集落と言われているが、80ha とした集落の全容が見えていないので怪しい。木曾川と繋がる五条川の氾濫によって、住居を移し替えていることもあろう。総じて、考古学の住居数は多すぎであり、同時に存在した住居を特定できない。しかし、自然堤防の高地を住居としたのは間違いなく、農夫が戦争となると兵となって戦ったのである。兵の専門職は富が蓄積される 4 世紀以降となろう。歩兵は集団で戦う為に訓練が必要であり、戦闘には民を率いる臣が必要であり、戦争の英雄の方形周溝墓も増えることになる。



5 世紀の兵士の埴輪である。腰に剣を帯びているが、肩には鋤を担いでいる。農夫である事を主張しているこの埴輪の作成者は埴輪作成のプロと見える。では、この埴輪の 400 年前の朝日遺跡の兵士はどのような気持ちで戦争をしたのであろうか。水稻農耕によって食べ物を一日中採さなくて良くなり、500 人の集落となれば、手工業、交易の専門職が生まれ富を生む。王の野望による戦争の為に、王と民との間に臣が生れる。

日本の都市は、長安にならった持統天皇の藤原京から始まり、都市国家は無かったとされている。しかし、私は都市が出来る仕組み「権力」が戦争を生み出したと考え、これから都市

論を述べる。飢饉になり、食料の為に隣の大邑を襲うことなどありえない、狭い地域での戦争である。「権力」者がカミとなり、「権力」の拡大を目指して、都市（環濠集落）間で戦争は起きたのである。王にへつらう臣と、ただ従うだけの民の姿は、現在も変わらない。都市間の戦争に負けなければ、都市（環濠集落）は飢えないからだ。「パンとサーカス」がありさえすれば、民は満足するのが古代から続く権威主義国である。日本は今もそうなのだ。自由を叫んで血を流して得た民主主義の国は世界に少ない。

・都市の論理—権力はなぜ都市を必要とするのか—

第一段 都市は飢えない

飢餓にあえぐ国は一次産業で成り立っているのに、食料を作る農民に食べ物がなく、国の首都には超高層ビルが輝いている。飢える人々は都市に寄って来てスラム街を形成しなんとか生きている。マニラ、サンパウロの姿だ。農村より食べられるからだが、どうしてなのだろう。

人類は、農産物の余剰によって都市が生れたと学校で習うが、4大文明の発生した周囲の農村に食料品の余剰が恒常的にあったかは大変疑わしい。

農業革命が100万人の古代帝国都市ローマを作った。中世の2～3万人都市も農業を基盤産業としていた。しかし、産業革命の拡大は桁違いに100万都市を世界に作っていった。都市は汚く、疫病に満ち、火事によって一瞬に消えるが、人を集め、食料を集め、そのたびに復活した。今は第3世界での都市化が著しい。メキシコシティ、サンパウロ、カイロ、ブエノスアイリス、ソウル、マニラ、ジャカルタ、バンコク、カルカッタ、デリー、カラチ、テヘラン、中国は重慶、上海をはじめとして1000万人以上の都市が16もある。

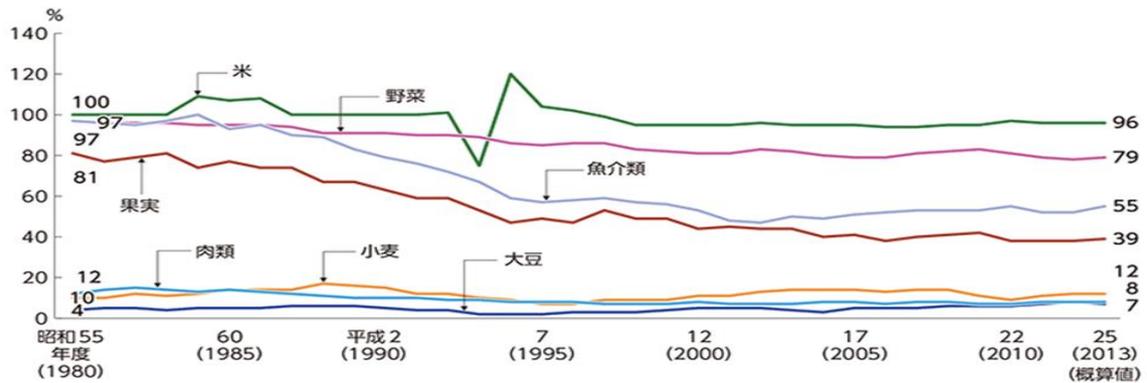


都市が飢えるのは戦争に負け、食料を集める権力がなくなった時だけである。方丈記に書かれた京は鎌倉幕府によって公家の律令政治が崩れ、多くの餓死者が河原に打ち捨てられた。太平洋戦争敗戦後の闇市で物乞いをする孤児たちの姿を私は知っている。都市化によって日本の第一次産業が衰退する程、日本は食料に満ち、飢餓から遠ざかった。日本で飢餓を忘れられるようになったのは、たかだか、この70年の事である。

第2段 商品作物は簡単には農民を富まさない

かつて、プランテーションで商品作物を作っていた農民とは奴隷だった。現代の民主主義国家の農民は自らの労働の価値を高くしたく、より高い価値を持つ作物の技術開発に努め、売り先の都市のニーズに答えてきた。長く米に価値があったので耐寒品種を開発し続け北海道が米どころとなり、自主流通米が許可されると、食味のよいとされるコシヒカリが全国で作られた。人が食べられる食料は一定であり、稼げる商品作物は「量」から「質」に転換せざるをえない。

図 1-2-3 我が国の品目別自給率の推移



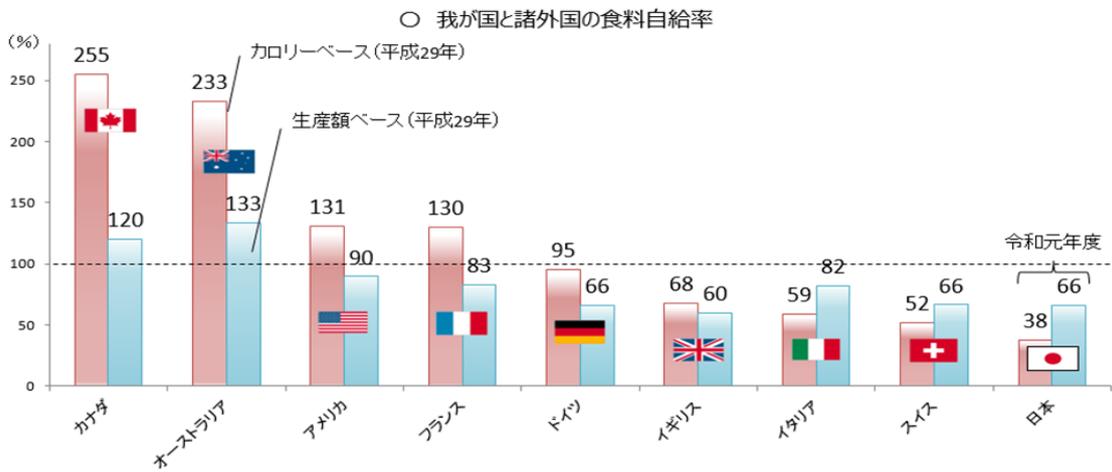
資料：農林水産省「食料需給表」
注：肉類については、飼料自給率を考慮した自給率

果実が「負のスパイラル」に陥った典型である。私の子供のころは、季節によって甘い果物を八百屋で買った。イチゴ、サトウキビ、スイカ、イチジク、柿、紅玉、栗、温州ミカンなどである。しかし、今の時代は、より甘い菓子であふれている。安くても甘くない果物は売れないので糖度をあげて高級品とし、結果さらに果物の購買量を下げている。また、気候による「不作」と「豊作貧乏」の罨が常にあるのが商品作物である。

第3段 穀物はどこに消えたのか

世界の穀物生産量は年 22 億トンである。1 人が 1 年で消費するのは 1 5 0 k g であるから、146 億人を養える。世界人口が 77 億人だから、69 億人分の穀物が余る事になるのだが、7 億人が飢餓に苦しんでいる。過食による肥満で健康に問題がある人が多くいるののである。快適な食生活を求める中で肉食が広がっており、莫大な穀物が家畜の飼料として消費されている。

農民はより多くの貨幣を求めて食料を生産しているのであって、飢えた人々の胃を満たすために生産しているわけではない。



資料：農林水産省「食料需給表」、FAO “Food Balance Sheets”等を基に農林水産省で試算。(アルコール類等は含まない)
注1：数値は暦年(日本のみ年度)。スイス(カルロリーベース)及びイギリス(生産額ベース)については、各政府の公表値を掲載。
注2：畜産物及び加工品については、輸入飼料及び輸入原料を考慮して計算。

農産物の生産が自国の消費量を大きく上まわるアメリカ、カナダ、オーストラリア、フランスなどでは、過剰生産は国の根幹を揺るがす問題になっており、作付け制限と備蓄は政府の負担となっている。日本も米の関税化には国家をかけて抵抗してきた。減反は先進国の共通の問題となっている。

東西冷戦が終わり、穀物メジャーが穀物を先物取引で扱うようになった。

日本の農家の高齢化が農業の衰退をもたらしたと感じるのは間違っていないが、若者が貨幣を得るに、第一次産業はつらいから産業人口が減っていくのである。いまや、日本の都市化は進み、カロリーベースの食料自給率は37%と下がっている。

第4段 都市は権力である

都市は巨大な権力が目的を遂行して行く上で、拠点となる大規模な施設が必要だと判断した時に建設されるのである。



人間は狩猟、採集の生活から農業革命をへて、家族・部族などの生活の単位ごとに永続的な定住の為に住居を建設するようになる。その集落はそれほど大きくなることはなかった。食料を確保し伝染病や火災などの災害を避けるためにも相互に離れて生活をした方がよかったからである。

大規模な集住である都市を形成するには、これらの危険を冒しても、追及しようとする目的がなければならなかった。他者からの生活の安全を保障する政治組織、豊かな生活をもたらす財やサービスの生産や流通を保証する経済組織、幸福な生活を保障する宗教組織などである。

都市の形成は家族や部族ではできない大量の人的、物的資源を動員しようとする政治、経済、宗教などの権力によって担われているのである。権力はその活動

を安定させるために、その機構を「機関化」する。その為にはフィジカルな施設が必要とされる。機関は大規模なほど、活動の拠点となる大きな施設を必要とするのである。

そして、その施設群を直接的間接的に担う人々の住宅がその施設の周囲にひしめき合う事になる。都市は M・マンフォードの言うように「最大の便益を最小の空間に納めるようく文明の産物」を凝縮し、貯蔵して伝達しようとするもの」として作られた。

「権力」は嫌われる。その定義が「権力とは自己の意思に反して他者の意思が押し付けられる。」のだから権力を握っていない民衆には当然だ。権力は戦争、革命の時に、その恐ろしさを嫌と言うほど見せつける。

なにもそうした政治権力に限らず、普段生活している会社や学校にさえ、家族にさえ、潜んでいる権力の恐ろしさを垣間見ることが出来る。権力によって生活が抑圧されていることはいくら強調してもし過ぎることはない。

しかし、それは「権力」の片面を指摘しているに過ぎない。人々の抵抗を押してまで貫徹される「権力」には、みあう「保証」があるから機関は存在できているのだ。

当面の欲求が「権力」によって中断されても、未来にはより大きな欲求充足の「保証」があると理解されているので、理解はなくても感じられるので「権力」は存在し、機関も存続し、都市は成立する。天皇陛下万歳と死んだ兵士、ヒットラー・スターリンを押し上げた民衆、天国に行けると自爆テロをする者、何れも「権力」にあがなうことなく「保証」を信じたのである。

民衆は豊かで快適な生活を求め続ける。そこには常に新たな「権力」が生れる。「権力」は、民衆の自己の存在をたしかなものとするために新たな「欲求」を増やし、その「欲求」に応じた「権力」を増殖させている。「権力」は命の安全、快適な衣食住、幸福、健康、安心の代償として、民衆に貨幣や労働力の支払いを命じ、民衆の生活に一層の加重をかけてきた。



愛知県清須市 朝日遺跡：集落の防御方法

具体例を順にあげていこう。

農業革命により財を貯めた人の「安全・平和」を脅かすのは、獣でなく人であった。清州ジャンクションの建設のために掘り出された弥生時代の朝日遺跡の環濠には日本中が驚いた。

1.2km×0.8km に 1000 人ほどが住んでいた大集落である。「邑」である。これが「國」となると都市は城壁によって明瞭に周囲の農村と区別される。City の翻訳を日本は「都市」としたが、中国は「城市」とした。

都市民を飢えさせると、国は簡単にひっくり返る。兵糧攻めは古来より用いられた戦術である。ローマ皇帝は「パンとサーカスを！」を求める市民に応じざるを得なかった。敗戦後の日本は不作と植民地の喪失さらに植民地からの帰還者で都市部を中心に 800 万人が餓死すると言われた。占領軍にとって都市の飢餓はあまりにも危険であり、マッカーサーは 350 万トンの食糧を日本に送るように求めた。

毛沢東は 1949 年に開放戦争を終え、「大躍進」を掲げ、農地解放を行い農業の集団化をはかり、工業化を急速に進めた。そして、1959 年～62 年にかけて 2000 万人が餓死するという史上空前の大惨事を生んだ。鄧小平は「現在もっとも重要なのは食糧問題だ。増産できれば個人経営でも構わない。白猫であれ、黒猫であれ、ネズミを捉える猫は言い猫だ。」と言ひ、現在の「改革開放」の中国の繁栄がある。中国の GDP は 2010 年に日本を抜いて瞬間に 1500 兆円となり、日本の 3 倍となりアメリカの 2200 兆円に迫る。1980 年に鄧小平が号令をかけた深圳市は、20 年後に 1000 万人都市となった。権力が都市を作るのである。



アベノマスクと揶揄され、安倍政権は消えた。

食料品はあっても、民衆に「衣食住」の一部が欠けると、政権は大きな痛手を受ける。「トイレットペーパーがない」「マスクがない」「インスタントラーメンがない」で、集団自衛権を閣議決定ですましてしまう力を持つ安倍内閣も消えた。民衆は生活感で動く。安保も共謀罪も消費税も見えないが、棚からモノが消えると大騒ぎになる。

多神教の日本では宗教戦争は少なく、16 世紀に法華教徒と本願寺門徒が京都と山科を舞台に争い、1637 年の島原の乱でキリスト教徒 3 万人が幕府に惨殺されたぐらいしかないが、今も世界ではキリスト教・ユダヤ教とイスラム教との争いがあり、テロが頻発している。



日本の宗教都市と言え、東大寺建設後の平城京であろう。聖武天皇は政治都市であるべき都を宗教に頼り変えてしまい、平城京は桓武天皇に捨てられた。奈良は興福寺の門前町となったが、門前町の形態は全国にある。教育も医療も、国家の「保証」に目を向けるが、その「保証」には、強大な「権力」が伴っていることを忘れてはならない。都市に定期的に必ず表れるのが感染症である。新型コロナウイルスへの民衆の恐怖により、国の「保証」なき「権力」があぶりだされた。熱が出

でも診療してくれない。検査してくれない。ベッドが足りない。突然の一斉休校。などなどである。

「娯楽権力」を、私は「都市の論理」の挿絵に加えた。娯楽に権力があるのか？と思われるであろうが、ローマ市民が求める「サーカス」に、皇帝は「闘技場」「劇場」「大浴場」を与えている。後代の私たちは、これらを都市の繁栄、都市文化の遺構と誉めそやす。飢えなくなった都市民は、パチンコに競馬に快樂を求める。俗にいう「女、酒、バクチ」である。

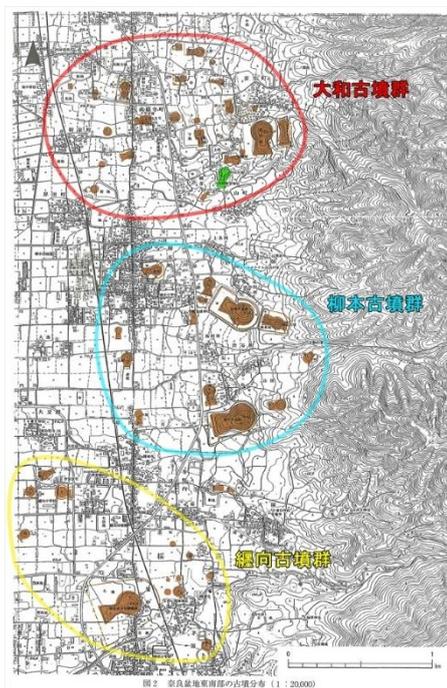
徳川宗春は城下のはずれ大須に歓楽街を作り、居酒屋をこよなく愛する名古屋市長・河村たかしは、久屋大通り公園を潰して「栄に賑わいだ」と商業施設を集めた。さらに、金シャチ横丁を作り、「天守は木造だ。ホンモノを作ればぎょうさん人が来る」と、史跡のテーマパーク化を図り、名古屋市民の圧倒的な支持を得ている。

カジノ誘致、インバウンド狙いとなると「観光」であり、政治権力でなく、経済権力とも言えようか。名古屋の経済権力は「ものづくり」で生きており「観光」での経済力訴求は乏しいので、河村市長で示されるように、経済権力とは違う「娯楽権力」は明らかに存在する。と、ここに書き留めておく。

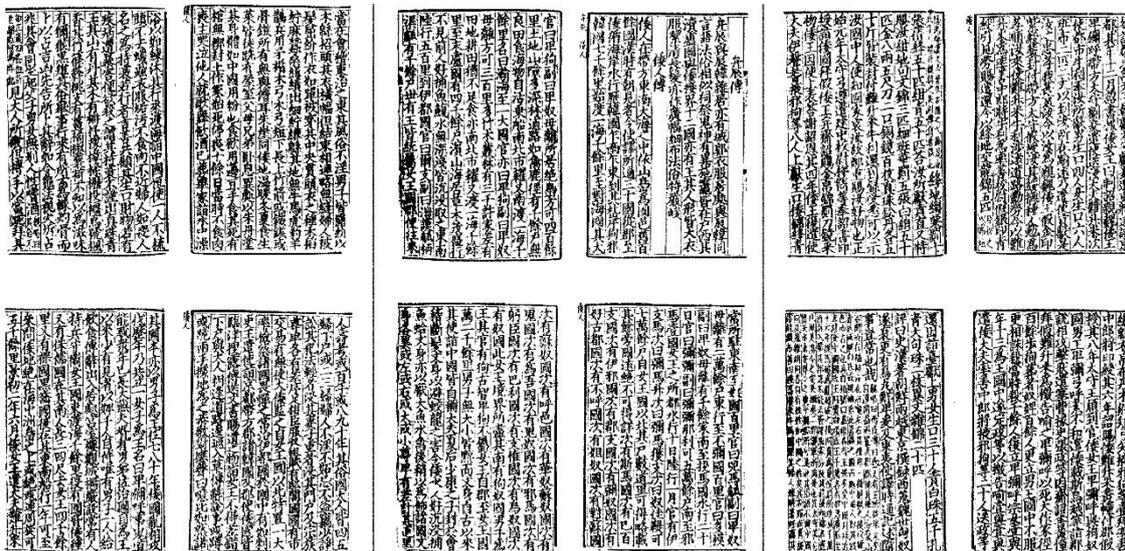
・唐古・鍵遺跡と邪馬台国

箸墓古墳は卑弥呼の墓であるという説がある。278 mと大きな前方後円墳であり、墳丘周辺の周壕から出土した土器（土師器）の考古学的年代決定論と、土器に付着した炭化物による炭素 14 年代測定法により、邪馬台国の卑弥呼の没年（248 年から遠くない頃）に近い 3 世紀中頃から後半とするのであるが、一方で、近年炭素 14 年代測定法では、実年代より 50-100 年程度古く推定されるともあり、古墳の発掘がされない以上決定打はない。

しかし、カミである三輪山の北から流れてくる川沿いに、纏向古墳群として、他に 80m 長のホケノ山古墳、115m 長の纏向勝山古墳、96m 長の纏向矢塚古墳もあり、その北 1 km の川沿いには柳本古墳群、更に 2 km 北の川沿いには大和古墳が纏向古墳群より新しくあるので、纏向古墳群のどれかが卑弥呼の墓として良いのだと思う。



弥生集落が集まってクニ（郡）となり、クニ（郡）クニ（国）となる過程を見れば、邪馬台国九州説は肥後、豊後に巨大環濠集落が発掘されていない以上ありえない。すると、教科書に大きく取り上げられている唐古・鍵遺跡が邪馬台国の拠点の集落となる。私の考えは、板付遺跡、朝日遺跡の例から卑弥呼は纏向古墳群に近い扇状地に住んでいたと思う。



魏志倭人伝に書かれている事が全て史実だと信じてはいけませんが、卑弥呼にカミを探すために、書かれていることを並べ、次に遺跡発掘調査内容を書き出す。

○国名：その道里を計ってみると、ちょうど會稽の東冶(福建閩侯)の東にあたる。女王国から北は、その戸数や道里はほぼ記載できるが、それ以外の辺傍の国は遠く隔たり、詳しく知ることができない。次に斯馬国があり、次に己百支国があり、次に伊邪国があり、次に都支国があり、次に弥奴国があり、次に好古都国があり、次に不呼国があり、次に姐奴国があり、次に対蘇国があり、次に蘇奴国があり、次に呼邑国があり、次に華奴蘇奴国があり、次に鬼国があり、次に為吾国があり、次に鬼奴国があり、次に邪馬国があり、次に躬臣国があり、次に巴利国があり、次に支惟国があり、次に烏奴国があり、次に奴国（重出、また□奴国の誤脱か）がある。これが女王国の境界の尽きるところである。

その南に狗奴国があり、男を王とする。その狗古智卑狗（くこちひく。菊池彦か）がある。女王に属さない。

○男子は大小の区別なく、みな顔や体に入れ墨をする。

○古代からこのかた、その使者が中国に訪問すると、みな自ら大夫（卿の下、士の上の位）と称する。

○夏后少康（夏第六代中興の主）の子が、會稽（浙江紹興）に封ぜられ、髪を断ち体に入れ墨をして、蛟竜（みずちとたつ）の害を避ける。いま倭の水人は、好んで潜って魚や蛤を捕らえ、体に入れ墨をして、大魚や水鳥の危害をはらう。後に入れ墨は飾りとなる。

諸国の入れ墨は各々異なり、あるいは左に、あるいは右に、あるいは大きく、あるいは小さく、身分の上下によって差がある。

○その風俗は淫らではない。男子は皆鬣を露わにし、木綿（ゆう）の布を頭に掛けている。その衣服は横幅の広い布を結び束ねているだけであり、ほとんど縫いつけていない。婦人は、髪は結髪のたぐいで、衣服は単衣（一重）のように作られ、その中央に孔を明け、頭を突っ込んで着ている。

○稲・いちび・紵麻（からむし）を植えている。桑と蚕を育て、糸を紡いで、織物を作る。

○その地には、牛・馬・虎・豹・羊・鵲（かささぎ）はいない。

○兵器には、矛・盾・木弓を用いる。木弓は下を短く、上を長くし、竹の矢は、あるいは鉄の鏃（やじり）、あるいは骨の鏃である。風俗・習慣・産物等は儋耳（廣東儋県）・朱崖（廣東けい山県）と同じある。

○倭の地は温暖で、冬も夏も生野菜を食べる。みな、裸足である。

○家屋があり、父母兄弟は寝たり休んだりする場所を異にする。朱丹を身体に塗っており、中国で粉を用いるようなものだ。飲食では高坏（たかつき）を用い、手で食べる。

○人が死ぬと、棺はあるが槨（そとばこ）は無く、土で封じて塚をつくる。死してから十日余りもがり（喪）し、その期間は肉を食べず、喪主は泣き叫び、他の人々は歌舞・飲酒する。埋葬が終わると、一家をあげて水中に入り、体を清める。これは練沐のようである。

○倭の者が中國に詣るのに海を渡る時は、いつも一人の男子に、頭を櫛けずらず、虱が湧いても取らず、衣服は垢で汚れ、肉は食べず、婦人を近づけず、喪人のようにさせる。これを持衰（じさい）と名付ける。もし行く者が吉善であれば、生口や財物を与えるが、もし病気になる、災難にあえば、これを殺そうとする。その持衰が不謹慎だったからというのである。

○真珠や青玉が産出される。山には丹（あかつち）がある。木には柁（だん。クス）、桴（ちよ。トチ）、欒樟（よししょう。クスノキ）・榲（ぼう。ボケ）・櫪（れき。クヌギ）・投櫃（とうきょう。カシ）・烏号（うごう。ヤマグワ）・楓香（ふうこう。オカツラ）がある。竹には籊（じょう）・籥（かん。ヤタケ）・桃支（とうし。カヅラダケ）がある。薑（きょう。ショウガ）・橘（きつ。タチバナ）・椒（しょう。サンショウ）・蘘荷（じょうか。ミョウガ）があるが、それで味の良い滋養になるものをつくることを知らない。猿、黒雉がいる。

○その習俗は、事業を始めるときや、往来などのときは、骨を灼いて卜し、吉凶を占い、まず卜するところを告げる。その辞は令亀の法のように、焼けて出来る裂け目を見て、兆（しるし）を占う。

○その会同・起坐には、父子男女の別は無い。人は酒好きである。大人の敬するところを見ると、ただ手を打って、跪拝（膝まづき拝する）の代わりにする。人は長生きで、あるいは百歳、あるいは八十、九十歳。

○風習では、国の身分の高い者はみな四、五人の妻を持ち、身分の低い者もあるいは二、三

人の妻を持つ。婦人は淫せず、やきもちを焼かず、盗みかすめず、訴え事は少ない。その法を犯すと、軽い者はその妻子を没収し、重い者は一家及び宗族を滅ぼす。身分の上下によって、各々差別・順序があり、互いに臣服するに足りる。

○租賦（ねんぐ）を収める邸閣が有った。

○国々に市があり、貿易を行い、大倭（倭人中の大人）にこれを監督させていた。女王国より北には、特に一大率（いちだいそつ。王の士卒・中軍）を置き、諸国を檢察させ、諸国はこれを恐れ憚っていた。常に伊都国で治めていた。国中（中国）の刺史のようなものである。

○王が使いを遣わして京都（魏都洛陽）・帯方郡・諸韓国に行ったり、また郡が倭国に使いするとき、みんなが津に臨んで捜露（そうろ。探し表す）し、文書を伝送し賜遺の物を女王に届けるので、差錯（入り乱れ、交わる）することはない。

○その国は、もとは男子を以て王となし、留まること七、八十年。倭国が乱れ、互いに攻伐すること歴年、そこで共に一女子を立てて王とした。卑弥呼という名である。鬼道につかえ、よく衆を惑わせる。年は既に長大だが、夫は無く、男弟がおり、補佐して国を治めている。王となってから、朝見する者は少なく、下女千人を自ら侍らせる。ただ男子一人がいて、飲食を給し、辞を伝え、居所に出入する。宮室・楼觀・城柵をおごそかに設け、いつも人がおり、兵器を持って守衛する。

○女王国の東、海を渡ること千余里、復、国があり、みな倭種である、又、侏儒（こびと）国が、その南にある、人のたけ三、四尺、女王を去ること四千余里、又、裸国・黒齒国がある、復その東南にある、船で一年がかりで着くことができる。

○倭の地についての問いて集めるに、海中洲島の上に遠く離れて存在し、あるいは絶え、あるいは連なり、一周は五千余里ばかりか。

倭および魏の使いを年代順に西暦で書くと、238年倭使、240年魏使、243年倭使、247年倭使・魏使・倭使となる。

○景初二年（西暦二百三十八年）六月、倭の女王が大夫難升米等を遣わし、（帯方）郡に詣り、天子に詣り朝献するよう求めた。太守（郡の長官）劉夏は役人を遣わし、京都まで送らせた。その年の十二月、詔書で、倭の女王に報じていうには、（中略）

○正始元年（西暦二四十年）、太守弓遵は、建中校尉の梯儁らを遣わし、詔書・印綬を奉じて倭国に行き、倭王に拝仮して詔をもたらし、金帛・錦・罽・刀・鏡・采物を賜った。倭王は、使いに因って上表文を奉り、詔恩（天子からの恩典）を答謝した。

○その四年、倭王はまた使者の大夫伊声耆・掖邪狗ら八人を遣わし、生口・倭錦・絳青縑・綿衣・帛布・丹木拊（搏拊）・短弓矢を献上した。掖邪狗らは率善中郎将の印綬を拝受した。

○その六年、詔して、倭の難升米に黄幢を賜い、郡に付して仮に授けた。

○その八年、太守王頎が官にやってきた。倭の女王卑弥呼は、狗奴国の男王卑弥弓呼（彦尊か）と旧より不和である。倭の載斯烏越らを遣わして郡に行き、互いに攻撃する状態を説明

した。塞曹掾史張政らを遣わして、詔書・黄幢を齎し、難升米に仮に授けて、檄（ふれぶみ）を作り、これを告諭（告げ諭す）した。

卑弥呼の死によって大いに塚が作られた。径は百余歩、殉死した奴婢は百余人。さらに男王を立てたが、国中が服さない。互いに誅殺し合い、当時千余人を殺した。また卑弥呼の宗女の壺与という歳十三の者を立てて王とすると、国中がついに平定した。政（張政）らは檄を以て壺与を告諭した。壺与は倭の大夫の善中郎将掖邪狗ら二十人を遣わし、政（張政）らが還るのを送らせた。よって台（魏都洛陽の中央官庁）に行き、男女生口三十人を献上し、白珠五千孔、青大勾珠二枚、異文雜錦二十匹を買した。

以上。

100歳まで長生きをするとか、小人国とか、船で一年の旅とか、ありえない事がかかれているので、信じて良い記録かどうか心配になるが、鬼道で衆を惑わして（事鬼道、能惑衆）。とある。

この鬼道や惑の意味には諸説あり（中華の史書には、黎明期の道教や、儒教的価値観にそぐわない政治体制を鬼道と記している例もある。）正確な内容は不明だが、魏志倭人伝は別に「輒灼骨而卜、以占吉凶」（骨を焼き、割れ目を見て吉凶を占う）と卜術をよく行うとあり、囲われたところに千人の侍女とすみ、人前に現れず、男は4~5人の妻を持つのに、彼女は夫を持たず、ただ一人の男に辞するだけであり、男弟が国を補佐するともあるので、持統天皇のように藤原不比等ら臣を束ねる「女王」ではない。

そこで、巫女（シャーマン）だと言われてきた。カミの声を直接聞ける能力が民を束ねるには必要だとは一神教の旧約聖書でも同じであるが、彼らは奇跡を起こすが占いはしない。そして、王は神に油を注がれた者であった。

危険な海を渡るのに持衰（じさい）を伴うのだが、生贄のような感じがする。生口（奴隸）が貢物になるのだから、既に階級分化は進んでいたのだろう。

アニミズムの「万物に聖霊が宿る」というのでなく、卑弥呼だけが交信できるカミ（複数でもよい）がおり、卑弥呼はそのカミ代わりになって倭国を束ねるシンボルだと言うのは、男王を立てたが国中は服さず、壺与という歳十三の者を立てて王とすると国中が平定したことから言える。これは天皇制のような一系ではないが、天皇制のシステムに繋がる。

喪に服すのはわずか10日でしかないのは、卑弥呼の死に対して殉死させ、大きな墓を作ると矛盾する。一般の民の事なのであろう。王ごとの墓を作るのはエジプトのピラミッドと同じであり、個人崇拜であって現代の祖先霊を敬うのとは違う。

前方後円墳は後ろの円墳に葬り、前の方段で首長霊継承儀礼が行われ、代々の祖先霊を引き継ぎ首長となるという説があるが、葬送儀礼がされたとしても、祖先霊説には賛同できない。

1 唐古・鍵遺跡(奈良県)

唐古・鍵遺跡は、奈良県田原本町にある、弥生時代約600年間にわたる大環濠集落遺跡で、面積は約42haにおよぶ。弥生前期に3カ所に分かれていた集落が、中期になって統合され、周囲に大環濠がめぐらされたと考えられる。青銅器の鑄造施設が発見され、糸魚川周辺産のひすい製勾玉や、さまざまな地域の土器が出土するなど、集落の規模や構造などから大和地域における拠点集落と考えられている。



遺跡全景



環濠遺構



大型建物遺構



ひすい製勾玉入りの鉢石 1993年、二つのひすい製勾玉をおさめた褐鉄鉢の容器が出土した。勾玉はそれぞれ長さ4.64cm、3.63cmという大形のもので、石の原産地は新潟県糸魚川周辺である。

楼閣絵画がある土器片 1991年の調査で出土した土器片の一つに2層の屋根と渦巻き状の屋根飾り、もう一つに2本の柱と梯子が描かれていた。

楼閣(復元) 土器片の絵をもとに復元された楼閣は、高さ12.5mの2階建てで、4本の柱は直径50cm。屋根は茅葺きで、藤曼でつくった屋根飾りがつけられた大陸風の建物となっている。



考古学の成果をみよう。膨大な報告書があるが、主にウィキペディアの5段階によって書いていく。

第一段階 B C 500 年弥生時代前期後半～B C 300 年弥生時代中期前半

遺跡盛期の下層になるので、発掘はあえて進められていないようだ。カミの三輪山から流れてくる初瀬川の河岸段丘に、3つの集落があったようである。弥生時代早期に水稲耕作を行う小邑が既にあった。弥生土器だけでなく縄文土器も出土している。

多数の土坑とその内部から未完成の鋤や鋤などの木製品が検出されているが、これらは製作途中の木製品やその材料を水漬け保存したものと考えられており、纏向古墳群の下流域でもあり、この集落は初瀬川周辺集落に木器を供給する生産拠点でもあったと推定されている。奴国の板付遺跡ではB C 700 年から水稲耕作をしていたが、滋賀県の服部遺跡はB C 400 年頃に縄文人が水稲耕作を始めたので、その間で始まったのであろう。縄文文化のドングリを保管するピットもあった。

3世紀に集落がなくなるまで弥生土器は大量に出土し、大和様式弥生土器編年として纏められていて、報告書には前期、中期、後期と書かれているが、放射性炭素年代測定の結果が書かれていない。行われているはずなのだが、「唐古・鍵史跡が邪馬台国だ。」と言いたい事が邪魔をしているようだ。

第二段階 B C 300 年～B C 100 年 弥生時代中期中葉

各地区を区画する大溝が掘られた。この溝は湿地の排水を目的としたものと考えられ、短期間で埋没する。西地区の集落が最も大きく、総柱の大型建物跡が検出されている。建物の全容は明らかではないが集落の中心的な建物と推定され、梁行 2 間 (7m) 桁行 5 間以上 (11.4m 以上) の南北に長い建物で、独立棟持柱をもつ。柱穴には直径 60 cm のケヤキ 3 本とヤマグワ 1 本の柱が残存していたが、このケヤキの伐採時期は炭素年代測定法 (100 年程度時代が下がる傾向がある) により紀元前 5 世紀ごろのもの、紀元前 4 世紀～3 世紀のものという結果が示されている。このうち古い柱は転用された可能性があり、その場合、この建物の前身となったより古い大型建物が存在した事になる。

北地区の北東はずれから木棺墓、南地区南東部から方形周溝墓が検出されている。木棺墓のうちひとつは保存状態がよく頭骨を含む人骨が出土した。木棺の炭素年代測定では B C 100 年。引き続き未完成の木器貯蔵穴が検出され、農耕具や斧などの工具・高杯などの容器類が出土している。

石器は製品のみでなく原料や未成品が出土し、集落は石器製品の生産地でもあったと考えられる。これらの原料は、弥生時代前期では耳成山産流紋岩 (磨製石包丁)、中期には紀ノ川産結晶片岩 (磨製石包丁)、前期から中期を通して二上山産サヌカイト (打製石剣・打製石鏃・打製石鑿など) など、遠方から持ち込まれた。一方で磨製石斧など、製品が出土する一方で未完成品が発見されない石器もあり、地域間ごとに石器の生産が分担され交易があったと推測される。

遠方からもたらされた土器も出土している。弥生時代前期から中期前半は伊勢湾から東海地方の土器が多く、弥生時代中期後半になると吉備地方を中心とする瀬戸内地方の土器が多くなる。特に、1 点ずつ発見されている吉備製の大型壺と大型器台は日用品ではなく、2 地域間の関係性を象徴するものと推定されている。

青銅器は弥生時代中期初頭の細形銅矛が最も早い、これは朝鮮半島もしくは北部九州からもたらされたと考えられる。次に古いのは、銅鐸を模した土製品である。土製品ではあるが、文様などが精工に再現されており、保有していた弥生時代中期の銅鐸を観察して製作したと考えられる。

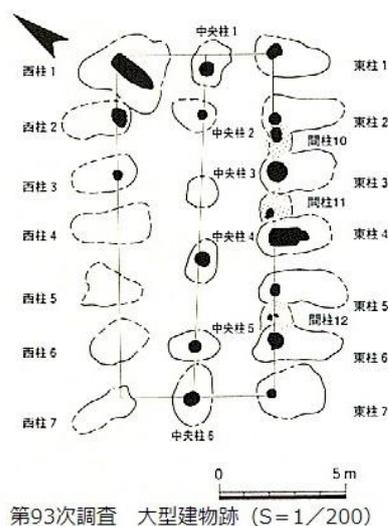
第三段階 B C 100 年～A C 100 年 弥生時代中期後半

幅 7 m 深さ 1.5～2 m の環濠を、直径 500m 24 ha の集落周囲に回したと想定する唐古・鍵遺跡の盛期である。想定とは、発掘が部分的にかされていないからである。さらに外側に 3 条から 5 条の小規模な環濠が掘削され、環濠帯を形成する。最も外側の環濠は、全長は 2 km に達し、40 ha と推定



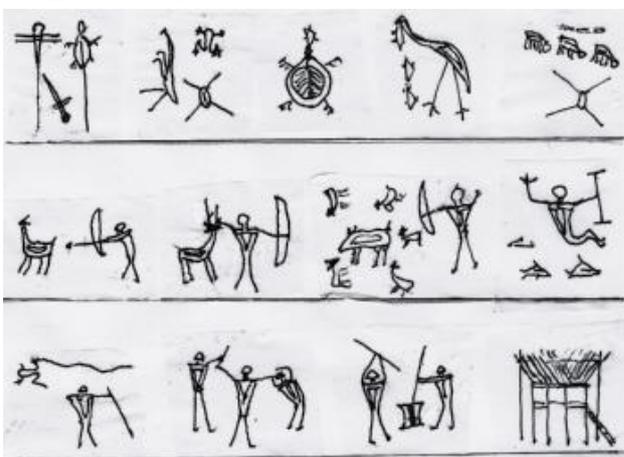
され、相当の年月と人工を必要とした土木工事とされる。環濠に湛える水は流水であったと考えられ、環濠集落の出入りは木橋であった。集落の南東部にあたる環濠からは橋脚と思われる径 30 cm の柱が検出されている。吉野ヶ里遺跡より少し遅く、朝日遺跡と同じ時期であるが、発掘物の先進性と量は圧倒的である。

南地区には鑄造関連遺物が出土し、青銅器工房があったと推定される。工房が展開したのは中期末から後期初頭にかけてと推定され、炉跡を中心に鑄型などが出土している。また、集落西南部には近江・紀伊地方からの搬入土器が多く出土する地区、北部にはサヌカイトがまともに出て出土する地区、南部には木器の未成品が出土する地区など特色がみられ、エリアごとに異なる役割をもつ集落構造であった。



西地区北側からは、前述のものとは別に中期と考えられる大型建物跡が検出されている。梁行 2 間 (6m) 桁行 6 間 (13.2m) の総柱の建物であるが、柱穴から少なくとも 2 回の建て替えが行われたと考えられる。検出された柱は炭素年代測定法により紀元前 4 世紀から 3 世紀との結果が得られた。集落まわりの大材は今まで過ごされた 400 年間の生活によって消費されつくされ、再利用を図らざるをえなかったのであろう。

その周囲にも全容はつかめていない大きな柱穴が見つかり、大型建物とそれを取り巻く施設が配置されていたと推測されているが、王の館、祀場、倉庫など使われた姿を示すもの出ていない。集落外縁部に土墳墓、あるいは甕を転用した小児の墓があるが、中心となる成人用の墓域はない。周辺の清水風遺跡や阪手東遺跡などの方形周溝墓である可能性が指摘されているが、この大集落の人口に見合う規模や権力を象徴するような遺物はない。土器に書かれた高樓が現地に復元されているが、土器が作られた時にあった



であろうという妄想によって観光の為に作られたものである。

BC 100 年頃に作成された神戸市桜ヶ丘遺跡、谷文晁絵、伝香川県の銅鐸の絵である。共に同じ製作集団によるものである。

絵の内容は、小さな釣り鐘が高さ 35 cm 重さ 2.4 kg と大型化して祭器とな

り、なんらかの呪術の意味があるのか、あえて小型の生物が線描きされている。トンボ、イモリ、カマキリ、クモ、魚を食べるスッポン、魚をくわえたサギ、スッポンとトカゲ。そして、狩りの収穫を祈ったのか、鹿を射る人、猪を犬と狩る人がおり、I型の工具を持っている人は糸を紡ぐ人か。杵で臼をつく絵から稲作もしたが狩りが食料調達の主体であったか。高床切妻の建物は倉庫であろう。

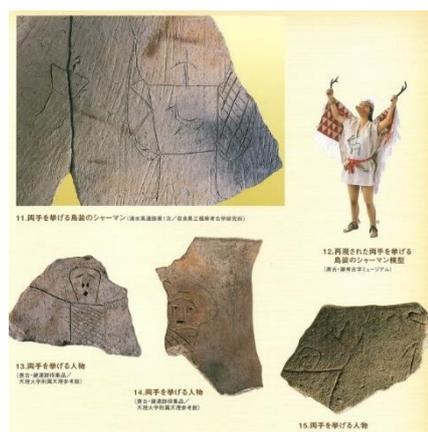
この遺跡から銅鐸は出土していないが、弥生時代中期ころの銅鐸の石製鋳型と鋳造失敗品と考えられるスクラップされた銅鐸片が出土している。確実に年代が判明する最古の遺物は中期後半の送風管であり、最も鋳造が盛んだったと考えられるのは、青銅器鋳造編年の第Ⅱ期から第Ⅲ期（弥生時代中期末から後期初頭）の土製鋳型によって大型青銅器が製造された時期で、南地区からは大量の土製鋳型が出土している。鋳型内側の粘土が剥離しているため、どのような製品が製造されたのかは明らかではないが、鋳型の大きさから銅鐸・銅戈・銅鏃・銅鏡などが候補に挙げられている。

骨トは、42個出土している。骨はイノシシやシカの肩甲骨が利用されている。焼灼の仕方が時期によって変化することも確認されている。このほか、イノシシの下顎に孔をあけたものが出土している。朝日遺跡にもあった。

鉄器は錆びてなくなるので出土は僅かである。弥生時代後期後半の鉄斧と、古墳時代前期のヤリガンナが出土している。ただし、大型の建物があり、木製品や骨角器などに鉄器による加工痕が見られるため、当然あったのであろうが、鉄素材は朝鮮半島からの輸入に頼るしかなく、貴重品であったのであろう。

この遺跡の土器は、絵が描かれていることで有名である。前に書いた楼閣の他に、人物・鹿・魚・スッポン・船などが見られる。女性とみられる鳥装の人物や盾や戈を持って踊る戦士は祭祀を表現したものと推定され、絵画土器は銅鐸と同様に、祭祀に用いられた特別な土器と考えられている。

手を広げた絵を描いた土器は19個あるのだそうだが、この鳥が羽を広げた姿を真似た人を、シャーマンだとミュージアムは断定している。はたしてそうなのか。古墳の副葬にも鳥は多くあり、八坂信仰の「鷲舞」は今に伝わっている。ヤマトタケルは馬に乗ることなく、白鳥に姿を変えて物語を終えた。鳥の如く、空を飛べる事のあこがれか、カミが居る天空への祈りの舞なのか。いずれにしても、鳥装した人がいてもそれがシャーマンであるとの論拠はない。



木器は水漬け保管を行いつつ数年かけて製作していたと考えられるが、その保管方法は前期と中後期で異なる。前期では土坑に水を湛えて保管したと考えられるが、中後期では環濠や区画溝・井戸跡などが用いられたとみられる。製品としては鍬・鋤・臼・杵・槽・斧柄などの農工具・工具類と、壺・高杯・鉢・匙などの食器類、糸巻具などの紡績具、弓や豎などの武器・狩猟具、木製戈などの祭祀用具など多様である。樹種としては、カシ・ヤマグワ・ケヤキなどが多く、製品により樹種を使い分けていた。この集落は専用の木工房として 700 年間続いた。

紡績具も多く出土している。機織り技術は弥生時代に大陸から伝来したものと考えられている。唐古・鍵遺跡からは貴重な弥生時代中期初頭とみられる織布の断片が発見されており、大麻を用いた平織り布が存在したことが明らかになった。この布断片は、きわめて緻密な布であり、銅鏡の如く大陸からの伝来したものという説もある。

第四段階 A C 100 年～B C 300 年 弥生時代後期

集落が被災・再生・発展した時期である。弥生時代中期後半から末にかけて集落各所で洪水跡が確認されており、繰り返し災害に見舞われたことが分かっている。沖積地での水稻耕作の宿命である。特に中期末の洪水は集落全体を押し流したと考えられ、また近畿一円の弥生時代中期の遺跡においても痕跡が確認されることから、広域大規模災害であったと考えられる。ただし、他の拠点集落が廃絶・解体・移動を行うのに対し、唐古・鍵遺跡では位置を変えずに再建しさらに規模を拡大したところに、邪馬台国の拠点集落としての力を感じる。大半の環濠は後期後半に大量の土器の投棄によって埋められている。さらに最後の環濠も弥生時代終末期に埋められて、環濠は消滅した。

一方で、弥生時代後期の土器が多数検出されており、依然として集落の生産・消費活動は衰えていなかったと推定されている。また、集落内に方形周溝墓が作られるようになり、特に南地区は墓域として再整備されたと考えられる。

すなわち、3 世紀前半、この集落に卑弥呼たちはいなかったと考古学は示している。



卑弥呼の古墳だと比定されている纏向古墳群は、巻向山の北麓を水源とする巻向川の標高 60-90m の纏向川扇状地上にあり、その周りに遺跡が形成されている。この纏向遺跡が、弥生時代から古墳時代への転換期の様相を示す遺跡であり、邪馬台国の最有力候補地だと邪馬台国畿内説を唱える研究者に私は賛同する。

弥生時代のクニ(郡)の中心はどこでも扇状地にあった。川下の河岸段丘にある集落は洪水で流されるからであ

る。しかし、纏向遺跡の発掘は進められていない。卑弥呼に下賜された京初3年銘の三角縁神獸鏡でも出土しないと、発掘に動かないだろう。

朝日遺跡がそうであったように、邪馬台国の手工業基地としてあった唐古・鍵遺跡として見ていく。

弥生時代後期の銅鏃・銅釧・巴形銅器・小型仿製鏡・有孔円盤などが出土している。装身具としては、新潟県姫川産のヒスイが7点出土している。特に注目されるのが、褐鉄鋌の空洞に入った状態で出土した2点のヒスイ製勾玉である。1号勾玉の大きさは弥生時代では最大クラスの4.6 cmで、2号勾玉は最高品質のヒスイで大きさは3.6 cmであった。その他には、水晶玉・ガラス小玉・牙製垂飾品などが出土している。また、未完成の碧玉製大型管玉やこれを加工する玉砥石などが出土しており、集落内で装飾品の加工が行われていたと考えられる。

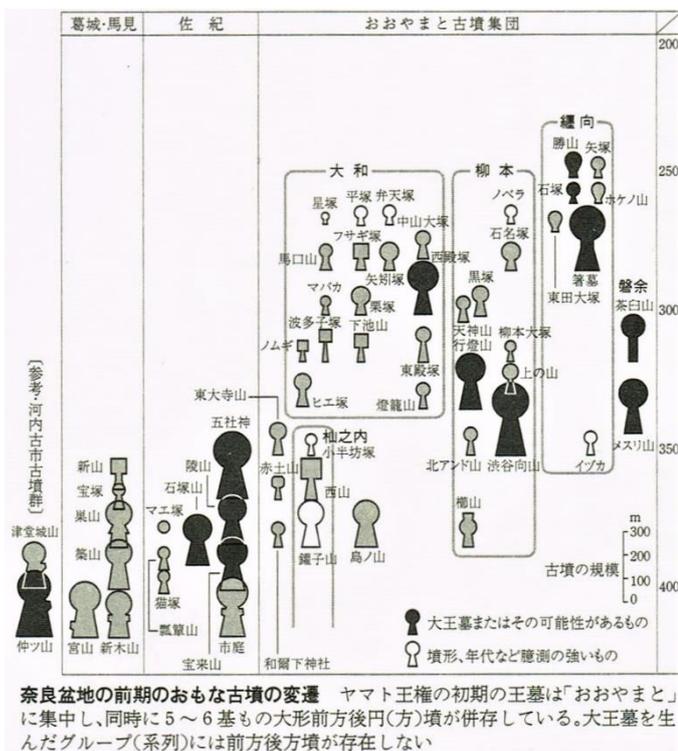
ゴミ捨て場から、食料をみておく。植物性食料としては主食の炭化米や穂束などがあるが、その他にマメ・ウリ・ヒョウタン・モモ・クルミ・トチノキなどが出土している。動物性食料としてはイノシシが圧倒的に多く、獣類ではシカ・イヌ・タヌキ・キツネ・ウサギ・スッポン、鳥類ではカモ・ガン・ツグミ、魚類では淡水魚のアユ・ギギ・ナマズ・ウナギ・コイ、海水産としてマイワシ・エイ・ハモ・タイ・アカニシ・サメ・クジラ・ウニが確認されている。海産物と関連して漁具の蛸壺も出土しており、こうした品々は和泉沿岸から大和川を經由して持ち込まれたと考えられている。

第五段階 古墳時代

環濠は前段階で埋められ機能を失ったが、集落は存続していたと考えられる。ただし出土する土器では、古墳時代最初期の庄内式甕は顕著ではなく弥生形甕が中心となっており、同時期に繁栄した奈良盆地南東部の纏向遺跡などとは様相が異なっている。

続く布留式土器が出土する古墳時代前期では遺構遺物ともに数が増し、山陰系の土器が出土するなど、交易が行われていたと推定される。

また、北地区・南地区・西地区など



で弥生時代中期から後期の環濠が再掘削され、古墳時代前期に環濠集落が復活したと考えられている。

6世紀後半ごろから唐古・鍵遺跡に後期古墳が10基あまり造営される。これらの古墳は早い段階に墳丘が崩壊したと考えられるが、小字に上塚や狐塚が見られる事から中世ごろまでは残存していたと推定される。しかし、その後の開発により墳丘は削平されて、現在は周溝が残存するのみである。また遺跡東側からは古墳時代の集落が検出され、井戸からは馬の頭蓋骨を含む祭祀遺物が投棄されていることから、有力首長の存在が推定されている。

・ 埴輪

土偶が消えて1000年、銅鐸、壺の線刻のつたない絵から、突然立体造形の埴輪が生れた。古墳時代は、前期4世紀、中期5世紀、後期6世紀、終末期7世紀と区分されているが巫女、馬、犬の面白い埴輪は5世紀から6世紀であり。次の「第三章大王から天皇」の時代だが、この章でホトケが入ってくる「カミ」を埴輪に探す。



教科書では、4世紀に近畿大和を中心として全国（と言っても関東から九州まで）で、地域の首長の墳丘墓が画一的な形状・埋葬施設・副葬品をもつ前方後円墳にかわる姿から、ここに広域的な政治連合・ヤマト王権ができたとしている。死者を弔う何らかのイデオロギーを持つ前方後円墳を地方でも真似ることが、ヤマト王権の地方への伸長をしめしているというのだ。しかし、日本独自のこの古墳の形がどんな意味を持つのか、朝鮮半島の20m規模の円墳に対し、ひたすら巨大化するイデオロギーの実態解明は天皇陵の発掘を止められている考古学ではできない。地方につくられた古墳の埴輪に頼るしかない。

3世紀の邪馬台国から5世紀の倭国となるのに、クニ（国）同士での戦争があったのであろうが、神話ではヤマトタケルの征服、出雲の国譲りしかない。4世紀を語る唯一、文字としてあるのは414年建立の「好太王碑」である。高句麗の長寿王が父・好太王の事績を顕彰す

るために建立した物であり、自慢話である事、高句麗と倭国の間には新羅、加羅（伽耶）、百済の三国がある事から、どこまで史実なのか疑わしいのだが、ワカタケルは478年に宋に「使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事・安東將軍・倭国王」と自称しているので、BC500年に朝鮮半島から渡来した弥生人が1000年を経て「倭王」になり、さらに勢いをかって朝鮮半島にまで兵を出した事は、「日本書紀」にある神功皇后の新羅征伐とも重なり、史実だと思う。秀吉も日本統一後「壬辰・丁酉の倭乱1592～98」を起こしている。



「高句麗が海を渡り、倭を攻めた。」と朝鮮の学者はいうが、ここは日本の通説で示す。倭軍は13年間、朝鮮半島を侵略している。

- 百残新羅舊是屬民由來朝貢而倭以未卯年來渡海破百殘加羅新羅以為臣民
そもそも新羅・百残は（高句麗の）属民であり、朝貢していた。しかし、倭が辛卯年（391年）に海を渡り百残・加羅・新羅を破り、臣民となしてしまった。
- 399年、百済は先年の誓いを破って倭と和通した。そこで王は百済を討つため平壤に出向いた。ちょうどそのとき新羅からの使いが「多くの倭人が新羅に侵入し、王を倭の臣下としたので高句麗王の救援をお願いしたい」と願い出たので、大王は救援することにした。
- 400年、5万の大軍を派遣して新羅を救援した。新羅王都にいった倭軍が退却したので、これを追って任那・加羅に迫った。ところが安羅（加羅）軍などが逆をついて、新羅の王都を占領した。
- 404年、倭が帯方地方（現在の黄海道地方）に侵入してきたので、これを討って大敗させた。

埴輪には兵士の姿が多い。首長を死後も守ろうと背を棺に向けて埋められている。ヤマト王権の指示で朝鮮半島まで出かけた兵士もいたのであろう。継体天皇527年筑紫国造磐井の乱を最後に国内の戦争はなく（アイヌ討伐は外国扱い）、中大兄皇子663年白村江の戦いで倭国は唐・新羅軍に大敗し、以後、秀吉まで日本の朝鮮半島への侵略はない。

3世紀の初期の古墳には埴輪はない。吉備国の墳丘墓にある特殊壺とそれを載せる特殊器台のセットが埴輪の起源であり、4世紀前半に器台のみを表した「円筒埴輪」、器台に壺を載せた姿「朝顔型埴輪」が確立し、古墳を聖域として画するために墳丘を段状に飾った。

1978年（昭和53年）、川西宏幸が「円筒埴輪総論」を発表した。川西は、円筒埴輪の持つ突帯（タガ）の形状や調整（ハケメ）の向きなどの諸属性を分類・検討し、ハケメ調整として断続的な「A種ヨコハケ（工具が表面から複数回離れる）」、継続的な「B種ヨコハケ（工具を離さないが静止痕が残る）」、連続的な「C種ヨコハケ（工具を離さず一周させる）」、「タテハケ」を見出し、編年基準とした。また表面の「黒斑」の有無により、須恵器生産技術として伝来した窯の導入時期を画期とするなどして、I～V期の年代区分を与え、全国的な埴輪編年を構築した。

4世紀に家形・器財形・動物形（鶏）が出現し、5世紀以降に人物埴輪が作られるようになった。埴輪は江戸時代から集められており、埋葬時に並べたままの出土は少ない。器材埴輪は、盾、ゆきの武器の姿からのものと、さしば、きぬがさと団扇、日傘をデザイン化したものであり、邪気を払い首長の権威を示すものと解されている。



家形埴輪は埋葬の中心にあり、4世紀から6世紀まで必ずあり興味深い。切妻平屋だけでなく、入母屋、二階だてもある。故人の住まいを作るならば、木棺、石室の飾りにこだわるのだろうが、ベンガラから7世紀・高松塚古墳の四神と従者の絵で終わるので、死者の家を作ろうとする意思は死者の弔いにはない。

この家形埴輪はカミに関連すると思う。カミと共に食事をする (cf.宮中の新嘗祭) ために高床の倉庫を利用した伊勢神宮の形は、BC100年の銅鐸の絵に既にある。宮内庁が所有する家形埴輪は、鯉木、千木があり、玉垣で囲われているので、神社の社そのものである。ホトケが持ち込んだ建築技術がなければ、この形はできない。

動物埴輪は鳥が圧倒的に多い、鷹を肩、腕にとませた鷹狩の武人の埴輪もある。大空に羽

ばたく鳥に天空に居るカミへの使者をイメージしたのか、ならば、西欧のエンジェルが羽をはやしているのと同じとなる。それとも、鳥は身近の食料なのか。6世紀初めの継体天皇の古墳と想定される今城塚古墳では、武具を備えた兵士、馬と共に鳥もいる。家形埴輪と中心として、この構えた行列の中で鞍をつけたように見える鳥の埴輪になんの意味があるのかわからない。馬はいまでいう戦車であるとすれば、鳥は戦闘機なのか。楽しい妄想の世界である。



侍女の埴輪に、スカートをめくって陰部をみせているのがある。男根をソリ立たせている兵士の埴輪もある。副葬品であるので、侍女の役割、兵士の力をみせているのか。

機材埴輪には船がある。大阪市平野区长吉、大和川北岸の沖積地にある長原遺跡の1987年の調査で1号墳・2号墳(5世紀前半の円墳)周溝より船形埴輪(はにわ)が出土した。1号墳出土の船形埴輪は、丸木舟の舟底に舷側板を追加した準構造船(縫合船)をかたどり、底部2ヵ所に台座を造り付けて、西都原古墳群出土埴輪に似る。2号墳出土埴輪は、全長128.5cm、国内出土の船形埴輪中最大。丸太を割り抜いた船底部と上部の二重構造を立体的に表現、船首・船尾ともに船底端部が衝角状に突出する。

考古学では、死者の船での旅たち「補陀落浄土への船」と解説するのもある。私には、地上が馬で、空が鳥で、海は船と、黄泉の国で亡くなった首長が縦横無尽に動けるように埴輪の模造品を作り副葬したのだと見える。

・古事記のカミ

初めて天皇と号し、藤原京を作った天武天皇の指示で712年に古事記が完成した。現代に「天皇は万世一系」は間違いないと言われている、その始祖・第26代継体天皇(507年58歳にして河内国樟葉宮(くすはのみや、現大阪府枚方市)において即位)以前の事は、神そのものを語る神話の世界から現実の天皇・継体天皇にどうつなげるか、まさに古事記は太安万侶の作った物語である。神代はともかく、邪馬台国の2世紀後半から継体天皇の6世紀5世紀には大陸から道教、儒教、仏教が入っており、既に「ホトケ」が「カミ」を凌駕した時代に書かれている物語から弥生時代、古墳時代前期の「カミ」をあぶりだすのは難しい。しかし、「カミ」が書かれているので当然無視するわけもいかない。

はじめに………

上巻 神々の物語………

一 神々の誕生………

1 造化(神)と巨大神の時代 2 神の名前の意味 3 神の祖神祖神

二 瀬田群島出現………

4 柱の出現 5 経見と経見

三 筑紫国訪問………

6 筑紫国

四 三貴子の誕生………

7 神の誕生 8 三貴子の名

五 天照大神と須佐之尊の誓約………

9 誓約の約定 10 神を祀る手

六 天岩戸………

11 日本書紀 12 天岩戸と御魂

七 八岐大蛇退治………

13 八岐大蛇 14 須佐之尊

八 稲羽の素戔………

15 稲羽の素戔

九 少名見古事部の本筋………

16 田つり 17 少名見古事部

一〇 建御市之男神と建御名方神の方くらべ………

18 建御名方神と建御市之男神と中臣氏

二 醜い神と美しい妹………

20 日向(天)の房舎 21 ナナササノミと日本

三 海佐知屋古・山佐知屋古の物語………

22 失われた神話

中巻 大和朝廷の誕生………

一 三 東征の開始………

23 東征開始 24 大和国

二 四 聖徳太子の決戦………

25 聖徳太子の決戦

三 五 三輪山の神の祟り………

26 三輪山の神の祟り 27 聖徳太子の即位

四 六 物言ひぬ王子………

28 本音即ち命に即ち命

五 七 倭建命の御尊………

29 倭建命

六 八 倭建命の皇孫………

30 倭建命の皇孫 31 聖徳太子の即位

七 九 神功皇后の二尊………

32 神功皇后の二尊 33 四世紀の朝鮮半島と神功皇后

八 〇 大山守命の謀反………

34 葛城氏の謀反

下巻 王族と豪族の抗争………

一 仁徳天皇の善政………

35 仁徳天皇の善政 36 仁徳天皇

二 聖徳太子の反乱………

37 太子の反乱 38 伊勢本朝本朝天皇と聖徳太子

三 聖徳太子………

39 聖徳太子

四 木梨之輕土の失脚………

40 木梨之輕土の失脚

五 日御土の反乱………

41 日御土の反乱

六 葛城山の言下神………

42 葛城山の言下神

七 王子発見………

43 聖徳太子の王子 44 聖徳太子の即位

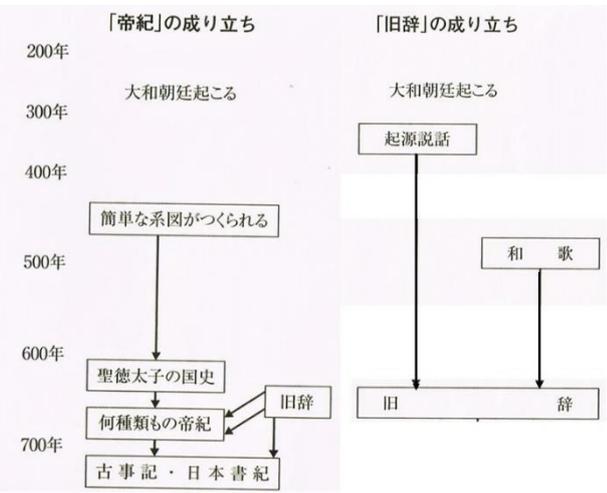
八 平群志麻呂………

45 平群志麻呂

解説「古事記」と「日本書紀」………

そこで、武光誠 著「一冊でわかる古事記」2012年 平凡社刊を図書館で借りだし、アンチョコとする。

聖徳太子の国史以前に、倭の五王の5世紀には漢字が日本に入っており、文字で「系図」が書かれていた。「帝紀」とは系図である。稲葉山古墳出土鉄剣471年の「系図」がそれを示す。国の起源を示す説話は万葉集に仁徳・雄略天皇の御製と伝承されている歌もあり、7世紀以前にも、弥生時代からの口伝での伝承があったのだと思う。アイヌの口伝「アイヌ神謡集」と読むと、文字を持たない人々が歌でいかに歴史を伝承していたかが実感できる。



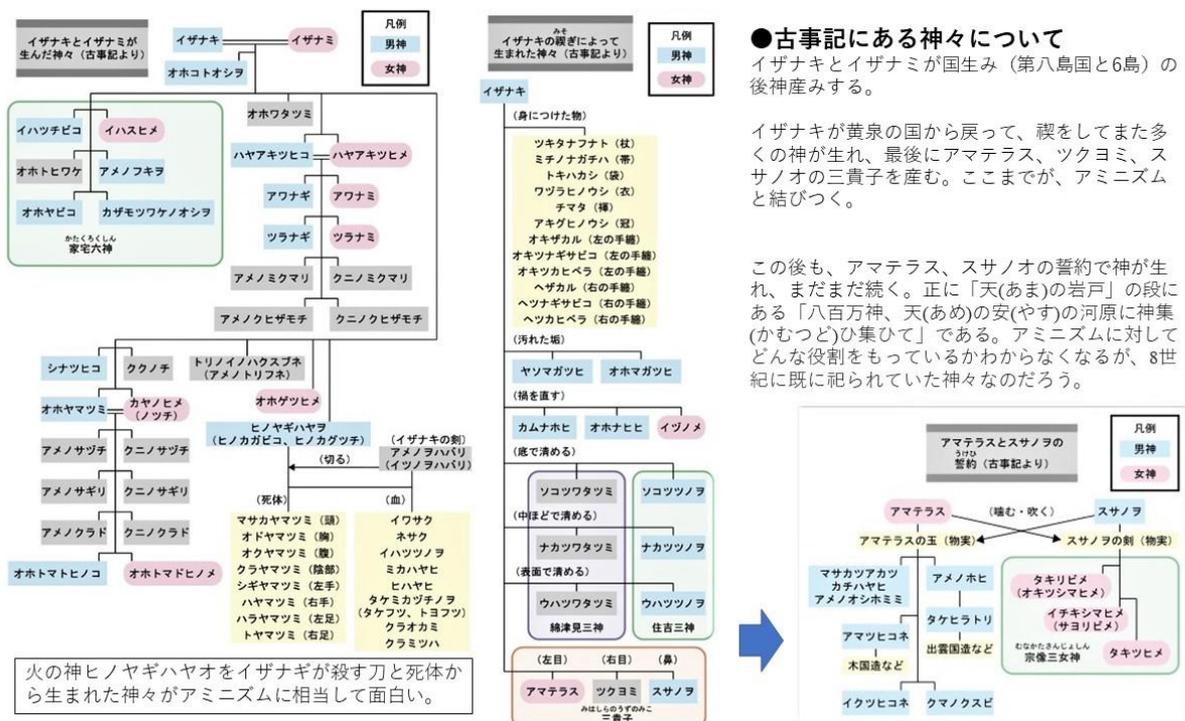
7世紀になると、地方の王、ヤマトの豪族、百濟、それぞれの歴史物語「旧辞」が作られており、それらを整理して「古事記」「日本書紀」が作られた。

最初に出現した神は、天之御中主神(あめのみなかぬしのかみ)という。「天の中心」は、空の上の神聖な土地、高天原に現れた。人間や動物を繁殖させる高御産巢日神、神産巢日神が続き、その後7代12神をつなげてイザナキ、イザナミが男女の神として生まれ、「国生み」「神産み」をする。

天武天皇の天皇の語源は7世紀中頃の・道教の天皇(てんこう)・地皇・人皇に由来しており、その天皇由来話から机上で産んだ神代の話だ。「天」は輸入された漢字とその概念ですが、倭国の人々も「あめ」と訓づけられた天空に神を見たのだろう。天と地、地と海、太陽(昼)と月(夜)、生と死と対比される世界観は人類共通にある。

最初の子は「ヒルコ」と言い、干潮時に現れるブヨブヨした土地だったので葦船で海に流さ

れ、次が「アワシマ」と言い、草木の生えない岩礁だったのでこれも失敗。ようやく、確かな大地として6世紀の日本列島を「大八島」と産むのだが、淡路、伊予（四国）、隠岐、筑紫（九州）、壱岐、対馬、佐渡、大倭豊秋津島（本州）の順番がその当時の日本で土地の序列を示しているようで興味深い。次に「家宅六神」を産む。建物の材料や構造を示した名前であり、土地の次は家が欲しかったのだと思うと微笑ましい。海、河、風、木、山、野と続くとアミニズムだが、動物の神はいなくて、船の神が続き、最後に火の神・火之迦具土神を産んだときホトを焼き、苦しむ。苦しんで、嘔吐、糞、尿からも神が生れる所は黄泉の国のイザナミの見てはいけない姿と並んで凄まじい。火の神をイザナキは怒って太刀で切るのだ



が、この時の火の神の死体と太刀から生まれた神々に、火、農耕、鉾山に対しての敬いの気持ちがある。相変わらず弥生人の生業であったはずの狩猟、漁労が消えてしまっている。日本を「五穀の国」とする意思が神話にある。

須佐之男命が食事の用意をする大気都比売神の様子を覗くと、大気都比売神は鼻や口、尻から食材を取り出しそれを調理していた。須佐之男命は、そんな汚い物を食べさせていたのかと怒り、大気都比売神を殺してしまった。すると、大気都比売神の頭から蚕が生まれ、目から稲が生まれ、耳から粟が生まれ、鼻から小豆が生まれ、陰部から麦が生まれ、尻から大豆が生まれた。とあるので、米作りだけでなく、アワ、小豆、麦、大豆も大切な穀物であったとわかる。

次に、なくなったイザナミを求めてイザナキは黄泉の国に行く神話は有名だが、黄泉の国はここにしか書かれていない。死者のいる黄泉(よみ)は、黄泉(こうせん)と中国の春秋左氏伝にある外来語であり、黄泉の国の描写は7世紀の横穴式古墳に似ている。

古事記の死後の国は「根国」「常世国」と書かれており、地下もしくは海のかなたにある。大国主神と国を作った相棒の少名毘古那神が、粟の茎にはじかれて「常世国」に死に行く姿を見るに、生き残った大国主神は泣き叫ぶのだが、死者はあちらの世界でまた楽しくやっているように見える。スサノオは根の国を「妣（はは）の国」と呼んでおり、大国主神は須勢理毘売命に会い、生大刀・生弓矢・天詔琴を根の国から持ち帰り、田道間守は垂仁天皇の為に橘を取って来た。

古墳の副葬品を見ると、死後の霊の行き先はコチラなのだろう。こうあって欲しい世界観が優先するものだ。ホトケが来る前の人々には地獄世界はなく、雷、嵐、火事、大蛇が怖かったのだ。

ペルセウス・アンドロメダ型神話の分布



出典：『神話から歴史へ』（井上光貞著、大林太良作図、中央公論社刊）に加筆

大蛇と言えば、スサノオの八岐大蛇（やまたのおろち）退治だ。山から出る川にそって水田を作った弥生人は、川を山からの贈り物として捉え、川毎にクニ（郡）を作り、その対象の山を氏族のカミとしてあがめた。例えば、三輪山（大王氏・大物主神社）、春日山（物部氏・石上神社）、葛城山（葛城氏・一言主神社）である。

山の蛇は川のようにクネクネしており、カミの使いであり恐れるものではなかった。神が怒る時、神の使いである蛇は大蛇（洪水）となり人間を襲うのである。

八岐大蛇（やまたのおろち）退治は、ギリシャ神話の「ペルセウス・アンドロメダ型神話」と呼ばれ、世界にある。橿名田比売（くしなだひめ）は、美しい稻田の神であり、大蛇（おろち）とは「峰

（お）の霊（ち）」であり、山の神である。出雲では祭りの日に山の神が人里に現れ、田の神と結ばれるという神事があったのであろう。スサノオという勇者の神が田の神に会いに来た山の神を退治し、田の神と結婚するというのは、勇者ペルセウスが怪物を倒して美女アンドロメダと結婚する話と同じだ。

山幸彦、浦島太郎の話では、海の底に一種の理想郷としてあり、不老不死、若返りと結び付けられた世界観がある。神も霊も海の底では永久不変なのだ。日本では天国はアマテラスたち神の国であり、死して霊となっても天国には行けない。

柳田國男は「根の国が沖縄のニライカナイ（他界）と同根であるとの考えより、本来は明るいイメージの世界だった。」と言っている。海に囲まれた国故に海に「補陀落浄土」を求めたというだ。山頂の先の天を仰ぎ見るより、海人だった弥生人には水平線の彼方の方が適していたのかもしれない。

魏志倭人伝は、死者を弔ったあとに、海に入って禊をする」とある。古事記の「禊」も、河でなく海である。今の清め塩に繋がっているのではないか。

もう一つ、魏志倭人伝と一致するという説がある。邪馬台国の女王・卑弥呼、狗奴国の男王・卑弥弓呼の音である。古事記の大王は日子と書き、ヒコと読ませている。卑弥呼、卑弥弓呼も音はヒコに女と男を混ぜたものであり、江戸時代の「ヒメ」「トノ」と同様に倭国の普通名詞であったというのだ。私は賛同する。

・古事記のカミからヒトへ

「大王は神にしませば」と万葉集の表現にある。大王（天皇）は神に近い人間でなければならないが、大王（天皇）は人間の姿をして、普通の人間のように血を流し、病で死ぬ。古事記は 3 巻に分けて、カミが主人公からヒトが主人公となる物語に変えていくが、エポックはニニギノミコトの天孫降臨直後にある。美女・木花之佐久夜毘売を見初めて嫁にしたいと親の大山津見神に頼んだら、姉の醜女・石長比売もセットで送られてきた。ニニギノミコトは、美女だけ取り姉を返してしまう。すると、大山津見神に「石長も留めおけば、命は永遠でしたが、木花之咲くとだけでは、楽しく人生は過ごせませんが、お子達は花が散るように寿命も散ります。」と言われたとある。

神武天皇までの日向 3 代によって「ヒトに近いカミ」となった。

バナナ型神話の分布



出典：『神話から歴史へ』（井上光貞著、大林太良作図、中央公論社刊）に加筆
※本図のほか、北米大陸北西岸に同型の神話がある。

これは、南方に広く分布するバナナ型神話として有名である。「小さな過ちから人間の寿命は限りあるものとなった。」とするものである。インドネシアのセレベス島のアルフル族の神話では「人間は古くは天から神が縄に結わえて降ろしてくれる贈り物を食べて生活していた。石を降ろされた時に「食べられない」と言った。すると神はバナナを授けてくれた。人間は喜んでバナナを食べた。すると神はこういった「石を食べれば不死の体になったのに、バナナを食べたために人間の命はバナナのようにはかなくなった。」神からの石なので食べられることも出来たであろうに、不味い石より美味しいバナナを主食として人生を楽しもうと考えた。

食べ物を狩るのでなく、天から縄で降ろされるというのでは楽ちんなアルフル族であるが、石とバナナが、醜女と美女に変わり、「限りある人生だから嫌いな事はさけて明るく楽

しく生きていこう。」と、これは人生訓になっている。

山幸彦と海神の娘の子・天津日高日子波限建鵜草葺不合命（なんともながたらしいが、日子の家は海に近い所にあった茅葺の家だったのだろう）と海神の娘の妹が結婚し 4 人の子供をもうけ、4 男が初代天皇となる神武天皇・神倭伊波礼毘古命である。次男は常世國、三男は海の国に行く。



日向の国に巨大古墳はなく、難波からヤマトに入るには大和川であるべきなのに、熊野から吉野を超えているので、6～7世紀に作られた新しい神話であろう。「大王は神にしませば」としなければならぬ神武東征（大友氏を先陣とする兵士を引き連れているが、歌と呪術で勝つ）の物語であった。BC 5～4 世紀頃にこのように筑紫から奈良盆地まで渡来人は東に來たのだが、彼らに 1000 年前の記憶があろうはずがない。

10 代天皇・崇神天皇は「御真木入日子印恵命」と言う。初代の神武天皇と同様に「はつくにしらすすめらみこと」との別名から、彼がヤマト王権の実質の初代であり、6 世紀になって神武以下 9 代の天皇が作られたのであろう。古事記学者の暦研究が正しいとすると、彼は 3 世紀の末の人物となる。

崇神天皇のすぐ前に、大物主神の妻となったが、大物主の神ともめて、箸が陰部を突いて死んだ巫女・倭迹迹日百襲比売（やまとととひもひそひめ）の名が古事記にあり、宮内庁は箸塚古墳がその巫女の古墳だとする。

邪馬台国の卑弥呼とは 60 年違うので、氏族の血統が邪馬台国とヤマト王国が繋がっているかどうかはわからない。しかし、邪馬台国（やまたいこく）とヤマト王権と、ヤマトの音

は似ていると思う。クニ（国）の時代であり、古事記にも王族の内乱が多く書かれている。

伊勢神宮の立った神話は、崇神天皇の跡を継いだ垂仁天皇に、「天照大御神さまを祀るに最適な場所を探すように」と命じられた倭姫命（やまとひめのみこと）は、カミ（鏡）を持ってアチコチ巡りようやく伊勢にたどり着く。

しかし、それまでは天皇と同じところに祀られていたとなると、三輪山に居た大物主神である。神話の中では、鏡がカミであるという事、天皇と同室にカミが居るという事は書かれていない。

この伊勢神宮の立つ神話に、崇神天皇は、国中に疫病が蔓延したので大物主神にたずねたところ、大物主神は「私を意富多多泥子オオタネヒコノミコトに祀らせるように」とお告げをする。神が天皇自身は神を祀らなくて良いというのだ。

6世紀の「大王は神にしませば」によって、大王は太陽神・アマテラスからの直系で続いているという神話と、国を作り大王にその国譲りをした大国主は大物主と同じであり、大王がその大物主神を氏神として三輪山に祀って来たという神話は、天皇の祖先神が二系統となり矛盾してしまった。そこで、矛盾を解決するためのお話がここで必要となったのである。大王（天皇）の氏神、祖先神が三輪山から伊勢神宮に入れ替わったという2つ続きの神話であった。

そして、伊勢神宮に天皇が参拝する事は持統天皇が最初で、以後は明治天皇までない。なにに、京都にカミはいくらでもいたのだ。

氏神、祖先神が入れ替わるこの神話は、58歳で福井県から来て天皇になった継体天皇が一気に作ったのだと思う。ヤマト王権と離れていた彼しかできない事だからだ。カミはどこに鎮座していても、神主に「祓詞」で呼び出されればたちどころに現れてくれるので困らない。古事記は、ここで天皇をカミからヒトに変え「大王は神にしませば」のアイデアが確立した。

倭建命と神功皇后の三韓遠征は、4～5世紀の倭国統一、朝鮮半島への倭国の出兵の神話として作られたのだろう。皇后の腹にいた応神天皇は、半島との戦いの神として奈良時代に八幡大菩薩として蘇るが、継体天皇も応神天皇の5世

祓詞

【要訳】 伊邪那岐大神が筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原で禊祓をされたときに生まれた祓戸の神々よ、さまざまな罪穢れを清めて下さい。

【祓詞】（現代の神事で多く用いられるもの）
掛まくも畏き伊邪那岐大神、筑紫の日向の橘小戸の阿波岐原に御禊祓え給いし時に生ませる祓戸の大神等、諸の禊事罪穢有らんをば、祓え給い清め給えと白す事を聞こし食せと恐み恐み白す。



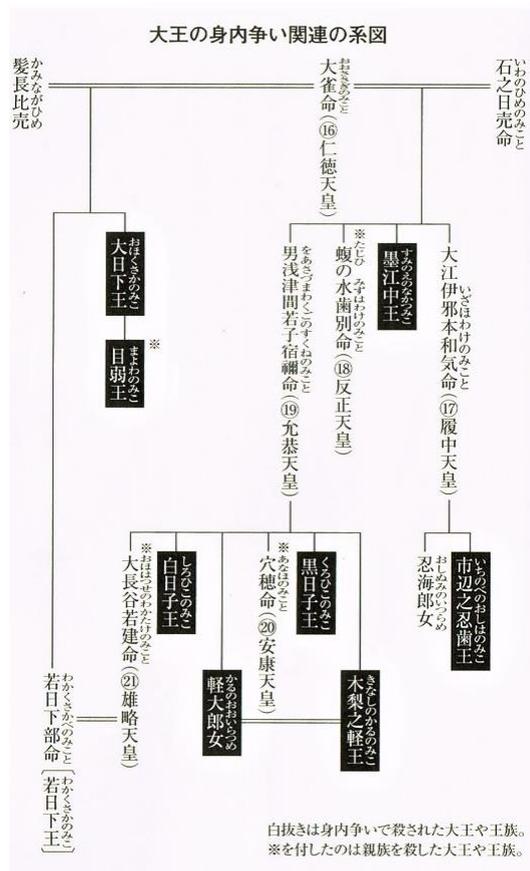
の子孫とされているので、実在した大王として記憶されていたのであろう。百済から 369 年に贈られた七支劍の「倭王旨」を応神天皇に比定する学者もいる。

アマテラスとスサノオの誓約（うけい）で宗像三女神が生れるが、弥生時代にあった半島から伊都国への渡来の航路が、船の発達により筑紫との航路に変わったのではないかと。

仁徳天皇（大雀命おおさぎのみこと）が、難波の高津宮で天下を治めたとある。続いて履中天皇、反正天皇、允恭天皇、安康天皇、雄略天皇（大長谷若建命おほはつせのわかたけのみこと）と、5 世紀に 6 代続く王朝を、南朝の宋に 421 年～478 年に渡って 10 回使いを送った「倭の五王」と、教科書にある。

河内（堺市）に百舌鳥古墳群、和泉（羽曳野市）に古市古墳群と、ヤマト王権は奈良盆地から大阪平原に大和川沿いに出て巨大古墳を作った。大阪湾、瀬戸内海に大王の権威を示すものだ。

414 年建立の「好太王碑」により、倭国が高句麗と戦争をしていたことは明らかであり、王朝最後のワカタケルは 478 年に宋に「使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事・安東將軍・倭国王」と自称した事は埴輪の項で書いた。

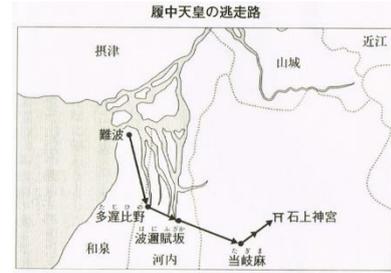


ここでは、史実の検索はしない。古事記ではどう扱われているかの検証である。大王が自ら劍を持って戦う身内の争いが克明に描かれている。そこには豪族の伸張も関わっている。

応神天皇には母親が違う 3 人の子供がおり、大雀命（仁徳天皇）ではなく、宇遲能和紀郎子につがせようとした。応神の死後、もう一子の大山守命が兵をあげたが宇遲能和紀郎子は大山守命を宇治川で殺す。宇遲能和紀郎子の母は春日山をカミとする春日一族であり、和珥氏、粟田氏、小野氏がいた。大雀命の母は王族であったが、妻は葛城曾都毘古の娘の石之日売命であった。仁徳天皇が宇遲能和紀郎子の自死？によって実現するとともに、和珥氏は衰え、大王、物部氏、大伴氏の盆地の東側から、西側の葛城氏、平群氏、巨勢氏、蘇我氏に勢力は移る。

5 世紀は大王に妃を送り込んだ葛城氏が勢力を持ち、百済にサチヒコ（曾都毘古か？）が送られた。雄略天皇が後の父・葛城氏の直系の都夫良意富美（つぶらのおおみ）を討ち、領地

を奪い葛城氏は衰える。6世紀になると葛城氏の傍系の蘇我氏が大王の外戚となって大友氏を失脚させ、物部氏を滅亡させ、645年中大兄皇子、中臣鎌足に討たれて蘇我氏も消え、藤原氏の出番となる。

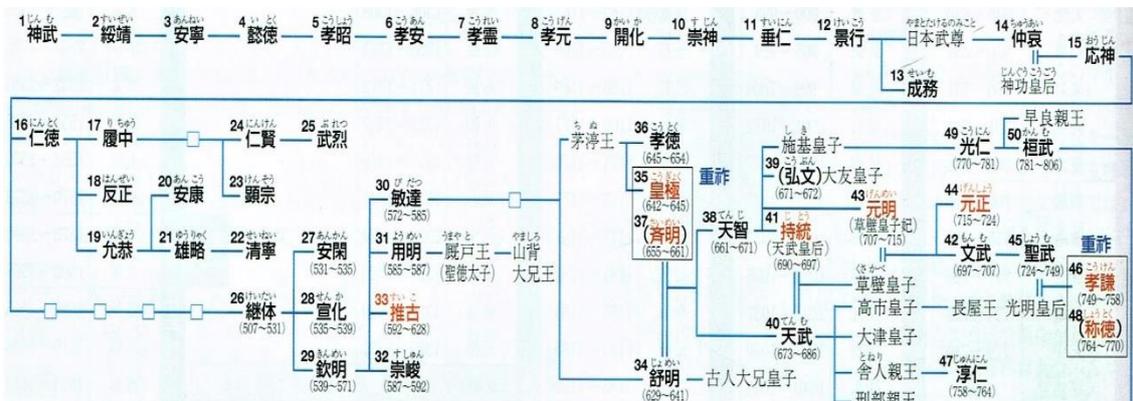


仁徳天皇の後の履中天皇も、王位をつぐ前の新嘗祭で酔いつぶれ寝たところで、弟の墨江中王に反乱される。難波宮（12棟の建物跡が出土）から漢直の祖先・阿知使主に守れ、石上神社に逃げる。京都に都が移ってから、奈良に逃げ出した平城太上天皇を思い起こす。

6世紀、継体天皇は淀川水系に宮を構えヤマトに入らなかったが、また明日香に王権は戻る。

6世紀の継体天皇以降天皇の系譜は現代まで続く。4世紀の大王たちと5世紀の「倭の五王」とは系譜が違い、身内を殺しまくった雄略天皇の死479年から継体天皇の即位507年のわずか28年の間もまた系譜が違ったのだと思う。

28年間に清寧・顕宗・仁賢・武烈と4代つづくが、仁賢しか他の記録では確認できず、古墳から見ると6~7人の王が大王の座を争ったのだとも見える。



王権とヤマト豪族は共に内乱を起こしており、平群氏も消えた。福井県からあらわれた継体天皇が子供3人を続けて天皇にし、孫4人もまた続けて天皇となり、7世紀末に天武天皇、持統天王が古事記を作ると共に日本国をなしたのだと思う。

景行天皇からヤマトタケルとなると、天皇はスッカリ人間となってしまい、古事記は恋の歌に満ち、恋敵、妻、美人、兄、弟が殺されて王位が変わるといってお話ばかりとなる。その実体は朝鮮半島との戦争の中で、「実力者が大王となる。」のだという機運が高まったのであろう。豪族が次々と根こそぎ消えていったのは、古事記の恋話で消えたのではなく、シビアな戦争があったのだと思う。

奈良時代8世紀の律令政治の税金の話と土地政策を示す。「王 臣 民」と分けた場合の民はここまで時代を下げないと示せない。



第三章 大王（オオキミ）から天皇へ

第一段 古墳時代（3世紀後半～6世紀）とは、ヤマト王権が天下を「王中の王」としてまとめていく過程である。カミは山に降りる。水分（みずわけ）の山を農耕のカミとする。

- ・ 治天下大君



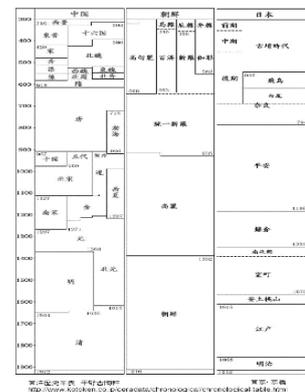
埼玉県稲荷山古墳出土鉄剣の金象嵌には「ワカタケル大王（雄略）」の名があり、「吾左治天下」とある。471年に記されたこの「吾」とは、古墳に埋葬されたこの地の王（豪族）オワケ臣（オミ）であり、彼は「治天下大王（アメノシタヲオサメタマウ）」雄略の左治（大君の天下統治を補佐）をしたとの意味である。同時代の熊本県江田船山古墳出土鉄剣の銀象嵌にも「治天下ワカタケル大王世」とある。4世紀から5世紀にかけて全国（熊襲、蝦夷を除く）に前方後円墳ができる姿が、それぞれの古墳に祀られた地方を治める王の力を示すとともにヤマト連合政権の成立を示す。

弥生時代の小さなクニの王も集落の外に副葬品と共に葬ったが、古墳となると、その墓の規模に権力が示される。カミが降りる人工の山は斎場

となり、子孫を見守る先祖霊としての役割を、白く輝く古墳に期待した。卑弥呼はカミとの交信によって邪馬台国をまとめたようだが、大王は太陽神・アマテラスをアニミズムの八百万神（やおよろずのかみ）から祖先霊として抜き出し、カミとした。エジプトの太陽神である王が死後ミイラになってピラミッドに納まっている、太陽信仰と同じである。

- ・ 「天」中国とヤマト王権との違い

中国から輸入された漢語の「天下」であるが、「アメノシタ」と訓ずる日本の「天」には、中国の「天帝」と呼ばれる地上の運命を支配する意思を持った存在はいない。中国は「易姓革命」によって、



天下の支配が変わるとされてきた。天は地上でもっとも徳のある人に天命を下して天子（皇帝）とし、新しい王朝が開かれる。暴君が現れると別の有徳者が選ばれ天命が下され天下の支配が委ねられるというのだ。新たな支配者は、壇を築き、天に向かって感謝の述べ、革命を宣言して天子となる。中国に朝貢してくる「夷狄」（中国の四方に居住する異民族に対す蔑称：四夷＝東夷・北狄・西戎・南蛮）を含めて天子の支配が行き届く世界が中華思想による「天下」であった。

・ヤマト連合政権 いよいよ鉄器時代になり国が立つ。

4 世紀から 5 世紀にかけて、朝鮮半島から鉄が多く輸入され、武器（剣、矢じり、鎧、兜、）だけでなく農具（鎌、鋤の刃）に使われ生産力を高めた。高い灌漑技術によって、河川毎にそれぞれの王（豪族）がカミを祀り（ヤマト王権は三輪山）、その地を治めると同時に、馬を使った壮絶な戦いが王（豪族）の間で起き、いくつかのクニ（郡）をまとめたクニ（国）が立ち、奈良盆地で起きたヤマト王権のクニ（国）が盟主となる倭の連合国を作る。



395 年に高句麗の好太王が倭を討つと石碑にある。古事記では応神天皇の頃だと歴史学者は言う。対馬の対岸の加耶と日本との交流が強くあり、帰化人（秦氏、西文氏、東漢氏の祖）が養蚕・機織り、論語、須恵器などの技術・文化を持って列島に来る。

5 世紀の中国史書には「倭の五王」が朝貢を行い「倭王」の号を授かっている。478 年南朝・宋に朝貢した最後の王「武」がワカタケル（雄略）であると、どの学者もこの王だけは一致する。倭の連合国の王は国内をまとめるに中国の権威付けが欲しかったのだろう。実際、438 年、451 年の倭王は臣下への叙爵も中国に求めていることに、倭が連合国である事が見える。

5 5世紀の東アジアと倭の五王



王「武」は、盟主の力を強くし、臣下への叙爵を宋に求めず、478 年上表文に「使持節都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事・安東將軍・倭国王」と自称したのであった。朝鮮半島の高句麗を除く全ての領域で、中国の天下の為に倭国は高句麗と戦う意思があると示した。

ワカタケルは、朝鮮半島から列島へ多くの渡来人、文化を受け入れると共に、半島にも倭から送り込んだヤマト連合政権が存在することを中国に認めさせ、さらに倭は高句麗と同等である開府儀同三司の官爵を求めたのだった。

宋は高句麗の圧力を感じていた。百濟が高句麗に大敗した 475 年を期に、朝鮮半島につけ入ろうとする倭王であったが、

宋は都督百濟諸軍事の称号を与えている百濟を外して「六カ国の軍事を担う、安東大將軍」とした。宋が敵対する北朝・北魏の包圍網をなす陸続きの高句麗の方が、海に向こうの倭国より重要なのは当然である。これを最後に日本は中国の冊封（名目的な宗属関係／中国を「宗主国」とする）を受けず、朝貢外交を進めることになる。

中華思想に従い、宋王朝に駢儷体の漢文をしたためることが出来るまで、倭国の文化度と国力が上がった事を示す出来事であるが、倭国の朝鮮進出による領土化は歴史的事実ではない。私たち世代は日本書紀にある「倭が任那日本府を設置」をそのまま教えられたが、今の教科書に「ミナマ」はない。

埼玉県の豪族オワケ臣は従者を従えて、ヤマト王権の宮に出仕し、大王の戦いに参加して、彼の兄の治めるクニ（国）はヤマト連合国の一つとなった。奉仕の見返りは、クニ（国）とヤマト王権に認められる事。そして、朝鮮半島からの先進の文物であり、技術を持つ渡来人である。金象嵌の何度も鍛えた鉄剣もその一つである。



埴輪から家畜、船、竈を持つ家も伺われる。弥生時代は戦いに備えて濠と土塁を構えた環状集落であったが、古墳時代の地方の王となると、単独の館を構えて戦いに備える。戦鬪のプロ集団が生れた。

高床の米蔵を建て、井戸の近くには祭祀の石畳があり、銅・鉄の加工場を持つのは、奈良県明日香村のヤマト王権だけでなく、筑紫・

吉備・出雲・紀・上毛野の豪族たちも、ヤマト王権より規模は小さくても同様であったことが遺跡に見られる。

・カミを祀るのを仕事とする氏・中臣が出現

大王を支える中央の豪族には、土地の名を氏とした葛城・和珥（わに）・平群（へぐり）・的（いくは）・蘇我。職業名を氏とした大伴・物部・中臣・膳（かしわで）の名が知られる。



人物埴輪とその復元(左:男性, 右:女性, とともに埴輪は千葉県芝山古墳)

ヤマト政権の組織として農地を押さえる氏姓制度が作られ、百濟からの渡来人が 5 世紀後半に文芸を持って多くあったこともあり、伴造（とものみやつこ）＝トモ・部制が作られた。6 世紀になるとヤマト政権は地方の有力豪族を「国造」として任命し、屯倉（ヤマト直轄地であり、地方を押さえるべくヤマトから派遣された官家）を設置して地方支配を強めていっ



た。初穂というヤマト政権への税金は、大王の神により豊作が約束された種粍に変わって、また地方に支給された。

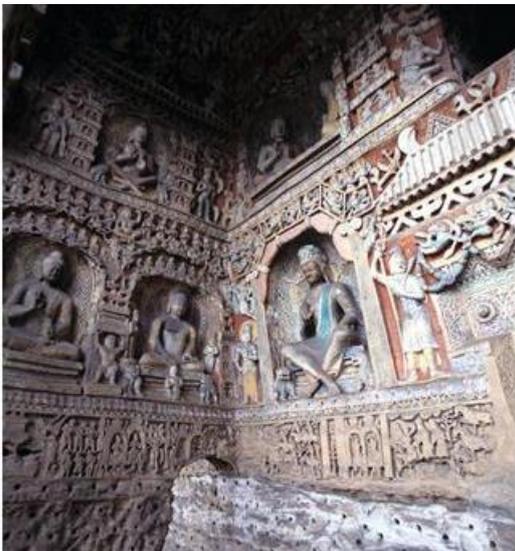
第二段 飛鳥時代(6世紀～7世紀前半)ホトケがやって来た。

ヤマト政権の持統天皇が日本国、天皇を 689 年に制度化し、律令を定め、記紀をまとめ、薬師寺・伊勢神宮を建設し日本の礎を築くのだが、律令を中国からの輸入物から日本化したのと同じく、カミも蕃神(ばんしん、あだしくにのかみ、となりのくにのかみ)をホトケという日本化したものにしないといけなかった。写真は韓国国立中央博物館にある金銅像 高さ 93.5

センチ。

538 年欽明天皇は、百済の聖明王から釈迦金銅仏と經典を送られた。大臣の蘇我稲目がもらい受け小墾田の家に安置した。

・ 仏教の歴史



ここで、日本に来たホトケをウィキペディアで学びなおす。さりとて、ここでそもそも仏教とは?とまで読みほどこつもりはない。ヤマト王権もブツダの「悟り」とは程遠いホトケで良かったのだ。

仏教伝来は、朝鮮半島の百済王からと学校では習うが、それ以前に帰化人(鞍作氏)が仏像を携えて来ていた。

飛鳥寺の塔を囲む三金堂の伽藍配置は高句麗の清岩里廢寺と同じであり、高句麗のさらに北の北魏・雲崗の石窟(460年-494年)には、法隆寺のアルカイクスマイルの仏像だけでなく、

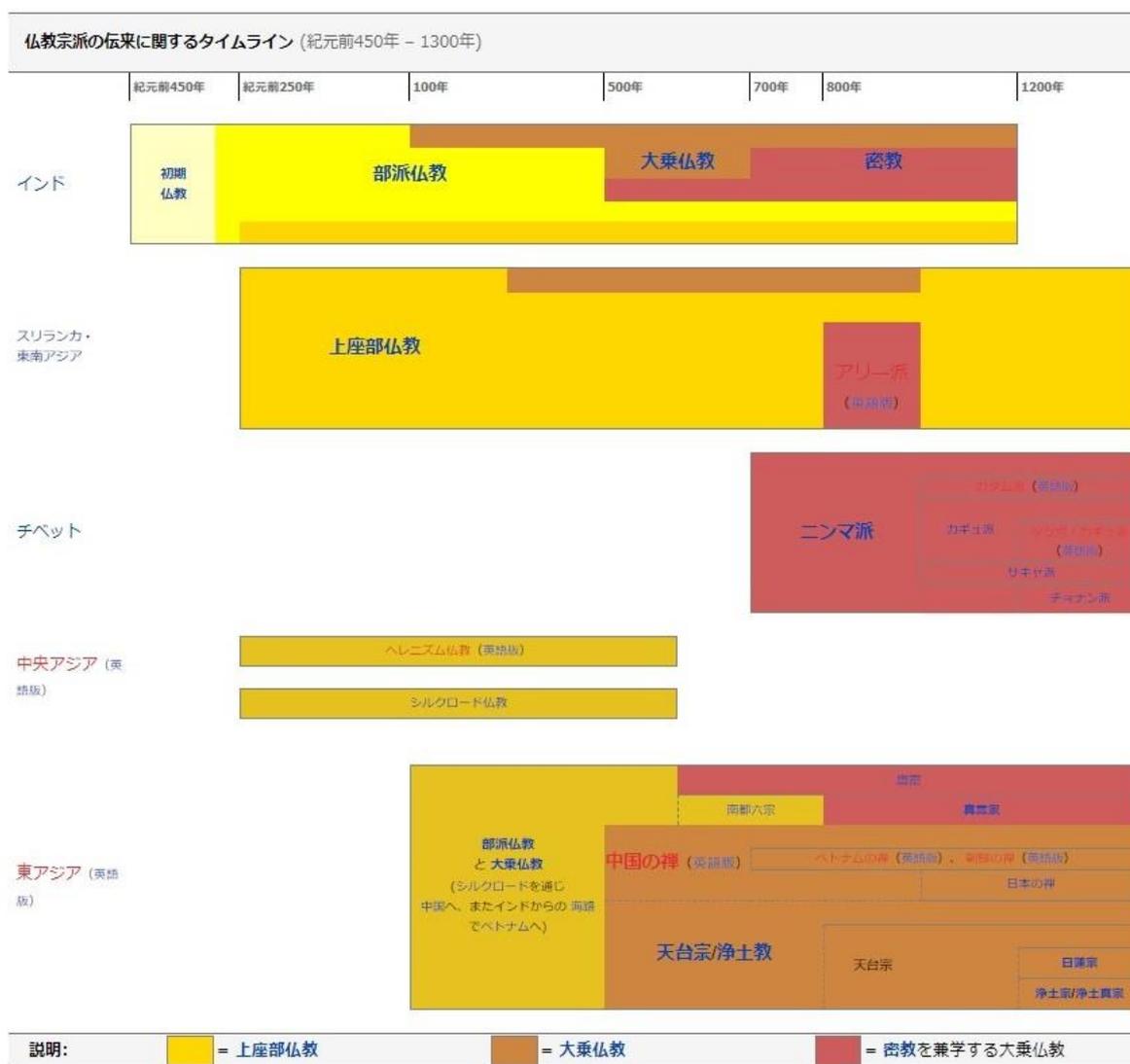
人型雲形肘木、人字型割束、卍崩しの勾欄という完成された建築様式もある。百済は仏教文化の流れでは終点近くにあり、さらに終点となる列島にホトケを流したのだった。

仏教は、最新のアイデアとして日本に紹介されたのだが、その最新のアイデアも、実は古くインド内部で1000年かけて密教に変容し、その変容した物が中国に渡り、漢語に翻訳(鳩摩羅什 344年・413年、玄奘 602年・664年)されたものだった。

禅宗は鎌倉仏教として新しく日本に入ってくるが、大乘仏教、浄土教とその始りの時代はそ

んなに変わらない。儒教も朱子学として中国で変容した物を、新たに「新しい」と日本は江戸時代に取り入れている。宗教の始点と日本輸入の時期を見誤らないようにしないといけない。

入って来た外国の神(蕃神)のアイデアを、彼らはどのように捉え、日本化させてホトケとし、さらにカミと一体かしたのか。その習合の様子の概略を以下の表で探って欲しい。



近年は異論もあるが、仏教の歴史の時代区分は、原始仏教、部派仏教、大乘仏教に三区分するのがおおかたの意見である^[43]。

※補注 ミニミニ仏教史

紀元前 5 世紀の頃、シャカ族の王子として生まれたガウタマ・シッダールタはこの世の苦しみから解脱するために 29 歳で出家し、35 歳で「もろもろの現象は全て滅びゆくものだ。怠ることなく精進せねばならぬ。」と悟りを開き、80 歳で沙羅双樹の下で涅槃するまで、ガンジス河流域を説法して歩いた。弟子たちに口伝されたのが阿含経(初期経典)であり、原始仏教とされる。

前 3 世紀、インド初めての統一王朝マウリア王朝第三代アショーカ王に保護された仏教は全土に広まり、教団は拡大分裂をする。部派仏教である。なかで保守的な個人の悟りを求める修行に重きを置く上座部仏教（小乗仏教）は、セイロンからビルマ、タイに伝わる。

1～3 世紀にイラン系のクシャーナ朝がガンダーラを中心に起き、ギリシャ由来の仏像を作り、中国、日本へと、大乘仏教が伝わった。大乘とは大きな乗り物と言う意味であり、ナーガールジュナ（竜樹）によって体系化された。初期の経典、法華経・阿弥陀経を鳩摩羅什（くまらじゅう）が漢訳した。修行をしなくても、誰もが平等に成仏できる。死後には浄土があるという思想である。信者に対して専門職の僧侶が生まれ、仏陀（悟りを得た者）の哲学から仏教と言う世界（普遍）宗教になる。

キリストのように病をなおし、死者を生き返らす呪術的な秘密の要素が仏教に取り入れられ、僧侶がそれを成した。この秘密教すなわち密教は、日常祭祀や民間信仰に重点を置いた大衆重視のヒンドゥー教に対抗して多くの如来、菩薩、インドの神に由来する仏を生み出す。しかし、インドでは仏教はヒンズー教に吸収される。チベット仏教は、この密教と土着のボン教が融合されたものである。

日本への仏教は、中国で漢訳された経典を元としているが、そこに中国土着の道教（多神教、不老長生）と儒教（倫理）を混じらせて、専門職の僧侶が語るの、語る僧侶の数だけ宗派が生れた。ホトケには、インドの神、道教、儒教が混じっていることが、ホトケを日本土着のカミと習合させるのに役立ったのだ、と民俗学は現代に伝わる神仏習合の事例を挙げる。

・継体（450 年？-531 年？）の 58 歳での大王即位（507 年）の怪

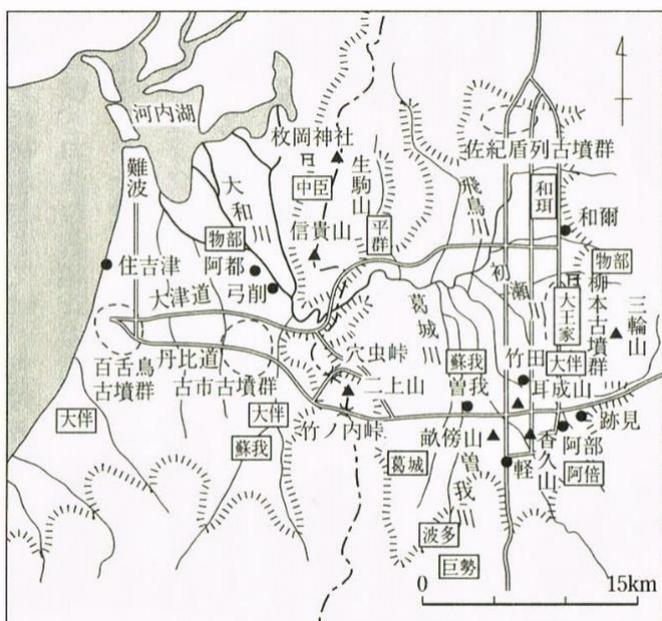
蘇我馬子大臣と聖徳太子による三宝[仏陀（仏像）と法（経典）と僧伽（そうぎゃ、さんが）]を敬う事が日本の仏教の始まりであり、現在も日本の全ての仏教徒の太子信仰へと続くの

1 ヤマトの豪族勢力の推移

大王 (天皇)	倭 (日本)	大臣	大連	朝鮮
ふれつ 武烈	507 おおびのかなむら、 <small>けいたい</small> 継体天皇を迎える	〈蘇我氏〉	〈物部氏〉 あらかひ 麿鹿火	〈大伴氏〉 かなむら 金村
けいたい 継体	512 大伴金村、加耶 4 県を百済に割譲 527 筑紫国造磐井の乱			
あんかん 安閑	528 物部麿鹿火、磐井の乱を鎮圧		磐井の乱	
せんか 宣化	538 百済の聖(明)王、仏像と経論を献上 (552年説もあり)	稲目	尾輿	
きんめい 欽明	蘇我稲目と物部尾輿、崇仏論争	【崇仏派】	【排仏派】	高句麗
	540 大伴金村、加耶問題で失脚	対立	失脚	百済
	562 新羅が加耶を滅ぼす			加耶
びだつ 敏達	587 蘇我馬子、麿戸王(聖徳太子)らと物部 守屋を滅ぼす	馬子	守屋	
ようめい 用明		対立	滅亡	新羅
すしゅん 崇峻	588 蘇我馬子、飛鳥寺造営を開始			
すいこ 推古	592 蘇我馬子、東漢直駒に崇峻天皇を暗殺 させる	暗殺		

であるが、太子の曾祖父である継体天皇の怪から、太子の祖父の欽明天皇と蘇我氏の台頭へとまず繋げる。ホトケは、その当初からカミと組み合わせられ「お上」によって采配された。応神から 11 代目の武烈まで男系で大王が続いたのだが、武烈に子がなく、越の三国（現福井県三国町）から、越前と父・息長氏から受け継いだ琵琶湖東岸の近江国高嶋郷（現滋賀県近江町）を統治していた男大迹王（をほどのおおきみ）を武烈の姉・手白香皇女の入り婿としてヤマト政権は迎えたのであった。

大伴金村大連は、最初は丹後国桑田郡在の仲哀 5 世孫の倭彦王を迎えようとしたが倭彦王に逃げられてしまい、物部麤鹿火大連と闘って、応神 5 世孫の男大迹王を向かい入れたと記紀にある。仲哀となると 100 年も前の事でありその血脈は到底信じられないが、450 年生まれであれば雄略は存命しており、大王家と息長氏との姻戚関係はなんらか存続していたのであろう。しかし、大和、河内の地にもそのくらいの血脈を持つ者がいたと思うのが普通であらう。雄略が亡くなり継体が継ぐまでの 28 年間に、4 代もの天皇の数は怪しい。



ウジの本拠地(熊谷作成)

既に、ヤマト王権には氏姓制度が出来ていた。葛城氏は 5 世紀に大王と姻戚関係を結び大きな力を持っていたが、雄略に滅ぼされた。その記憶は生々しく残っており、大伴、物部のどちらの氏の血も引かない「天孫降臨」の神の系譜に血脈で繋がる者を探し出し、この後のヤマト王権の支配制度、国造(くにのみやつこ)、屯倉、部を、大連として固めていきたたかったのだと私は考える。

継体天皇は、河内国樟葉宮(くすはのみや、現大阪府枚方市)で即位しても、その後 19 年間ヤマトに入ら

ず淀川沿いの現・京田辺市、現・岡京市におり、526 年に磐余玉穗宮(いわれのたまほのみや、現奈良県桜井市)にようやく遷る。翌年起きた新羅と結んだ筑紫君岩井の乱は物部麤鹿火によって鎮圧され、なんと 81 歳まで生きた継体の古墳は、ヤマトになく摂津国嶋上郡(現高槻市)と淀川右岸に設けられ、宮内庁の指定を受けることなく、古墳には誰でも自由に訪れることが出来る。死してなお、現在も怪しい大王なのである。

継体天皇が大伴、物部の大連に担ぎ出されたところは、いまだヤマト連合国の形式が残っていたのであろう。当時の大王即位は天皇即位と違い①群臣がレガリア(鏡と剣)を新大王に

献上②即位の場には壇が設けられ、新大王がレガリアと共に昇り即位③壇を築いた場所を宮に定める④大王は大臣、大連、臣、連、伴造などを任命する。の順だったようだ。譲位の慣習がなく大王が次代を決めることはできず、大王の死去と共に君臣関係は一度とかれ、新大王と群臣は改めて人格的結びつきを作るのであった。しかしながら、後に外戚に操られる権威だけの天皇の姿を継体天皇の一生に見えるとも言えよう。

継体は、即位の前に6人の妃がおり、尾張連草香の娘・目子媛(めのこひめ)の子が安閑(535年没)、宣化(539年没)と大王を続けるのだが、皇后・手白香皇女の王子の欽明(509年?～571年)が539年に即位をする。欽明は蘇我稲目の娘二人を妃にしており、敏達(538年～585年)のあと、稲目の娘の子が、用明、崇峻、推古と大王を繋げ蘇我氏は外戚となる。大伴金村が継体をヤマト王権に呼び込み、その子の安閑、宣化まではヤマト王権を握っていたのだが、欽明が即位すると、彼は伽耶問題を理由に大伴金村を失脚させ、蘇我稲目を引き立てた。宣化まで葛城氏外縁の蘇我氏の名前は歴史に出て来ていない。

ここで、「538年欽明天皇は、百済の聖明王から釈迦金銅仏と経典を送られた。大臣の蘇我稲目がもらい受け小墾田の家に安置した。」によろやく戻る。教科書では蘇我氏が「崇仏派」物部氏が「廃仏派」と習うが、百済を倭国が援助する見返りに百済が送ってきた五経博士、易博士、歴博士、医博士と共に仏教も入って来たのである。外国の神(蕃神)をどう扱うかの争いは、武力で長く大王に仕えてきた物部氏を、ヤマト新興の蘇我氏が追い落とす戦いであり、そこには仏教の宗教「悟り」の匂いは全くなく、蕃神が携えてくる朝鮮半島からの新たな文化(仏像、経典、寺の建築技術)で新たな国作りをしたい蘇我馬子でしかない、と私は思う。馬子は崇峻天皇を暗殺し、ホトケによる「新たな国造り」は聖徳太子によって結実するが、蘇我氏と蘇我氏と繋がる王族は滅ぼされる。しかし、新しいアイデア・ホトケは以後も繋がっていく。

・蘇我馬子(551年～626年)のホトケ

稲目は向原の家を寺としたが、569年、疫病が発生し多数の死者が出たので物部尾輿らは「国のカミが怒った。」と欽明天皇の許しを得て、仏像を難波の堀江に投棄し寺を焼いた。577年、百済から敏達天皇に経典と僧侶と共に造寺工が送られてきたので、難波の大別王(おおわけのみこ)の寺に彼等を置いた。この場合の「寺」とは今の寺でなく「役所」の意味であり、外交使節を置く館が難波にあったのであろう。

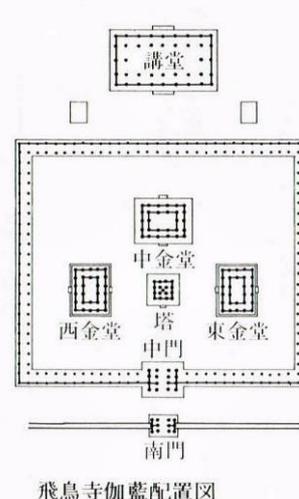
585年、馬子は石川の宅の東に仏殿を作り弥勒の石仏を置く。高句麗からの渡来人に僧経験者があり、司馬の娘ら3人を尼とし法会を行うと舍利が出現したので、大野丘(現・明日香村)の北に塔を建てて大規模な法会を行い、舍利を納めた。塔は仏舎利のストゥーパを起源

とするが、馬子には塔は古墳に替わって天にそびえる祖先霊の依り代であり、巫女が尼に替わればよく、「仏法」を語る僧侶は必要としなかったのである。戦後の焼け跡にテレビ塔が聳える姿を見て、新しい復興の国作りを夢見た親父の姿が重なる。



馬子が病気になり、また疫病が流行ったので、物部守屋と中臣勝海は敏達天皇に訴え、仏教は禁止された。塔は倒され仏殿と共に焼かれ、仏像は難波の堀江に捨てられ、尼は捕らえられた。カミに祈るのは、飢餓を恐れる五穀豊穡への願いであり、治病延命であった。それは外国からの神であってもかわらない。587年、用明天皇は疱瘡に倒れ、仏教への帰依を大王として初めて表明した。用明の死は即守屋の死となり、崇仏派の勝利となる。

死者の供養、祖先霊崇拜の塔と合わせて、仏教は「現世利益を願う」日本化した「ホトケ」として列島にはいつて来たのであった。本格的な伽藍は馬子の飛鳥寺である。百済に求めて、588年には仏舎利、僧侶に加え、技術者（寺工・太良未太、文薺古子、露盤博士、瓦博士、画工）がやって来た。590年に材木を刈りはじめ、2年後には仏堂と歩廊が建ち、あくる推古元年には塔の心柱を立て、596年に寺を作り終えた。606年に止利仏師の丈六の金堂釈迦如来像が金堂に安置された。



飛鳥寺の塔は伽藍配置の中心にある。595年に高句麗僧・恵慈、翌年には百済僧・恵聡が飛鳥寺の「三宝の棟梁」として住すので、高句麗、北魏の様式が百済経由で入ったのかもしれない。

塔は1196年に雷によって燃えているが、掘っ立て心柱の下、地下3mの心礎から1750点の遺物が昭和の調査で出土した。ガラス玉の他にも、硬玉製勾玉、管玉、水晶製切子玉、琥珀玉、金銅製耳飾、銀製空玉、馬鈴、打出金具、瓔珞、刀子、蛇行状鉄器、挂甲（鉄製鎧）など、古墳の副葬品として一般的に見られるものであり、馬子たちは古墳と同様に墓として塔に向かって祈っていた事がわかる。



・聖徳太子（574年～622年）信仰

聖徳太子を開祖とする宗派として聖徳宗（法隆寺が本山）が存在しているが、親鸞の「太子和讃：法華義疏」の影響が大きい。観音菩薩の化身とされている。聖徳太子という名前からして後世に聖人というラベル張りが行われた証拠であるが、聖人化はすでに「日本書紀」720年完成から行われており、8世紀には「本朝の釈迦」と言われ、鎌倉時代までに『聖徳太子伝暦』など現存するものだけで二十

種以上の伝記と絵伝（中世太子伝）が成立した。

飛鳥時代（538年～644年）のあと白鳳時代（645年～709年）の670年に若草伽藍、斑鳩宮（601年～）は燃える。西院伽藍は白鳳時代に再建され、天平時代（710年～793年）に夢殿を中心とする東院伽藍を太子の宮の跡に作った。今に至るまで1300年間残ったのは、太子信仰があった故である。

太子の事績として、6つの儒教の徳目に大小をつけた冠位十二階 603年、憲法十七条 604年、遣隋使 607年（隋書では600年に文帝に倭国は第1回遣隋使を送っている）の3つが私たちの教育では取りあげられてきたが、近年の歴史学では、律令国家（飛鳥浄御原令 689年）を作った持統天皇・藤原不比等が、大化改新 646年、太子の事績を「昔からあったのだ。」と、ことさら日本書紀で強調したかったのであり、「大化改新」と言われている大化という元号はなく（元号は大宝 701年から）、当時は干支で年号をあらわしていたので「乙巳（いっし）の変」と変えられた。そして、戦前に太子信仰を皇国史観にすり替えた事を反省し、教科書では憲法十七条も、隋の煬帝を怒らせたとされていた「日出處天子致書日没處天子無恙云云」（隋と争う高句麗の僧・恵慈が遣隋使に介在したとの説あり）の記述もない。

・憲法十七条とホトケ

第一条の「和をもって尊しとなす」を私たちは「和」は平和と同一視し、「民主憲法」の元祖と教えられたが、主旨は「論議を尽くして合意しなさい」である。戦前の明治憲法下では第三条「承詔必謹」の部分が強調され、[王、臣、民]の身分設定の中で「王に民は従え」とされた。歴史事実は、冠位を定めて氏姓制度から臣の登用を離脱させ王権を強くしたいとした王が、臣に示したモラル書であり、モラルに基づいて臣は民を納めよ、である。

神仏習合の視点からみると、第二条の「三宝（仏法）を敬え」に目が行くが、仏教思想（高句麗僧・恵慈）で臣のモラルを縛ることができるものでない。儒教モラルがこの時代に既にあったことを示す憲法である。儒教（儒教博士・覚賀かくか）を展開した十七条の中で第二条では「仏法は生物が最終的に帰する処であり、世の中極悪人は少なく、大抵は教えによって従えることができるが、三宝（仏教）に依らなければ、曲がった心を直すことはできない。」とあり、仏教を涅槃、輪廻転生から見ており、死を覚悟した人の価値観をモラルの基準としている。

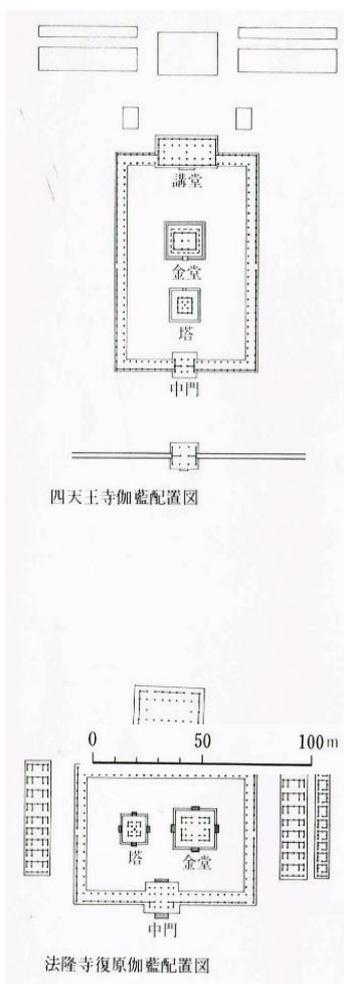
第三段 7世紀後半 詔「現神御宇天皇 あきつみかとあめのしたしらすめすめらみこと」に向かつて

現神アキツカミ「この世にあらわれた神」イデオロギーは徐々に形成されていった。600年の第一回遣隋使は「倭王は天を兄として日を弟としている。」と、高句麗神話を元に文帝に

述べ、道理を持たない夷狄であることを諭される。推古天皇・聖徳太子は 14 年間で 5 回の遣隋使を送り猛烈に大陸文化を輸入する。唐に替わっても奈良時代の前 80 年の間に 8 回遣唐使が使わされた。日本人の学問僧、留学生が帰国後果たした役割は大きい。

天武（?～686 年）が壬申の乱に勝ち、初めて「天皇」と呼ばれ、神格化される。持統天皇（645 年～703 年）が天皇を制度化し、702 年遣唐使は倭国を日の土台「日本」と名前を変え唐にも認めさせた。天皇スメラミコトは新羅、渤海には使うが、唐には「日本国王主楽美御徳スメラミコト」とした。

朝鮮半島では 660 年に高句麗・新羅によって百済が滅び、668 年唐が高句麗を滅ぼし、676 年新羅が半島を統一する。日本の対岸は熱く目が離せない。この頃のカミとホトケの主演は持統天皇である。712 年古事記・720 年日本書紀が成立し、奈良時代になって天皇がアマテラスの直系の子孫とようやく明確になる。天皇は神の子孫であるが生きては神ではなく、死してカミと祀られる。持統は天皇を子に譲って上皇 697 年となり、初めて土葬でなく、火葬されて天武陵に追葬された。



・聖徳太子が作ったとされる寺は、私（氏）寺であり、中宮寺→法隆寺・若草伽藍→四天王寺の順である。

法隆寺中門の前に立つと、右に五重の塔、左に金堂があり、どっちが伽藍の主演？と思う。恩師・内藤昌は「この配置は朝鮮、中国になく、これぞ、日本の非対称の美を示している。」と本に書いている。しかし、これは若草に埋もれていた飛鳥時代の聖徳太子の伽藍でなく、天武・持統天皇が白鳳時代に再建した伽藍なのだ。

律令国家である事を宣言し、国名を「日本」と定め、「天皇」の称号を定め、記紀でその根拠「天孫降臨」を示すさなかの再建であった。仏法を国家鎮護の法とするため持統天皇は多くの寺社を作っていたのだが、法隆寺の白鳳、天平期の再建は、その中の一つの「官寺」としてされたのだった。

なら、聖徳太子の法隆寺・若草伽藍が四天王寺と同じ伽藍配置であることはなにを示しているのか。持統天皇のホトケは何だったのかをこれから遺跡で見える伽藍配置だけで論じる。

飛鳥時代の伽藍は、大王の皇族、有力な氏族が現世の安寧を願い、先祖の菩提を弔うと共に一族の繁栄の象徴でもあった。

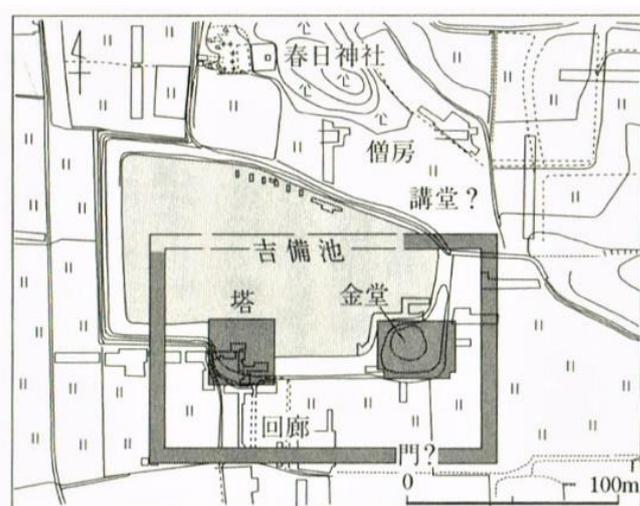
四天王寺の伽藍配置は百済に多く見られ、飛鳥時代の伽藍配置の典型的な姿であり、厩戸一族の寺は、太子の母・穴穂部皇女（あなほべのひめみこ）の菩提を弔ったと言われている中宮寺の四天王寺式伽藍配置から始まる。

中宮寺には、弥勒菩薩半跏像、太子の死後に行ったと思われる天寿国繡帳残闕（てんじゅこくしゅうちょう ざんけつ）の国宝が伝えられているが、日本書紀に記述はない。穴穂部皇女が亡くなったのは622年、聖徳太子が亡くなった2か月前だ。よって死後の菩提を弔う太子の建設とはならない。遺跡の金堂と塔との間隔が狭く、尼寺である向原寺（桜井尼寺）と同系統の瓦が出ていることから尼寺と考えられている。太子は605年に斑鳩の宮に移っているので、飛鳥寺の小型版を馬子になって斑鳩の宮の東に尼寺様式で造営したのであろう。太子の祖母（母・穴穂部皇女の母、欽明天皇の妃）は馬子の姉・小姉君であった。

法隆寺・若草伽藍の建設由来はわからない。金堂の薬師如来（東の間にあり。中の間には釈迦があり、金堂には本尊が二つある）の光背には607年に用明天皇（588年没）の意を受けてこの像と寺を作ったとあるが、「偽書でありもっと新しい。」と学者たちは言っている。しかし、たかが30年の違いでは、今から見れば同時代の作品と言ってよいだろう。

推古天皇と第一王子の山背大兄王（?～643年）が太子を弔うために建設したとすると、飛鳥寺の例から若草伽藍完成は630年ごろになる。聖武天皇の国分僧寺、尼寺の741年の詔にあるように、寺の様式に性別があり尼寺の数も多かったのであろう。仏像は容易に移動できるので、尼寺・中宮寺の本尊・薬師如来が643年に山背大兄王と共に燃えてしまい、改めて復元されたという考えもできる。

金堂釈迦三尊像の光背には「623年、太子を弔うために一族、諸氏が発願し、鞍作鳥に作らせた。」とある。仏像を先に作り、若草伽藍の完成まで斑鳩の宮に安置したとすればつじつまが合う。



吉備池廃寺遺構配置図(奈良国立文化財研究所提供)

勅願寺の百済大寺639年（寺域は東西約205m、南北約354m）川原寺668年に比べると伽藍は小さく、670年に燃えた後、持統天皇が和銅年間708年に山を削って再建を終えた現・西院もその規模は踏襲しており、蘇我石川麻呂の私（氏）寺、山田寺・四天王寺伽藍配置648年と寺の規模は同じである。

法隆寺東院は、斑鳩の宮が山背大兄

王の死と共に焼かれたあと、聖徳太子信仰の高まりを受けて、大僧都行信が 739 年に、太子の廟所・八角堂を中心として作ったことは資財帳に明確に残されている。ただし、当時の掘っ立て柱、檜皮葺きなどは中世に作り替えられている。

四天王寺は寺伝・書記で聖徳太子の造だとあるが、発掘で出てきた瓦は若草伽藍より新しい。丸垂木一軒が禅宗様のように扇状に出土して、鎌倉時代の禅宗様デザインは中国では古代からあったと判明した。

日本は法隆寺、薬師寺、唐招提寺と 100 年の間に唐から違ったデザインを同時に入れていて、その中から「唐招提寺様式を和様として育てたのだ。」と当時話題になった。

聖徳太子の朝鮮、隋との外交から見ると、難波に大和川でつながる奈良盆地の西端の斑鳩の地が彼の宮によく、ヤマト政権の外港として難波の整備が必要であり、使者を向かえるにワカタケルの百舌鳥古墳群でなく、ピカピカの四天王寺が必要だったのであろう。

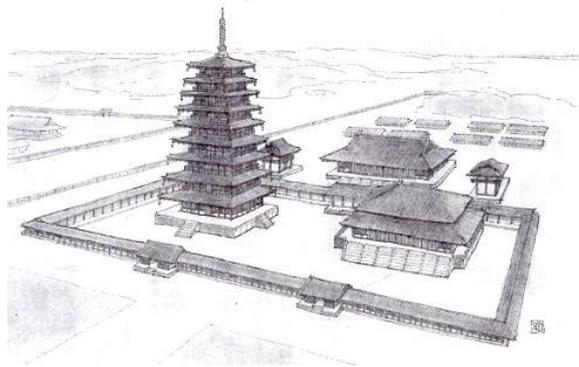
孝徳天皇が 645 年に難波宮を掘っ立て柱で作るのだが、648 年に仏像 4 体を塔に安置と記録にあり、塔の完成はその頃に下がる。聖徳太子の私（氏）寺としては、605 年から建設されたのであろうが、伽藍となると、「官寺」としての資金が必要だったのであろう。

時代が下がるが、法隆寺東院・伝法堂は、光明皇后の亡くなった母・橘三千代の住宅だった。また、平城京の東にある法華寺は、藤原不比等の邸宅であったのだが、娘の光明皇后は、住まいの一部に仏像を置き寺とし、やがて大伽藍を作り総国分尼寺とする。そして、平安京では、敷地の中に朝廷に隠れて持仏堂が作られる。今も住宅の中に仏壇があるように、ホトケは身近にあってこそ価値があるのであろう。

推古 32 年、西暦 624 年の記録では、寺 46 カ所、僧 816 人、尼 569 人とある。鞍作鳥の金剛寺、坂田寺、推古天皇の尼寺である豊浦寺と名前は残っているが、発掘はされておらず、飛鳥地方にこの頃一斉に出来た寺の姿はわからない。寺の発祥は飛鳥時代でも、伽藍を形成するには、法隆寺西院伽藍と同様に白鳳期までかかったのだと思う。

馬子の飛鳥寺は塔を中心にした伽藍配置であったが、四天王寺式伽藍配置はそれを受けて塔をまず正面に置き、その奥に仏像を納める金堂があり、その奥には回廊と一体化した最も正面が長い迫力を持つ講堂がある。塔と金堂が回廊で囲まれ、伽藍の中心である。三方を広く回廊を回し、講義する建物を正面に置き空間を狭めている。飛鳥寺では回廊の外にあった講堂だが、聖なる回廊の内に取り込まれた。人（僧侶）が主役に近づいた配置である。

弔う為だけの古墳のような菩提寺でなく、三宝のアイデア「死を覚悟した人の価値観が政権モラルの基準」が朝鮮半島から持ち込まれ、益々専門職の僧侶が活躍する伽藍となっていく。



大寺院だった百濟大寺（百濟徳施寺）の想像図イラストレーター：早川和さん作

・官寺

百濟大寺

舒明天皇（593年～641年）は639年に百濟大寺と百濟宮を百濟川のほとりに建てる事を命じた。宮は翌年にできるが、書直県（ふみのあたえあがた）を大匠とした大寺は、子部社（ちいさ

こべのやしろ）を切り開いて九重の塔（高さ100m）を建てたために神の怨で失火し、塔と金堂の石の鴟尾（しび）が消失破損し、その建設は京極天皇（594年～661年）に引き継がれたとある。ここで大化改新があり、はたして完成されたのかどうかかわからない。発掘でわかった4.5mの幅の基壇は大極殿と同じであるが、燃えた跡も瓦も出て来なかったことから未完成と移設の両説がある。

天武天皇は壬申の乱に勝ち、天武2年673年に造高市大寺司を任命し高市大寺を作り、天武6年にその名を大官大寺と変えたとある。天武12年に百濟大寺を移築したとある。

天武天皇は藤原京建設を発意し、持統天皇が694年に都を移す。大官すなわち天皇の寺であるので、文武天皇が藤原京での大官寺の建設を引き継ぐが、711年に未完成のまま燃える。燃えた遺跡は発掘で証明された。

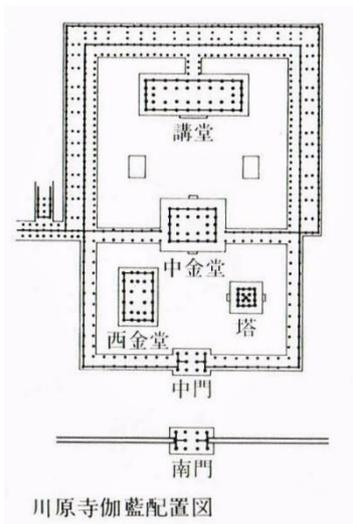
天武天皇（？～686年）は672年に飛鳥浄御原宮に戻り即位するが、そこには天智天皇の川原寺があり、一切経を書写している。「現神御宇天皇」と自らを神格化するためには、何としても川原寺を圧倒する大きな高市大寺改め大官大寺を作りたかったのだが、律令制度を定め革新的な都市「藤原京」を作るには14年と命が足りず、持統天皇（645年～703年）が藤原不比等（659年～720年）と共に行うことになる。「神の怨で失火」とは、カミがホトケを嫌う記述であるが、掘っ立ての心柱では100mの木造建築は技術的に無理だったのだと思う。その長さの木材は世にない。完成しないままの失火は好都合だ。

川原寺（弘福寺）

中大兄皇子は、645年母である皇極天皇の前で蘇我入鹿を殺害したあと、孝徳天皇と共に難波に都を移すも、653年母と共に突然飛鳥に戻る。母は斎明天皇となると、運河を作り、石で板葺きの宮を飾り、阿倍比羅夫を使わして蝦夷・肅慎を服属させ、須弥山の前で化外の民を供応し、661年百濟滅亡を聞いて筑紫まで兵を率い、そこで客死する。

2万7千の兵を半島に送るが663年白村江の戦いに倭国は敗れる。中大兄皇子はひそかに着実に蘇我氏を謀殺してきた事の延長であろうか、白村江の敗戦の責任を負わないように

するためか、7年の間即位をせず政務を行う。唐の攻撃にそなえ、対馬、壱岐、筑紫、瀬戸内と防衛線の拡充に努める。668年に高句麗は滅び、新羅は676年に半島から唐を追い出し半島を統一する。中大兄皇子は677年に宮を近江国大津に移し、翌年天皇を即位する。



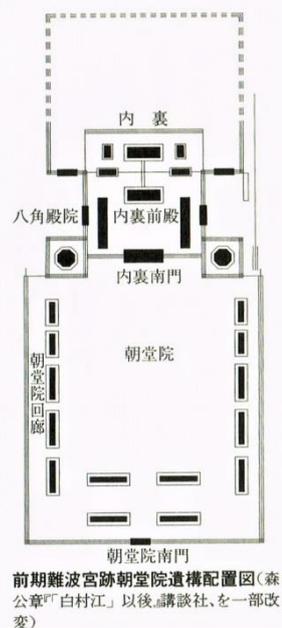
これらに阿弥陀、弥勒を加えた四つの浄土が描かれている。大きな講堂は、周囲を僧房によって囲まれている。講堂に中心性を持たせたこの配置は、南都六宗の学問寺の先駆の伽藍配置と言える。

天智天皇は現神として政務と天神地祇行「朝廷＝朝堂院と内裏」を唐にならい大極殿を中心に作るのと同時に、蕃神を日本のホトケとすべく、685年に諸国に仏舎を作る事を命じた。

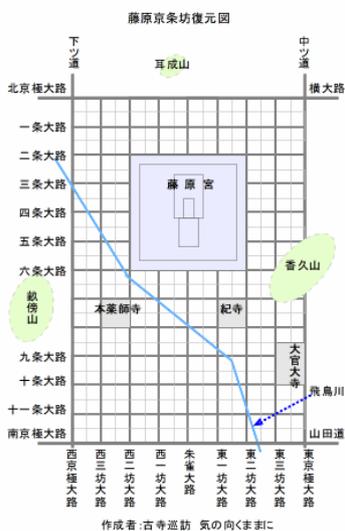
これを請けて多くの寺が作られるが、同時に国家として寺院、僧侶への統制を強める。僧正、僧都、律師を任じて僧尼を統括させる。仏典は諸天善神が国を守護する「金光明経」であり、国家鎮護を律令制度とホトケを両輪にして「臣 民」の支配を進めるのであった。

斎明天皇の水と石を使った儀礼空間の遺跡からは、カミの禊とホトケの守護神の混然と一体化した姿が見てとれる。天智天皇は662年に飛鳥に川原寺、677年に近江国大津に崇福寺、大宰府には筑紫観世音寺を創建する。

川原寺は百濟寺の伽藍配置から、塔の役割が減じている。中門から入ると正面に中金堂があり、左右に金堂、塔がある。西金堂は庭に面してある。治病延命の現世利益追求は、薬師如来信仰を強めており、釈迦如来と金堂をすみ分けたのだろうか。7世紀後半に再建された法隆寺金堂の壁画は、

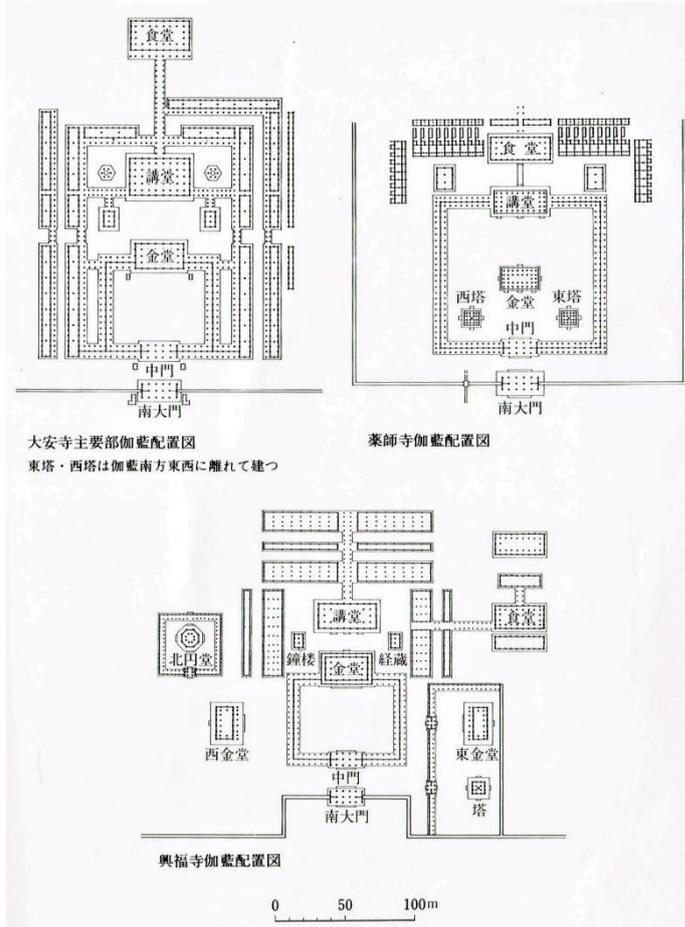


前期難波宮跡朝堂院遺構配置図(森公章「白村江」以後講談社、を一部改変)



持統天皇は、壬申の乱に勝ち673年に即位した天武天皇の死後3年の称制を経て690年に45歳で天皇を即位し、694年に藤原宮に移る。710年に元明天皇が平城京に遷都するので、わずか16年間の都であり、どこまで唐の長安を模した都ができていたかは分からない。すくなくとも大官大寺は未完成であった。平城京では大官大寺は大安寺と名前を変え、飛鳥寺も平城京では元興寺と名を変え、それぞれ移転している。京のほぼ中心に内裏・官衙のある藤原宮を配している。高さ5mの塀で囲まれ、12ヶ所の門があった。朝堂院は南北約

600m、東西約 240m におよび、57m × 27m の大理石張りの基壇に大極殿があった。



薬師寺（本薬師寺）

天武天皇が皇后・持統の病氣平癒を願い、薬師如来を本尊とする薬師寺を発願したが、本格工事は690年以降に、持統天皇、文武天皇によって行われた。平城京の薬師寺は藤原京からの移築ではないが、本薬師寺の装飾的な伽藍を受け継いでいる。

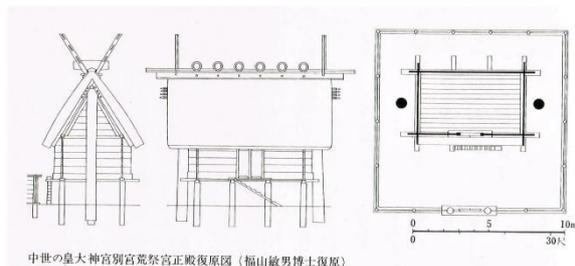
蘇我馬子が依り代と見た塔は金堂の前の両側に脇侍のように二本立ち、大安寺、興福寺となると回廊の外に出されてしまう。

大極殿前の朝庭と似た姿になるのはホトケへの参拝が、現代の東大寺での法要に見られるように屋外の回廊の中、青空の下で行われる

ようになった事を表し、王の寺から、臣・民の寺へとホトケが広がった事を示す。多くの人が建屋に入って仏像を拝するのは、東大寺法華堂（三月堂）、当麻寺のように、平安末まで下がる。

・伊勢神宮 と 持統天皇

伊勢神宮の式年遷宮は持統2年（688年）に決められ、第一回遷宮が690年とされている。途中120年の空白があるが、白鳳時代に寺工の技術によって作られた姿が今に伝わる。現状は柱が梁・桁を受けているが、その古式は、外宮御饌殿のように板倉であり、柱は床だけを受けて、板を組み上げた弥生時代の倉作りが起源だったと想定されている。



正殿は、古式の板倉を様式美として昇華せしめたもので、棟持ち柱の構造的な意味はこの形ではないが、板倉なら屋根の荷重を

板壁で負うのを軽減する働きがある。機能から様式美は生まれている。鯉木は棟押さえ材の強調された姿であり、破風板は屋根を貫いて屋上に千木として現れている。破風の上方に鞭懸と称する細い箸状の棒を 8 本ずつ打つのは、破風を止める装置が形式化したものだ。



日本のカミは弥生時代に渡って来た稲作と共にあった事を伊勢神宮が形で示している。

古事記では、大王と共に住んでいたカミ（鏡）が住まいを求めて転々とし、伊勢志摩のこの地に落ちついたとある。持統天皇は即位 3 年目 692 年に伊勢行幸を行い、中納言三輪高市麻呂が諫めるのだが、持統天皇は受け入れず、彼は辞職する。

三輪山は、大王のカミの宿る山の名であり、高市とは天武の勅願寺の名前だ。三輪高市麻呂の名は、旧来のカミと新たに持統が推す伊勢ノ神の間での闘争があったサインではないか。

記紀が皇祖神をアマテラスという女性神として、高天原から降りて天皇となるという神話をまとめようとするときに、持統天皇は、大海人皇子が壬申の乱の成就を遠く伊勢から地方神の伊勢ノ神に願った記憶から、この地方にあった太陽信仰をアマテラスと習合させたとする、学者の中でも最も新しく伊勢神宮は生まれたという説を私は支持する。

伊勢ノ神に、官寺と同様の封戸を与えてこそ、あの社が成り立つものであり、持統天皇時代に宮中祭祀（祈年祭・豊年祈願、月次祭・季節の順調な運行祈願、新嘗祭・収穫祭）がまとめられ、伊勢神宮は天武天皇の皇女を斎宮としていただき、宮中祭祀を伊勢神宮の祭祀と一体化させたのだった。

カミといえどもまとまった収入が決まらない事には、神殿は作れず、祭祀も行えないという現実的な論理である。伊勢神宮という、カミの中のカミも持統天皇が創始したのであった。この頃、推古、皇極、斎明、持統、元明、元正、考謙と女帝が続く。邪馬台国が卑弥呼の鬼道によってまとまったとあったが、古代においても同様であり、国分寺と同様に国分尼寺が作られたことから、子を産む母性＝豊穡への願いが、カミの本質だとされたのだと思う。

飢餓をおそれる時代が古代からほんの 70 年前まで続いた事が、日本の原始信仰・カミの存続となり、「民は王＝カミに従う」日本となり、今も民主主義が根付かないのだと考える。

・ 怨霊と持統天皇

時代は下って、平安京での怨霊の話から。

都の災いは、非業の死を遂げた怨霊のせいだと、桓武天皇の弟の早良親王をまつる御霊神社、平安時代に比叡山延暦寺を立て直した元三大師をまつる廬山寺、菅原道真をまつる菅原院天満宮、陰陽師安倍晴明を祀った清明神社、昼間は天皇に仕え、夜は閻魔大王に仕えた小野篁をまつる六道珍皇寺。さらには、明治天皇が崇徳天皇の呪いを鎮めようと 1868 年に創設した白峰神宮、悪霊を沈めるいわゆる官立の神社仏閣は京都に多くある。

応仁の乱の頃から八坂神社で行われる祇園祭は、中世になって力をつけた京の町衆が、強力な牛頭天王にわが町に来ていただき、悪霊（疫病）退治に成功したら、さっさと退散ねがうという、官の御霊会とは違う町衆が主役になった悪霊封じであった。

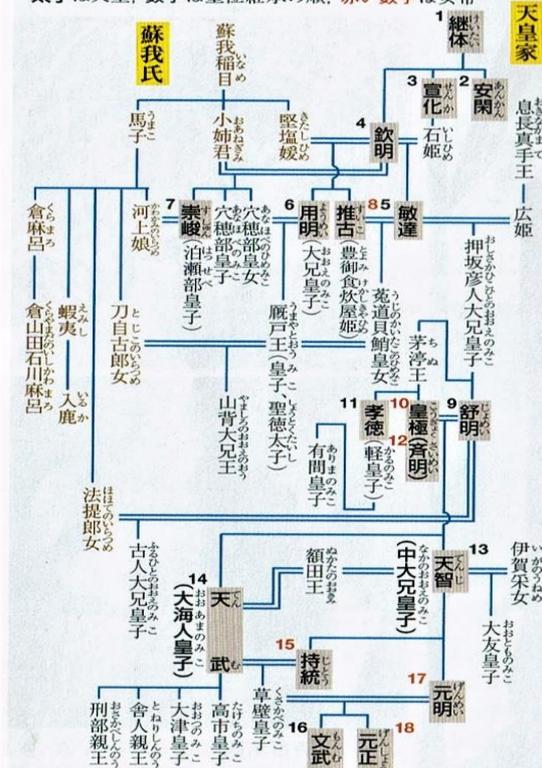
カミとホトケは、間違うと怨霊になり禍をもたらすので供養をしないといけない。

京都では提灯で祖先霊を向かい入れ、五山の送り火で祖先霊を天に送る。尾張津島では川に流して送る。今に続くこの民族風習は全国にある。しかし、経典もなく宗教とまでは言えない祖先霊への信仰心だ。この平安京の怨霊は、古代からカミとホトケへの祈りの中に祖先霊を弔うことがあった事に起因していると言われている。祖先霊の中で、恨みを持って死んだ者が怨霊となるというのである。

何故、持統天皇は、聖徳太子を弔う法隆寺を官寺にしたのであろうか。梅原猛 著「隠された十字架」1972 年新潮社 刊の話を書きうつす。

2 天皇家・蘇我氏の関係系図

太子は天皇、数字は皇位継承の順、赤い数字は女帝



持統天皇が保ちたかった天智・天武の系統は、元明・元正・聖武天皇と平城京に多くの寺を建設する事ではかなうと思ったのであろう。

しかし、天智系の桓武天皇はその寺々に反発して、平安京に遷都すると東西に二つの寺しか置かないとした。斑鳩の法隆寺伽藍は太子信仰によって 1300 年間、唯一残る。

持統天皇の曾祖父の代に、聖徳太子が大王にならなかった故に、天智・天武の系統が天皇になれたのだった。そこに至るには王家の人々の多くの血が流されている。とりわけ太子の怨霊を恐れた持統天皇だったのだ。

蘇我馬子は、物部守屋が推す甥の穴穂部皇子を殺し、その弟の崇峻天皇を殺し、蘇我と縁のない敏達天皇の押坂彦大兄皇子が大王なら

ないように、敏達天皇の皇后・推古を天皇とした。次は聖徳太子が大王となる前提であった。

ところが、聖徳太子は病死し、その長子・山背大兄王は殺され、排除された押坂彦大兄皇子の長子が舒明天皇となる。舒明天皇と蘇我馬子の孫・古人大兄皇子が大王にならないように、舒明天皇の皇后が皇極天皇となる。天智天皇は古人大兄皇子を殺し、取りあえず天皇にした伯父の孝徳天皇の後で天皇となる。

天智天皇の娘・持統天皇は天智天皇の子・大友皇子を殺した天武天皇の皇后となり、天武天皇の死後は天皇を引き継ぎ、文武天皇が早死にすると、元明、元正と繋ぎ、子の草壁皇子の血脈には、藤原を蘇我に代わる新たな外戚として、聖武天皇を生み出す。なんとも、近親の間で多くの血を流してできた持統王朝なのであった。ここに持統天皇の怨霊対策が生れるのは必然だ。

と梅原は書く。法隆寺、山田寺はそのわかりやすい事例だと。

持統天皇は梅原氏が解説したように、聖徳太子の怨霊対策をしたのかもしれないが、怨霊の為の官寺を聖武天皇はその後作ることなく、741年に国分寺の詔、743年に国家鎮護の大仏を作る詔を発する。新しく入って来た華嚴経の廬舎那仏に国家鎮護を仮託したのであった。

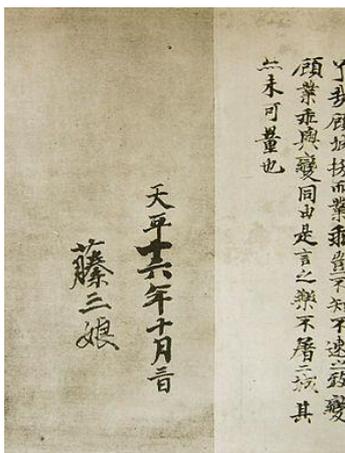
すると、カミのホトケへのすり寄りが始まる。



第四章 ホトケになりたいカミ

教科書での奈良時代は、光明皇后が東大寺正倉院納めた聖武天皇の遺物と大仏によって、天皇親政が華やかに書かれ、大宝律令 701 年、養老律令 718 年による律令政治が解説されている。しかし、口分田は人口の半分もなく三世一身法 723 年、墾田永年私財法 743 年が出され、大仏建立に国家予算の半分を使う。教科書的には聖武天皇によって王の権威がもっとも高まった時だか、同時に租税集めに困り、国家の統合のカミとホトケが迷い道に入った時でもある。神社に神宮寺、寺に鎮守社が設けられ、神仏習合が始まった。

写真は鏡に代わり菩薩の姿で座る神像であり、これをご本尊とした堂宇が作られ、神宮寺となった。



第一段 聖武天皇の神仏習合の事績

・聖武天皇のカミ

741 年に国分寺の詔、743 年に国家鎮護の大仏を作る詔を發した聖武に、ホトケはあってもカミはないのではないかと思うのが普通であろうが「おカミさんは光明皇后だった。」と。これはダジャレだが、歴史書には明確に書かれていない、光明皇后の思いを聖武天皇の前に書いておく。

写真は 744 年皇后 44 歳の時、王義之の「楽毅論」の手本をみて光明皇后が書いたものだ。

聖武天皇（701～756）は、父親の文武天皇（683～707）が 25 歳で亡くなったときは 6 歳であり、祖母の元明天皇（661～721）が持統天皇（645～703）にならい中継ぎで即位する。714 年 13 歳で立太子するも、715 年元明は太上天皇となり、伯母の元正天皇（680～748）が天皇となり、721 年天武天皇の孫・長屋王が右大臣となる。724 年 23 歳で天皇を譲られるが、729 年に長屋王が自害して、勇躍、藤原不比等（659～720）の娘・光明子（701～760）が夫人から皇后に立つ。天皇になる事もある皇后は王族から選ばれるルールが破られ、藤原氏が外戚となって栄華を極める道がここから作られた。

光明皇后は、718 年に阿倍内親王（後の孝謙・称徳天皇 770 没）を出産していた。727 年に基王を生み、喜んで 32 日後に皇太子に立てるも 728 年に夭折。春日山麓の山房に基王弔い

の9人の僧を置き、733年に金鍾寺（こんしゅじ）とし、738年に20歳の娘・阿倍内親王を立太子させている。741年に全国に国分寺の詔が出されると、翌742年、金鍾寺は大和国の国分寺兼総国分寺と定められ、名は金光明寺（現存する三月堂）と改められた。独身の31歳・考謙天皇が749年に父・聖武天皇の譲位により即位すると、皇后宮職を紫微中台と改称し、光明皇后の甥の藤原仲麻呂（恵美押勝）を長官に任じる。756年聖武太上天皇が亡くなると、皇太后となり娘・考謙天皇の後見を4年行い59歳で亡くなる。



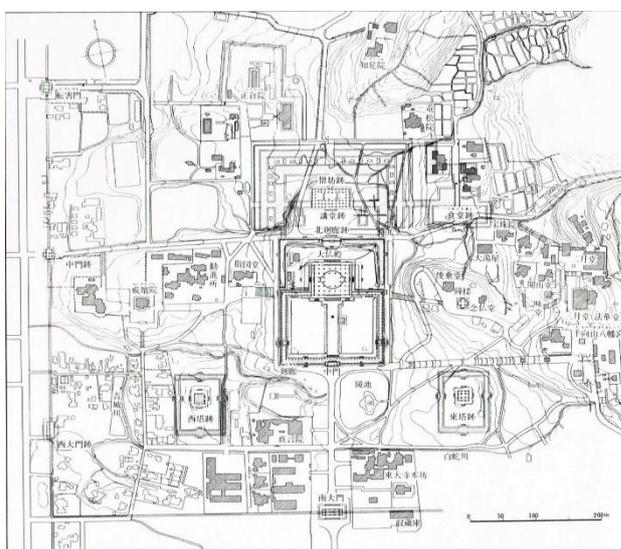
聖武天皇に戻る。737年、政権を担っていた藤原四兄弟が天然痘の流行によって相次いで死去し、政権は橘諸兄に替わり、唐から帰った吉備真備と玄昉を重用する。740年に不比等の孫・藤原広嗣は左遷された大宰府で兵をおこし、吉備真備と玄昉の更迭を求めた。干ばつと疫病で平城京が死臭に満ちていたところにさらに内紛が起き、聖武天皇は乱の最中に、突然関東（伊勢国→美濃国）への行幸を始め、平城京に戻らないまま恭仁京（平城京の北15km）へ遷都を行う741年。国分寺の詔は国衙を引き連れた恭仁京で出された。翌年紫香楽離宮（恭仁京の北東30km）の建設工事を担当する「造離宮司」を任命し、743年紫香楽宮において廬舎那仏（大仏）発願の詔が出され鑄造が始まる。744年天皇は恭仁宮から難波宮への遷都の詔を発し、745年紫香楽宮を新京と宣旨し、平城京に戻る。平城京には、勅願寺（法興寺、大安寺、薬師寺）だけでなく、興福寺（藤原氏）、喜光寺（土師氏）、紀寺（紀氏）、葛城寺（葛城氏）、佐伯院（佐伯氏）が薨を並べており、すでに仏教の都に相応しい景観を形作っていたのであった。

少し詳しく歴史をみると、聖武天皇は、持統、元明、元正、光謙と続く女帝の中で、一人だけ、ナヨッとあった男帝に見える。不比等の母・宮子も病気であり、彼を叱って育てる人もなく、729年28歳になって光明子が皇后に立つと、基王の弔いに引っ張られ、国分寺だけでなく国分尼寺も作ることになる。

光明皇后は天皇ではないが、持統、元明、元正と同じく、自分の血脈を守ろうと必死だ。740年～745年の天皇の彷徨も、都の死臭を嫌いホトケにすぎたのは、史書には書かれていないが、女性たち（元正皇太后、光明皇后、阿倍内親王）の声に従ったように私には思える。橘諸兄の母も皇后と同じ橘三千代（文武天皇のお守り役から不比等に嫁ぐ）であり、彼は皇后の異父兄となる。恭仁京は橘氏の地元（山城国綴喜郡井手）近くにあり、南北750メートル、東西560メートルの南北に長い長方形の中に、宮殿と大極殿、朝堂院を作っている。都の天然痘（735年～738年）から橘諸兄の意見で女性たちと国衙がここに逃げたと私は考える。745年平城京に国衙が戻ると、748年大極殿は国分寺に施入される。

律令制度の中に神祇官があり、従4位下の中臣氏が祭祀（祈年祭、月次祭、新嘗祭）を司るのだが、現神（あらびとがみ）である天皇の呪術的な皇祖神への祈りが基にあり、聖武天皇の祈りが足りないので、干ばつが起き、疫病がはやり、内紛が起きるのだと聖武天皇は考え、華嚴経にある廬舎那仏の大きさに頼ったのだと歴史書に書かれているが「天皇の呪術的な皇祖神への祈りが基」とは、具体的に何を指すのかわからない。

飛鳥時代には、小墾田宮（推古天皇）岡本宮、田中宮、百濟宮（舒明天皇）飛鳥板蓋宮（皇極天皇）岡本宮（斉明天皇）飛鳥浄御原宮（天武天皇・持統天皇）と掘っ立て柱に板葺きの宮を築いていた。発掘では遺跡が層をなしていることもわかっている。聖武天皇は都を新たに築くというのではなく、壇を築きカミを言よせて壇の上に新宮を作ると宣言することによって、今の世ならば、引っ越しによる心機一転の心持ちもあったのであろう。そして、疫病が収まれば、また平城京に戻る。



2 東大寺境内図 (■の部分には復原図)

・王の寺は王権国家を守るためにあり、僧侶は臣であった。中央に僧尼を統括する僧綱（僧正、僧都、律師）があり、民への布教を禁じていた。しかし、民の間には中央に認められていない遊行僧がホトケの教えを説いた。

行基は15歳で大官大寺にて得度を受け出家し、24歳で戒師の高宮寺徳光禅師のもと受戒するが、僧俗混合の宗教集団を形成して貧民救済や治水・架橋・造寺などの社会事業活動し、僧尼令違

反を理由に処分され、私度僧となった。しかし、743年、75歳にして東大寺の建立の責任者となり、日本初の大僧正となる。

東大寺（金光明四天王護国之寺）建設のあらましを以下に書く。

- ・745年平城京の郊外、興福寺の北を敷地とし、道路付けを行う。
- ・746年宇佐八幡宮の禰宜尼であった大神朝臣杜女（おおがのあそんもりめ）大神杜女（おおがのもりめ、とも）が八幡大神（応神天皇：軍神）を奉じて入京し、神が大仏造立事業への援助をすると託宣した。

この頃すでに、八幡大菩薩と呼ばれるようになっていた。（義江彰夫）

高さ16mの大仏鑄造には、渡来系の人々が活躍した。鑄造事業の総監督は國中連君麻呂（くになかのむらじきみまる）大鑄師は高市大国・高市真麿。

- ・749年鑄造が終わって、大神杜女が大仏を押しに平城京に来る。孝謙天皇・太上天皇・皇

太后も同行した。(僧 5000 人が礼仏読経し、大唐渤海の呉楽、五節田舞、久米舞を演じられた。) 社女は従 4 位下を授けられ、宇佐八幡宮は大仏の守り神として梨原宮の地に勧請される。やや後に、現在の境内手向山に移され現在にいたる。行基 81 歳で入滅。

新羅からの渡来人・猪名部百世 (いなべのももよ) により、建築工事が始まる。

・ 752 年天竺出身の僧・バラモン僧正・菩提僊那を導師として大仏開眼会が举行された。

・ 754 年鑑真 (688～763) が、孝謙天皇・太上天皇・皇太后以下に大仏殿前で受戒した。僧侶となる正式の儀式である授戒の場・戒壇院を大仏殿と谷をへだてた西に置くこととなった。

私度僧であった行基も官に取り入れられたわけであり、唐から 6 度目の渡海で日本によくやくたどりついた鑑真が、私寺である唐招提寺を貴族の寄付によっておこし、律宗 (仏教徒、とりわけ僧尼が遵守すべき戒律を伝え研究する宗派) を広め、西に筑紫戒壇院、東に下野薬師寺戒壇院が作られたと言う事は、相変わらず、王の寺は王権国家を守るためであり、僧尼は僧綱によって縛られる王の臣であった。

・ 756 年 講堂が完成。

・ 757 年 聖武上皇の一周忌に中門と回廊が間に合う。

・ 758 年 大仏殿の彩色が終わる。

・ 764 年 東西七重の塔とそれを囲う回廊、門ができる。

・ 789 年 桓武天皇が 784 年長岡京に遷都し、造寺司がなくなっても僧房の建設は続いた。

東大寺建設と共に他の造寺も続いた。光明皇后による尼寺の法華寺、聖武天皇の病氣治癒を願う新薬師寺、称徳天皇の西大寺、西隆尼寺、最後が秋篠寺。平城京は塔がニョキニョキ立つホトケの都市となる。

そこに、渡来系の母を持ち、皇族としてではなく官僚としての出世が望まれて大学頭や侍従に任じられ、おおよそ天皇になるとは思っていなかった桓武天皇によって「寺の排斥」が行われた。早良親王を藤原種継暗殺の廉により廃太子の上で流罪に処し、親王が抗議のための絶食で配流中に薨去するという事件が起きると、中国の天子を真似て交野柏原 (現在の大阪府枚方市) において、日本で初めて天を祀る郊祀を行った。

※補注

武 則天 (624～705 則天武后)

637 年、13 歳で太宗 (598～649) の後宮に入る。太宗の崩御にともない、武照は出家することとなったが、額に焼印を付ける正式な仏尼になることを避け、女性の道士 (坤道) となり道教寺院 (道観) で修行することとなった。

帝位をついた高宗の後宮に再び入り、655 年に 31 歳で皇后になると、監禁されていた王氏 (前皇后) と蕭氏 (前淑妃) を棍杖で百叩きに処した上、惨殺した。武照は高宗に代わり、垂簾政治を行った。武照は自身に対する有力貴族の積極的支持がないと自覚していたため、



則天武后



持統天皇

自身の権力を支える人材を非貴族層から積極的に登用した。

660年、新羅の請願を容れ百濟討伐の軍を起し、百濟を滅ぼした。倭国（日本）・旧百濟連合軍と劉仁軌率いる唐軍が戦った白江口の戦い（白村江の戦い）にも勝利し、その5年後には高句麗を滅ぼした。690年、武后は自ら帝位に就いた。国号を「周」とし、自ら

を聖神皇帝と称し、天授と改元した。

帝室を老子の末裔と称し「道先仏後」だった唐王朝と異なり、武則天は仏教を重んじ、朝廷での席次を「仏先道後」に改めた。諸寺の造営、寄進を盛んに行った他、自らを弥勒菩薩の生まれ変わり（権現の考え）と称し、このことを記したとする『大雲經』を創り、これを納める「大雲經寺」を全国の各州に造らせた。

天智天皇が恐れた敵であり、持統天皇と同時代に生きていた武則天の振る舞い（遣唐使が日本と名乗った相手）を彼らが知らないはずはなく、天智天皇が、諸天善神が国を守護する「金光明經」を元に 685年に諸国に仏舎を作る事を命じた事、そして、聖武天皇と光明皇后が741年に国分寺・国分尼寺を全国に作る事を命じたのも武則天の影響が大変大きいと私は考えるのだが、それを示す史書はない。



・八幡大菩薩宇佐宮

弥勒菩薩を本地とする八幡大神（応神天皇）であるので、明治までは宇佐八幡宮弥勒寺を正式名としていたが、今は宇佐神宮と言い、全国に約 44,000 社ある八幡宮の総本社である。先に書いたように、東大寺建立で名を成し、769年の宇佐八幡宮託宣事件（道鏡事件）では皇位の継承まで関与するなど、伊勢神宮に次ぐ程の皇室の宗廟として崇拜の対象となり繁栄した。860年に京都に勧請され石清水八幡宮（護国寺）ができ、さらに武士の信仰を得て、石清水八幡宮が 1063年に鎌倉に勧請されて鶴岡八幡宮が出来た。

781年朝廷は宇佐八幡に鎮護国家・仏教守護

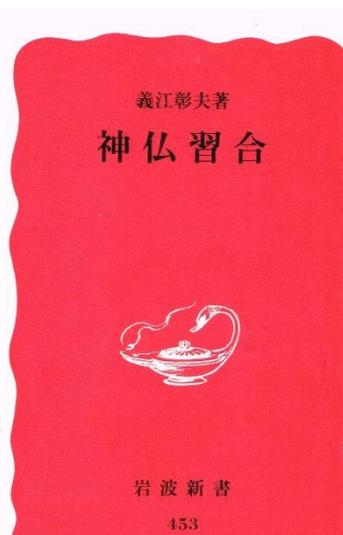
の神として「護国靈驗威力神通大菩薩」の神号を贈ったと記録にあるが、筑前から 663 年白村江の戦いに 2 万 5 千の兵が出ており、敵の則天武后が道教より仏教を重んじ、自らを弥勒菩薩の生まれ変わりと称したのも、ヤマト政権・奈良王朝は当然知っており、神仙思想の道教をカミ（神道）に置き換え、大陸からの新しく強いアイデアを持つホトケ弥勒菩薩は、実はカミの本質（弥勒菩薩）だったと捉えた、と考える事もできよう。

雑密の法蓮が、宇佐神宮社殿の西に 737 年に移った弥勒寺の初代別当についており、738 年に金堂・講堂を建立したと伝わっている。

奈良朝廷の官軍とは、720 年隼人征伐、740 年藤原広嗣の乱において、宇佐神宮は軍神として交流があり、743 年の聖武天皇の大仏建立の詔に反応してわざわざ奈良に上り、八幡大神の名を朝廷に売る事が出来た。即ち、東大寺の守護神と祀られたから、781 年に神仏習合の八幡大菩薩となったとの考えを私は採らない。さらに神仏習合に則天武后の影響があったのではないかと提示をした。

しかし、これでは「ホトケになりたいカミ」の説明とならない。新しもの好きでホトケに帰依するなら蘇我馬子から既にあるが、カミ自身がホトケになりたいのではない。

第二段 多度神宮寺



従来、神仏習合は「本地垂迹説」によると説明され、平安末から鎌倉にかけて広まったとされてきたが、私は義江彰夫著「神仏習合」岩波新書 1996 年刊 を読んで目を洗われた。

この本の第一章 仏になろうとする神々 は、788 年に成立した「多度神宮寺資財帳」の研究をベースにしている。私の神仏習合への理解はこの本によるところが多く、第四章 ホトケになりたいカミ のほとんどは、義江氏の記述による。

しかし、義江氏は 8 世紀からの記述始まるので、カミがホトケになりたいと思う以前に、第三章 大王から天皇へ において、ホトケが外国からどのように入って来て、日本に根付いていったか。その前に、ヤマト王権がカミと共に日本を統合していく様はどうなのか。第二章 弥生時代 第一章 縄文時代 とさかのぼり、神仏習合はカミの変容とホトケの変容の相互作用の結果であると捉えなおしてこの「神仏習合」の全体構成としている。

まだ、●はじめに

第一章 縄文時代のカミ

第二章 弥生時代のカミ は、書いていない。第三章の古墳時代から初めて、現代まで先に書いていくつもりだ。その書いていく筋道は、年表の形にして先に作ってある。書いて行けばこれ以後の章立ても出来よう。

「長きにわたって、この地方を治めてきた結果、いまや本来の神道からはずれて重い罪業に苦しめられ、神道の報いを受ける所にいたってしまった。いま脱するには永久に神の身を離れることが必要であり、仏教に帰依したい。」



近くの井於道場で阿弥陀仏を造って仏教普及に努めていた、民間を遊行する僧である満願禅師は、この託宣を聞くや、神が鎮座する多度山の南辺を伐りはらい、そこに小堂を建てて、その中に仏になろうと修行する姿＝菩薩の神像を彫り上げて安置した。これが多度神宮寺の始まりである。

伊勢杭桑名郡の郡司の書記官であった、この地方の豪族の一人、水取月足は鐘を鑄造し、その楼台を建立して施入した。美濃国で多度山近くの一帯を支配していた豪族、近江県主新磨もまた、三重の塔に着手した。美濃、伊勢、志摩、尾張をまたがる地域を納めてきた神の願いにこの地域の実質的支配者である即座に対応したと言う事は、託宣自体が地方豪族の願いであり、豪族たちが神仏習合の託宣を仕組んだ可能性を感じる。

780年までの17年間は、伽藍整備は進んでいなく、三重塔工事着手はされていないようである。専従の僧は確保されたが、朝廷の僧綱（僧正、僧都、律師）に認められておらず、私的に僧となった私度僧であった。神宮寺を人々の支持を得て本格的寺院に高めるには、私度僧をまず朝廷公認の僧としないといけない。780年に朝廷は使いを送り、多度神宮寺の4人の僧を得度させた。

701年大宝律令以来、地方から民の五穀豊穰・除飢餓の願いをきく有力な昔から今に繋がる神社が選ばれて、その祝部は遠路を帝都の神祇官まで参集し、国家の祈年祭に参加し、皇祖神の靈力で満たされた稲穂以下を班与されていた。種粃として田にまかれれば絶大な靈力によって豊かな収穫が期待できるとした制度である。租庸調の税制を知らない民に、神々への感謝の初穂の名目で、租税を取り立てられると考えたマジカルな基層信仰を国家的に統合する呪術的な神祇官制度であった。しかし、8世紀の後半になると神祇官に幣帛を取りにいかない神社が出てくる。神道と神祇官編成から抜け落ち、仏教に傾斜した地方豪族の心をとらえなおしうると考えての朝廷の得度であった。

朝廷得度の直後、中央で活躍していた高僧大僧都賢環大徳がこの地を訪れ、三重塔建立に取り掛かり、たちまち法堂、僧房、大衆湯屋を作り、多くの法具、經典類も整えて、神宮寺伽藍が完成した。788年の資財帳作成は、僧綱が国家公認の寺院なるための手続である。763

年の託宣からわずか25年で大伽藍の神宮寺となれたのは、朝廷が手を貸したからであった。

他の例もあげる。五穀豊穡だけでなく、国家鎮護・朝廷の安寧もうたっているところがミソ。

越前国気比神宮 715年までに神宮寺が作られた。と藤原氏が伝える。

宇佐八幡 746年までに宇佐大菩薩と呼ばれていた。

常陸国鹿島神宮 758年満願禪師は、多度より先に神宮寺を建てる。

伊勢神宮 766年までに神宮寺が作られた。

山城国加茂神社 8世紀末、加茂大神は「神戸百姓」に仏堂帰依を訴える。

近江国奥津神社 865年元興寺僧賢和を招いて神宮寺建立。

若狭国若狭彦神社 714年神願寺が沙門滑元によって開創されたと伝わるが、9世紀か？

反対に、寺を作る時にその鎮守社を祀る事も重なり、日本独特の神仏習合が進む。

春日大社 714年興福寺が三笠山の麓に建設され三笠山の神々と春日大社が寺の鎮守社に。

龍田大社 法隆寺8世紀の再建の際に、生駒郡から境内の西に龍田社を勧請した。

日吉大社 9世紀初め延暦寺を建てる際に、山のカミ日吉大神の認定をうけ寺の鎮守社に。

丹生神社 9世紀初め金剛峰寺を建てる際に、山のカミ丹生神から土地を譲られ鎮守社に。



・カミの祭主であった地方豪族の「ホトケになりたい」

神宮寺が出来たからといって、カミが消えたわけでない。インドでは仏教が丸ごとヒンズー教に取り込まれたし、中国仏教は道教と融合するが、寺院内に道観（道教寺院）が作られてはいない。キリスト教はゲルマンの習俗を取り入れるが、ゲルマン教は今にない。

全く、日本の神仏習合は「カミとホトケ」とセットであり、それぞれが互いに影響を与えながら、明治政府の「神仏分離」まで存続した。明治政府はアマテラスをトップにし国教として神道を整備したが、今も

「カミとホトケ」は民の習俗してある事を民俗学は示している。

えてして「日本人は無宗教」とか反対に「新興宗教のラッシュ」とか言われるが、普遍宗教

としての仏教と基礎信仰としての神祇信仰が、各々の独自の信仰と教理の体系を維持したままで、開かれた系で結ばれているという日本独特の宗教構造をもつ、日本人が奥底に持つ「カミとホトケのニッポン教」だと私は思う。それゆえに、戦後にアメリカ占領下で与えられた憲法にある「民」の主権が自分のものにならない。イギリス・フランスでの血を流して得た「民」の目覚めはなく、今も「王と臣」に「カミとホトケ」を見出す。これをジャーナリズムでは「保守」と片付けるが、イギリス・フランスの「保守」とはアイデアが全く違うものである。

義江氏はこの後、775年、817年、855年、893年の太政官符をならべ、皇祖信仰が地方豪族から離れていくのを、朝廷としては強く、更に強く諫めていくのだが、荘園制の進行と共にあきらめざるを得なくなっていく、と続ける。

カミを背負って地方を支配した豪族が「ホトケになりたい。」と言いきざるを得なかったのは、皇祖の霊力では支配ができず、民の無病息災、五穀豊穰、飢餓無しを「カミとホトケ」に願うしかなかったからと結ぶ。ホトケの呪術は、新しく密教が入る事によってさらに高まる。

・ 建築（国分寺）が、神仏習合を進めた。

これは義江氏を書いていない、建築家の私の見解である。

教科書風に語ると「カミでなく仏教に帰依した聖武天皇は、律令制度の国府、国司による地方支配の中で、国府のそばに国分寺を作せ、民にホトケを敬えとした。地方の文化センターとなった。」である。絵は国分寺の中で最高の文化を示した陸奥国の国分寺である。



▲ 陸奥国分寺(復元模型) 国分寺は、国分尼寺とともに国府の近くに建立され、その国の文化センターとなった。伽藍配置は、金光明最勝王經をおさめる七重塔を中心とするが、多様である。陸奥国分寺は塔が回廊の外に建つ、東大寺式であった。→p.55 6

多度大社を崇敬する国は、美濃、尾張、伊勢、志摩の4カ国であるが、その4カ国すべてが、国府、国司、国分寺を持つ。民が見て立派な、あがめたくなる、国分寺を超えたデザインが忽然と8世紀中ごろから現れたのであった。

国司は中央から来るが、地方は豪族である郡司、県主が納めており、徴税もしている。弥生時代から古墳時代にかけて、川毎に豪族が生れて、奈良時代の律令制度では「郡」と名付けられた。現代に繋がる日本列島の支配単位である「郡」の豪族が「臣」として「王」つながろうとすると、カミは山に鎮座しており目に見えず拝殿もないが、国分寺には拝むホトケが立派な伽藍の中に置かれている。

そこで、豪族はカミの境内に神宮寺を設け、拝むカミでもある菩薩が置き、シャーマンに替わって「民」の願いを受け入れる遊行僧を集め、さらに朝廷に働きかけ、朝廷の認める神宮寺として、豪族の存在を神宮寺によって朝廷との紐づけをしたのであった。「民」の支配は「王」でなく「臣」であった。

「王」は、天皇、摂関家、上皇、平家、北条、足利、信長、秀吉、家康と時代の流れと共に変遷していくが「カミとホトケ」は「民」の支配に欠かせない「臣」のアイデアであった。

明治になるまで国家の神道はない。ニッポン教のカミは本来的に体系化を拒む存在なのである。一方、仏教は国家権力と民を繋ぐに有効であり、「王と臣」は常々、教理の体系をもって新たに現れる仏教宗派を利用し、「民」を治めてきたのだった。

・「雑密」役行者えんのぎょうじゃ（634?～701?）

『日本霊異記』810年 - 824年には、地方豪族の仏教帰依に関する話が奇跡と霊力で説明されている。



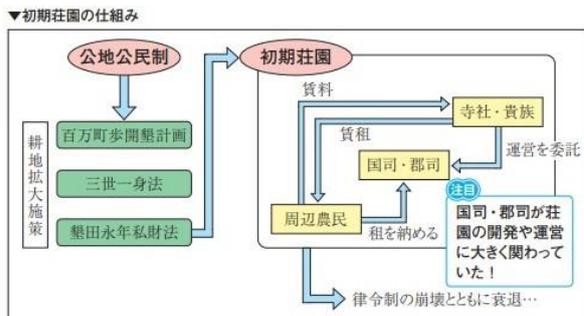
カミの持っていた地域共同体での力が、外来のカミであるホトケにすり替わり、神仏習合して共にニッポン教として残ったという私の考えの為には、空海が持ち込んだ密教以前に、「雑密」のホトケがあったという話をしたいのだが、その主役の役行者は実在したかどうかは怪しい「山岳信仰」の祖である。宇佐八幡弥勒寺の法蓮と同様に歴史学的に実証例を示すことはできない。

彼が修験に励んだ雑密経典・孔雀王法は今も残る。インドの女神である毒蛇を食べる孔雀明王は、変じて「人々の災厄や苦痛を取り除く功德」があるとされ信仰の対象となった。

さらに、孔雀明王は毒を持つ生物を食べる＝人間の煩惱の象徴である三毒（貪り・嗔り・痴行）を喰らって仏道に成就せしめる功德がある仏という解釈が一般的になり、魔を喰らうことから大護摩に際して除魔法に孔雀明王の真言を唱える宗派も多い。まさに呪術そのものである。

・839年多度神宮寺は天台比叡山の別院となり、849年真言東寺の別院に替わる。

今も神社では「初穂料」と言って金を取るが、初穂とは、収穫した初めての稲の穂先を指す言葉であり、古代はその束で収穫量を示しており、1束=10把。成斤1束は1代(刈)から収穫される稲の量を示す、まさに初穂は神祇官制度での税金であったのだ。



皇祖信仰が地方豪族から離れていくと言う事は、「公地公民」の考えによる班田授受の法、律令国家の根幹が崩れると言う事である。墾田永代私有令が早々に出され、豪族に「私有地」の考えが根付く。ヤマト王権では村の共有地を束ねた豪族が国造、県主になったのだが、律令制度の中で大領・小領・主帳という郡司の役職につく

ようになる。国家の条里制の整備、用水路の確保、山野の田畑への開発が進むと富の余剰が生れるが、豪族は朝廷に税を納めない事を考える。

9世紀になると律令制が崩れ、私営田領主となり、他所者を田夫として雇い入れ更に富む。私的経営者の村長を束ねるに、国家と地方神との霊力の宿った稲穂を分与する伝統的祭祀の有効性はない。

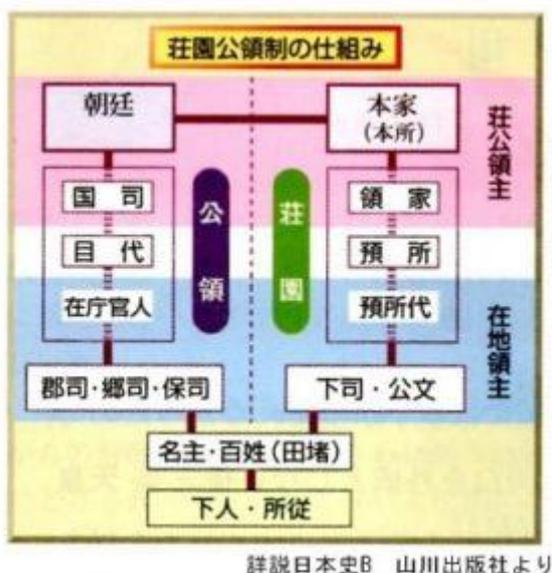
聖武天皇は、天災・疫病・内乱に対して、カミでなく外来のカミのホトケに頼んだが、私腹をこやしたい豪族にも、新たなカミのアイデアが必要となり、雑密の遊行僧によりカミより強力な霊力をもつ外国からのホトケの為に神宮寺が作られた。

朝廷が認めた(神祇官からの幣帛を受ける)延喜式神名帳 927年にある神社は2861社である(現在は小さな祠も含めて20万社)が、皇祖神の伊勢神宮による神社のピラミッド統合は明治時代までなく、豪族の旧来のカミを存続させるためにも自らが神宮寺を求める事となった。私腹を肥やす豪族がカミと村民より報復を受けるのでないか、との心配が「長きにわたって、この地方を治めてきた結果、いまや本来の神道からはずれて重い罪業に苦しめられ、神道の報いを受ける所にいたってしまった。いま脱するには永久に神の身を離れることが必要であり、仏教に帰依したい。」の託宣となったというのが、義江彰夫著「神仏習合」岩波新書1996年刊の主論である。

それだけでは神宮寺の権威がないので、多多度神宮寺は中央の天台宗の別院となる。しかし、雑密でなく、アイデアをもって京の東寺に座った空海の密教に近づき、その別院となって安定した地位を保ち、明治の神仏分離まで神宮寺別当が多多度神宮を仕切った。

東大寺、興福寺などは8世紀から地方に荘園を持つが、中央からの荘園に私営田が吸収さ

れないように、また後に積極的に私営田を貴族の荘園とし、田租の免除（不輸）を認めさせる為にも、入れ替わりに国司になって配される貴族とは別に、地方の「カミとホトケ」を中央と結びつけておく必要があったのである。



教科書では国の税制の変遷が、田堵、寄人、荘園と公領、荘園整理令などと説明されているが、武士の誕生においても、平将門（～940）が神がかりした巫女の託宣「八幡大菩薩が位を授ける。位記は菅原道真の霊が書いた。」により「新皇」となった事に見るように、精神世界の神仏習合「カミとホトケ」が日本国を作っており、現在の靖国神社、護国神社へ政治家の参拝にまで繋がっている。

ここには現代の憲法のアイデアは存在しないのだ。「信仰の自由」で靖国神社、護国神社を擁護し説明するのでは、「お上」に従う民

の説明はできない。

・義江氏の「仏になろうとする神々」では、仏教のアイデアから豪族の願いを抽出している。

「仏教の根本は何よりも、物や人間に対する欲望に人間の罪の源泉（cf.アダムとイブの原罪）があり、罪を補うためには苦行によって欲望の根を断ち、その世界から解放されて悟りの境地に達することが究極の目的である、という教説（ブッダ）にある。この考えは、小乗仏教から大乘仏教に発展し、更に密教に展開しても、根底に据えられている。私有することを共同体の神と村人に対する罪と感じている当時の地方の豪族や村長等にとってみれば、私有する苦悩を正面から問題とし、それを根本的に打開する道を提示しているが故に、神の身すなわち神祭りの利用した支配をしてきた自己を払拭して、仏教に帰依してそこに救いを求める事となる。

しかも、大乘仏教は、ブッダの教えの贖罪の為の苦行と悟りという究極の課題を出家した僧侶の課題に限定し、一般在俗者は、この僧侶を供養し布施を施せば、それによって贖罪と救済が保証されると論理を持つに至っている。つまり、心に罪の意識を堅持して、仏と僧への供養と布施を行い続けられれば、実際には、いかなる所有と支配の罪を犯しても帳消しとなる構造を内包していたのである。私的領主化し始めた豪族や村長らにとって全く都合な論理と価値観であった。

さらに、密教は、呪術的な修法と修行によって、僧自らが超絶的な神通力を身に着け、その力で贖罪を行い、悟りに達すると言うのである。インドで1～2世紀の頃、大乘仏教の価値観を異なる世界の諸民族に広げるために、極端までの具体例の累積を行い、その為に、悟りへの論理は逆に極度に普遍化され抽象化された。その結果、呪術と奇跡を求めて共同体的なインドの神々を祀る社会底辺の庶民には、事実上全く理解できない教説と化してしまった。密教は地域ごとに多種多様となり独自に経典を開発した。インド、チベット、中国を經由して日本にも7世紀に入って来ていた。基礎信仰(カミ)のゆきづまりを仏教化された秘儀で強化・再生させる面に力点が置かれ、大乘仏教が達成した普遍性、抽象性は逆に後退していった。これが雑密である。」と、義江氏は説く。

目次	
序 巫女の託宣……………	1
——誰が平将門に新皇位を授けたか——	
第一章 仏になろうとする神々……………	9
1 伊勢・多度大神の告白……………	11
2 神宮寺確立の過程……………	16
3 社会的背景を探る……………	25
4 律令国家の神社編成のゆきづまり……………	31
第二章 雑密から大乘密教へ……………	49
1 空海は何をもたらしたのか……………	51
2 仏教受容と密教による再編成……………	55
3 地方社会への広がり……………	61
4 王権側の論理と大寺院の対応……………	79
第三章 怨霊信仰の意味するもの……………	87
1 御霊会とは何か……………	91
2 道真の怨霊をめぐる説話……………	102
3 反王権のシンボルから王権守護神へ……………	111
4 怨霊信仰をもたらした社会的背景……………	120
第四章 ケガレ忌避観念と浄土信仰……………	133
1 王権神話が伝えるもの……………	136
2 ケガレ忌避観念の肥大化と物忌み……………	144
3 日本の浄土信仰Ⅱ『往生要集』の論理……………	149
4 極楽往生を願う人びと……………	158
第五章 本地垂迹説と中世日本紀……………	165
1 仏教の論理に包摂・統合された神々……………	168
2 王権神話の読みかえと創造……………	178
3 王朝国家の危機のなかで……………	188
結 普遍宗教と基層信仰の関係をめぐって……………	201
主要参考文献……………	
あとがき……………	

私が以上を簡単に訳すと、「ブッダの悟りの取得は個人が生きる上の哲学であるが、大乘仏教となり民の宗教となり、信者の数を増し、さらに、キリスト教の新約聖書にも見られるように、密教の呪術と奇跡によって、大衆化したのである。」となる。

キリストは病人を治し、死者を生き返らせたし、今もカトリック教では奇跡を起こした人を福者、聖人としている。

宗教の解りやすさから追及すると、喜捨の過多しだいで免罪され、願いが叶うという理屈が生れるというのは道理である。

第五章 密教と怨霊から、山岳信仰へ

・空海 と 最澄

真言宗の開祖・空海（774～835）は、弘法大師と呼ばれ今も親しまれている。密教を日本に持ち込んだことより、民には灌漑土木工事を行脚して行った事の方が難解な密教の教理よりわかりやすいのだろう。例え史実でないにしても。

ここで、彼の略歴を最澄と絡ませて書いておく。

讃岐国多度郡豪族佐伯氏の子として生まれ、14歳で上洛し氏寺の佐伯院に滞在した。15歳で桓武天皇の皇子伊予親王の家庭教師であった母方の叔父である阿刀大足について論語、孝経、史伝、文章などを学んだ。18歳で大学寮に入る。大学での専攻は明経道（儒学）で、春秋左氏伝、毛詩、尚書などを学んだ。一沙門より「虚空蔵求聞持法」という修行と秘法を重んじる雑密の経典を教えられ、阿波の大瀧岳や土佐の室戸岬などで修業を重ねた。797年23歳で、儒教、道教より仏教が優れた事を語る「三教指帰」を著す。呪術的雑密を土台として大乘的な密教経典を探し求め、大和国久米寺で唐から将来された「大日経」を発見したと言う。中国で作られた大乘密教の根本経典の一つに触れ、804年30歳にして遣唐使に志願し、勇躍、長安の青竜寺で僧・恵果に出会う。

恵果は「大日経」と「金剛頂経」を下敷きにして、雑密と大乘仏教を合体させ、呪法から宇宙の究極の価値まで解き明かした空前絶後の宗教体系を作り上げ、それを図画化した「胎蔵界」「金剛界」の曼荼羅をつくり、大乘真言密教として大成させていた。

空海は、わずか1年ですべてを伝授され、806年に帰国すると護国神宮寺の課題に答える思想体系を将来したと内外につげ、高雄山寺を拠点として嵯峨天皇に接近し、大乘真言密教を護国の教とさせ、神宮寺建設の動きを自身の教理と教団（真言宗）の元に編成することを認めさそうとした。しかしながら、嵯峨天皇は空海と共に唐に渡り、本来護国の教として中国で発達を遂げた天台宗を将来した伝教大師最澄（767～822）を高く遇し、806年比叡山延暦寺鎮護国家の寺として建立することを認め、最澄の死後822年、南都八宗と対抗できる大乘戒壇の設立を延暦寺に認めた。

最澄は弟子を空海の下に送り、借用した経典を写すといったことを、809年から816年頃まで繰り返した。最澄は短い在唐の間に天台宗以外に座禅も密教も得ており、密教の灌頂や祈祷を朝廷に行ったが、空海の方が密教では良質とも優れていると解し教えを乞うている。最澄は天台と真言は一致しており同じ一乗（仏となる教え）であるとしている一方、最澄の弟子・泰範が比叡山から空海の元に身を寄せ、空海は「天台を真言より低い教え」と816年に最澄への手紙に書いて袂を切った。

空海は816年嵯峨天皇に高野山に真言修行の寺を建てることを求め、819年に金剛峰寺を完成させ教団育成に努めた。823年嵯峨天皇から東寺を与えられた。淳和天皇は空海を庇護

し、東寺は真言専修の護国寺をなり、834年には宮中御齋会も全て真言宗の僧侶で行うようになった。神宮寺を統括しようとする真言密教は王権鎮護の教団となることで神宮寺をさらに強く引き入れる事となった。「雑密」こそ、密教の源泉であったのだが、恵果の成果「真言密教」を持って帰り、それまでの「密教」を「雑」と貶めたのである。

そこには後の時代の「弘法大師」庶民信仰は微塵もなく、雑密の大乗密教化と王権による教団の庇護と教団による王権擁護を実現させたのであった。法華経をはじめとして大乘仏教経典では、王を含めて在俗の者は在俗者の代わりに出家して苦行を重ねて悟りを求める僧に供養し布施をすれば、悟りへの縁を結ぶことが出来るという主張があらゆるところに書かれている。これが王権中枢の人々の苦悩を救い、ブッダが否定したはずの罪業＝所有・支配が正統化された。

天台宗では、最澄の弟子たちが唐に渡り、恵果以後の密教を得るに務めた。847年、12年の留学を終えた円仁（慈覚大師）は天台密教（台密）を王権と地方に普及しようと努めた。858年、5年の留学を終えた円珍（知証大師：園城寺）が恵果の直弟子・法詮阿闍梨から教理と曼荼羅、修法の全てを得て、真言密教（東密）に比肩できるようになった。空海の2年を40年かけて追いついたのであった。

最澄が開いた日本の天台宗は、智顛（538～597）の説を受け継ぎ法華経を中心としつつも、禅や戒、念仏、密教の要素も含み、延暦寺は四宗兼学の道場とも呼ばれ、鎌倉仏教の法然や栄西、親鸞、道元、日蓮といった各宗派の開祖が学んだことから「日本仏教の母山」とされている。

・御霊第一号は崇道天皇

第三章で聖徳太子信仰は、持統天王の怨霊封じから生まれたと、梅原猛 著「隠された十字架」1972年新潮社刊の紹介をした。日本霊異記 822年では、729年謀反の疑いに自尽した長屋王、740年反乱を起こし処刑された藤原広嗣を怨霊としている。

平安時代になると、怨霊を慰め鎮めるための御霊会（ごりょうえ）が密教の僧によって行われた。怨霊を敬意の念を込め御霊と読んだその第一号は崇道天皇である。日本三代実録 863年では、伊予親王・藤原夫人（807年謀反の疑い）、藤原仲成（810年薬子の変）、橘逸勢（842年承和の変）、文室宮田麻呂（843年謀反の疑い）と続く。

政争で敗死した者の霊が、成仏かなわず、敗死させた個々人への贖罪と報復を求めて天災・疫病の禍を起こすので、御霊をホトケと見立てて経を説き、歌や舞を加え、童子を着飾り馬上から弓を射させ、相撲をとらせ、芸比べをさせるのが御霊会である。863年朝廷が神泉苑にて、初めて行う。これは王と臣によるものであるが、民にも公開した。この前 859年に宇佐八幡宮を石清水に勧請し、朝廷と京都守護の武神としており、疫病、死者の増大により、雑密僧かつ神官による民主体の御霊会も催されたのであろう。

最澄は唐から戻ると早々に桓武天皇の治癒を願う祈禱を行ったのだが、密教の僧たちは、マッチポンプとなって嵯峨、淳和、仁明、文徳、清和天皇の 50 年の間に、御霊を広めた。藤原一族が摂関政治に向かう反面、律令制は崩れて没落貴族が生じ、地方豪族はカミを神宮寺によってホトケと一体化する。これら反王権の胎動を僧たちは受け止めつつ、王権擁護の加持祈禱をするのであった。

祖先神を祀る事は古来水田耕作の神祇信仰の元で行われて来たが、祖先霊は共同体祖霊の群れの中にあり、特定の個人の霊が出現することがなかった。平城京、平安京と、律令国家は地方と都市を生み、そこに天災・飢餓・疫病が集住する故に周期的に発生するようになる。マジカルな曼荼羅の世界観をもつ密教が輸入されて、この都市問題を解決する疫病退散の「神仏習合」は王から臣に広がり、やがて都市民も参加する「祭り」となっていった。「京童」が京都で生まれるのは 10 世紀、武士が力を持ち院政がなされ、歴史教科書でいう「中世」となると富んだ「町衆」が誕生し、祇園祭が町衆主体で行われるようになった。

崇道天皇（750～785）について書いておく。桓武天皇（737～806）は予想だにできなかった天皇に 45 歳でつくと、3 年後の 784 年に長岡京に遷都をする。道鏡による宇佐八幡神託事件など、平城京の仏教世界から遠ざかり、淀川水系の渡来系の母方の地を選んだのだが、河

川の氾濫が多く親者に死者が重なり、わずか 10 年、794 年に平安京に遷都をする。これは崇道天皇の怨霊によると桓武天皇は解した。

崇道天皇と 800 年に桓武天皇により追諡されたが、皇位継承をしていないため、歴代天皇には数えられていない。早良親王と呼ばれ、桓武天皇の同母弟であり、皇太子であったが、785 年、造長岡官使・藤原種継の暗殺事件に連座して廃され、乙訓寺に幽閉された。無実を訴えるため絶食し 10 余日、淡路国に配流される途中に河内国高瀬橋付近（現・大阪府守口市の高瀬神社付近）で憤死した。桓武はまず 797 年に淡路島の墓を整備し、797 年には僧二人を派遣し、転経悔過（怨霊に経を読み謝罪）をし、800 年に天皇とし、805 年諸国に小堂を建てさせ、命日には一切経をあげさせ、806



年には年二回、国分寺に金剛般若経を読ませている。子の嵯峨天皇も 810 年に 100 人を得度させ、崇道天皇を祀る僧とした。

おそらく、早良親王全くの無実の罪だったのだろうが、これだけ行っても都の疫病は止まらず、新たな御霊が続々と生まれることになる。加持祈祷の密教は全国支配をし、南都 6 宗もやがて密教化することになる。都市となれば、疫病から逃れることは出来ない。

・超下級御霊 天神さん

文章道官人であった菅原道真（845～903）を学問の神様＝天満天神（墓所の上に太宰府天満宮）として、今も、全国の天神さんは受験生を集めている。10 世紀に現れたこの怨霊は後醍醐天皇を殺し、947 年神として祀られ、10 世紀末には朝廷の守護神として手なづけられるも、関東では武士の神として八幡大菩薩とセットで反王権の神としてあり、権現様として家康が東照宮に祀られると、権現様の祖として天神さんは全国に勧請される。天満宮の建築様式は権化造りと称され、東照宮の建築様式として採り入れられた。

鎌倉の都市は、承久の乱 1,221 年の後、北条泰時によって整備された。7 つの切通し以外は三方を山に囲まれた城塞都市である。海に参道を引いた、石清水八幡を観請した鶴岡八幡宮を中心とした門前町の形の中に、武家屋敷を並べている。

都の六波羅探題が西日本を押さえているので、鎌倉は東日本の国府であれば良く、関東の武士をまとめる精神的支柱として八幡大菩薩（カミとホトケ）が重要視された。

鶴岡八幡宮の初めは、1063 年相模守源頼義が観請した由比若宮にあるが、その前

1040 年代に、頼義は寒川神社に八幡大菩薩を源氏氏神として導入し、1060 年代には安楽寺（天満宮）を建てさせていた。



平安末の「日本紀略」「扶桑略記」、鎌倉時代の「北野天神縁起」に書かれているのは「説話」であって史実ではないが、当時の人々にとっては事実であり、この事実が政治を動かしていた。密教僧のマッチポンプ、とりわけ延暦寺の尊意のマジカル術によって東寺をしのぐ様が見える。以下に貴族からねたまれる史実を書き、次に説話として残る超下級の怨霊の仕業を書く。

葬送を職掌する土師氏の家から、代々儒学を修め、紀伝道（文章道）を家業としていた。道真の父、是善（812年～880）は、従三位・参議までになっている。道真は874年29歳で従5位下民部少輔になると、朝廷の第一人者藤原基経の代筆を行い、父・是善がなくなると式部少輔と文章博士を兼任し、朝廷の文人社会の中心となる。891年、讃岐国司から戻ると宇多天皇（867～931：在位887～897）は彼を蔵人頭にする。893年には参議となり公家となる。22歳若い宇多天皇の相談相手となって、895年には先任者3名（藤原国経・藤原有実・源直）を越えて従三位・権中納言、権春宮大夫に叙任。また寛平8年（896年）長女衍子を宇多天皇の女御とし、寛平10年（898年）には三女寧子を宇多天皇の皇子・斉世親王の妃とし、宇多との結びつきをより強化していった。左大臣の源融や藤原良世、宇多天皇の元で太政官を統率する右大臣の源能有ら大官が相次いで没し、897年6月に藤原時平が大納言兼左近衛大将、道真は権大納言兼右近衛大将に任ぜられ、この両名が太政官の長となる体制となる。7月に入ると宇多天皇は敦仁親王（醍醐天皇）に譲位したが、道真を引き続き重用するよう強く醍醐天皇に求めた。

家格の低い菅原道真の出世（899年右大臣）は、宇多天皇から醍醐天皇に替わると妬みとして現れ、901年正月に従二位に叙せられたが、間もなく「宇多上皇を欺き惑わした」「醍醐天皇を廃立して娘婿の斉世親王を皇位に就けようと謀った」として、1月25日に大宰員外帥に左遷された。『菅家後集』に収められた「叙意一百韻」では、左遷・流謫の身に至るまでの自らの嘆きを綴っている。大宰府浄妙院で謹慎していたが、左遷から2年後の903年2月25日に大宰府で薨去し、安楽寺（天満宮と一体であったが明治の神仏分離で廃された）に葬られた。

比叡山延暦寺にいた尊意（866～940）のもとへ道真の霊が現れた。霊をザクロの実でもてなすと「復讐にあたって、梵天と帝釈天の許可を得た。例え天皇からの命令であっても、私を阻止するような事はしないで欲しい」と道真の霊に頼まれる。尊意はこれを「天皇から二度三度と出勤要請があれば、断る事はできません」と断る。すると、激怒した道真は、とっさにザクロをつかみ、口に含んだかと思うと、種ごと吹き出した。種は炎となって燃え上がり、傍らの戸に引火するも尊意は印を結び、水を放ち消し止めた。尊意はそのまま道真の霊を追っていく。鴨川まで来ると突然、川の水位が上がり始め、とうとう土手を越えて町中に流れ込んできた。尊意は手にした数珠をひともみして祈ると、水の流れは二つに分かれ一つの石が現れた。石の上には道真の霊が立っていた。尊意僧正との問答の末、道真の霊は雲の上に飛び去り、それまで荒れ狂っていた雷雨がぴたりとやんだという（北野天神縁起絵巻）

908年道真配流首謀者の一人藤原菅根が54歳で没すると、怨霊の仕業とされ、909年には、長く病床にあった道真の政敵である藤原時平が呪い殺される。

時平は、天竺渡来の妙薬、陰陽師たちの祈祷の効き目がないので、文章博士・三善清行（道

真の2歳下で道真の出世に恨みを持つ)の長男・修験僧浄蔵が加持を行う。清行が時平邸に見舞いにくると、道真の怨霊が左右の耳から二匹の青龍となって現れ、「無実の罪で配流され大宰府で死んだ私は、いまや天帝(梵天、帝釈天)の許可を得たので、怨敵に復讐を加えると決断した。貴殿の息子の浄蔵が繁茂に加持祈祷をしているが無駄な事、やめさせよ。」と言われたので、息子共々時平邸を出たその時、時平の命は絶えた。909年。913年には右大臣源光が狩りの最中に泥沼に沈んで溺死した。

清行は、うろたえてさらに、浄蔵の弟・道賢(905~967)を宇多法王の弟子とし、真言宗の金峰山に送り込み、道真の霊に应ずる修験者とした。よって、清行は怨霊にあてられることなく72歳の天寿を全うできた。918年。道真は密教の大日如来の化身である帝釈天の弟子・観自在天神にあたり、龍、雷を操って危害を加えるカミと認識されていた。

怨霊は時平の子孫を殺し、923年には醍醐の皇太子・保明親王の命を奪い、923年、道真は従二位大宰員外帥から右大臣に復され、正二位を贈られた。



930年には清涼殿に火雷日気毒王を遣わして、神の火を放つ。大納言藤原清貫は胸を焼かれ、右中弁平希世の顔はただれ、紫宸殿にいた右兵衛美努忠包は髪を焼かれ、何れも死亡し、紀蔭漣は腹部を焼けただらして悶乱し、安曇宗仁は膝を焼かれて倒れ伏し、なによりも醍醐天皇が火雷日気毒王の毒気を体に入れ重病になってしまい、3か月後に崩御した。

道賢は修行によって、冥界めぐりに成功し、道真の本心と醍醐帝の訴えを聞いて生還したと「日蔵(道賢あらため)夢記」にある。

941年、世上の不穏、物の怪の跋扈、不吉な占いの頻出などの根源を見極めようと笠の岩屋にこもり、頓死する。すると、金峰山の蔵王菩薩が現れて導かれると、仏神となった道真一行が現れる。「無実の罪から君臣、人民、国土全てをほろぼし、84年後に改めて我が住城を築こうと思ったが、普賢・龍猛らのとく密教が私を慰めるので、10分の1は消えた。しかし、我が眷属16万八千の悪神が各地で危害を加えるのは止められない。我が像を造り、名号を称え、祈祷するなら怒りを鎮めよう。道賢よ、大日如来と胎蔵界を意味する日蔵という名を与えよう。」

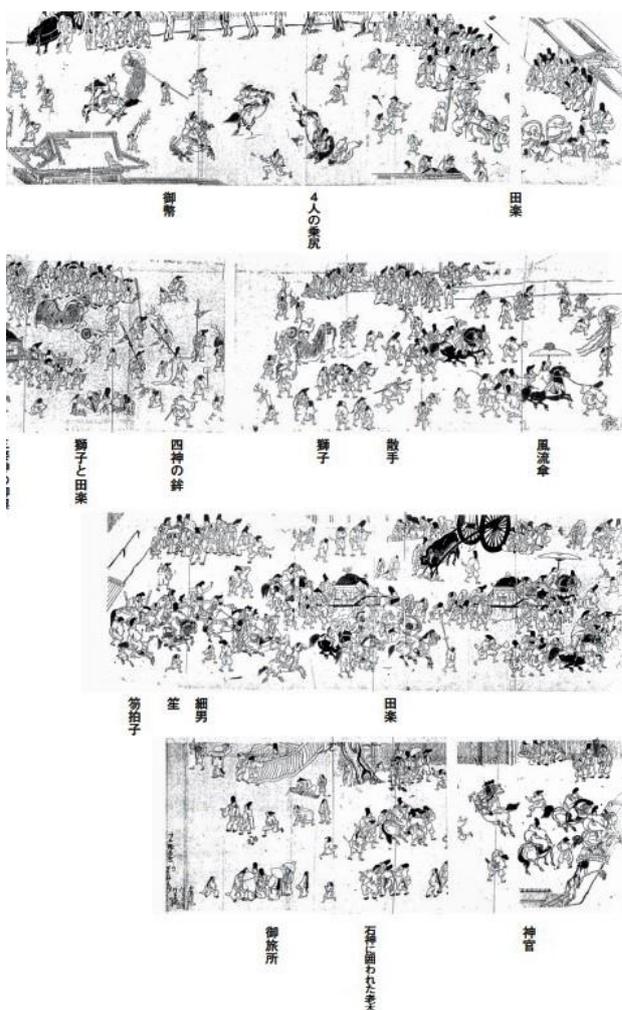
日蔵は一旦金峰山に戻り、蔵王菩薩の言に従い、兜率天巡りをしたあと、地獄にいき醍醐天皇にあう。「私は5つの大罪を犯し、更に無数の罪を犯し、ひたすら苦しみに責められてい

る。帰って朱雀天皇に奉上し、我が身の辛苦を早く救済して欲しい。摂政忠平には我が苦しみを抜くために一万の卒塔婆を建てるよに頼んで欲しい。」次に、宇多法皇の霊にあい「すべては道真の怨霊のなせることだ」と聞いて、笹の岩屋に生き返る。

御霊会で慰めることなどできない、超ド級の御霊が現れたのは、理不尽な処置で人を死に追いやれば、その靈魂は罪を犯した人すべてに報復を加え、帝王をも殺しても仕方がないという認識が当時の朝廷社会を覆っていたのだった。日蔵のこの修験行為は、道真怨霊の全国での跳梁を、理のある事、防ぎきれない事と根拠づけたのである。道真の怨霊を担いで、反王権的行動に出るものを正当化した。

939年の将門の乱の巫女の託宣と繋がっているのだ。ただし、「新皇」と名乗るには天孫降臨の子孫でなければならず、彼は桓武天皇の5代の孫とする。道真が朝廷に手なづけられるのも臣の家であったことがその理由にあり、日本の血脈＝祖先神は強い。浄土真宗の現在の門主も、親鸞聖人を初代として第二十五代を名乗っている。

947年に北野天満宮において神として祀られるようになり、一条天皇の時代には道真の神格



化が更に進み、993年6月28日には贈正一位左大臣、同年閏10月20日には太政大臣が贈られた。ここに天神は王権守護神となった。怨霊を調伏すべく、神として祀り加持祈祷するのが密教の僧であるところに、神仏習合は第二段階を迎えた。

天神の朝廷への脅威がなくなると、洛東八坂の感神院祇園社に祀られる外来で架空の悲劇王・牛頭天王が新たな御霊と信仰され、やり場のないと市民尾不満を糾合する神としての役割を果たす。感神院は10世紀末に比叡山の末寺となる。王権は974年と早々に、祇園御霊会を主催し、以後、紫野今宮、船岡山と御霊会を開いて抱き込みを図る。御霊神の行列が内裏に乱入するのも許し、御霊会は王権の枠内であがく民衆のカーニバルと化す。首都でパンとサーカスを求める民は、いずれの王にとっても怖いものであ

る。

年中行事絵巻（1157～79年頃）祇園御霊会は、牛頭天王の神輿渡御が主体であった。

市聖と言われた空也（903～972）、往生要集を書いた源信（942～1017）、皮聖と呼ばれた行円の時代と、この章の怨霊の出没した時代は重なっており、すでに浄土と地獄が現れているが、阿弥陀仏浄土信仰となると時代が下がる。

道賢の金剛峰寺の修行の姿を長く引用したが、922年、千日回峰行・生き葬式によって不動明王と一体となり、衆生を救済する修験道が金峰山に生れている。



・山岳信仰

日本古来のアニミズム山岳信仰が、外来の密教、道教、シャーマニズムなどの影響のもとに平安時代末に至って一つの体系をつくりあげたもので、修験道ともいう。山岳修行による超自然力の獲得と、その力を用いて呪術(じゅじゅつ)宗教的な活動を行うことを旨とする。実践的に願いをかなえる力を持つ修験者は偉かった。江戸庶民にひろがり山岳信仰となった。

修験道は神仏習合の塊であり、アマテラスを皇祖神とする国体を決めた明治政府は迷信だと徹底的に破壊したが、戦後の宗教の自由で復活をしている。

11世紀の浄土信仰と裏返しの六道地獄草紙、餓鬼草紙の世界が、仏像の後戸に祀られた摩多羅神と結びついた。天台密教の阿弥陀仏を祀る常行堂の阿弥陀仏の背の壁に

後戸に向いてある。

世阿弥が「風姿花伝」で「後戸に猿楽の発生」を説き、表で仏に向かっての仏法と背中あわせに、民衆の祭りが行われそれが芸能の元となった書いたことに、引っ張られる。具体的には、どの寺にでも後戸、床下に秘儀が隠されてある。

水がわく場所は土地神の場であり、東大寺二月堂のお水取りに今も伝わる。修正会、修二会と呼ばれる寺の祭りは、神と共にある。

本尊と護法神、菩薩と鎮守神、主神と眷属、翁、式神、天狗、金比羅、大黒天、七母天、吒枳尼天、牛頭天王などなど、およそ正統と言えない魑魅魍魎が跋扈する仏殿なのだ。神仏習合は日本教であり、教義を持つ宗教とは言えない楽しい説話を持つ風俗として今も引き続きる。

まえがき

目次

序章 山岳信仰とは何か

第一章 出羽三山——死と再生のコスモロジー

第二章 大宰山——修験道の揺籃の地

第三章 英彦山——西日本の山岳信仰の拠点

第四章 富士山——日本人の心ふるさと

第五章 立山——天空の浄土の盛衰

第六章 恐山——死者の魂の行方

第七章 木曾御嶽山——神がかりによる救済

第八章 石鏡山——修行から講へ

あとがき——体験知との出会い

参考文献

3

34

68

102

132

161

195

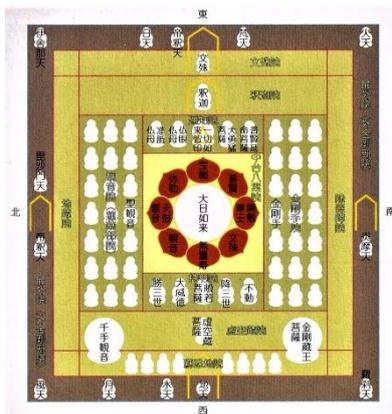
220

250

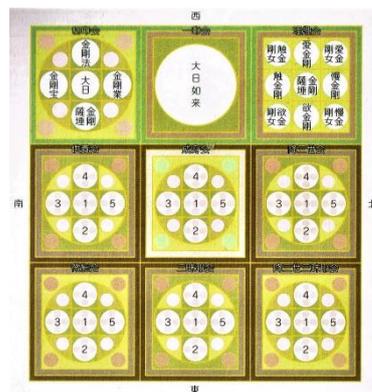
長く選ばれた修験者による修験道だったのが、江戸時代に山岳信仰となって庶民に広がる。

*補注

「大日経」→ 胎藏界曼荼羅



「金剛頂経」→ 金剛界曼荼羅



主役の大日如来を中心としてあるのだが、ホトケの配置と名前も違う。大乘仏教の最後に出てきた密教なので、ヒンズー教の神々を取り入れており、宇宙の中心である大日如来の周りに分業と序列を表したものである。

「カミとホトケ」のホトケではなく、神話の神々と同じように見るものであろう。傑作なのは「釈迦が最初に悟りを開いたもの」と絵の中では遠くに置かれている事だ。マホメットが「キリストは先輩だが、私こそ究極。」と言っているのと同じなのである。

第六章 浄土信仰にカミをみる

・浄土信仰

浄土信仰とは、一般には、鎌倉時代になって、法然（1133～1212）の浄土宗、親鸞（1173～1262）の浄土真宗、一遍（1239～1289）の時宗による、念仏「南無阿弥陀仏」を唱えれば往生でき、浄土に行けるとする「他力本願」の浄土宗系を指す。しかし、菅原道真の怨霊が跋扈する10世紀頃の浄土信仰は、浄土宗系の阿弥陀仏の西方極楽浄土だけでなく、この外に阿閼仏（あしゅくぶつ）の東方妙喜世界、薬師仏の東方浄瑠璃世界、観音仏の補陀落浄土世界、弥勒菩薩の弥勒浄土世界、釈迦牟尼仏の無勝莊嚴国とあった。



蓮華王院（三十三間堂：1000体の千手観音像）は1266年の再建であるが、元は、1164年に平清盛が後白河法皇（1127～1192）の為に離宮内に造営したものである。清盛の父・平忠盛も鳥羽法皇（1103～1156）の為に白河の地に得長寿院千体堂（三十三間堂、文治地震で倒壊）を造営している。観音仏の補陀落浄土も阿弥陀仏の極楽浄土と共に人気であり、求められていた。

宇多天皇（867～931）が上皇から法皇となったのを先として、白河法皇（1053～1129）から院政が始まるが、王権は10世紀に浄土信仰を取り込み、さらに11世紀末には王権維持のために本地垂迹説に全面的に傾き、法皇となって寺社・武士勢力に対抗した。今の教科書は、170年ぶりに藤原氏を外戚としない後三条天皇（1034～1073：即位1068）からを「中世」としている。

インドで紀元1～2世紀頃発生した浄土信仰は、おそらくゾロアスター拝火教（永遠の寿命＝無量光）やキリスト教を含むメシア思想（死を代償とする天国への救済）の影響を受けた大乘仏教の一派としてインド神々を引き入れたもので、今も「雑密」として経典が残っている。中国で漢訳された経典は270と言われるが、中でも根本経典「浄土三部経」として「大無量寿経」「観無量寿経」「阿弥陀経」が4世紀までにできており、日本には7世紀の初めには入っていたと思われる。私の仏壇にもありますが、意味不明です。

その教理を端的に言えば、人間はうまれながらに欲望に根ざす五つの大罪を背負ったもの（cf.キリスト教の原罪）と見、贖罪の為に念仏と修行に励めば、死に際に絶対神である阿弥陀仏が来臨して使者を彼の住まいである西方極楽浄土に誘い、救済してくれるというものである。人間を欲望にとらわれた罪深い存在とみ、贖罪のための修行に励む点は、ブッダ、

上座部、大乘、密教と変わらないが、西方の極楽浄土という死後の天国とその主である「絶対他者」阿弥陀を設定し、贖罪の目的地を天国に定め、「往生＝死で救済される」を主張するのは阿弥陀浄土信仰のみである。イスラム教でも天国（イスラーム）があるが、そこは信教を貫いた者だけが死後に永生を得る所とされている、とハードルが高い。

・藤原道長（966～1028）の浄土信仰の1

現代の歴史学では、醍醐天皇（885～930：即位 897）を境にして、それ以前の藤原京・平城京時代 100 年、平安時代 100 年の 200 年を「律令国家」と言い、以後の平安時代 300 年の摂関政治、院政、平氏政権を「王朝国家」と呼ぶ。律令制：人（正丁）に対する税から、負名体制・荘園公領制：土地に対する税に替わる。

醍醐天皇は延喜の荘園整理令に失敗し、令外の官である蔵人所、檢非違使、滝口武者、殿上人など天皇の私的家政機関をつかい、官司、国司を統合して権力を強めた。

古墳時代からの豪族が地方のカミと共に郡司として民を治め、王権への納税・兵役を担っていたのだが、私営田領主が力を蓄え中央への荘園寄進により税金を払わなくなると、部下を引き連れて赴任した国司は、荘園寄進の認否の裁量権を持ち、さらに私営田領主の土地を没収し公領（負名）に再編していった。名（みょう）の田畑総面積に応じた租税（官物・万雑公事）を出しさえすれば、経営は名を負った者（田堵）の自由にゆだねるのだ。

国司の下の郡司、郷司、保司となる新たな在地領主には、中央からそのまま居つく者も出てくる。私有地の囲い込み、税の運輸には武力に秀でた者が必要であり、国司になった源氏は、摂関政治の時代、東北の合戦を通じて力を蓄え、平氏と共に台頭する。このように、中央も地方も様変わりする 10 世紀には、国統治の為の「カミとホトケ」も大きく変わるのであった。

藤原道長は、この摂関政治の最盛期に生きた。天皇の外祖父としての官位、荘園からの収入だけでなく、国司（受領）の任命には、彼らからの膨大な見返りがあり、邸宅・寺の建設費にあてることができた。

1008 年道長 42 歳にして、ようやく、入内 10 年目の彰子が皇子・敦成親王（後一条天皇）を道長の土御門殿において出産、翌年にはさらに年子の敦良親王（後朱雀天皇）も生まれる。この花の時代スタートの 1 年前、1007 年に道長は弥勒菩薩が出現した場所と信じられていた吉野の金峰山に登り、経筒（国宝）を埋めた。「御堂関白記」によると、道長は 998 年 32 歳の時、大病に陥り出家を天皇に願い出る程に深刻であった時に「法華経」「無量義



経」「観普賢経」を書き写しており、それに「弥勒上生経」「弥勒下生経」「弥勒成仏経」「阿弥陀経」「般若心経」を加えての事だった。これには、阿弥陀仏の西方極楽浄土への希求は見えない。

金峰山からその奥、熊野の山々は、この頃既に修験者の山となっていた。熊野は日本書紀720年の一説として、「イザナミが葬られた。」と書かれている所でもある。ヤマト王権にとって南に一山超えると吉野があり、その奥には熊野の山々がそびえる所から、カミの降りる山だとされたのだろう。さらにその山々の向こうには、大海原がある。



・神話の中のケガレとキヨイ

イザナミは、日本国土を司る諸所の神々を生んだ最後に、火の神ホノカグツチを生み、その為に女陰を焼きただれて死ぬ。その尿から、水の神・ミズハノメが生まれ、次にワクムスビが生まれ、頭の上に蚕と桑が生じ、臍（へそ）の中に五穀が生じたと日本書紀にある。

夫イザナギは恋慕のやみがたく、黄泉の国にイザナミを訪ねる。しかし、イザナミは死のケガレで腐乱していた。驚いて逃げるイザナギを憤怒して追うイザナミ。追撃を振り切って黄泉の国から脱出したイザナギは、清らかな海に身を浸して禊を繰り返す。禊の最後に左目を洗ったときにアマテラス、右目を洗ったときにツクヨミ、鼻を洗ったときにスサノオが生まれた。イザナギは、アマテラスに天界（高天原）を、ツクヨミには夜の世界（夜之食国）を、スサノオには海の世界（海原）の統治を命じた。

スサノオはイザナミを慕って泣き暮らし、統治を怠り悪神、妖怪らが横行し、イザナギは怒りスサノオを追放する。スサノオは黄泉の国に行く別れの挨拶といつわり天界に昇る。ウケイという賭け事を二人は行い、スサノオの剣から三柱の女神が生まれ、アマテラスの勾玉から三柱の男神が生まれる。スサノオは「勝った」と宣言し、乱行をする。アマテラスの田の畔や溝を壊し、食事の殿舎に脱糞し、衣服を織る機屋に馬を逆剥ぎにして投げ込み、驚いた織女は杼で女陰を突いて死んでしまう。

農村を語る神話世界の様が、産、死、腐、尿、糞、屠畜のケガレ（穢れ）と、海、高天原のキヨイ（淨い）が対比して描かれ、キヨメの「禊」は、祀り場でのハライ（大祓い）と連続する。

私には、イザナミは死後の世界、黄泉の主宰神であり、ケガレに満ちた忌み嫌うものの象徴に読み取れるのだが、道長たち平安貴族は熊野をどうとらえたのであろうか。

現在の熊野三山は 2004 年 7 月に、ユネスコの世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成資産として登録された。熊野本宮大社のケツミコノカミの本地は阿弥陀如来、熊野速玉大社のハヤノタミノカミの本地は薬師如来、熊野那智大社のフスミノカミの本地は千手観音と神仏習合が堂々をうたわれている。

・藤原道長（966～1028）の浄土信仰の 2

道長に戻ろう。

1017 年 3 月、道長 51 歳は摂政と藤原氏長者を嫡男の頼通に譲る。1018 年 3 月、後一条天皇が 11 歳になった時、道長は三女の威子を女御として入内させ、10 月には中宮とした。道長の邸宅で諸公卿を集めて祝宴が開かれ、即興の歌「この世をば わが世とぞ思ふ 望月の 虧（かけ）たることも なしと思へば」（この世は 自分（道長）のためにあるようなものだ 望月（満月）のように 何も足りないものはない）を詠んだ（『小右記』、原文漢文）。

1019 年 3 月、53 歳で病となり剃髪して出家する。半年後に東大寺で受戒された。法名は行観（後に行覚。土御門殿に隣接する地に、九体阿弥陀堂の建立を発願し、翌年に完成して無量寿院と号した。諸国受領の奉仕を受け、続けて十斎堂、講堂、経蔵、道長の正妻源倫子による西北院、金堂、五大堂等と次々に堂舎が建てられ、その規模は東西 2 町・南北 3 町に及び、伽藍は豪壮を極めた。



1022 年 56 歳には法成寺と寺号を改め、金堂・五大堂の落慶供養が盛大になされた。供養には道長の孫にあたる後一条天皇の他、東宮（後の後朱雀天皇）、いずれも道長の娘である太

皇太后藤原彰子・皇太后藤原妍子・中宮藤原威子も参加し、その様子は『栄花物語』に詳しく描かれている。法成寺は平等院の範となった寺院でもあり、当時、鴨川方向から見れば、ちょうど宇治川方向から見た平等院のようであろう。庭と建築とを一体化させ「浄土」の世界を地上に描いたのであった。



1027年 62歳、死に臨み、東の五大堂から東橋を渡って中島、さらに西橋を渡り、この時の為に築いた西の阿弥陀堂に入った。受領以上の貴族を集め、「往生要集」を書いた源信の弟子で天台座主の院源以下の居並ぶ僧たちの念仏を聞きながら、阿弥陀如来の手から自分の手まで糸を引き、釈迦の涅槃と同様、北枕西向きに横たわり、僧侶たちの読経の中、自身も念仏を口ずさみ、西方浄土を願いながら往生したと「栄花物語」にある。

念仏は、天台宗の僧たちであった。法然は天台宗の僧・円仁（794～863）を慕った。なぜなら、円仁は唐から戻り、阿弥陀仏を安置してその周囲を回って行をする常行三昧堂を造営したからである。阿弥陀経は法華経とならぶ、天台宗の根本経典となった。

以上から、道長は30年の間に阿弥陀仏の西方浄土に傾いたのはわかるが、なぜなのか？「蜻蛉日記」「紫式部日記」「和泉式部日記」「更科日記」を見るに、やたら物忌みをして外出せず、外出には方違え（かたたがえ）をしている。これはカミの仕業であろう。彼女たちは阿弥陀を持仏として念仏を唱え、現実に絶望して極楽浄土を願っている。橘美千代は女官として天皇に仕え、藤原不比等と再婚して権力を握ったが、平安の国風文化を作り出したのは、親王を生むことでしか価値のない中宮に仕える単なる女房であったのである。彼女らの庇護者である道長はここに阿弥陀仏の浄土を見つけたのか？

私には、道長は死者のケガレに満ちた黄泉の国から脱して、単に煌びやかな浄土に行きたかっただけとしか思えないが、この30年の間に源信の「往生要集」がある。歴史家は「往生要集」から阿弥陀信仰を説くが、道長に対しての実際のところはわからない。次は「往生要集」である。

・「往生要集」

源信（942～1017）が42歳であった984年から6か月で書き上げたもので、極楽往生するためには、どうすれば良いのかを説いた、いわば平安時代の「終活ハウツー本」である。この本が当時の人々に大きな衝撃を与えたのは、源信が紹介した死後の世界のビジョンが、あまりに衝撃的だったからである。「地獄」と「極楽」の様子を詳しく描いた。六道の世界では、苦しみから逃れられないのだといい、とりわけ、悪いことをした者が死んだ後に行く「地獄」では、臼ですりつぶされたり、刀で切り刻まれたり、燃えさかる炎で何度も焼かれたり、ひたすら痛い思いをさせられたりして、悪いことをしてもうまくこの世では捕まらなくても、あの世での裁きからは逃れられないとある。



六道とは、仏教において、衆生がその業の結果として死後輪廻転生する6種の世界である。

- 天道（てんどう、天上道、天界道とも）
- 人間道（にんげんどう）四苦八苦に悩まされる。苦しみ、不浄、無常の三つの相
- 修羅道（しゅらどう）阿修羅が住み、戦い争うために苦しみと怒りが絶えない。
- 畜生道（ちくしょうどう）苦しみを受けて死ぬ地表の世界。
- 餓鬼道（がきどう）腹が膨れた（栄養失調）姿の鬼になる。地表の世界。
- 地獄道（じごくどう）罪を償わせるための世界。地下に八層繋がっている。

このうち、天道、人間道、修羅道を三善趣（三善道）といい、畜生道、餓鬼道、地獄道を三

悪趣（三悪道）という。

観音菩薩の導きで六道世界より救われるという観音信仰がある。天道：如意輪観音、人間道：准胝観音（真言宗）不空罽索観音（天台宗）、修羅道：十一面観音、畜生道：馬頭観音、餓鬼道：千手観音、地獄道：聖観音。観音菩薩は変化（へんげ）観音と呼ばれるように、様々な形の像があり、とても書ききれないが、法華経「観世音菩薩普門品第二十五」（観音経）には、観世音菩薩はあまねく衆生を救うために相手に応じて「仏身」「声聞（しょうもん）身」「梵王身」など、33の姿に変身すると説かれている。西国三十三観音霊場、三十三間堂と、三十三にこだわる理由である。

「往生要集」の目次とその解説書を簡単に紐解く。

第一章 厭離穢土 第二章 欣求浄土 第三章 極楽の証拠 第四章 正修念仏 第五章 助念の方法 第六章 別時念仏 第七章 念仏の利益 第八章 念仏の証拠 第九章 往生の諸行 第十章 問答料簡

第一章は、現状どのような世界にいるかの認識を示し、第二章と第三章で理想の世界を示して、第四章以下に、現状の世界からどのようにして浄土・極楽に行けるか、そこに行ける為に必要な念仏と諸行の説明がある。誠に論理的であるが、浄土三部経とは違う論理である。浄土三部経では、人間が主役であり、人間は五大罪を背負っているというのが現状認識なのであるが、この世はどうしようもなく「穢土」とケガレに満ちており、逃れようがないと決めつけから始まる。罪を悪として、その贖罪の為に念仏と修行に励み、阿弥陀仏に救われようと説く浄土三部経の人間性はここには無い。

万物は滅するものであり、諸行無常の諦観は仏教の基本であり、大乘仏教は今に繋がるカースト（不可測選民）の原点：マニ法典（紀元前2世紀～起源2世紀）と同時代に生まれているので、ケガレをキヨメル考えは仏教にも当然あるが、源信が説いて、貴族が得心したケガレは日本のものであり、カミのものである。

・物忌み、方違（かたたがえ）

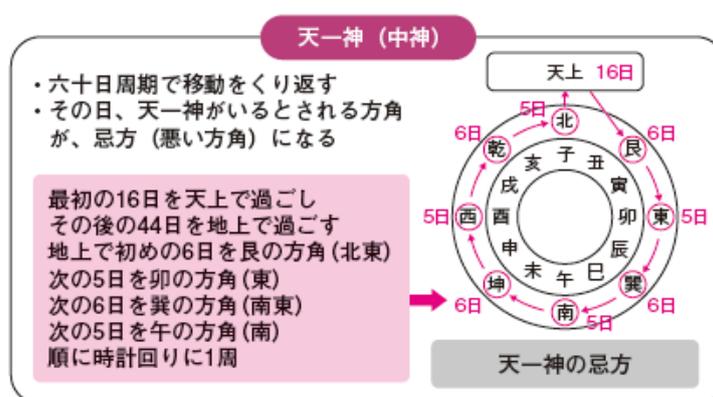
縄文人の土偶が持つアミニズムの聖霊信仰から、集団をまとめる祖先霊になり、神話の世界では黄泉の国のケガレ忌避になった。律令国家10世紀となれば、都には食べられない人々が集まり、疫病が流行ると腹の膨れた栄養失調の貧民が路傍で死に、鴨川の河原に打ち捨てられる。感染症の対策なのであろうか、物忌みといって外出せず、わざわざ遠回りをする「かたがえ」が行われた。

神話のケガレ忌避は、律令制度の中では「大祓い」の儀式として、6月晦日と12月晦日に固定されるが、源信のいうようにとてもでもないが、年二回のキヨメでは間に合わない。そこで、陰陽道という本来は天文・暦の学問から、日本では呪術、占術を発達させ、10世紀

には安倍晴明（921～1005）が出て、身の回りにある悪霊の法則化がされた。道教、密教、神道が、中国伝来の陰陽五行思想に交じり摩訶不思議の世界であるが、律令を補う「式」にケガレ忌避が数字をもって明記された。

弘仁式 820 年では、「人の死」は 30 日の忌み、「人の産」は 7 日の忌み、「六畜の死」は 5 日の忌み、「六畜の産」「肉食」「死者への弔問」「病人の見舞い」は 3 日の忌み、等々。ケガレに感染した者は自邸に籠り、四方の簾をたらしして忌中と書いた札をかけ、付着したケガレが完全に四散する日数が来るまで外にでないのである。この時期のケガレ忌避は、王権の祭祀の場でしか適用されなかったのだが、貞観式 871 年、延喜式 927 年と時代が下がると、王権祭祀の場が外され日常生活への縛り＝物忌みとなる。

村上天皇の「新儀式」では、日数と項目が増えている。流産は妊娠 4 カ月を経たのは「人の死」として 30 日の忌み、3 カ月以下は 7 日の忌み、流産し休暇を取ったものは祭祀に参加できない。懐妊した女官、月経の女官は祭祀散斎の前日に退出し、出産は当然



宮外で行い、祭祀散斎の時は、僧侶、服喪者は参内禁止である。弔問、陵墓造営所詣でを行ったものは参内禁止、神事での失火は 7 日の忌み、等々。ケガレの対象を広げると同時に潜在的に可能性あるものも内裏から排除し、王権の空間の清浄化に努めた。

農耕接触者の考えもあり、感染は同一の垣根で囲まれた空間にいて着座した場合のみ生じ、歩いて通過する分にはよく、二次感染は一次感染者が他所に入った場合にその他所に入って来た者に限るとしたのであった。神々を祀る天皇はもっともケガレから遠ざかり、清く、浄められていなければならなかった。

神仏習合の第二段階で、密教が怨霊調伏と言う形でカミを取り込んだが、神社と神宮寺は共に開かれた形で存続し続けており、王権の神祇信仰を支える「穢」「浄」の価値観は密教の力が増すに応じて増し、絶対化していった。王と臣の日常生活まで縛ったのであった。ここに、神仏習合の第三段階がある。

源信が「往生要集」で「厭離穢土」の現状を説いて、貴族が即座に得心したケガレは日本の古来からのものであり、カミのものである。

王も必ず死ぬので、死によって救済されるという阿弥陀仏のメシア思考が浄土信仰を広めたと言っても間違いではないが、単なる死者の追善目的でなく、ケガレた世を生きる人の心の支えとなる浄土信仰であるには、カミのケガレ忌避思考が必然であった。

・カミとホトケの建築

信仰は目に見えないと抱けない。カミとホトケの神仏習合は、互いに他の影響を受けてそれぞれ変容してきたが、カミとホトケはそれぞれにオープンな関係にあり、その信仰を目に見えるものとして、神社と寺のデザインを明確に分けないといけない。どこにそのポイントがあるのか。



まずは、寺の国風化を述べる。平安時代の国風化では、ひらがなの発明、和歌から語られるが、建築では「和様」と言う。中国由来の寺が **Japanize** されるポイントは、まず唐招提寺金堂の様式が選ばれ、薬師寺、法隆寺は捨てられた。

次に、寺の内部空間を広げる工夫がされ、人の拝する空間が仏像に近く、広がる。新薬師寺と、当麻寺とで比較する。外観ではわからないが、断面図を見ると屋根と天井との間に部材を入れて大きな空間を作っている。雨が多い日本では、その庇の先端の工夫が発達した。

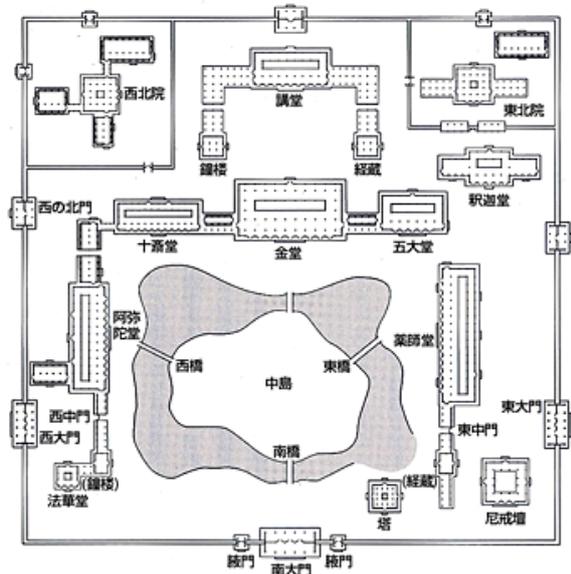
伊勢神宮は、藁ぶき高床の住宅からの転用であるが、板葺きの宮以来、宮殿も武士の御殿も屋根は檜皮葺き、柿葺きと、黒く重い瓦を載せない。この平安時代には寝殿造りといわれる貴族の館が建てられるが、中央の寝殿は儀式・政務の場であり、裏に住まいを持つ。江戸時代の二の丸御殿までハレ（儀式）とケ（生活）の構成は変わらない。

藤原道長が作った法成寺の正面は、今も残る頼道の宇治の平等院とって良い。

手前に寝殿造りの透廊が東西に二本出て、庭を囲む構成は寝殿通りである。

広島の大島神社の吹き放ちの姿を重ねるとよい。

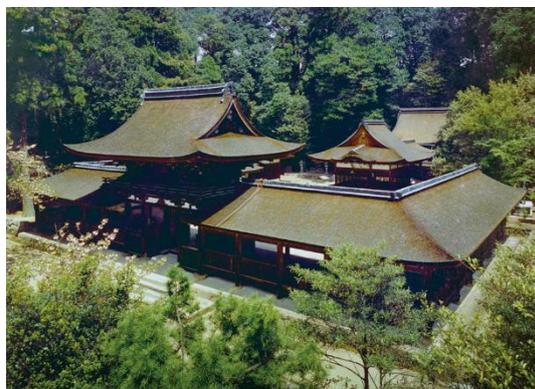
神社は、宇治上神社の 1060 年までしか遡れないが、平氏の作ったこの海に浮かぶ構成こそ、法成寺のものと同じである。



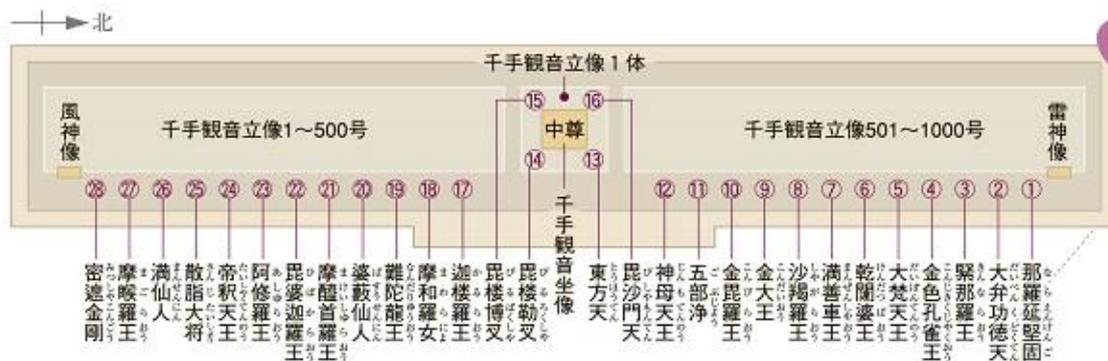
透廊の二本が、薬師堂、阿弥陀堂となっているが、これは三十三間堂、瑠璃光寺を比肩する。



1493年と時代は下がるが、神仏習合の結果を示す神社として、油日神社がある。屋根の檜皮葺が目立つが、本殿と拝殿がわかれている。社は寺と違い人を入れないのは、現代まで続く。人の為の空間を広げられないので、相の間で本殿と拝殿をつなぐ権現造りが東照宮で採用された。



寺を古式に戻すように、南宋から禅宗が禅宗様建築を持って入ってきたが、権力に結び付き、密教化していった。



第七章 本地垂迹説と鎌倉仏教

教科書で「神仏習合」といえば、この「本地垂迹説」が説かれ、明治政府の「神仏分離令」で、カミとホトケを分けられ「廃仏毀釈」の嵐が起きたとある。日本にも宗教革命があったと言う人もいるが、いやいや、日本人の価値観の基幹をなすニッポン教として、今もカミとホトケは一体としてあるというのが、この私の論文の主旨である。「本地垂迹説」は、「神仏習合」の到達点ではない。もっともケガレる人殺しを本業とする武士によって、カミとホトケはまた変容していった。

・ 本地垂迹説

如来・菩薩・諸天が神と化して、日本各地に垂れて現れると言う意味で、その跡に神社が設けられるが、その神の本地は如来・菩薩・諸天にあるという説である。言い直すと、日本各地に祭られていた神々を、仏教の神仏が仮の姿をとって現れたものと理解する事である。11世紀の平安末から現れ、鎌倉末14世紀末までに日本中の神社が本地を名乗るようになった。第三段階の浄土信仰では、仏教側が神祇信仰(ケガレ忌避)を浄土信仰の本質(メシア思考)を理解するために活用していたのであったが、ここにいたって、仏自体が積極的に神の世界に侵入して神は仏の化身だと位置づけ、仏教は神々の抱き込みを図ったのであった。

前に書いた、アマテラスが大日如来の化身として垂迹したとあるのは、11世紀後半の「東大寺要録」であり、熊野三山の本地が、阿弥陀如来、千手観音、薬師如来であることは、1134年の鳥羽上皇の熊野三山詣に随行した近臣源師時が、日記「長秋記」に書いている。



後白河法皇(1127~1192)は1158年31歳で上皇になり、1169年42歳で出家し法皇となって、1180年前後に「梁塵秘抄」を書くが、その今様には「大日如来は究極のホトケであり、阿弥陀如来は人を往生させてホトケにする力を持ち、薬師如来はあらゆる病を除く事が出来、観音菩薩は補陀落浄土への救済ができる。」と唄い、讃えている。彼の治世は保元・平治の乱、治承・寿永の乱と戦乱が相次ぎ、二条天皇・平清盛・木曾義仲との対立により、幾度となく幽閉・院政停止に追い込まれるがそのたびに、武士を利用して復権を果たした。新興の鎌倉幕府と

は多くの軋轢を抱えながらも協調して、その後の公武関係の枠組みを構築する。

政治的には定見がなくその時々的情勢に翻弄された印象が強いが、それは間違いである。鎌倉幕府は、放生会を行って人殺しをしても救われる八幡大菩薩信仰、御霊の天神信仰を守護・地頭と共に全国に広め、新たな王権力の精神的支柱としていくが、その前の院政とは、天孫降臨のカミを祀る天皇では、殺生の罪とケガレを意に介さない武士が全国蜂起しても押さえることが出来ず、自ら法皇＝最高権力を持つ僧となって、ホトケの力で武士の上に立つための、意図しない制度であった。そして、白河法皇は本地垂迹説を積極的に意図して唱え、平家政権の上にたち、文化を今に残したのであった。

「平家物語」の壇之浦での安徳天皇入水では、外祖母二位殿に「伊勢神宮に別れを告げ、阿弥陀のいる極楽浄土を目指せ」と言わせている。アマテラスより仏教の神仏が勝るのである。ここに、歴史学上、平家政権は後白河法皇をいただく王朝政権であり、武士政権とはされない理由がある。平清盛は武士であるが、貴族がする太政大臣となるに、いわゆる白河院落胤説が必要であったのである。

写真は、修験道の金峰山寺蔵王堂の本尊である蔵王権現

中央像（釈迦如来の化身）高さは728センチ、脇に千手観音、弥勒菩薩の化身が中央像とほぼ同じデザインであり、役行者がこの三尊の合体した姿を得たとの伝承から1591年に作れた。インドに起源を持たない日本独自の仏（仏が姿を変えて現れたのを権現という）の名前であるが、このデザインの源は、密教の不動明王の憤怒の姿である。



以下に、本地垂迹説による、カミでありホトケである名前のいくつかを示す。

天照大御神＝大日如来、十一面観世音菩薩
八幡神・応神天皇＝阿弥陀如来

熊野権現＝阿弥陀如来、善財王とその妃・王子（熊野曼荼羅）

日吉＝天照大神＝大日如来

市杵島比売命＝弁財天

春日権現＝不空罽索観音・薬師如来・地藏菩薩・十一面観音

愛宕権現＝智明権現＝勝軍地藏菩薩

秋葉権現＝観音菩薩

素盞鳴=牛頭天王=藥師如来
大国主神=大黒天
東照大権現・徳川家康=藥師如来
松尾=藥師如来
国之常立神=藥師如来
豊宇気毘売神=金剛界大日如来
須佐能尊=熊野権現、阿弥陀如来
月読命=阿弥陀如来
菊理姫=十一面観音
大己貴神=阿弥陀如来
伊弉諾尊=釈迦如来、阿弥陀如来
伊弉美尊=千手観音
火之迦具土神=千手観音
瓊瓊杵尊=釈迦如来
木花之佐久夜毘売=浅間大菩薩、阿弥陀如来
山幸彦=文殊菩薩
天之忍穗耳命=弥勒菩薩
天手力男命=不動明王、聖観音
天思兼命=釈迦如来、虚空蔵菩薩
少彦名命=金剛蔵王権現
神変大菩薩=聖観音
御姥尊=大日如来
七面天女=吉祥天、弁財天
三宝荒神=大聖歓喜天
稻荷神=十一面観音、聖観音、茶枳尼天[3]
火牟須比命=伊豆山権現、千手観音
青龍=清瀧権現[4]=准胝観音、如意輪観音
北斗（北辰）信仰・太一=妙見菩薩
えびす=毘沙門天、不動明王
岐の神・塞の神・道祖神・庚申信仰・猿田彦=青面金剛、地藏菩薩、馬頭観音
山の神・金精神=馬頭観音
天満大自在天神・菅原道真=大自在天、大威徳明王=十一面観音菩薩、不動明王、釈迦金輪、
藥師如来、愛染明王、慈恵大師、阿弥陀如来、毘沙門天、大聖歓喜天、弁財天、千手観音、
大日如来、地藏菩薩、文殊菩薩、観音菩薩

・鎌倉仏教

源頼朝は後白河法皇から、1183年木曾義仲討伐の見返りに東国支配を認めさせるが、その後1185年義経追討と共に守護・地頭の設置を求め、奥州藤原氏を滅亡させると1190年に征夷代将軍の官位を求めるが、法皇に拒否をされる。法皇が亡くなった後に後鳥羽天皇によって1192年に幕府を開くことができた。いわゆる「公武二元体制」であったが、後鳥羽上皇の承久の乱1221年で、上皇派の西国武士、寺社の僧兵・神人に執権北条義時、時房兄弟が勝ち、後鳥羽、順徳、土御門の三上皇を配流させ、平氏の館があった六波羅に六波羅探題を置き、西国の政務・軍事・裁判権を得て、武士王権を確立した。京都と鎌倉の二眼である。北条時宗の時、中大兄皇子以来600年ぶりに外国と戦う事になる。1274年文永の役、1281年弘安を神風によって勝ち、北条氏が30カ国の守護を独占するも、1333年に御家人の足利尊氏が六波羅を攻め、新田義貞が鎌倉を攻め、鎌倉幕府は倒れる。後醍醐天皇が建武の親政を行うが、1336年天皇が吉野に逃れ南北朝(→1392合体)となる。1338年足利尊氏が征夷代将軍となり京都に幕府を開く。

系統	浄土宗系(他力本願)			天台宗系		禅宗系(不立文字)	
	念仏(「南無阿彌陀仏」)			題目(「南無妙法蓮華経」)		禪	
宗派	浄土宗	浄土真宗(一向宗)	時宗(遊行宗)	日蓮宗(法華宗)	臨済宗	曹洞宗	
開祖	法然(源空)(1133~1212)	親鸞(1173~1262)	一遍(1239~89)	日蓮(1222~82)	栄西(1141~1215)	道元(1200~53)	
来歴	美作国押領使であった父、漆間時国が夜襲にあい、遺言で仏門に入る 比叡山西塔黒谷寂空に師事、法然房源空と名乗る 1175 京都東山吉水にて念仏を布教 九条兼実・熊谷直実らが帰依 1198 『選択本願念仏集』(高弁「推邪論」で反論) 1207 承元の法難(旧仏教の訴えで土佐(実際は讃岐)配流) 1212 京都東山吉水で入滅(知恩院)	貴族日野有範の子。9歳で青蓮院慈円に師事 1201 京都六角堂への参籠を機に、法然に師事 1207 承元の法難(越後配流)強制還俗: 妻帯=破戒(妻・恵信尼) ↓ 悪人=戒律を守れない者こそ救われるべき ↓ 悪人正機 1211 赦免、東国で布教(長男善鸞中心) 1235 掃洛、京都で布教(三女覚信尼中心) 1262 入滅(大谷御影堂=大谷本願寺)	伊予国家族河野通広の子 ↓ 出家・還俗・再出家 信濃善光寺 紀伊熊野本宮に参籠 ↓ 1279 踊念仏を信濃小田切(伴野市近く)で創始 1289 兵庫和田岬観音堂で入滅 	安房小湊の海人の子 安房清澄寺で出家後、比叡山などで修行 1253 日蓮宗(法華宗)開宗 1260 『立正安国論』 蒙古襲来を予言 1264 小松原法難(安房小湊の地頭)による襲撃 1271 竜の口法難(相模竜の口での)幕府による斬首を免れ佐渡へ流罪 1274 流罪赦免 →甲斐身延山久遠寺 1282 武蔵池上で入滅(池上本門寺)	備中吉備津神社の神職、賀陽氏の子 比叡山で受戒 1168 入宋(天台山万年寺)後乗房重源と同行 1187~91 再び入宋 1198 『興禅護国論』 比叡山の圧迫を受ける 鎌倉寿福寺(北条政子)・京都建仁寺(源頼家)『喫茶養生記』→源実朝 ↓ 1215 京都で入滅	内大臣入我(源)通親の子 比叡山で出家 1223~27 入宋 1233 京都興聖寺で『正法眼蔵』の執筆開始 比叡山・東福寺の圧迫 1244 越前大仏寺に移る 1246 大仏寺の寺名を永平寺にあらためる ↓ 永平寺を弟子懐奘に譲り、京へ移る 1253 京都で入滅	
教義	専修念仏 阿彌陀の本願にすがる念仏は易行であるが、往生の唯一の方法として、ひたすら「南無阿彌陀仏」を称えることが必要	一向専修 (一向宗の称の由来) 一心一向に阿彌陀仏に帰依することを旨とする 悪人正機 武士・鎮師など戒律を守れないような悪人こそが阿彌陀の本願の対象	踊念仏 齋戒 } 全国遊行 念仏を記した算を配り、受け取ったものを往生させる→のちに、念仏を称えるだけですべての人が救われるという教義になる	題目唱和 ↓ 法華経のみが唯一の釈迦の教え ↓ 他宗攻撃 念仏無間・禪天魔・眞言亡国・律国賊	坐禅 公案(禅問答) ↓ 師の出す問を通して悟りにいたる ↓ 政治に通じる 幕府の保護	只管打坐 ただひたすら坐禅を組むことで、悟りにいたる 出家第一主義 女人成仏を否定	
布教対象	京都周辺の公家・武士	関東のちに北陸・東海・近畿の武士・農民、とくに下層農民	全国の武士・農民層	下級武士・商工業者	京・鎌倉の上級武士、地方の有力武士	地方の中小武士・農民	
主著	『選択本願念仏集』 1198年頃、九条兼実の求めに応じて教義を説いた『一教起請文』 1212年、死期間近の法然が残した、念仏往生の要点	『教行信証』 関東布教期の書で、念仏、悟り・往生をまとめたもの 『歎異抄』 関東布教期の弟子唯円が宗内の異説を嘆じた書。悪人正機について記載	『一遍上人語録』 一遍は死の直前、自身の著書をすべて焼いたが、死後に門弟らが法語・消息などをまとめた	『立正安国論』 1260年に得宗北条時頼に提出した書。念仏を禁じないと反乱と侵略(蒙古襲来)を招くと主張 『開目抄』 1272年、配流先の佐渡での著書	『興禅護国論』 1198年、旧仏教の圧迫に対し、坐禅の本質を説いた書 『喫茶養生記』 1211年、源実朝に茶の効用を説いた書	『正法眼蔵』 曹洞禅の本質・規範に関する道元の説法を収録した書 『正法眼蔵随聞記』 道元の言行を弟子懐奘が筆録した書	
中心寺院	知恩院(京都)	本願寺(京都)	清浄光寺(神奈川)	久遠寺(山梨)	建仁寺(京都)	永平寺(福井)	

殺生の罪とケガレを意に介さない武士が求めたホトケが鎌倉仏教である。

但し、鎌倉時代だから鎌倉仏教と言われるのであり、宗祖は東国を回るも、日本唯一の中世都市である京都において宗力を得て現在に至っている。宗祖 5 人の中で京都以外の武蔵池上で入滅 1282 年した日蓮であるが、日親（1407～1488）が 1427 年に入洛し町衆の信者を集め、1532 年～36 年の法華一揆に結実する。

11 世紀、仏教でいう末法（1052 年）をむかえて貴族の間に浄土信仰が広がるが、鎌倉時代になって、信仰を武士、農民に広げた念仏三宗派がある。法然（1133～1212）は、比叡山で修業し、公家、上級武士に広め浄土宗を起こした。

一遍（1239～1289）は、全国を、踊念仏をもって遊行し時宗を起こした。一遍上人絵伝は、中世日本の姿を示してくれる貴重な資料である。室町時代中頃に猿楽師の観阿（観阿弥）、世阿（世阿弥）で知られる時衆系の法名を持つ者が見られ、同朋衆、仏師、作庭師として文化を担うなど時宗の全盛期を迎えたが、教団が発展する中で権力への接近が始まり、幕府や大名などの保護を得ることで大がかりな遊行が行われるようになると、庶民教化への熱意は失われ、時宗は浄土真宗や曹洞宗の布教活動によって侵食されることになった。

親鸞（1173～1263）は法然の弟子となり、後鳥羽上皇の怒りによって 1207 年越後に配流され妻帯する。東国の簡素な念仏道場で「教行信証」を書く。一向専宗（ひたすら阿弥陀仏に帰依）は、後の戦国武将をてこずらせた一向一揆の名となる。弟子の書いた「歎異抄」には、悪人（ケガレを持つ武士、狩人）こそ、阿弥陀仏の救済を受けるとあり、源信のケガレ忌避から 200 年を経て、念仏はケガレ・殺生をも肯定する思想をもつように大転換をした。血脈で代をつなぎ 8 世の蓮如（1415～1499）が衰えた浄土真宗本願寺を盛り興した。武士、農民の一向専宗は、環状城塞都市「寺内町」を築き、戦国武将に武力で対抗した。私にはカトリック教と封建領主に抗して血を流したプロテスタントを思い起こされるが、織田信長によって、第 11 代顕如は石山本願寺御坊を明け渡す。秀吉は京都の城下町化に即して本願寺を京都に置いた。徳川幕府は巨大勢力を恐れて二つに割り、かつ、檀家制度を持たせて、民の戸籍把握にホトケを利用した。

私は本願寺派の門徒であり、浄土三部経は聞いた数は数知れないが、その経を解していない。

「正信偈」という『教行信証』の「行巻」の末尾に所収の真宗の要義大綱を七言 60 行 120 句の偈文にまとめたものと、同じ親鸞撰述の『三帖和讃』を、お経のように節をつけて読むもこれも解していない。

蓮如の手紙から抜粋した「御文章」は短く、私に



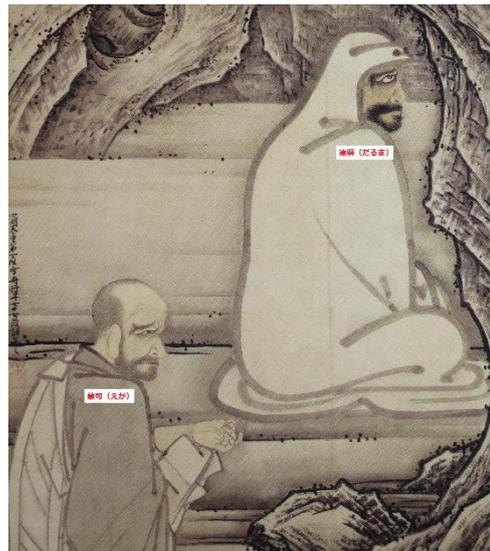
も理解できる。

「お盆に先祖が帰ってくる。」事はない、仏壇は阿弥陀如来を祀るものであり先祖代々の戒名を書いた位牌を置くものでない、お墓は寺が管理するものでなく部落で管理するもの、と祖先霊崇拜を戒めている事とこの「御文章」が、私にキリスト教のメシア思想と近い宗教だと思わせている。明日の現実に希望が持てない農奴は、死後の天国に救済を求めるしかなかったのだと。もっとも、人口減少によって寺が減っていく中で、第25代門主であると天皇のように血脈をうたっているだけでは、欲望渦巻く現代に取り残されようが。

以上、いずれの念仏宗も「ケガレ忌避」は中世の強さはなくなっている。しかし、カミとなると依然と「ケガレ忌避」はある。これは民俗学であつかう「習俗」であろうか。いいや、旧統一教会は「あなたは先祖7代の悪行を受け継いでいる。喜捨によって救われよう。」と言ひ、信者は喜捨によって財産を潰したとあり、安倍元首相がその恨みによって撃たれたという。こんな報道を見るにつけ、カミとホトケのニッポン教は保守政治家にとって、今も大切な支持基盤であり、欧州のように討論を尽くす民主主義は根付いていないと思う。

・ 禅宗

密教は修験道に発展し、修行によって法力を得て益々呪術に走る。東大寺、興福寺、延暦寺、東寺など大寺は、王権に繋がり荘園、僧兵をもつ権力者となっていった。そこに禅宗が入って来た。座禅・公案を重んじ、自己の内にある仏性を内観し成仏しようという上座部仏教のような別名「仏心宗」であるが、公案すなわち禅問答は「以心伝心」であるものされ、言葉や文字を借りず、師の心から弟子の心に伝えることとあり、仏の教えとしての論理の積み上げはない。6世紀に南インドのバラ



モンである達磨が中国に渡り、唐代に老荘思想と結びつき、中国独自に発達した。既に804年最澄が座禅を唐から日本に持ち込んでいた。宗代には五家七宗と別れていたが、そこから、臨済宗(建長寺)を栄西(1141~1215)が入宋(1168 重源と同行、1187~91)して伝え、栄西の死後、曹洞宗(永平寺)を道元(1200~1253)が入宋(1223 - 27)して伝えた。

臨済宗は、多くの中国僧を向かい入れている。鎌倉の建長寺の開山：蘭溪道隆(らんけいどうりゅう)禅師(1213-1278)、円覚寺の開山：無学祖元(むがくそげん)禅師(1226-1286)、その他大休正念(だいきゅうしょうねん)、一山一寧(いっさんいちねい)、兀菴普寧(ごったんふねい)等々であるが、南宋の寧波と日本との定期航路がすでに開かれていた事に加え、北

の元からの圧迫に逃れる為でもあった。

彼らは、教科書にあるように日本に多くの新しい文化を持ち込んでいるが、道教、儒教の知識が無くては禅僧になれなかった事が教科書に書かれていない。太い思想の元があつての、手わざの文化であつたのである。



神仏習合された神宮寺の別当には禅儒僧が入り込み、人殺しを業とする戦国武将は彼らを知識人として重用し、政治に関わるようになる。江戸時代に林羅山が「朱子学」を持ち込むまで、密教・儒教・禅宗の僧侶が王権についた。ホトケは浄土真宗と同様にケガレ忌避と距離を置くことになり、今度はカミのほうから「反本地垂迹説」がホトケに対して出てくる。

栄西は興福寺から敵視されると、北条政子に近づき寿福寺を造り、吾妻鑑には、1214年二日酔いに苦しむ源実朝に茶一服と「喫茶養生記」を献じたとある。

多治見の永保寺を作った夢窓礎石（1275～1351）は、後醍醐天皇、足利尊氏の帰依を受け天竜寺を造る。禅僧は「師」と仰がれるルールがある宗派であり、室町時代に武士の上層からの帰依によって急速に拡大する。

3代義満の時に、鎌倉五山（建長寺、円覚寺、寿福寺、浄智寺、浄明寺）京都五山（天龍寺、相国寺、建仁寺、東福寺、万寿寺）とそれぞれに十刹を定めるが、それ以外に「林家」と呼ばれる、大徳寺・妙心寺（臨済宗）、永平寺・総持寺（曹洞宗）の大伽藍が作られた。

6～7世紀に仏教が入り、9世紀に密教が入ったのと同様に、禅宗のかつ歩が14世紀にあつたのである。中でも、禅宗にそれまでのカミとホトケを取り入れて日本化をした夢窓礎石の働きは大きい。

中世（11～16世紀）は、施肥による二毛作・稲の品種改良・商品作物（紵（カラムシ）桑・楮・漆・藍・茶・塩）が作られ、商工業（織・紙・鉄・酒・油・陶器）が飛躍し、町衆・百姓が富み、今に繋がる室町文化が生まれた。カミとホトケは、王と臣だけでなく、長くアニミズムに浸かっていた民のものともならないといけなくなった。

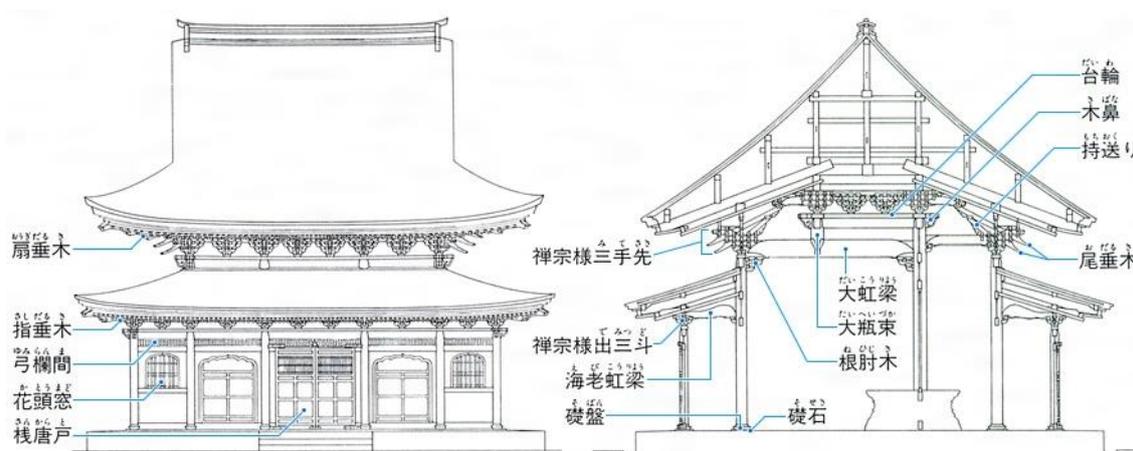
庭の夢窓礎石、水墨画の雪舟、茶の一休、立花の池坊、猿楽の観阿弥など、日本の新しい文化の担い手は、公家から僧侶に替わった。

・禅寺

建築史では、それまでの「和様」に対して禅寺には「禅宗様」とか「宋様」と名前が付けられている。「宋様」となると、重源が再興した東大寺で採用された貫きを多用する「大仏様」も入るが、大仏様は東大寺と浄土寺しかない。浄土寺 1194 年は西日を仏像の背後にいれ、独特のインテリア空間を造っているが、外観は法隆寺のような軒先であり、簡素な姿に戻っている。



「和様」は、床を貼って拝殿を仏像の前に広く取るように発達したが、8世紀中国の北で作られた様式がそのまま小作りになって南に残っていたのが、そのまま日本に入って来た。私は、和風の伸びやかさに対して、細やかに積み上げた様式に理知的なものを感じる。



また、昔にもどり、床を貼らず、天井もむき出しとなる。垂木は難波の四天王寺のように扇状に広がり、斗供を詰めて屋根を支えている。扉は棧唐戸とし、細かい透かし模様が入る。禅宗として3番目に江戸時代初期に入って来た黄檗宗があるが、中国で 500 年の間に禅宗様式が変化した物をそのまま新たな建築様式として入ってきたものであるり、宗風の独自性が臨済宗と比べて少ないのと同様に、建築様式の根本は変わらない。

明治まで、日本が海外から建築様式を取り入れるといっても、それは中国からしかない。そして、明治以降もそうであるように **Japanize** が行われてきた。江戸時代になると「和様」と「禅宗様」を混在させた「折衷様」となる。1636 年家光が作り直した日光東照宮には、これらの様式が誇張されてある。

伽藍配置は、中門を三門、金堂を仏殿、講堂を法堂と名前が変わっただけで変わらないが、修行僧を置くので、東司（トイレ）風呂、大きな庫裏が特徴である。



宗理から、仏舎利を重んじることがないのであろう、五重塔はない。塔頭とは、塔ではなく、本寺の境内にある末寺院を指す。高僧が寂すると弟子がその塔（墓石）の頭(ほとり)に小庵(しょうあん)を建て、墓を守ったことに始まる。

のちには、大寺院の高僧が隠退したときなどに、寺の近くや境内に小院を建て住し、没後も門下の人々が、この小院に住いして墓塔を守り、祖師が生けるがごとく奉仕するに至り、それらをも塔頭と称する。次々と小院が建てられたために、しだいにその数も増え、たとえば鎌倉の円覚寺(えんがくじ)は一時、32庵二院を数え、いまでも12庵一院を擁している。元来、塔頭は大寺院に従属したが、明治以後では独立した寺院として扱われることが多い。

一種の祖先信仰が禅寺にも起きたわけであり、曹洞宗の葬儀は、死後に本尊である釈迦牟尼仏の弟子になるためのものとされており、往生できる事を主眼とする葬儀を大切にすることは、他の宗派ともどもニッポン教化が進んでいる。浄土真宗だけが、故人は亡くなるとすぐに浄土に導かれると考えており葬儀においても成仏を祈ることはない。

第八章 吉田神道（唯一神道） と 織田信長

密教の僧が15世紀にかけ本地垂迹説を全国の神社を網羅する。天台宗系は山王神道、真言宗系は両部神道という。神官自体が密教を受け入れた。全国の主な神社はそれぞれの祭神と地域の特性から、記紀神話のストーリーそのものを仏教的、密教的に説明しなおし、作り直した成果を学者は「中世日本紀」という。有名なのに、我らが熱田さんの「神祇官私記」がある。

これに反発して神を仏の上位におき、反仏、排仏の姿勢を示した「反本地垂迹説」が生れた。度会 行忠（わたらい ゆきただ 1236～1306）は1251年より53年間伊勢外宮の禰宜をつとめており、内宮（アマテラス）の下に置かれた外宮（トヨウケ）が両部神道では胎蔵界と金剛界と対等に置かれたことから、外宮の地位向上を密教、道教、儒教の外来宗教の知識でもって図った。伊勢神道の祖となる。伊勢神宮で行われた祭祀を基盤に絶対神の存在を強調した。「正直」と「清浄」を神道の二大徳目として、鎌倉仏教がケガレ忌避を薄めることに対抗した。北畠親房（1293～1354）は伊勢神道の影響を受けて「神皇正統記」を著し、天台宗の僧・慈遍（吉田兼頭の子か？）も伊勢神道の影響を受けて神道思想を提唱し、神道が根本であり儒教がその枝葉で、仏教が果実であるとする「根本枝葉果実説」を唱えた。

反本地垂迹説の要となったのは吉田神道である。江戸幕府が1665年諸社禰宜神主法度を発布し、神道本所となって全国の神社、神官は吉田神道の支配下とされた事による。明治政府は平田篤胤らによる復古神道いわゆる平田神道を元にして神祇院を復古し、今は神社本庁なる宗教法人が伊勢神宮を本宗として8万社をまとめているので、吉田神道に昔日の力はない。

彼の著作「唯一神道名法要集」は稀有壮大なものであり、祝詞、祓いの素朴な言葉でしか表現されなかった神祇信仰を、様々な宗教の諸言説（仏教、道教、儒教、陰陽道、密教の加持祈祷）を越境的に統合しつつ、仏教から独立した独自の教義・経典・祭祀・儀礼を持つはじめての神道説とした。



吉田家の祖先神はアメノコヤネノミコト（中臣氏の祖神）と言い、伊勢信仰を吸収するために「伊勢の神霊が吉田山に降りた。」と、神道の総本山を自称する八角形の太元宮をつくり、神祇管領長上を自称し、従来神祇伯の白川家をしのいで神職の任免権を得、権勢を高めた。

森羅万象全てが神道の顕現なることを説くもの（絶対神）で、天上・地上・人体のそれぞれの内部に神が存在し、神が宇宙全体に遍満するという一種の汎神論が、兼俱の構想した「唯一神道」との解説があったが、旧約聖書のデウスの如き天主を唱えているように思える。

・信長の天主

応仁の乱（1467～1477）で京都は焼きつくされ、下剋上を生き抜く戦国大名が群雄割拠する戦国時代に入る。1543年に鉄砲が入り、1549年に宣教師フランシスコ・ザビエルが来日し、1568年に信長が足利義昭を奉じて京都に入り、日本は近世と時代のページが変わる。

信長の死後秀吉は「豊国大明神」となり、家康は近世封建国家のカミとして「東照大権現」と祀られる。なら、先を行った信長はどうであったか。信長は、安土山を蓬莱山と見立て城を築き、山頂に天主を建てた。



近江八幡市 作成の復元図 安土山を南の水面から見る。

天主の音は中世の殿主＝住まいでかつ行政・司法を行う所からの引用であり、そこに天主教（キリスト教）の天主の字を当てて意味を持たせたのは、絶対君主としての権威付けを建築の形として表したいからであった。ワタタケル以来の「天下」を信長は「天下布武」の朱印として用いており、天主教からの直接の引用ではないが、天主＝カミとしてありたいという意思はあった。同時代にフランスの絶対王政を確立したフランソワ一世（1515～1547）も城・シャトー・シャンポールをレオナルド・ダ・ヴィンチに設計させている。

フロイスの「日本史」でフロイスは以下のように書いている。

「信長はカミとホトケへの礼拝を意としなかつたのみならず、嘲弄し、焼却を命ずるほどで

あったが、今回、悪魔の勧誘と本能に操られた。日本では通常神体と称するものがあるが、信長は自らが神体であると言った。彼への礼拝が他の偶像のそれと劣らないように、ボンサンという石を寺院の一番高所、すなわち全てのホトケの上に安置し、あらゆる身分の男女、貴人、武士、庶民、賤民が、彼の生まれた日に神体を礼拝しに来るように命じた。創造主にして世の贖い主であられるデウスのみにはささげられるべき祭祀と礼拝を横領するほどの途方もなく狂気じみた言行と暴挙に及んだのでデウスは19日以上継続することを許さなかった。」

ボンサンとは「信長公記」では、盆山と書き、「天守指図」では天守の一階の床の間に置かれており、ここに書かれた寺・惣見寺にはおかれていないが、フロイスは惣見寺に対しての信長の言葉も引き写している。



「偉大なる当日本の諸国のはるか彼方から眺めただけで、見るものに喜悦と満足を与えるこの安土の城に、全日本の君主たる信長は惣見寺と称する寺院を建立した。拝し、大いなる信心と尊敬を寄せる者に授けられる功德と利益は以下のようなものである。

第一に、 富者ならばますます富み、貧しき者、身分低き者、賤しき者が礼拝にすればその功德のよって富裕の身になろう。子孫を増すための子女なり相続者を有せぬ者は直ちに子孫と長寿に恵まれ、大いなる平和と繁栄を得るだろう。

第二に、 80歳まで長生きをし、疾病はたちまち癒え、その希望はかなえられ、健康と平和を得られるだろう。

第三に、 予が誕生日を聖日として、当寺に参詣する事を命ずる。

第四に、以上全てを信じる者には、確実に疑いなく、約束されたことは実現しよう。これらに信ぜぬ邪悪の徒は、現世においても来世においても滅亡に至るだろう。故に万人は大いなる崇敬と尊敬を常々これにささげることが必要である。」

なんとも、なんでもかんでも庶民の願いを叶えてしまう生きたカミとなった信長である。寺の住職は信長が生まれ育った津島牛頭天王社から禅儒僧・堯照呼んでおり、これらの功德と利益は、神仏習合された天王社のものと同じであった。王が臣だけでなく民にも自らの権威を植え付けるには、武力だけではダメでカミとなったのである。秀吉、家康の先駆をなした信長であった。天皇だけでなく、道真などの怨霊もカミとなっていたが、死後の事であり、祖先霊の延長であったのに比べ、アラビトガミとは、さすが信長である。

安土日記の村井貞勝の天正7年正月拜見記では「御殿主を見せられた」であるのに、太田牛一は軍記ものに改変した信長公記では「安土山天主之次第」と「天主」をタイトルにした。大工・中井正清宛に江戸幕府重臣から名古屋城を急げとの督促の手紙が残るが「天主」と「天守」が混在している。

信長は天主（ゼウス）たらんと欲した。1582年11月5日ルイス・フロイス記

内藤昌氏は「復元安土城」において、造形の意味—天道思想を主張していた。キリスト教だけではなく、儒教、道教、仏教、神道、キリスト教の全てを踏まえ、信長は神となる事を望んだと。城郭内に徳見寺建て、津島牛頭天王社から堯照法師を呼び住持とし、「子の誕生日を聖日とし、毎月来るべし。現世ご利益が得られる。」とフロイスは書く。天主の「吹き抜け」は信長が宣教師から教会の身図を見聞していたのではないかと、内藤昌氏は推定しているが、現在、この部分だけがクローズアップされて「天主」造形の意味がぼけてしまっている。大工（設計施工者）の視点で、先例によることを示す。

金閣 本来は舍利殿であり、仏教それも禅宗の系譜である。



三層「兜摩頂」庭の眺めを楽しむだけでなく、内部は座禅を組む禅室に見える。



二層「潮音洞」観音像を四天王が囲み、天井には極彩色の天人飛天の絵がある。

天主 1579年最上階の内部には、道教・儒教の絵が描かれた。



内外金戸黒漆 天板花鳥 三皇五帝 老子 文王、周公 孔子 孔門十哲



外は神の標式 内は持仏堂 八角円堂は世の中心を示す

南蛮寺 京都



安土城下のカザ（修道院）も三階建てであり、一階は茶屋敷を含んだ宿泊用の雑堂を構え、二階は広間と禪室、三階はセミナリオ（神学校）

吉田社 太元宮



八角円堂は法隆寺、興福寺が著名であるが吉田兼信は「唯一神道」を唱え、創造主宰神を祀り、宇宙の中核と言う。

宝塔 法華経に説かれる過去仏多宝如来の舍利塔が起源。地階からの吹き抜け、4間(8.5m)×6間(12.7m)高さ1.5mの中に二本の大黒柱が立ち、2階に舞台と縁。3階には橋が渡り、縁が回る。一階には「信長と思え」とされた石、ボンサン（益山）がある。



天主の造形を見てみよう。なんといっても、100尺の高さの木造建築を山頂に載せるのが第一の課題であり、そして足利義満の金閣寺をならって金張りとした。

金閣寺は住まいの上に仏殿、その上に禅堂があったが、安土城天主は住まいの上に、唯一神道の太元宮を模した朱塗りの八角形を置き、内部に釈迦と沙門十大弟子を描き、その上は、道教・儒教の神々を描いた。地下には舍利の上に宝塔を置き、法華経の世界を吹き抜けて見せた。天孫降臨伝説のアマテラスはもはやいらぬ。

第九章 明治政府「神仏分離」

- ・江戸期の儒学に明治維新の先ぶれを見る。

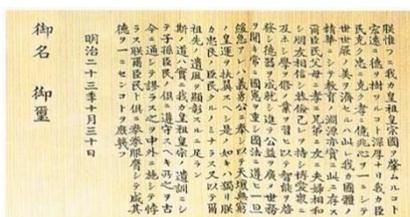
中国では孔子廟を中心に「儒教」は宗教として現在もあるが、日本では林羅山(1583~1657)が徳川家康に仕えていらい、禅儒僧による儒教は、林家が大学頭を務めて朱子学・陽明学と学問となった。これを「儒仏分離」という。

中国、朝鮮は「科挙」によって役人は登用されるのだが、江戸時代の武士には試験は無く、儒学は教養・徳目・武士道となる。山崎闇斎(1619~1682)によって「神儒一致」が唱えられ儒教神道が生まれた。その後、荻生徂徠(1666~1728)は、朱子学や陽明学などの後世の解釈によらず、論語などの経典を直接実証的に研究する古文辞学を唱える。



本居宣長(1730~1801)は、徂徠の影響を受け「古事記」「日本書紀」の研究を行い「国学」が生まれた。10代の頃は浄土教思想の強い影響下にあったが、儒仏に対する排除を主張し「死すれば黄泉の国に行く。」と「古事記伝」をそのまま信じていた。本居家は松阪「鈴屋」にて学灯を繋ぐ。本居家の墓(妙楽寺)から本居宣長の靈魂を殿町の森に運び大正4年に学問の神様として本居神社が遷座し、1995年に社号を本居宣長ノ宮と改称している。

このように、明治の「神仏分離」の前に「神儒一致」「儒仏分離」と、「古事記」にある千字文と論語を伝えた王仁(わに)以来の「儒教」があった事を忘れてはならない。



▲教育勅語 1890年、地方官会議で徳育の混乱が指摘され、起草された。封建的儒教理念の強い「教学大旨」(1879年)とは異なり、家族主義的国家観に立つてつくられた。謄本が小学校に分けられ、式日には奉読を義務づけた。

明治政府は、天皇が發布した教育勅語 1890年(明治23年)に儒教的道徳を復活させた。国家を家族に模し、教育の根本は皇祖皇宗(国体は神話による)の遺訓とし、忠君愛国(主権在君)を国民の道徳とした学校教育が行われ、明治天皇制の精神的・道徳的支柱となった。1945年、ロバート・オールソン・バロウは『神国日本への挑戦—アメリカ占領下の日本再教育と天皇制—』中で教育勅語を“国家神道の「聖書」といってもよい」と評した。

今も「教育勅語」を称賛する人が多くいる。

・明治維新

幕末の勤王の志士たちは「尊王攘夷」「王政復古」を唱え、1867年（慶応3年10月14日）30歳の徳川慶喜から15歳の明治天皇に「大政奉還」がされた。大政奉還は討幕派の機先を制し討幕の名目を奪う狙いがあった。朝廷には政権を運営する能力も体制もなく、幕府が一旦形式的に政権を返上しても依然として公家衆や諸藩を圧倒する勢力を有する徳川家が天皇の下の新政府に参画すれば実質的に政権を握り続けられると考えていた。しかしながら、岩倉具視ら倒幕派公卿と、尾張藩、越前藩、土佐藩、安芸藩、薩摩藩の5藩（後に+長州藩）は倒幕を目指し「王政復古のクーデター（新たな教科書の表現）」を起こした。慶応4年1月3日鳥羽・伏見の戦いから明治2年5月18日まで戊辰戦争を続けることになる。

「王政復興の大神令」をクーデターに読み替えたい日本政府と歴史家なのだろうが、死者は8420人。その内、新政府側3556人、旧幕府側4707人。さらにその内、薩摩藩514人、長州藩427人、会津藩2557人であり、京都守護職であった会津藩が突出している。尾張藩の松葉事件（渡辺新左衛門在綱を含む3重臣及び11藩士が処刑）のように「朝敵」となる事を幕藩体制側は恐れたので、当時の人口3300万人からこの死者数を見れば、政変に伴ういざこざが少しあったに過ぎない。



明治天皇：内田九一撮影

当時の人口2700万人のフランス革命1776~1779では、内乱と処刑で65万人、外国との戦争を含めると100万人が死んでいる。

日本は、フランスのように民の大量の血を流すことなく政体を変えている。その主役は民でなく臣だけで行われたのであった。

「朝敵」を避けるところに、私はカミとホトケのニッポン教を見る。

このドタバタの中で、明治新政府は天孫降臨の天皇による「祭政一致」を目指し、神仏判然令（1868年慶応4年3月13日から明治元年10月18日までに出された、太政官布告・神祇官事務局達・太政官達など一連の通達の総称）に基づき、神道と仏教、神と仏、神社と寺院をはっきり区別させること<神仏分離>とした。これは、明治政府が「革命」で生まれたのでないのと同様に、これも「宗教革命」とは言えない。これをこの章で書いていく。

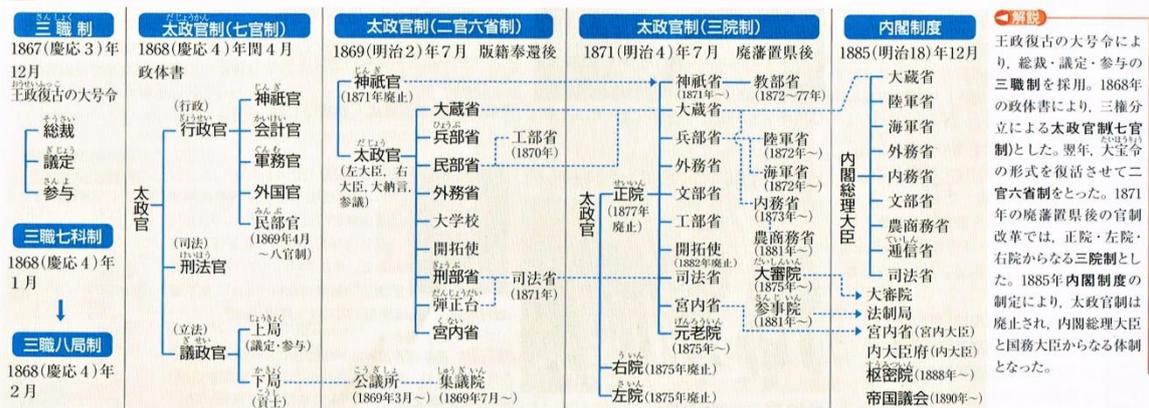
「革命」とは程遠い明治維新故に、今もカミとホトケ（ニッポン教）は日本社会に根ざしている。勤王の志士たちの崇敬を集めた幕末の吉田神道に戻る。

・平田神道

碧川篤真は、平田篤胤（1776～1843）に師事し、平田家の養嗣子となり平田鋈胤（鐵胤）を名乗り平田篤胤の後継者となった。鋈胤は上京し、当時「草莽の国学」として全国的にさかんだった平田国学の総帥として尊王攘夷を鼓舞する一方、篤胤と知己のあった堂上人や長州藩士とも親交を結び、朝廷の内情や京都の政局といった情報を国許の久保田に報じるなど多方面に活動し、1868年（明治元年）には神祇官判事に任じられた。新政府の実力者岩倉具視とは親交があり、明治2年、京都屋敷内に義父平田篤胤を祀る祠（邸内社）をつくった。

平田派は、神仏分離と神道国教化を推進するも、明治5年3月14日の神祇省廃止・教部省設置によって、「祭政一致」は頓挫し、明治6年（1873年）にはキリスト教に対する禁教令が廃止され、明治10年（1877年）には教部省も廃止し内務省社寺局に縮小される。神社の神宮寺は廃され神仏分離はされたが、日本の独自性を目指した平田神道の国教政策は放棄された。

5 中央官制の変遷 -p.214-3



「神道は宗教ではない。」という見解が、キリスト教、仏教との対比で採用される。軍部は帝国主義を確立するための要件として、八百万神のカミガミでなく、一神教の如き天皇をおカミとする宗教制度を必要とし、それに異論を唱える宗教団体や外国人を擁する宗教団体への弾圧が行うも、宗教団体を法の支配下に置くことは出来なかった。



平田篤胤（ひらたあつたね 1776～1843）は、20歳になったばかりの寛政7年（1795年）1月8日に久保田藩を脱藩・出奔し、25歳のとき勤め先で江戸在住の備中松山藩士で山鹿流兵学者であった平田藤兵衛篤穩（あつやす）の目にとまり、才覚を認められてその養子となる。宣長没後2年経った享和3年（1803年）に本居宣長の国学を知り、夢のなかで宣長より入門を許可されたと「宣長没後

の門人」を自称した。宣長の漢意（からごころ）を排除し、文献学的・考証学的姿勢に徹する方法によって、蘭学を吉田長淑に学ぶ。とくに西洋の医学・地理学・天文学を学ぶことによって、それまで仏教的・儒教的に牽強付会もともなってきたさまざまに説明されてきた古代日本のありさまが、見事に西洋で解明されていることに篤胤は衝撃を受けた。

1803年処女作「呵妄書」を著し、翌1804年28歳、「真菅乃屋」を号して自立した。「真菅乃屋、後に気吹舎」ば、身分を問わず誰に対しても門戸がひらかれていた。以後、篤胤は膨大な量の著作を次々に発表していった。その著作は生涯で100におよぶ。

1811年35歳、それまで、宣長「古事記伝」の説に従えばよいと考えていたが、他の「日本書紀」「古語拾遺」など諸書も参照して、正しい内容を確定すべきではないのかと考え、諸書を集め12月5日から年末までの25日間をかけて大部の書を一気に著述した。こうして成った『古事記』上巻・『日本書紀』神代巻の内容を再構成した「古史成文」であり、その編纂の根拠を記した「古史徴」であった。死後に復古神道の経典とされる「靈能真柱」の草稿もこのとき成立している。

1812年、妻・綾瀬を亡くし、死後の霊や幽冥への関心を促し、本格的な幽界研究へ向かう。本居宣長が、人は死ぬればその霊は汚き他界、つまり「夜見」（黄泉）の世界へゆくのであるから、人が死ぬことはじつに悲しいことであるとしたのに対し、篤胤は、人は生きては天皇が主宰する顕界（目に見える世界）の「御民（みたま）」となり、死しては大国主神が主宰する「幽冥」（目には見えない世界、冥府）の神となって、それぞれの主宰者に仕えまつるのだから死後は必ずしも恐怖するものではないと説いた。そして、その「幽冥」とは、われわれが生きる顕界と同じ空間、山や森、墓といったわれわれの身近なところであって、決して他界ではなく、幽冥界からはこちら側（顕界）が見えるものとし、こちら側から向こう側（「幽冥」）が見えないだけであるとした。さらに、神はわれわれとはさほど遠くない「幽冥」の世界から顕界に生きるわれわれの生命と暮らし、郷土の平和と安寧をいつも見守り、加護してくれていると説いた。

これは、日本で長く伝わってきた「祖先霊」信仰そのものである。違うのは世界の支配者として現世では天皇（アマテラス）に、死しては大国主神に我が身を託すというのである。死後の霊の行方について考え、その霊の安定を神道に求めたゆえ、平田神道は宗教色を一気に強めた。篤胤は、キリスト教的天地創造神話と「旧約聖書」的な歴史展開を強く意識しながら、天御中主神を創造主とし、儒教的・仏教的色彩を完全に排除した新たな「復古神道」を宣言したのであった。篤胤によって、八百万の神々が一神教に変容した。

明治になると神道系の宗派が多くなったが、平田神道の影響が大きい。

教祖教説系 3 派			
教名	成立	創始者	公認
黒住教	1814	黒住宗忠	1876 岡山、天照大神信仰
金光教	1859	川手文治郎 (赤沢文治)	1900 岡山、天地金乃神の尊信
天理教	1838	中山みき	1908 大和、天理王命が教神
山岳信仰系 3 派			
扶桑教	1873	突野半	1882 富士講からおこる
実行教	1878	柴田花守(咲行)	1882 富士講からおこる
御嶽教	1873	下山応助	1882 木曾御嶽の講からおこる
神道系 7 派			
神道本局	1875	神道事務局	1882 神道事務局の後身。のち神道大教
神道修成派	1873	新田邦光	1876 キリスト教対策、山岳信仰者中心
出雲大社教	1873	千家尊福	1882 出雲大社の講
(神道)大成教	1879	平山省齋	1882 種々の教会の集合体的性格
神習教	1881	芳村正業	1882 東京、神道国教化を主張
神理教	1880	佐野経彦	1894 福岡、三条教則が教理
(神道)禊教	1840	井上正鉄	1894 天照大神、禊祓の修行重視

篤胤は 1816 年 40 歳 4 月に江戸を出て、船橋・神崎・香取・鹿島・銚子・飯岡と利根川下流地域をめぐり、途中、鹿島神宮・香取神宮及び息栖神社に詣でている。この旅で「天之石笛」という霊石を得たことにちなみ、篤胤は家号を「伊吹乃屋(気吹舎)」と改め、「大角」とも名乗るようになった。翌 1817 年には、この旅の顛末を記した「天石笛之記」が書かれている。学問を広めるといふより、この巡回は布教の様相を示している。

平田神道には、洋学からの新知識や世界の地誌や地理、地動説にもとづく宇宙論、分子論を取り込んだ靈魂論、また、復古神道の論理的帰結であり、身分制の解体を希求する「御国の御民」論など、当時、台頭しつつあり、また地方の課題に向き合うことを余儀なくされた在方の豪農層には新鮮で有用な知見が多く含まれていた。(ex.島崎藤村の「夜明け前」)

平田神道には、洋学からの新知識や世界

篤胤死去後の弘化 2 年(1845 年) 3 月、白川神祇伯は篤胤に「神霊能真柱大人」の称号(のちに「霊神」に改称)を贈った。また、没後 100 年となった 1943 年(昭和 18 年) 8 月 21 日に従三位が追贈されている。

・ 廃仏稀釈

明治政府の「神仏分離令」1868 年は、神社にあった神宮寺を取り壊す「廃仏稀釈」運動となった。「廃仏」は仏(宗教の対象)を廃(破壊)し、「毀釈」は、釈迦(仏教の開祖)の教えを壊(毀)すという意味である。

中世からの「神仏習合」により、大きな神社ならば必ず神宮寺があり、多くの神社は別当と呼ばれる密教系の僧が神社を含めての経営を担っていたので、まずは神官たちからの「廃仏毀釈」運動であった。

3 廃仏毀釈



● 廃仏毀釈(「開化の入口」1873年) 1868年に神道国教化の方針をとり、神仏分離令を公布したことで、仏教を排斥する廃仏毀釈の風潮が強まった。図は寺を小学校にするため、経文などを焼いている様子を描いたもの。

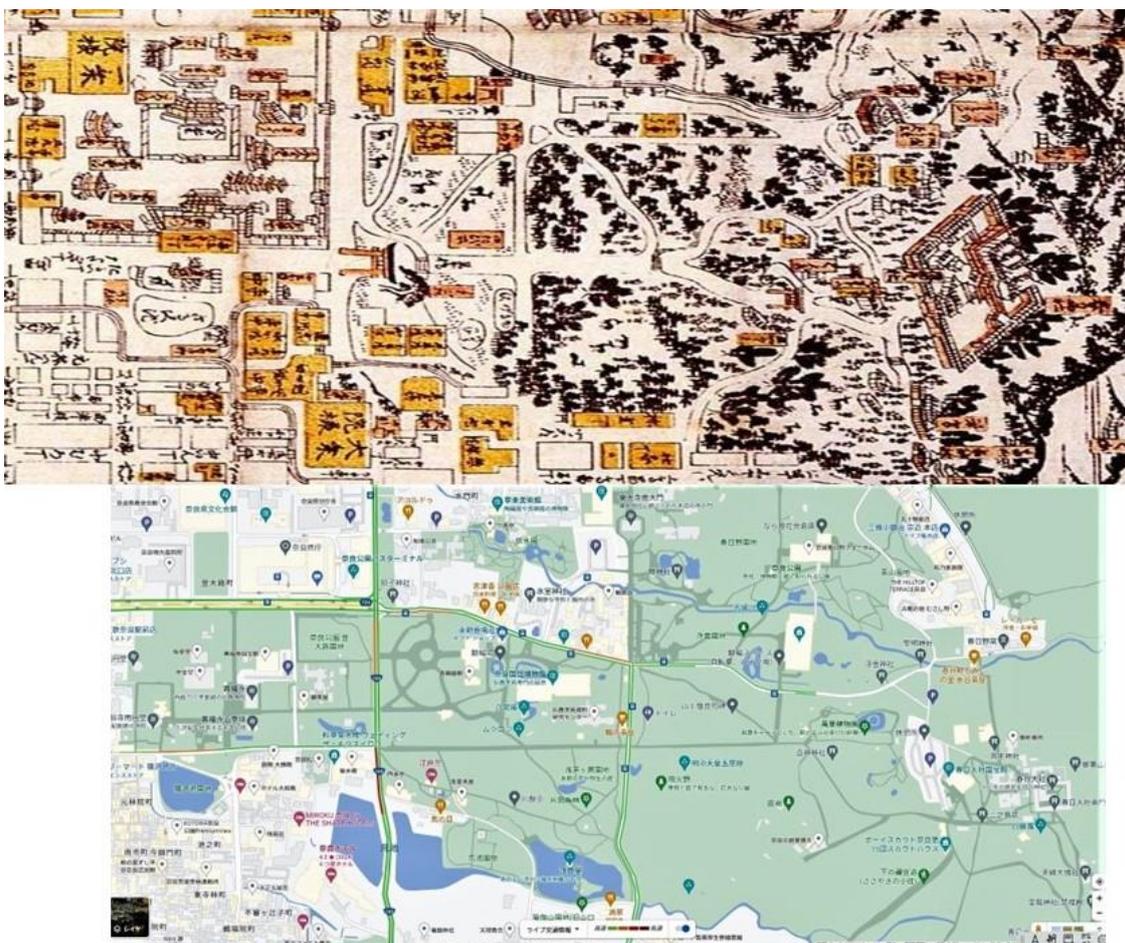
比叡山延暦寺が支配する麓の日吉社から廃仏毀釈は起きた。日吉(日枝→比叡)社は延暦寺が出来る前からの地主神としての自負心を持っていたが、延暦寺の守護社とされ、日吉社の神は唐の天

台宗の本山である天台宗の天台山国清寺で祀られていた山王元弼真君にならって山王権現と呼ばれるようになり、延暦寺では山王権現に対する信仰と天台宗の教えを結びつけて山王神道を説いていくようになった。

延宝9年(1681年)、神仏習合や山王神道(山王一実神道)を改めようとする動きが、吉田神道の影響を受けた日吉社から出て延暦寺と争いになるが、貞享元年(1684年)に日吉社は論争に敗れ、延暦寺に支配されて来た経緯から、神仏分離令が出ると日吉社は率先して仏教色を一掃し、延暦寺から独立して社名を日吉大社とした。

分離令直後の1868年4月1日、日吉大社の社司で、明治政府の神祇事務局事務掛を兼ねていた樹下茂国(じゅげしげくに)が、吉田神道の吉田神社(京都市)の神官らからなる「神威隊」を伴って、延暦寺に対して日吉大社の引き渡しを要求。拒否されると近在住民らとともに社殿に乱入し、仏像や経典などを破壊したり、焼き捨てたりした。日吉大社は全国に約3,800社ある日吉・日枝・山王神社の総本社であり、これが「廃仏毀釈」が全国に広がる発端となった。

奈良における廃仏毀釈の波は、東大寺や法隆寺、薬師寺、西大寺、唐招提寺などに及んだ。大きな寺には必ず守護社が置かれていたが、神社の敷地を寺から分離させ独立をする。



とくに激烈を極めたのが興福寺であった。興福寺は春日大社と一体となって中世大和国を支配しており、大乘院（奈良ホテルになる）・一乗院（裁判所になる）を筆頭に末寺計107寺を抱えた巨大伽藍を形成していた。

分離令が出ると、興福寺の僧たちは「お上には逆らわないので、神職としての地位を保証してほしい」と懇願した。この申し出に神祇局は、還俗を許可するとともに、興福寺の僧侶にたいして「新官司」の地位を与えた。そして、春日大社に納められていた仏具類は、すべて興福寺が引き取るよう命じ、完全に神仏を分離させたのである。こうして興福寺から130人すべての僧侶がいなくなり、広大な境内地と七堂伽藍だけが残され、多くの堂塔が破却処分され興福寺は荒廃し、仏像が内外に流出することになった。快慶作の木造弥勒菩薩立像がボストン美術館に、乾漆梵天・帝釈天立像がアジア美術館（サンフランシスコ）に、康円作の木造文殊菩薩・侍者像（重要文化財）が東京国立博物館に流れるなどした。

後年になって、焼却を免れた一部の千体仏が発見された。千体仏は無残にも、暖炉にくべる薪の束のように数十体ずつにまとめて縛られていたという。両手や足先、台座のないものが多かった。民間に流出した千体仏は、現在、藤田美術館（大阪市）やMIHOミュージアム（滋賀県）が所蔵している。燃料にできないような金属製の仏具は悉く売り払われ、溶かされていった。嘆願により、興福寺の再興の許可が下りるのが1881（明治14）年のことである。

奈良市が現在の観光マップに江戸時代の興福寺・春日大社の地図を重ねあわさないのは、興福寺の明治の凋落を隠そうとしているからである。享保2年（1717年）1月4日、7代目中金堂・4代目西金堂・7代目講堂・4代目南円堂・僧房・中門・南大門焼失。1819年、8代目中金堂を仮堂として再建。1871年（明治4年）、8代目中金堂が国に没収され、警察署、奈良県庁、郡役所に使用される。2000年（平成12年）7月31日、8代目中金堂が解体される。アフリカから木材を得て、2018年によりやく天平の中金堂を復元した。

京都の廃仏毀釈も激しかった。1868年7月に東京遷都となり、天皇、公家たちが眼前から消えた現実と重なり、神仏分離令に直ちに応ずる。

第五章で扱った天満宮は朝日寺（東向観音寺）の境内に菅原道真の怨霊を鎮めるために社を造営した事が起源であり、曼殊院門跡の是算国師が菅原家の出であったことから是算が初代北野別当職に任じられた。これ以降、曼殊院門跡が北野別当職を歴任することとなり、松梅院、徳勝院、妙蔵院の祠官三家の社僧が代々神官を務めていた「神仏習合」の典型であったが、1868年（明治元年）3月に直ちに北野別当職を廃止し、曼殊院門跡と距離を置いた。

そして、松梅院、徳勝院、妙蔵院の祠官三家も廃寺とした。北野天満宮にあるたくさんの仏堂は解体されていき、経王堂は大報恩寺（千本釈迦堂）に規模を縮小して移築され

4 神社制度

官社	・大中小の官幣社(神祇官がまつた神社、神 儀幣帛料を皇室費から拠出)、別格官幣社(功 臣をまつり、官幣小社と同等)	◀解説▶ 1871年、明治新政府は全国 の神社を神祇省行政下 におき、官社・諸社の別と 社格を定め、祭式を統一し た。社格制度は1946年ま で存続した。
	・大中小の国幣社(地方官がまつた神社、神 儀幣帛料を国庫から拠出)	
諸社	府県社・郷社・村社・無格社	

た。1871年（明治4年）に官幣中社に列するとともに「北野神社」と改名する。

国は1871年神祇省の元に全国の神社の社格を定め、神饌幣帛料を社格に応じて国・地方自治体で支払う事にし、神社の祭りへの協賛の形で神社経営の安定を図った。1890年（明治23年）11月29日に施行された大日本帝国憲法第28条により、国民の「信教の自由」が認められると、神道も仏教、キリスト教とともに宗教団体として国家の公認を得ることになったが、一方で、神社は国家から宗教として扱われないまま国家祭祀を公的に行う位置づけとされ、この神饌幣帛料を公的資金ではらう神社制度は1946年まで続いた。

戦後は宗教法人法に基づく文部科学大臣所轄の包括宗教法人として「神社本庁」が東京に置かれ、「神社庁」が県ごとにあり、神社本庁が社格を定めている。もとより、国・自治体からの補助金はなく役所でないが、あえて「庁」と紛らわしい名前にしているところがニッポン教らしいところだ。神社本庁は、神道系の宗教団体として日本最大であり、約8万社ある日本の神社のうち主要なものなど7万9千社以上が加盟している。

伊勢神宮が天孫降臨の天皇の祖となる場所であり、社格のトップに君臨するのだが、アマテラスの本地は大日如来、十一面観音菩薩であると、神仏習合もトップであった。



歴代天皇は、超越的な地位を維持するためか、未婚の女性皇族を神社に派遣する齋宮制度を採用し自ら参詣に行くことはなかったが、1869年（明治2年）3月11日に明治天皇が初めて参詣するとなり、一カ月前に行幸の道筋にある寺をすべて撤去せよと県令が出された。役人が明治政府をみて決めた「忖度」である。やがて宇治山田で109カ所の寺があったのだが、残ったのは15カ寺となった。多くの僧侶が武家階級（陪臣、奉公人も含むと人口の1

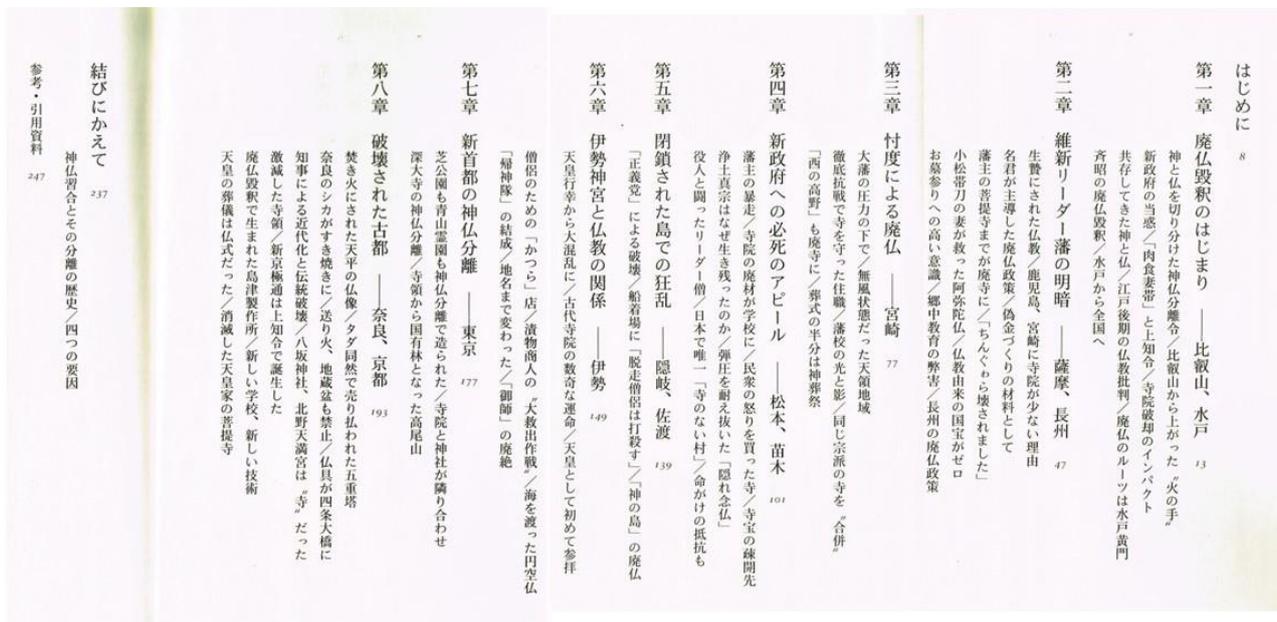
0%)と同様に職を失う明治維新であった。

鶴飼秀徳 著「仏教抹殺」文春新書 2018年刊に、「廃仏毀釈」の事例が多くあるが、山間地方、島々において、地方が明治政府を「忬度」して行われたものであり、唯一、維新を担った薩摩藩が主体的に、徹底的に「廃仏毀釈」を行っており、藩内寺院 1616 寺が対象とされ、僧侶 2964 人すべてが還俗（当時としては僧侶特権からの分離）とされている。鹿児島県内には『宗教年鑑』平成 30 年版の引用で 481 寺あるが、国宝や重要文化財の仏像は 1 点もない。以上、民がホトケを抹殺したのでない。

鎌倉仏教、特に浄土真宗は「祖先霊」拝しないので神仏習合化が行われておらず、「反・廃仏毀釈＝護法一揆」を三河・越前で起こしており、鹿児島にも積極的に寺院を展開した。真宗の僧侶、島地黙雷（1838～1911）は、神道国教化に対し政教分離、信教の自由を唱え、カミの神祇官→神祇省を宗教全般を管轄する教部省（1872～1877）に替えさせ、教部省が 1872 年（明治 5 年）に大教院（神仏合併を行う教導職の道場として設置した半官半民の中央機関）を作ると彼は真宗を脱退させ、1875 年（明治 8 年）4 月 30 日、「神仏合同布教禁止の令」が発せられ、5 月 3 日、大教院は解散、閉鎖された。

カミとホトケの両方の受難であったのは、明治維新によってパトロンを失ったことにある。民の身近にあるカミとホトケは安泰であるが、大きな寺社程、封建制度の支配階級の没落による事が大きい。

1869 年（明治 2 年）の版籍奉還によって藩主は土地と家来を政府に取り上げられ、知事になるも、1871 年の廃藩置県により藩主は東京に集められ、地方の 1 使 3 府 72 県は中央から派遣された府知事、県令が中央からの指示、中央への「忬度」よって治める事となる。「廃仏毀釈」によってホトケの権威を失墜させたのだが、それ以上に、政府は幕藩体制、士族社会を砕かなくてはならなかった。



・「廃城」にカミとホトケはいなかった。

大名が保持していた城は193、代官の陣屋127、要害20の合計340の城があった。ほとんどの城には天守はなかったが、城は地方の中心となる城下町の中心（行政、司法）であった。既に幕末には藩の財政が乏しく、城の維持修理の費用を賄い切れず放置状態であった。政府は城が旧藩士たちの反政府のよりどころとなるのを恐れ、1873年（明治6年）に「廃城令」を出し、名古屋城など40の城は陸軍の基地とし、それ以外は大蔵省の売却処分対象となった。

陸軍は兵営地とするため、建物、石垣を壊し、堀を埋めて都心に広大な土地を得た。移築して再利用されたのは、薬医門、高麗門、土蔵など小さなものであり、寺に移築されたが、天守は壊すのも大変であり、興福寺の千体仏のように薪にしかならず、姫路城天守も23円50銭（470万円）で落札されている。長岡城はあとかたもなくなったが、金沢のように学校が置かれたり、福井のように県庁が置かれたりした。

陸軍省に渡された天守を何とか残そうと中村重遠大佐はドイツ公使マックス・フォン・ブラントの後押しもあり、陸軍卿山縣有朋に建白書を出し、名古屋城と姫路城は陸軍によって修理された。明治12年のことである。その1年前には彦根城の解体足場が天皇の目に留まり解体を免れている。松江城、松本城は民間の資金集めによって廃城を免れた。文化財保護の考えも、カミもホトケもないが、天守は都市民の都市のシンボルとして江戸時代を通じて仰ぎ見てきたものであり、城下町が近代都市に生まれ変わる過程においても都市のシンボルとして必要とされたのだった。

日清戦争で日本は勝利すると民族の自覚が高揚し、明治30年「古寺保存法」が成立し、昭和4年「国宝保存法」によって文化財保護の対象が広げられ、昭和5年に名古屋城が国宝になると、秀吉の大坂城天守を模したものが秀忠の天守台の上にコンクリート造で作られる。以後、天守がなかったところにも模擬天守がつくられた。誰でも作れるようになったのである。文化財ではない、己をカミと見せたかった織田信長の安土城天主の小型版である。背の高い建物として、五重塔となればホトケに仮託するのだが、天守となるとカミなのであろう。



明治初年の名古屋城本丸内部と大・小天守 米野より

名古屋城天守は空襲で燃えたが、昭和34年にコンクリート造で外観復元された。都市の戦後復興のシンボルとして全国に天守が建つが、史跡保護の観点からコンクリート造は禁止される。そして今、現天守を壊して名古屋城天守を木造で復元すると名古屋市長河村たかしが言い出した。危険な木造天守復元は現代の法に照らしてできないのだが、竹中工務店は名古屋市と請負契約を結んだ。木造で新築しても文化財では当然なく、またカミもホトケもない。あるのは河村たかしの「面白い」だけである。

第十章 民主主義と「カミとホトケ」

民主主義は1946年憲法発布からであり、その草稿はアメリカ占領軍から渡されたものと今の教科書にははっきり書かれている。50年前には無かったことである。



しかし、明治政府は国の近代化を推し進めるにあたって、民主主義(フランス人のポアソナード1873年(明治6年)来日)を含めた西洋思想を既に取り入れていた。西欧化主義への反動として明治10年代に民族主義(三宅雪嶺、陸羯南)が現れると、その力を不平等条約の解消、外国への領土拡張に向け、自由民権運動が吹き荒れ、1887年にドイツ人のロエスレルが草稿を書いた「大日本帝国憲法」が1889年(明治22年)に成立した。天皇は神聖不可侵の元首であり、統治権、統帥権を持ち、国民は天皇の臣民であるが、天皇の名のもとに行政は内閣が行い、立法は議会が行い、司法は裁判所で行う姿は、西欧にあるように王を頂く三権分立であった。

そして「宗教の自由」も謳われた。「カミとホトケ」は神仏分離1868年(明治元年)、修験道廃止1872年(明治4年)によって、基層信仰として心の奥底に潜り込むしかなかった。

まえがき	目次
序章 山岳信仰とは何か	3
第一章 出羽三山——死と再生のコスモロジー	34
第二章 大峯山——修験道の揺籃の地	68
第三章 英彦山——西日本の山岳信仰の拠点	102
第四章 富士山——日本人の心ふるさと	132
第五章 立山——天空の浄土の盛衰	161
第六章 恐山——死者の魂の行方	195
第七章 木曾御嶽山——神がかりによる救済	220
第八章 石鎚山——修行から講へ	250
あとがき——修験知との出会い	287
参考文献	291

神宮寺は廃され、大名と同様に広大な寺領も没収されるも、寺は公家、武家に替わる新たな信者を得て復活する。民法では、戸主権を絶対化した家父長的家族制度とし、ポアソナール

が持ち込んだ個人主義、人権を採用せず、儒教に傾いた。

これが、万世一系の天皇を祖とする疑似・家父長制度（1890年教育勅語）と重ねて日本は国家主義に突き進み、日清戦争 1894～95年、日露戦争 1904～05年、第一次世界大戦 1914～18年に勝ち、1931年（昭和6年）満州事変に突入する。

明治政府は家族主義的国家観を、「教育勅語」に込め、子供たちに教えた。私の大正生まれの親父はそらんじていた。「天皇陛下バンザイ」と叫んで戦地で死ぬことは、そういうものだと言わなかったと言うのである。天皇が宮中三殿で戦勝祈念を行うのは当然だと思うが、坊主たちも集団で戦勝を祈念する伊勢参りをしたとなると、「カミとホトケ」を超える宗教の力が儒教、朱子学にあったのだろうか。

・ 儒教は宗教か？

この問いを發するには、宗教とは何か定義されていないといけない。広辞苑では、「神または何らかの超越的絶対者あるいは神聖なものに関する信仰・行事」とある。日本語の「宗教」は、仏教用語であり、究極の原理や真理を意味する「宗」に関する「教え」を意味しており、仏教の下位概念として宗教という言葉が存在していた。

幕末期に英語の Religion の訳語が必要となって、「宗教」一般をさす語として採用され、明治初期には、宗教と言え、キリスト教をイメージして受容され、今にいたる。宗教という言葉は、こうして仏教の上に立つ概念となり、キリスト教、イスラム教を世界宗教と言ひ、ユダヤ教や神道、ヒンドゥー教など特定の地域や民族にのみ信仰される宗教は民族宗教と呼ばれる。

宋代に起きた、儒教の朱子学はより哲学的な宋明理学体系となり、朱子学は政治と密接な関係を持ち、科挙受験のために必要不可欠となった。「修己治人」（有徳者が為政者となる）や「修身・齐家・治国・平天下」（自分・家・地方を治め得る人物が天下を握る）「經世済民」（世を治め人々を救う）といった教えを江戸幕府は取り入れたが、そこには死後の世界の安寧を願う信心はなく、宗教とは言えない。

中国では、儒教・道教・仏教の一致をさす「三経一致」は、隋の文仲から言われており、儒教は道教と並んで古くから宗教と意識されている。



道教は儒教より新しく後漢末に老子の思想として生まれるが、雑多の民族信仰が時代の経過と共に積みあがった多神教である。不老長生を求める神仙術や、符籙（お札を用いた呪術）・齋醮（亡魂の救済と災厄の除去）、さらに仏教の影響を受け

て經典・儀礼なども作られた。唐代に仏教が広まり一時衰えるが、中国の民族宗教として今にいたっている。道観（道教のお寺）に行くと、仏教のホトケも並んでいる。儒教は「孔子廟」を持つが、私には道観の一形態に見えた。中国では、祖先霊を祀り、「天」をあがめる。日本列島に稲と共に入って来た信仰なのだろうか。

2010年に中国で行われた調査によれば、14億人が何らかの形で民俗宗教や道教に帰依しており、7億5400万人（56.2%）が祖先崇拜で、2億1500万人（16%）が神の存在を信じ、1億7300万人（13%）が民俗宗教と区別が付かない程度にまで道教を取り入れているという。同調査では1億8500万人（13.8%）が仏教徒とある。

こうして中国の宗教を振り返ると、万世一系の天皇を祖とする疑似・家父長制度からの国家主義は、ヒトラーは天皇ではないが、ナチスの「ドイツ民族至上主義 1919年バイエル反革命」と通じるものであろう。従って、天皇を中心とした日本民族のイデオロギーを作り上げるに40年で事足りた。プーチンがロシア至上主義でウクライナ侵略するのもおなじである。ロシア正教会がプーチンを支持するのも、戦時中の日本宗教界と同じだ。

・治安維持法

「カミとホトケ」を蹴散らしたイデオロギーは、1925年（大正14年）に男子普通選挙法と共に法制化される。安倍首相が2013年に決めた「秘密保護法」の時に、「戦前の治安維持法での弾圧と同じことが起きる。」と、治安維持法が改めて話題になった。

4 治安維持法の公布

【東京日日新聞】1925年3月30日

<p>治安維持法</p> <p>第一条 国体ヲ变革シ又ハ私有財産制度ヲ否認スルコトヲ目的トシテ結社ヲ組織シ又ハ情ヲ知りテ之ニ加入シタル者ハ十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ処ス</p> <p>……</p> <p>第二条 前条第一項ノ目的ヲ以テ其ノ目的タル事項ノ実行ニ関シ協議ヲ為シタル者ハ七年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ処ス</p> <p>第四条 第一条第一項ノ目的ヲ以テ騒擾、暴行其ノ他生命、身体又ハ財産ニ害ヲ加フヘキ犯罪ヲ煽動シタル者ハ十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ処ス</p> <p>（官報）</p>	<p>第五〇議会における衆議院議員 星島二郎の反対演説</p> <p>諸君、我々は普通選挙を断行せんとし、貴族院改革を致さんとする現政府を支持している一人であります。然るにその与党に属する私どもが突如この法案にしかも反対の意志を以て質疑しなければならぬ……この法案の一条で、日本の大部分の結社を踏みつぶすことができる。もし普通選挙がしかれた後におきまして、無産政党ができるならば、これを解散し、これをふん縛ることもできる……</p> <p>（衆議院議事速記録）</p>
--	---

▲解説 治安維持法第1条にある「国体ヲ变革」とか「私有財産制度ヲ否認」が意味するものは、天皇制の打倒と資本主義体制の否定である。普通選挙の成立と日ソ基本条約締結による日ソ国交樹立が社会主義・共産主義の拡大を促すことを恐れたのである。しかし、衆議院議員星島二郎の演説にあるように、「結社」の組織・加入を犯罪行為とし、思想まで弾圧するこの法律はまったく新しい弾圧法となった。

「国体の变革を目指し」「私有財産の否認」する結社を取り締まる法である。

帝国憲法 3 条の「天皇の地位は神聖にして不可侵」は、刑法で「不敬罪」が定められていたが、この法に依って団体・結社をも縛る事となった。その後、1928 年（昭和 3 年）6 月 29 日公布の緊急勅令で修正が加えられた。さらに 1941 年（昭和 16 年）にも全面改正され、1945 年（昭和 20 年）10 月 15 日に廃止された。

大正デモクラシーに共産主義思想の拡大はない。1930 年代前半にこの法によって左翼運動は壊滅した。

1935 年（昭和 10 年）の大本教への適用（大本事件）など新宗教（政府の用語では「類似宗教」。似非宗教という意味）の取り締まりに用いられた。軍部が 1931 年満州事変を起こし、大陸侵攻から大東亜共和圏へと日本領土の拡大を目指すとともに、天皇を頂点とする国家神道の存立を脅かすことが、国体の変革に当たるという解釈の下に取締りが進められたのである。大本以外にも PL 教団、創価教育学会、天理本道、ホーリネス系キリスト教団など弾圧を受けた団体は多い。

1917 年（大正 6 年）の十月革命（ロシア革命）による共産主義思想の拡大を脅威とみて企図されたと教科書に書かれているが、おかしい。軍の拡大主義と共に、日本の資本主義の成長を追わないといけない。

1905 年日露戦争後に日本は、列強の中国大陸の分捕り合戦に関東州から加わり、1918～22 年にシベリア出兵をし、失敗をする。1925 年（大正 14 年）列強からの圧力があり日ソ基本条約が締結され、ソビエト連邦との国交を樹立させた。



1893 年に東海道線を全線開通させた後、わずか 15 年で日本列島を鉄道につなぐ。輸出は生糸一本であったのが、豊田佐吉の動力織機から軽工業が国内に起き、筑豊炭田の開発と 1901 年創立の官営八幡製鉄所によって、重工業が形成された。

日本の満州支配は、大連、撫順炭田、奉天、長春からロシアの敷設した鉄道の拠点ハルビンへと広げられた。

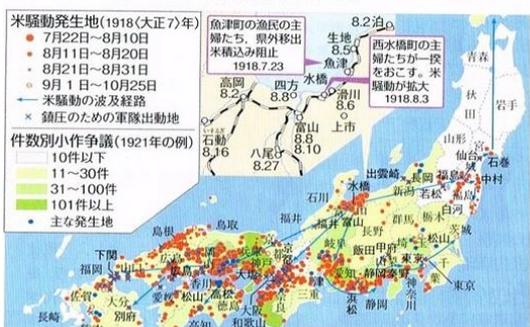
日本は日露戦争から第一次世界大戦 1914~18年へと、多大な戦費を使う事になる。そこで戦争景気に沸き、日本は一気に工業化が進み、三井、三菱、住友の三大財閥だけでなく、安田、さらに浅野、川崎、古河、大倉と八大財閥が日本資本主義を担うことになる。



2 米騒動 2-① 小売米価の高騰 1918年7~10月 ●名古屋の米騒動 1918年8月11日鶴舞公園に5万人



いとう呉服店(松坂屋)の前、広小路で群衆は騎馬警官と対峙する。



工業資本の急速な拡大と、シベリア出兵を睨んでの米問屋の米の売り惜しみが、米価を3倍に押し上げ、食べられない都市民の暴動を引き起こした。鶴舞公園が公園として輝いた一瞬であった。

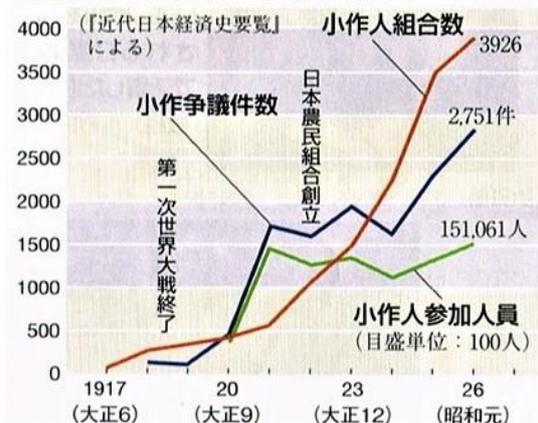
1920年には戦後恐慌がおき、1923年に東京は関東大震災に見舞われる。農地は明治時代になって売買が認められ、税が米から金になった事により、資本をもった寄生地主が誕生し、農民は小作人に落ち、あぶれた農民が工業都市に出て工場労働者となった。都市は急速に拡大し成金があふれ、大正デモクラシーが都市を華かに彩った。

そのただ中、1925年(大正14年)に男子普通選挙法とセットでの治安維持法の制定であった。

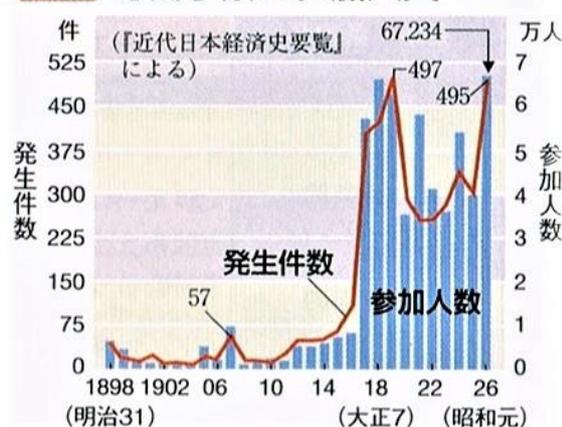
すなわち、治安維持法の「私有財産」とは、一部の財閥が資本を握ることであった。日本の国力と共に腹を膨らませ、1927年(昭和2年)日本の金融恐慌、1929年(昭和4年)世界恐慌は、無事乗り切る事ができたのだった。日本の資本主義の拡大と共に、格差社会が拡大

し、権力者と財閥が、大衆を押さえるに「共産主義者だ。赤だ。」とラベルをつけることに、治安維持法が利用されたのだった。

3-① 小作争議と小作人組合



2-② 労働争議と参加人員



世界のブロック経済化の中で、日本は大東亜共栄圏を財閥と共に打ち出す。日産、日窒、日曹、森、理研と新しい財閥が生まれた。

日中戦争（満州事変、シナ事変）を起こし、中国大陸を進軍する軍部は、1932年五・一五事件、1936年二・二六事件とテロ、クーデータを起こし、第二次世界大戦に至る。秘密警察「特高」と「隣組」に国民は監視され、「カミとホトケ」は消えてしまった。まさに、専制国家の出現である。300万人の死者をだし、日本帝国は、1945年8月、米、露、中国の連合軍に全面降伏する。

・ 仏教ファシズム

明治政府は、憲法に「信教の自由」を入れると共に、「国家神道」は宗教でないとして、現人神天皇による祭政一致の国体の憲法を作り上げた。それが、治安維持法により「国体の変革」を否定すると、軍部は神道ファシズムに突き進み「天皇陛下バンザイ」と叫び戦死することを美化した。

人を救う事、殺生をしない事が仏教なのに、仏教界もファシズムに流れていく。それをここで追っていく。

歴史上、宗教によって起こされた戦争は多い。エルサレム奪還の十字軍は、ブッシュ大統領が「イスラム原理主義との戦いは、十字軍の戦い。」言う事によって、改めて戦争と宗教の繋がりを思い起こさせることになった。イスラム側も「ジハード（イスラムを守り抜く）」と呼び、2001年のアメリカ同時多発テロから2021年のアメリカ軍のアフガン撤退まで20年に渡って戦争が続けられた。

大東亜戦争は、今まで見てきたように宗教によって起こされた戦争ではないが、神道だけでなく、仏教もキリスト教も積極的に参戦していった。鶴飼秀徳著 仏教の大東亜戦争 文春

新書 2022年7月刊 を元を書いていく。

はじめに	大仏はどこへ消えた？／本願寺の門に「挺身殉国」の立看板／軍用機も献納 国家にすり寄った仏教界
21	廃仏毀釈からのサバイバル——明治維新
	仏教への「逆風」／領の没収／尊王と献金／門士の遺言に「皇国の忠良たる」 ／新政府へのロビー活動／巴丹島が増上寺の寺領に
	島地黙雷と大教院
	岩倉使節団と合流／キリスト教への対抗／大教院と仏教界の巻き返し／肉食、 妻帯の自由で解放され／寺社ネットワークを利用した明治政府／庶民による大 教院批判／内村鑑三の事件の衝撃
33	進撃する仏教——日清・日露戦争
	日清戦争と大陸布教
	真宗義田、大陸に進出／従軍布教の開始／僧侶が義勇兵に
	日露戦争——仏教の帝国主義化
	鈴木大福、井上四丁の止戦論／真言宗、日蓮宗が戦勝を願う新編／陸軍による 戦時協力命令／出征僧侶の戦死／仏門から出た婦人運動
	植民地支配と仏教
	満州という「開教区」／先行する本願寺派、出陣した曹洞宗／移民とともに寺 院が増える／台湾布教は曹洞宗がリード／日本語学校を併設／総督府が主導し た朝鮮の仏教政策／奥村兄弟の活躍／朝鮮總督府の宗教統制／博文寺の運命
93	大東亜戦争と皇道仏教
	戦争に熱狂する仏教界
	「天皇は阿彌陀仏である」／事変勃発で天皇に御機嫌伺い／「大任状」／皇軍 開団……各宗派の勤王／宗門トップが戦争協力を訓令／従軍僧侶も戦死に参加 ／「殺多生」と日蓮主義／日蓮宗僧侶が起したテロ事件／仏教界トップも 前線で鼓舞／従軍僧の座談会
	戦闘機の献納競争
	最も多いのは浄土宗／軍艦建造に巨額の寄付をした真宗大谷派／東条夫人も紙 製の兵器も献金運動／大谷健児団
	軍人たちの仏教信仰
	松井石根愛蘭の「興亜福音」／悪逆平等の思想／参拝する軍人たち
	寺院に建てる戦争の記憶
	多くの寺に天牌が／戦死者に与えられた特別な戒名／寺社に砲弾を奉納／境内 が軍の駐留地に／字堂森間の拠点として「軍軍衣」としての法衣
	アメとムチの仏教統制
	仏教の自由よりも土地が大事？／再編をまねかれた浄土真宗
161	仏像も鐘も武器と化した
	金属供出と空襲
	山本五十六へ祝電／鐘の音が消えた／世界最大級の梵鐘も軍需工場／コンク リート製の鐘／解体された大仏たち／灯籠、狛犬も回収／複製像まで献上され た／仏像盗難／大量の文化財が民家の土蔵に／東大寺の抵抗／疎開を担当した 受刑者たち／空襲に備える京都／返り火の消え夏／増上寺空襲／空襲の犠牲 ／五〇〇カ寺近くが破壊された
	反戦の僧侶
	大連事件に連座／反戦を叫んだ楠本等の文
	農地改革と寺の「敗戦」
	G H Qの改革が直撃／コメ半依分が四分の三の土地を失う
	僧侶たちの戦争体験
	戦車部隊で「このクソ坊主」と殴られた／北川一有さん（元田原院戦車隊長） 除隊後／東京大空襲で被災／甲斐達人さん（保元寺住職） 特攻隊員を供養して／宮澤正順さん（西福寺住職）
273	結びにかえて
280	参考資料

現在の信者の数を文化庁から引っ張り出すのは、かなり怪しくなるが、文化庁の寺の数で示すと、宗門の勢力がわかろう。浄土真宗（東、西、高田、興正、仏光など）が江戸時代の檀家制度を引き継ぎ、トップであり2万を超える。二位が曹洞宗14604、三位が浄土宗7125と続く。これは、同時に明治の廃仏毀釈を乗り越え、仏教ファッシュズムに走った成果でもあるとも読みとれる。

維新時の西本願寺第20世門主大谷広如は、東本願寺と共に、朝廷に26000両を寄付し、1868年鳥羽伏見の戦いでは僧侶と門徒を御所の警備に送った。彼の勤王の方針がその後の教団の行き方を決めた。彼の遺言「真俗二諦しんぞくにたい」は、国家が行う戦争人殺しと不殺生を重んじる仏教の新理論として仏教界に広まる。端的に言えば、「あの世では仏に帰依するが、この世では天皇に帰依せよ。」と言うのである。浄土経の教えに俗世界の「天皇による救済」などはありえないが、彼は平田神道の勤王に凝り固まっていた。



世俗に対しての「神仏習合」の教え（神道、儒教、仏教）は、知識人の仏教の僧によって語られていたので、これ自体は不思議には思わないが、西本願寺の参政であった島地黙雷（1838～1911）は1872年（明治5年）門主の依頼により、岩倉使節団に合流する。1年半に及ぶ洋行であった。西欧諸国の要求で1873年2月にキリスト教禁止が解かれた事によって、岩倉は「西欧文明は欲しいがキリスト教は日本の国体を崩すことになる。」と案じていた。島地は仏僧として初めてキリスト教を現地で体感し、エレサレムにも行っている。オスマントルコではイスラム教国の裁判制度の知識を得

て、インドでは釈迦の仏跡に参拝もした。

島地は「パラダイスを目指す一神教のキリスト教は、阿弥陀仏ただ一仏に絶対的に帰依し、必ず浄土に行けるといふ浄土宗と似ている。浄土宗、浄土真宗でもってすれば、キリスト教に日本をおかされることはない。」と、岩倉はじめ政府の長州勢に説いた。島地も周防国（山口県）佐波郡の出身だった。

明治政府は 1868 年に神仏分離令を出した後、1872 年に大教院を設置して神仏の合同布教に舵をきるが、島地は「神道国教化」に反対して、浄土真宗を大教院から脱退させた。政教分離、信教の自由を主張し、政府によって神道の下に置かれた仏教の再生をはかり、国の宗教制度を変え、信教の自由は明治憲法に明示され、皇国日本の国体における「神道は宗教でない」とされた。

	1895-1903 日清戦争	1904-1909 日露戦争	1910-1918 第一次大戦	1919-1930	1931-1936 満州事変	1937-1945 日中戦争	不詳	計
シベリア	2	0	0	1	0	0	0	3
樺太	0	7	2	4	0	0	26	39
台湾	7	9	6	16	5	14	6	63
朝鮮半島	1	9	33	29	23	13	24	132
満州	1	11	3	4	15	24	11	69
中国	1	3	1	1	1	35	5	47
南洋	1	0	0	2	5	7	0	15
合計	13	39	45	57	49	93	72	368

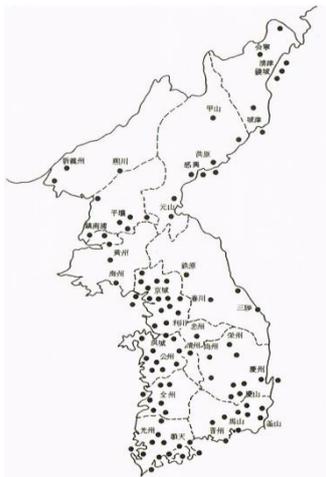
表1 浄土真宗本願寺派における時局別の植民地開教状況
 (出所：長谷川尚人『近代西本願寺の別院本堂建築における「印度佛教式」意匠について』2012年)

日清戦争宣戦布告後 6 日にして、西本願寺は大洲鉄禅を部長として戦争対応に入る。最初は軍隊慰問使であったが、軍と共に動く従軍僧を大陸に派遣する。戦死者の弔い、兵隊の心のケア、捕虜の撫恤（ぶじゅつ、捕虜への慰問、説法）が役割であった。真宗は「怨親平等」の考えから敵味方も平等と言ひ、戦勝後の大陸支配に備えた。

日露戦争が始まると、陸軍から「僧侶教師従軍ニ関スル件」の通達が出され、日露戦争の正統性、戦時協力が求められた。神道、仏教、キリスト教、宗教学者は「大日本宗教家大会開催趣意書」をまとめ、それに答えた。「日露戦争は、わが国の安全と東洋の平和実現の為であり、世界文明や人道の為である。決して、宗教や人種の違いによって引き起こされたものでない。宗教者は宗教や人種の違いに関係なく、互いに公正の信念に訴え、この戦争の真実を世界に表明して、速やかに平和を実現したい。」

戦争を平和の為に行うというのは、NHKの大河ドラマで繰り返されるセリフであり、プーチン大統領を支持するロシア正教とも同じ根本的ロジックである。矛盾としか言いようがない。戦争で勝った征服者にとっての平和であり、敗者には怨恨こそ残れ、心に平和など来るわけない。

日本は、帝国主義により朝鮮、台湾を併合し、満州国を立てた。これらの植民地政策として、仏教は寺を作る。「開教」と呼ばれた。



曹洞宗における朝鮮半島開教分布地図
『曹洞宗海外開教傳道史』をもとに作成

とりわけ、浄土真宗の寺が多い。曹洞宗がそれに続く。皇国日本を象徴する神社も作られたが、観音信仰（道教、仏教）をもつ台湾人には禅宗の方が親和性は高かった。既存の道観、寺院を、曹洞宗の末寺 100 か所として、一気に広げた。曹洞宗の開教寺院には日本語学校も作られる。

日露戦争後 1910 年（明治 43 年）に、日本は朝鮮総督府を設置し朝鮮を統治下においた。「朝鮮の歴史的寺院の保存・管理を目的」とした「寺刹令」を發布する。これは、植民地政策として、日本の本山制度に範をとり宗教を日本政府の支配下に置くと言う、共産党の宗教支配と同様に恐るべきものであった。戦時下の 1940 年になると、日本でも「宗教団体法」が作られ「信

教の自由」はなくなった。

1919 年（大正 8 年）に、朝鮮で三・一運動が起きる。大韓帝国初代皇帝李太王の葬儀に合わせ、朝鮮の仏教、キリスト教、天道教の宗教者が日本政府からの独立宣言したのであった。運動は武力鎮圧され 1 万人が逮捕された。これによって、朝鮮人の皇民化（隷属）が公然と行われる。天照大神と明治天皇を祭神とする官幣大社・朝鮮神宮を作る。設計は伊藤忠太であった。



1932 年（昭和 7 年）には、1909 年に暗殺された伊藤博文の菩提寺・曹洞宗春畝山博文寺が作られる。伊藤は自宅近くの神道式墓所に埋葬されており、菩提寺はなかったのにである。朝鮮人に有名な伊藤博文を持ち出し、総督府、朝鮮神宮、博文寺の 3 点でソウル市街を包囲したのであった。設計は伊藤忠太であった。



宗教で朝鮮人の心がかめないので、壮麗な建築を用いたのだが、上手く行くはずはない。

軍部と文部省は、仏教連合会を通じて各宗派向けに様々な戦争協力を求めていく。国家の方針は宗門トップから末寺に、檀信徒に伝えられた。従軍僧は語学を生かしてのスパイだけでなく、銃を取った。浄土真宗は「一殺多生」と、殺すことを肯定した。

日蓮による法華經の教え天皇国家の中でとらえなおし、日本人の思想や生活意識に変革をもたらし、政治は経済、文化に至るまで広く影響を及ぼそうとする宗教運動「日蓮主義」を田中智学が興した。世界全面戦争に勝ち、最終的には天王が統治する王道楽土が出現するというのである。戦争を肯定する仏教ファシズムである。

1932年（昭和7年）には、日蓮宗派の僧侶・本田日生は、右翼テロリスト集団「血盟団」を結成し、日銀総裁や大蔵大臣を務めた井上準之助、三井財閥総帥の団琢磨を暗殺し、国を殺伐とさせ、直後のクーデター一五・一五事件に繋がる。



1937年（昭和12年）7月7日盧溝橋事件から軍部は中国全土に戦線を拡大する。国民精神総動員令が發布され、「挙国一致」「尽忠報国」「堅忍持久」「欲しがりません勝つまでは」「贅沢は敵だ」の標語が街に掲げられるようになった。

西本願寺23世門主・大谷光照は、日本軍が虐殺を起こした南京市への同年12月17日の日本軍の入城式に参加し、陸海軍合同慰霊祭を勤めた。前線に自ら行き、日中戦争を鼓舞したのである。

彼は、1938年の消息（歴代門主文書）において「国家の事変に際し進んで身命を鋒鏑におとし一死君国に殉ぜんは誠に義勇の極みといつべし。一家同族の人々にはさこそ哀悼の悲しみ深かるべしと覚ゆれど長くも上聞に達し代々伝わる忠節の誉を喜びいやまし



に報国の努めにいそしみその意志をまっとうせらるべく候」と書いた。死をもって天皇、国に殉じよと説いたのである。親鸞が著した「教行信証」親鸞の伝記「御伝鈔」から天皇に不敬であると文言を削除した。彼は天皇の従弟であった。戦後に戦犯に名があがるも逃れた。

禅は武士道に通じ、南無阿弥陀仏と唱えれば浄土に行ける浄土真宗ともども、「死」に直面する軍人に広まった。陸軍大将・松井石根は善通寺に「興亜観音」仏を納めた。「興亜」とは、帝国思想によるもので仏典にあらうはずがないが、「怨親平等」と、敵味方に関係なく、極楽に行けるとしたのである。「死」を受け入れる「諦観」でしかない。



天牌と、戦時戒名の彫られた位牌

戦死者は親族とは別に墓が建てられ、格の高い「院」「居士」が与えられた。戒名には「義」「烈」「勇」「忠」「國」「誠」などの国粹主義を連想する文字が並ぶ。

どの寺にも「天牌」が祀られた。天皇の位牌である。明治天皇の崩御の後に始められ、大正天皇も続き、生きている昭和天皇に対しては「今上天皇宝祚無窮」「今上陛下聖寿万安」と書いたものであった。

銃後の活動として、各宗派は戦闘機、軍艦の献納合戦を行う。朝日新聞も300機の戦闘機費用をまとめる。金属の抛出求められ、慶長以後に铸られた梵鐘が全て消えた。燭台、香炉、花瓶はもとより、金属で铸られた仏像も消えた。



各地の寺院で仏具や梵鐘が集められた（四天王寺提供）

1940年（昭和15年）宗教団体法によって、

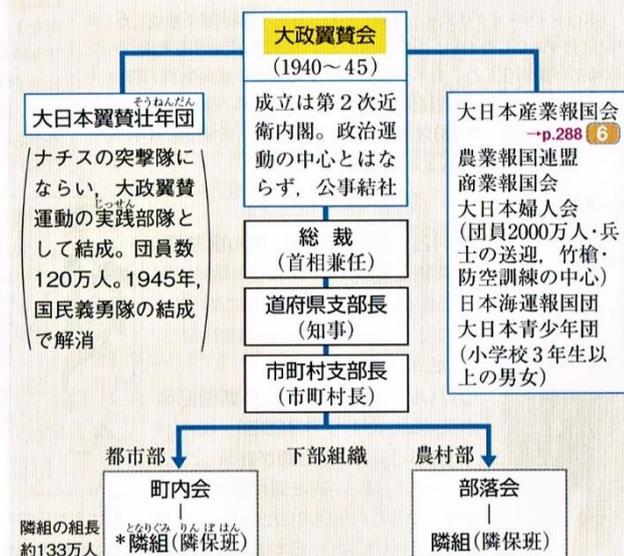
「信教の自由」がなくなった。政府は代わりに半世紀前の「上知令」によって没収された土地を寺に戻すとした。土地が戻る事に沸きあがり、「信教の自由」が消えることにもはや仏教宗派は関心を持たない程、仏教ファシズムに染まっていた。

国家神道は国体の祭政一致の「道」であり、宗教では無かったのであるが、「国教」となる。

「国教」故に、宗教団体法から外された。国の方針は一宗祖一宗派であったが、元来、宗教団内のイデオロギー、財産管理など様々な理由で分裂してきた経緯があったので、混乱を生じた。浄土真宗は国に対して強く、10派が認められた。仏教は都合13宗28派、キリスト教はカトリックとプロテスタントの2派、教派神道は金光教、天理教、黒住経など13派となった。

大政翼賛会が生まれ、日本は比較して圧倒的な財を持つアメリカ相手に戦争を起こし、大方の予想通り負ける。

3 大政翼賛会の成立



(吉川弘文館『国史大辞典』による)

・戦後日本と「カミとホトケ」

日本国憲法は、1946年（昭和21年）11月3日に公布され、1947年（昭和22年）5月3日に施行された。憲法20条に「信教の自由」がうたわれた。



日本憲法 第二十条

信教の自由は、何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない。

- ② 何人も、宗教上の行為、祝典、儀式又は行事に参加することを強制されない。
- ③ 国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない。

憲法20条1項後段、2項、3項、および89条は、政教分離原則を規定しているところが大日本国憲法と違う。「信教の自由」は明治憲法でもあった。明治政府が「神仏分離」を命じ「神仏習合」であったカミとホトケが分離され、列国の要望によりキリスト禁教を解いた後すぐに、浄土真宗の僧侶・島地黙雷（1838～1911）は、国家神道に反対し、政教分離、信教の自由を主張した。

大日本帝国憲法 第二十八條

日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス

見られるように「政教分離」はなく、「日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ」とある。「天皇の臣民として、国の秩序を妨げず、臣民の義務を果たす」なら、信教の自由があるとされた。皇国日本が日中戦争に突入すると、国家神道は宗教となり、他の宗教と別格となった。その反省から「いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない。」「国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない。」とされた。

安倍首相は旧統一教会の雑誌の表紙を飾り、護国神社に「総理大臣」として参拝するのは、
国、国会議員としてオカシイのだが、

個人が持つ「信教の自由」

- 内心における宗教上の信仰の自由
- 特定の宗教を信じる自由、信仰を
変える自由、宗教を信じない自由。
- 宗教的行為の自由 - 礼拝、祈祷、
その他の宗教上の行為、祝典、儀式
または行事を行い、参加し、もしく
はこうした行為を行わない自由、
布教の自由。
- 宗教上の結社の自由 - 宗教団体を設立し、加入する自由、活動する自由、または加
入せず活動しない自由



との、兼ね合いの中で安倍という個人の行為であり、「違憲ではない」とされてきた。

今は、占領軍による英文の下案が公開されている。

Article XIX.

Freedom of religion is guaranteed to all. No religious organization shall receive special privileges from the State, nor exercise political authority.

No person shall be compelled to take part in any religious acts, celebrations, rites or practices.

The State and its organs shall refrain from religious education or any other religious activity.

「民主主義」は占領軍によって国民に与えられたのであり、「自由」と同様に、権利として得るための血を流す闘争をしておらず、戦後 70 年を経ても身につけていない。

一方「信教の自由」の方は「カミとホトケ」の 1500 年の歴史があり血中のものとなっている。国体としての具体的な宗教名はないが、漠然とした日本教「カミとホトケ」が「王、臣、民」の社会を、なんとなく「お上」として君臨してきたので、憲法にカタチとしてある「民主主義」より、日本人を縛る力を持っていると考える。政治家は、そこを巧みに使い、票を集め、国を動かしている。

旧統一教会の集金の武器は「7 代前からの悪事のタタリがあなたを困らしている。」であることから、「カミとホトケ」の中の「祖先霊」「悪霊」は、目に見えないが今も日本教の中で力を持っているのだろう。

文化庁には、日本の全ての宗教団体が登録されている。一神教のキリスト教徒からは、日本は古事記「八百萬神、天(あめ)の安(やす)の河原に神集(かむつど)ひ集ひて」であることから、「無宗教」ともとられている。人としての安心立命を求めるのが「宗教」であるなら、今の日本は「新興宗教ラッシュ」とも言えよう。

宗教法人数

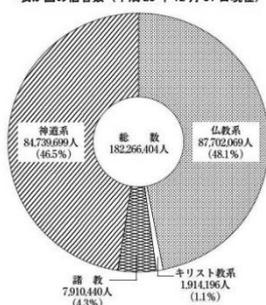
(令和2年12月31日現在)

所轄	系統	区分						合計
		包括宗教法人	単位宗教法人				小計	
			被包括宗教法人			単位宗教法人		
			文部科学大臣所轄包括宗教法人に包括されるもの	都道府県知事所轄包括宗教法人に包括されるもの	非法人包括宗教団体に包括されるもの			
文部科学大臣所轄	神道系	123	20	-	1	68	89	212
	仏教系	156	176	-	4	147	327	483
	キリスト教系	66	41	-	1	220	262	328
	諸教	26	35	-	-	63	98	124
	計	371	272	0	6	498	776	1,147
都道府県知事所轄	神道系	6	82,105	138	109	2,003	84,355	84,361
	仏教系	12	73,692	67	165	2,636	76,560	76,572
	キリスト教系	7	2,760	30	27	1,668	4,485	4,492
	諸教	1	13,578	-	8	385	13,971	13,972
	計	26	172,135	235	309	6,692	179,371	179,397
合計		397	172,407	235	315	7,190	180,147	180,544

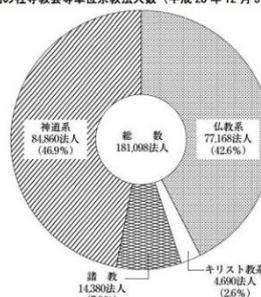
(備考)

○ 全ての信者数は、**182,266,404人** (前回 188,892,506人から△6,626,102人の減)。

我が国の信者数 (平成28年12月31日現在)



我が国の社寺教会等単位宗教法人数 (平成28年12月31日現在)



統計では、神道系と仏教系と分けているが、これは信者数と同様に、自己申告であり信用はできない。旧統一教会はキリスト教系を名乗っているが、だとすると、マホメットもキリスト教系になってしまう。

信教の自由によって、「神仏習合」は蘇った。いわゆる山岳信仰と呼ばれるものであり、神宮寺・鎮守社の復活ではない。明治に廃仏毀釈によって壊された寺、社の復活はない。吉野の大峯山、出羽三山、木曾御岳山、富士山、石鎚山など、女性にも修験道が解禁され人を集めている。



占領軍の政策で、「武器を持たせない」と共に資本主義の新たな展開がされた。「財閥解体」と「農地改革」である。財閥はやがて復活を遂げるが、「農地改革」によって農村の姿はまったく変わる。大地主が消え、自作農が増え、農村と都市を基盤に社会党が伸長した。

「カミとホトケ」は、「農地改革」によって大打撃を受ける。寺社は金貸しを行い、資本を集めて大地主になっていたのだが、収入の道が閉ざされ、「葬式仏教」頼りとなってしまった。檀家数を何百と集めないと宗教だけでは自立は出来ず、兼業農家と同様に兼業寺となっていく。



今は、地方の荒廃が著しく、都市に人が集まる。山間の人口は減る一方であり、地方の寺社は維持できなくなっている。無人の寺社が増えている。

日本人の人口総数が減る中、どんな宗教でも都市の中で新たな展開をみせないといけませんが、教師の高齢化が進み既成宗教は行き詰っている。逆に、怪しげなカルトこそがネットで簡単に拡散している。お伊勢参りに久しぶりに行ったら、若い人々が「パワースポット」に群がり、写真を撮り SNS で拡散していた。「カミとホトケ」は、今の若い人たちにも健在だと知った次第である。この何気ない軽さこそ「カミとホトケ」のニッポン教なのだ。

●おわりに

この著述の「神仏習合」の中核は、義江彰夫著の「神仏習合」岩波出版 1996 年刊によっている。

彼の著述は 8 世紀多度山神宮寺から 15 世紀本地垂迹説までである。

そのまとめは「神祇信仰が日本の基層信仰としてあり、そこに普遍宗教の仏教が波となって入って来た。古事記のケガレとは、仏教の罪と同質の負の存在として全面的に払拭しようという論理に支えられており、王権神話が仏教に比すべく、必死に普遍化と文明化を遂げた結果だ。

呪術をもった密教が入り、10 世紀末には「怨霊」「ケガレ忌避」観念が確立する。中世に殺生を仕事とする武士が現れ政権を握ると、鎌倉仏教、とりわけ浄土信仰が広がる。神社は記紀神話を密教化し、神宮寺の儒・禅僧が神祇信仰の中心となり本地垂迹説が民に広がる。

西欧では、キリスト教という普遍信仰がケルト・ゲルマンの基層信仰被り、ゲルマンの信仰は「父（神）と子（イエス）と聖霊、三位一体」の聖霊の中に埋没するが、日本教においては、仏教が神祇信仰を排除・抑圧することはなかった。開かれた系で結ばれた日本ならではの「神仏習合」であった。」と、結ぶ。

確かに、神話の禊（みそぎ）はケガレを払う事であり、相撲は神事であると今も塩をまく。スサノオは糞や尿からできた食物に怒り、ホトをさして織女は死ぬ。黄泉の国はケガレに満ちたところで、イザナキは桃をなげて逃げる。これは、仏教でなく道教の影響ではないか。糞は肥料となり、生き物は死して腐る事は十分知っていた古代人が道教の不老不死・仙境をとり入れたように私には見える。

民の信仰は義江氏のいう「罪」であり、「負」なのであろうか。

苦しい生活の中に生きる民は「お浄土」を求め、都市では疫病退散を願う天王まつりを行い、楽しんだ。

信長は天下を取って、安土山に摠見寺と称する寺院を建立している。

「拝し、大いなる信心と尊敬を寄せる者に授けられる功德と利益は以下のようなものである。

第一に、 富者ならばますます富み、貧しき者、身分低き者、賤しき者が礼拝にすればその功德のよって富裕の身になろう。子孫を増すための子女なり相続者を有せぬ者は直ちに子孫と長寿に恵まれ、大いなる平和と繁栄を得るだろう。

第二に、 80 歳まで長生きをし、疾病はたちまち癒え、その希望はかなえられ、健康と平和を得られるだろう。

第三に、 予が誕生日を聖日として、当寺に参詣する事を命ずる。

第四に、以上全てを信じる者には、確実に疑いなく、約束されたことは実現しよう。これらに信ぜぬ邪悪の徒は、現世においても来世においても滅亡に至るだろう。故に万人は大いなる崇敬と尊敬を常々これにささげることが必要である。」

これらは、生きようとする者の単純な願いであり、弥生人たちから続いた事ではないか。と
考え、義江氏が書かなかった7世紀までを詳しく書いた。豊穰を願う、素朴で大らかなカミが見えた。

邪悪な徒だと、決めつけた「カミ」が、民を邪悪な徒との戦争に駆り立てたのではないか。
と感じ、義江氏が書かなかって16世以降を長く書いた。「天皇陛下、万歳！」と民はどうして死する事が出来たのかを知りたかったからである。

今も、「お上」と「神」の混然となった権力に従うしかない「民」の姿を、この著述で皆さんに少しでも感じさせることができたなら幸いである。

2023年1月1日

高橋和生